

日向市東郷町所在

むこう ぼる なか お

向原中尾第1・2遺跡

むこう ぼる なか お

向原中尾第4遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5

2012

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第213集

『向原中尾第1・2遺跡 向原中尾第4遺跡』正誤表

ページ・図番号	誤	正
P27 第3表 挿図番号30 部位	口	胴
P27 第3表 挿図番号47 部位	胴	底
P45 第8表 挿図番号130 部位	胴	胴～底
P45 第8表 挿図番号147 器種	壺	甕
P46 第9表 挿図番号180 器種	甕	壺
P47 第10表 挿図番号190 石材	ホルンフェルス	頁岩
P69 第8図 頁岩	2	5
P69 第8図 頁岩	5	6
P69 第8図 頁岩	6	(番号削除)
P69 第8図 ホルンフェルス	10・12	削除
P86	石錘 (第26図193～211)	石錘 (第26図192～211)
P86 敲石文中	242	241
P93 C - C`断面注記	11・17	削除
P93 D - D`断面注記	4・11	削除
P97 H - H`断面注記	13	削除
P101 B - B`断面注記	2b	2
P107 第6表 掲載 94 器種	剥片	石刃
P108 第7表 掲載 125 器種	剥片	石核
P110 第10表 掲載 242 器種	深胴部	深鉢胴部



向原中尾遺跡群立地状況（1）（南西から）



向原中尾遺跡群立地状況（2）（東から）



向原中尾第2遺跡から望む日向灘（南西から）
手前がSA3、奥がSA2、左がSA5



向原中尾第2遺跡S I 7断面（南東から）
集石遺構上のオレンジ色の土が鬼界アカホヤ火山灰
集石遺構下の黄色の土が始良T n火山灰



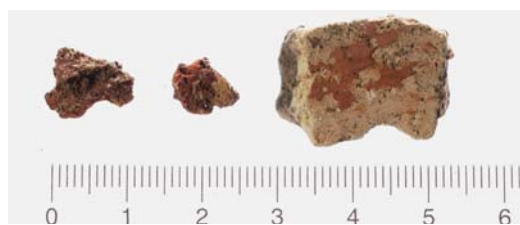
向原中尾第1遺跡B-1区土層（南西から）



向原中尾第 1・2 遺跡縄文時代早期遺物



向原中尾第 2 遺跡石斧埋納遺構出土石斧



向原中尾第 2 遺跡赤色顔料塊・顔料付着土器片



向原中尾第 4 遺跡後期旧石器時代Ⅱ期遺物



向原中尾第 4 遺跡縄文時代草創期遺物

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施してまいりました。本書は、平成20～22年度に実施した日向市東郷町に所在する向原中尾第1・2遺跡、向原中尾第4遺跡の発掘調査の成果を記載しております。

主な内容としては、向原中尾第1・2遺跡において縄文時代早期の集石遺構17基、石斧埋納遺構1基、弥生時代終末期の竪穴建物跡7軒が検出されています。竪穴建物跡7軒のうち4軒から炭化材が出土しており、焼失建物であると考えられます。

向原中尾第4遺跡において後期旧石器時代の始良Tn火山灰（AT）降灰以前の礫群1基、AT降灰以降の礫群4基、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）降灰以降の陥し穴状遺構7基が検出されています。特に旧東郷町域において初めてのAT降灰以前の遺構及び遺物を確認したことは、当地域の後期旧石器時代を考える上で重要な事例となりました。

当遺跡群周辺で、本格的な発掘調査が行われたのは今回の調査が初めてであり、今後、地域の歴史を復元する上で重要な成果を得ることができました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行に至るまで御協力いただいた関係諸機関ならびに地元の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

平成24年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 森 隆茂

例言

- 1 本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成20～22年に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した、日向市東郷町に所在する向原中尾第1・2遺跡、向原中尾第4遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。

基準点・グリッド杭等の設営	向原中尾第1・2遺跡、第4遺跡……………(株)アップス
空中写真撮影	向原中尾第1・2遺跡……………(有)ふじた
	向原中尾第4遺跡……………(有)スカイサーベイ九州
- 4 現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の調査担当者及び埋蔵文化財センター職員が行った。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 6 遺物の実測・トレースについては整理作業員の補助を得て各担当者が行い、石器実測・トレースについては一部を除き業務委託した。遺物写真撮影は今塩屋毅行が行った。また、整理作業全般について今塩屋の、石器類の分類・石材同定については松本茂の助言を得た。
- 7 向原中尾第2遺跡における自然科学分析のためのフローテーション作業ならびに種子などの選別作業は、埋蔵文化財センター職員及び整理作業員の補助を得て山本光俊が行った。その委託成果については、第2遺跡を谷口めぐみが、第4遺跡を橋本清美が編集して掲載した。
- 8 整理作業のうち、以下のものについては業務委託した。

石器実測・トレース	向原中尾第1・2遺跡、第4遺跡……………(株)大成エンジニアリング
自然科学分析	向原中尾第2遺跡（放射性炭素年代測定・種実樹種同定）……(株)古環境研究所
	向原中尾第4遺跡（テフラ分析）……………(株)パリノ・サーヴェイ
- 9 赤色顔料の蛍光X線分析については、平尾良光氏（別府大学）から多大な御援助を得ることができた。
- 10 本書の執筆・編集は、第I章は山本、第III章は橋本、第II章は分担して行い、その文責名を各文末に示した。なお、複数の場合は五十音順に示した。
- 11 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書で使用した周辺遺跡位置図は、国土地理院発行の1/25,000図(都農)をもとに作成した。また遺跡周辺地形図は、西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所提供の1/2,500図をもとに作成した。

凡例

- 1 本書に使用した主な略記号は次の通りである。
S A = 竪穴建物跡 S C = 土坑・陥し穴状遺構 S I = 礫群・集石遺構 K - A h = 鬼界アカホヤ火山灰
A T = 始良T n火山灰 G r. = グリッド
- 2 本書で使用した標高は海拔高であり、方位は座標北（G.N.）を基本として一部の遺構実測図は磁北（M.N.）を用いた。
- 3 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 4 本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩（WT1・WT2）を指す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定が困難なことも多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記した資料には溶結凝灰岩を主体としつつも、他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性がある。
- 5 石器の節理面は一点鎖線で、敲打痕の認められる部分は破線の○で、いわゆるガジリは白抜きで表現した。
- 6 石器実測図への使用痕の表現は以下のようにした。また、図面上で明示出来ない範囲については矢印で範囲を示した。
敲打痕＝コ 磨痕＝ス 磨滅＝マ 潰れ＝ツ ※実測図中の網掛けは砥面・強い磨滅面を表す。
- 7 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。

本文目次

第I章 はじめに

- 第1節 調査に至る経緯……………1
- 第2節 調査の組織……………1
- 第3節 遺跡の位置と歴史的環境……………2

第II章 向原中尾第1・2遺跡

- 第1節 調査の概要と方法・経過
 - 1 遺跡周辺の環境と調査区の設定……………5
 - 2 発掘調査の方法……………6
 - 3 調査の経過……………7
 - 4 整理作業の方法と経過……………7
- 第2節 基本層序と土層堆積……………8
- 第3節 後期旧石器時代の遺物
 - 1 遺物の分布状況……………10
 - 2 遺物……………10
- 第4節 縄文時代の遺構と遺物
 - 1 縄文時代早期の遺構と遺物……………13
 - 2 縄文時代後・晩期の遺物……………20
- 第5節 弥生時代以降の遺構と遺物
 - 1 遺構と遺物の分布……………29
 - 2 竪穴建物跡と出土遺物……………30
 - 3 包含層出土の遺物……………35
- 第6節 自然科学分析の結果
 - 1 放射性炭素年代測定……………48
 - 2 樹種同定……………49
 - 3 種実同定……………51
 - 4 蛍光X線分析……………52
- 第7節 総括
 - 1 後期旧石器時代……………56
 - 2 縄文時代早期……………57
 - 3 弥生時代の遺構と遺物……………58
 - 4 宮崎県域出土の石庖丁について……………59
 - 5 向原中尾第1・2遺跡の歴史的評価……………60

第III章 向原中尾第4遺跡

- 第1節 第1次調査、第2次調査の概要
 - 1 第1次調査……………61
 - 2 第2次調査……………61
- 第2節 第3次調査の概要
 - 1 第3次調査の経過……………61

- 2 整理作業の経過……………62
- 第3節 調査の記録
 - 1 調査の方法……………62
 - 2 基本層序……………62
- 第4節 後期旧石器時代の調査
 - 1 時期の設定……………67
 - 2 遺構に対する基本的な考え方……………67
 - 3 石材の分類基準……………67
- 第5節 後期旧石器時代I期の遺構と遺物
 - 1 調査方法……………67
 - 2 遺構……………67
 - 3 遺物出土分布状況……………68
 - 4 出土遺物……………68
- 第6節 後期旧石器時代II期の遺構と遺物
 - 1 遺構……………73
 - 2 遺物出土分布状況……………73
 - 3 出土遺物（II期・III期）……………76
- 第7節 縄文時代草創期・早期の遺物
 - 1 遺物出土分布状況……………84
 - 2 出土遺物……………84
 - 3 早期の土器……………84
 - 4 草創期の石器……………84
 - 5 早期の石器……………86
- 第8節 K - A h降灰以降の遺構と遺物
 - 1 遺構……………91
 - 2 出土遺物……………103
- 第9節 自然科学分析の結果
 - 1 目的……………111
 - 2 テフラ分析の結果……………111
- 第10節 総括
 - 1 後期旧石器時代……………113
 - 2 縄文時代草創期・早期……………113
 - 3 陥し穴状遺構群について……………114
 - 4 向原中尾第4遺跡の位置づけ……………114

挿図目次

第 I 章 はじめに

- 第 1 図 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図…………… 3
- 第 2 図 向原中尾遺跡群と周辺遺跡位置図…………… 4
- 第 3 図 遺跡間地形断面模式図…………… 4

第 II 章 向原中尾第 1・2 遺跡

- 第 4 図 遺跡位置と周辺地形…………… 5
- 第 5 図 グリッド配置図…………… 6
- 第 6 図 向原中尾第 1・2 遺跡土層断面図…………… 9
- 第 7 図 向原中尾第 2 遺跡後期旧石器時代礫・遺物分布図…………… 10
- 第 8 図 後期旧石器時代出土遺物実測図（1）…11
- 第 9 図 後期旧石器時代出土遺物実測図（2）…12
- 第 10 図 向原中尾第 2 遺跡縄文時代早期遺構分布図…………… 13
- 第 11 図 向原中尾第 1 遺跡 B-2 区縄文時代早期遺構分布図…………… 14
- 第 12 図 向原中尾第 2 遺跡縄文時代早期集石遺構実測図（1）…………… 15
- 第 13 図 向原中尾第 2 遺跡縄文時代早期集石遺構実測図（2）…………… 16
- 第 14 図 向原中尾第 2 遺跡縄文時代早期集石遺構実測図（3）…………… 17
- 第 15 図 向原中尾第 2 遺跡石斧埋納遺構及び出土遺物実測図…………… 18
- 第 16 図 縄文時代早期出土遺物実測図（1）…………… 21
- 第 17 図 縄文時代早期出土遺物実測図（2）…………… 22
- 第 18 図 縄文時代早期出土遺物実測図（3）…………… 23
- 第 19 図 縄文時代早期出土遺物実測図（4）…………… 24
- 第 20 図 縄文時代早期出土遺物実測図（5）…………… 25
- 第 21 図 縄文時代早期出土遺物実測図（6）…………… 26
- 第 22 図 縄文時代後・晩期出土遺物実測図…………… 26
- 第 23 図 向原中尾第 2 遺跡弥生時代遺構分布図…………… 29
- 第 24 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 1・7 実測図…………… 37
- 第 25 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 2 実測図…………… 37
- 第 26 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 3 実測図…………… 38

- 第 27 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 3 炭化材検出状況図…………… 38
- 第 28 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 4 実測図…………… 39
- 第 29 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 4 甕（172）出土状況図…………… 40
- 第 30 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 4 壺（174）出土状況図…………… 40
- 第 31 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 5 実測図…………… 40
- 第 32 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 6 実測図…………… 40
- 第 33 図 S A 1 出土遺物実測図…………… 41
- 第 34 図 S A 2 出土遺物実測図…………… 41
- 第 35 図 S A 3 出土遺物実測図…………… 41
- 第 36 図 S A 4 出土遺物実測図（1）…………… 42
- 第 37 図 S A 4 出土遺物実測図（2）…………… 43
- 第 38 図 S A 5・6 出土遺物実測図…………… 43
- 第 39 図 S A 7 出土遺物実測図…………… 44
- 第 40 図 包含層出土遺物実測図…………… 44
- 第 41 図 暦年代較正曲線図（1）…………… 48
- 第 42 図 暦年代較正曲線図（2）…………… 49
- 第 43 図 向原中尾第 2 遺跡出土の炭化材…………… 50
- 第 44 図 向原中尾第 2 遺跡出土の炭化種子…………… 52
- 第 45 図 No. 1 スペクトル図…………… 53
- 第 46 図 No. 2 スペクトル図…………… 53
- 第 47 図 No. 3 スペクトル図…………… 53

第 III 章 向原中尾第 4 遺跡

- 第 1 図 向原中尾第 4 遺跡基本土層図…………… 63
- 第 2 図 調査区と周辺地形図及びトレンチ配置図…………… 64
- 第 3 図 向原中尾第 4 遺跡グリッド配置図及び掘削範囲図…………… 64
- 第 4 図 向原中尾第 4 遺跡土層断面図（1）…………… 65
- 第 5 図 向原中尾第 4 遺跡土層断面図（2）…………… 66
- 第 6 図 後期旧石器時代 I 期礫群実測図…………… 67
- 第 7 図 後期旧石器時代 I 期遺構分布図及び調査区図…………… 69
- 第 8 図 後期旧石器時代 I 期石材分布図（1）…69
- 第 9 図 後期旧石器時代 I 期石材分布図（2）…70
- 第 10 図 後期旧石器時代 I 期石材分布図（3）…71

第11図	後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図(1) …71	第26図	縄文時代草創期・早期石器実測図(1) ……88
第12図	後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図(2) …72	第27図	縄文時代草創期・早期石器実測図(2) ……89
第13図	後期旧石器時代Ⅱ期遺構分布図 ……73	第28図	縄文時代草創期・早期石器実測図(3) ……90
第14図	後期旧石器時代Ⅱ期礫群実測図 ……74	第29図	K - A h 降灰以降遺構分布図 ……91
第15図	後期旧石器時代Ⅱ期土坑実測図 ……74	第30図	S C 1 実測図 ……92
第16図	後期旧石器時代Ⅱ期石材分布図 ……75	第31図	S C 2 実測図 ……94
第17図	後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図 ……77	第32図	S C 3 実測図 ……97
第18図	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(1) ……78	第33図	S C 4 実測図(1) ……98
第19図	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(2) ……79	第34図	S C 4 実測図(2) ……99
第20図	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(3) ……80	第35図	S C 6 実測図 ……100
第21図	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(4) ……81	第36図	S C 7 実測図 ……101
第22図	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(5) ……82	第37図	S C 9 実測図 ……102
第23図	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(6) ……83	第38図	S C 5 実測図 ……103
第24図	縄文時代草創期・早期石材分布図 ……85	第39図	K - A h 降灰以降遺物実測図(1) ……104
第25図	縄文時代早期土器実測図 ……87	第40図	K - A h 降灰以降遺物実測図(2) ……105
		第41図	K - A h 降灰以降遺物実測図(3) ……106
		第42図	T 38 試料の火山ガラス比の屈折率 ……112
		第43図	各試料の火山ガラスの屈折率 ……112

表目次

第Ⅰ章 はじめに

第Ⅱ章 向原中尾第1・2遺跡

第1表	後期旧石器時代石器計測表 ……12
第2表	縄文時代早期遺構一覧表 ……18
第3表	縄文時代早期土器観察表 ……27
第4表	縄文時代早期石器計測表(1) ……27
第5表	縄文時代早期石器計測表(2) ……28
第6表	縄文時代後・晩期土器観察表 ……28
第7表	弥生時代遺構一覧表 ……44
第8表	弥生時代土器観察表(1) ……45
第9表	弥生時代土器観察表(2) ……46
第10表	弥生時代石器計測表 ……47
第11表	弥生時代鉄器計測表 ……47
第12表	包含層土器観察表 ……47
第13表	包含層石器計測表 ……47
第14表	放射性炭素年代測定試料一覧 ……48

第15表	放射性炭素年代測定結果 ……49
第16表	炭化材同定結果 ……49
第17表	イネ炭化果実計測値 ……52
第18表	イネの粒形と大きさ ……52
第19表	蛍光X線の分析測定条件 ……52
第20表	定量分析結果 ……53
第21表	赤色顔料および赤色顔料付着土器の分析結果集成 ……55

第Ⅲ章 向原中尾第4遺跡

第1表	黒曜石産地別出土状況 ……67
第2表	石器石材分類表 ……67
第3表	後期旧石器時代Ⅰ期礫群観察表 ……67
第4表	後期旧石器時代Ⅱ期礫群観察表 ……74
第5表	後期旧石器時代Ⅰ期石器観察表 ……107
第6表	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器観察表(1) ……107

第7表	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器観察表(2) ……………108
第8表	縄文時代早期土器観察表……………108
第9表	縄文時代草創期・早期石器観察表……………109

第10表	縄文時代中期土器観察表……………110
第11表	弥生土器観察表……………110
第12表	K-A h降灰以降石器観察表……………110
第13表	重鉍物・火山ガラス比分析結果……………112

図版

巻頭図版1	向原中尾遺跡群立地状況(1)
巻頭図版2	向原中尾遺跡群立地状況(2)
巻頭図版3	向原中尾第2遺跡から望む日向灘、向原中尾第2遺跡S I 7断面、向原中尾第1遺跡B-1区土層
巻頭図版4	向原中尾第1・2遺跡縄文時代早期遺物、向原中尾第2遺跡石斧埋納遺構出土石斧、向原中尾第2遺跡赤色顔料塊・顔料付着土器片、向原中尾第4遺跡後期旧石器時代Ⅱ期遺物、向原中尾第4遺跡縄文時代草創期遺物
図版1	向原中尾第1・2遺跡調査区全景、向原中尾第1遺跡B-1区中央部V層遺物出土状況……………115
図版2	向原中尾第2遺跡S I 1検出状況、S I 2検出状況、S I 5検出状況、S I 9検出状況、S I 4~6検出状況……………116
図版3	向原中尾第2遺跡S I 11検出状況、S I 12検出状況、S I 13と検出層位、S I 14検出状況、S I 14の配石、S I 17検出状況、石斧埋納遺構と土層堆積……………117
図版4	向原中尾第2遺跡竪穴建物跡の広がり、S A 1・7完掘状況、S A 2検出状況、S A 2遺物出土状況、S A 2完掘状況……………118
図版5	向原中尾第2遺跡S A 3検出状況、S A 3土層堆積と炭化材との関係、S A 3炭化材と焼土の広がり、S A 3炭化材検出状況、S A 3全景……………119
図版6	向原中尾第2遺跡S A 4埋土上遺物出土状況、S A 4伏せて置かれた弥生土器の甕、S A 4土層堆積状況と遺物、S A 4完掘状況、S A 5遺物出土状況、S A 5土層堆積、S A 5完掘状況、S A 6遺物

出土状況……………120	
図版7	向原中尾第1・2遺跡旧石器時代遺物、縄文時代早期石器①・②……………121
図版8	向原中尾第1・2遺跡縄文時代早期石器③~⑤、向原中尾第1遺跡縄文時代後・晩期土器……………122
図版9	向原中尾第2遺跡S A 1・7出土遺物、S A 2出土土器、S A 3出土遺物、S A 4出土土器①~③……………123
図版10	向原中尾第2遺跡S A 4出土土器④~⑦、S A 4出土石器、S A 5出土土器①……………124
図版11	向原中尾第2遺跡S A 5出土土器②~④、包含層出土石器、出土水晶・軽石、向原中尾第1遺跡包含層出土土器……………125
図版12	向原中尾第4遺跡より尾鈴連峰を望む、S I 4検出状況、3区土層堆積状況、S I 2・3検出状況……………126
図版13	陥し穴状遺構分布状況、S C 1杭状痕跡検出状況、S C 3杭状痕跡プラン検出状況、S C 3完掘状況、S C 4杭状痕跡検出状況全景、S C 4(F-F'・I-I')、杭状痕跡検出状況……………127
図版14	S C 4周辺地形、S C 6(A-A'・C-C')杭状痕跡検出状況、後期旧石器時代Ⅰ期出土遺物①・②……………128
図版15	後期旧石器時代Ⅱ期ナイフ形石器・尖頭器・スクレイパー、後期旧石器時代Ⅲ期出土遺物……………129
図版16	後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期剥片・石核……………130
図版17	縄文時代早期土器・石器①……………131
図版18	縄文時代早期石器②、石錘……………132

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（日向～都農間）19.7km について
県文化財課は、平成 17 年度に 32 遺跡、306,700 m²
の分布調査結果を提示した。その後、当該区間は、
平成 17 年度末までに関係市町との設計協議等が終
了し、平成 18 年度末には用地買収に着手している。

この間、当該区間の平成 26 年度供用開始が公表
され、用地取得およびそれに続く埋蔵文化財調査に
とって時間的に厳しい状況となった。また、平成 19
年 11 月には発掘調査対象面積の見直しがなされ、
暫定 2 車線 261,400 m²と面積が減少している。

平成 20 年 7 月 1 日、東九州自動車道関連としては
初の『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道
路株式会社九州支社長と県知事との間で締結された。
この協定書では、発掘調査の範囲や体制、全体の実
施計画、費用の概算額等が提示された。その後、用
地の取得状況が進展しないながらも、同年 10 月 17
日付で『埋蔵文化財発掘調査委託契約』を結び、着
手が可能であった 10 遺跡、3,350 m²の発掘調査に
着手した。平成 21 年 1 月には、用地取得や文化財
調査の進展を条件に平成 25 年度の供用開始が努力
目標となったが、関係者の努力により平成 23 年 11
月末現在、日向～都農間の 32 遺跡中 25 遺跡は完全
に調査を終了している（第 1 図）。

第 2 節 調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告の実施にあたり、
以下の体制が組織された（平成20～23年度）。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 福永 展幸（平成20・21年度）

森 隆茂（平成22・23年度）

副所長 加藤 悟朗（平成20年度）

北郷 泰道（平成22・23年度）

副所長兼総務課長

長友 英詞（平成21年度）

総務課長 長友 英詞（平成20年度）

矢野 雅紀（平成22年度）

坂上 恒俊（平成23年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山 正信（平成20・21年度）

副主幹兼総務担当リーダー

長友 由美子（平成22・23年度）

調査第一課長 長津 宗重（平成20～23年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹（平成20～23年度）

調査担当

向原中尾第 1・2 遺跡

調査第一課調査第二担当

主 査 島木 良浩（第 1 遺跡 平成20年度）

主任主事 嶋田 史子（第 1 遺跡 平成20年度）

主 事 小船井 順（第 1 遺跡 平成20年度）

主任主事 松本 茂（第 2 遺跡 平成22年度）

主 事 石貫 弘泰

主 事 南 健太郎

主 事 山本 光俊

（第 1・2 遺跡 平成22年度）

向原中尾第 4 遺跡

調査第一課調査第二担当

主 査 島木 良浩（平成20年度）

主任主事 嶋田 史子（平成20年度）

主 事 小船井 順（平成20年度）

主任主事 徳留 洋志（平成21年度）

主 事 米森 祐太（平成21年度）

主 査 明石 宏一（平成22年度）

主 事 橋本 清美（平成22年度）

整理・報告書担当

調査第一課調査第二担当

向原中尾第 1・2 遺跡

主 事 南 健太郎（平成22年度）

主 事 山本 光俊（平成22・23年度）

向原中尾第 4 遺跡

主 事 橋本 清美（平成22・23年度）

調査協力・助言

緒方 博文（日向市教育委員会）

富井 眞（京都大学文化財総合研究センター）

平尾 良光（別府大学）

第3節 遺跡の位置と歴史的環境

1 地理的環境

向原中尾第1・2遺跡は宮崎県日向市東郷町山陰字山ノ口、向原中尾第4遺跡は日向市東郷町山陰字向ヲ原に所在する。日向市東郷町は宮崎県の北部に位置し、山々に囲まれた自然豊かな町である。

町の地勢は、南方には標高1,405.2mの尾鈴山を主峰とする尾鈴連峰がつらなり、また、600~800mの加子山・珍神山といった九州山地に属する山々が周囲を囲み急峻な溪谷や丘陵を形成している。その山々を縫って流れる耳川やその支流の坪谷川、また、児湯方面に流れる小丸川などは、河岸段丘や小規模な沖積地を形成している。日向市東郷町に存在する遺跡もこれらを中心に分布している。

遺跡が所在する寺迫地区は、日向市東郷町の中心部から東に飛び地のように離れている。地形的にみても異なり、尾鈴山地の東側に南北に長く連なる平坦な段丘地形に立地している。

寺迫地区には、猪渡（いのと）や落鹿（おとし）といった動物の名がつく地名がみられ、古くより狩猟文化との密接な関係を伺わせている。

2 歴史的環境

この項では向原中尾第1・2遺跡、向原中尾第4遺跡周辺の歴史的変遷について時代ごとに述べる。

旧石器時代 寺迫地区ではナイフ形石器と畦原型細石核が採集され、向原第3遺跡群では細石刃・細石核・ナイフ形石器が出土している。上野原遺跡では礫群1基が検出され、細石刃が出土している。八ツ山遺跡・仲野原遺跡ではナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパーなどが出土している。また、仲野原遺跡では礫群10基が検出されている。

縄文時代 八ツ山遺跡では早期の押型文土器・石斧・石鏃・磨石が出土し、下水流遺跡・深谷遺跡では石斧・石鏃が出土している、田野原遺跡・切瀬遺跡では石錘が採集されている。広瀬田遺跡では早期の集石遺構2基が検出され、早期・晩期の土器・石器が出土している。樋田遺跡では後期の竪穴建物跡2軒と後期を中心とした土器群、少量の晩期の土器が出土している。赤松遺跡や下水流遺跡から晩期の黒色磨研土器・粗製深鉢形土器・刻目突帯文土器など

が出土している。また、赤松遺跡・下水流遺跡・広瀬田遺跡では出土石器に対する石斧の多さが目をひく。

弥生時代 下水流遺跡では前期末から中期初頭の亀ノ甲タイプの甕と下城式甕が共伴して出土している。樋田遺跡・下三ヶ八ツ山・日田尾・鶴戸木では石庖丁が、鶴ノ内地区上ノ原遺跡では有茎の銅鏃が採集されている。樋田遺跡では花弁状住居2軒を含む竪穴建物跡16軒が検出され、瀬戸内系の高坏が出土している。

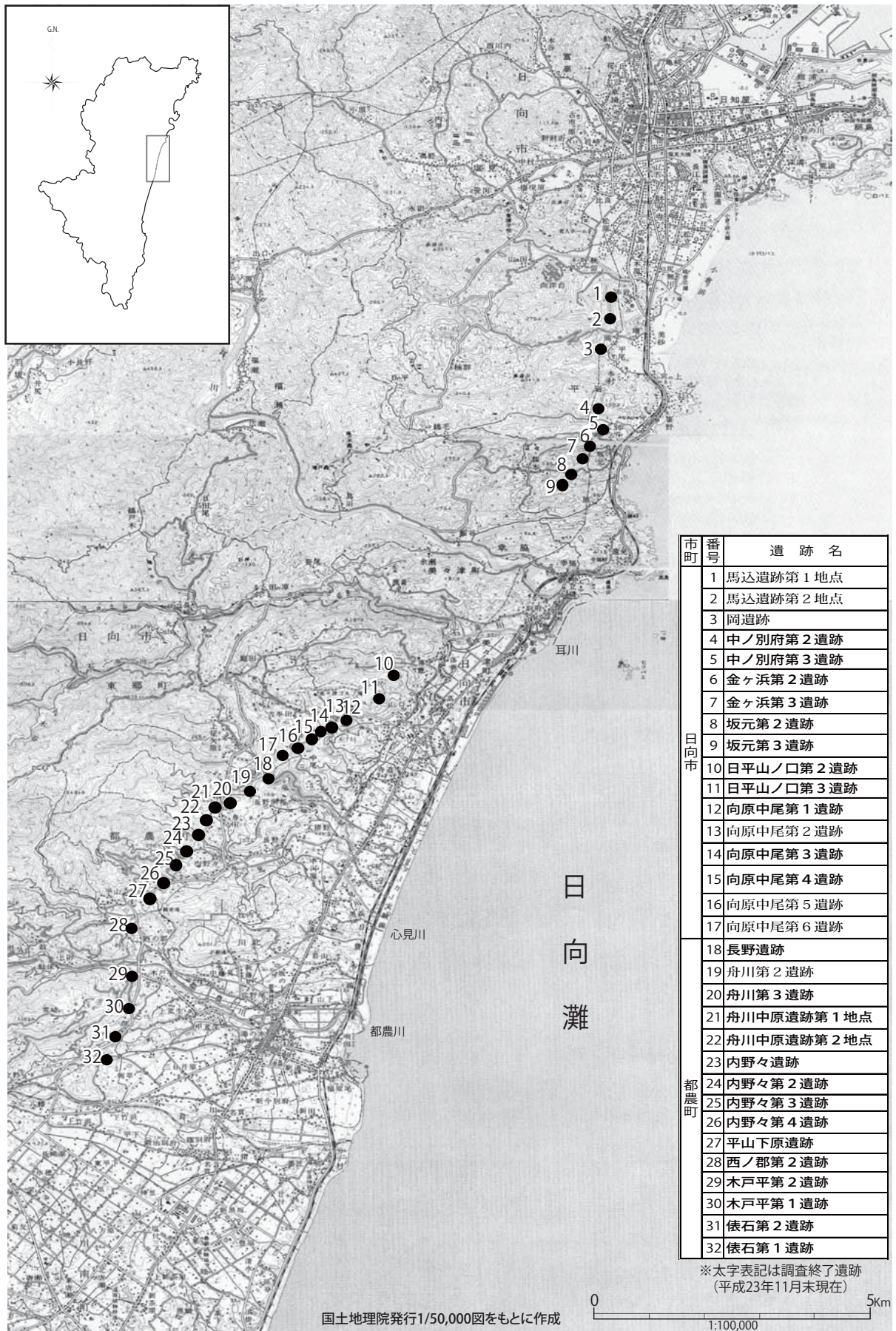
古墳時代 山陰・鶴ノ内・日田尾地区に所在する3基の円墳が県指定史跡となっている。八ツ山遺跡・羽坂A・B遺跡・蕨野遺跡のほか、勾玉が採集された老谷遺跡がある。

古代 古代律令制下では臼杵郡に属していたと思われる、「和名抄」に見える氷上郷に比定されるという説がある。天平勝宝年間（749~757）頃、百濟王が内乱のために日向に逃れた際に献納したものと伝えられる須恵器の甕が山陰神社に社宝として伝存する。

中世 小野田立山の中腹には伊東氏によって築城された山陰城跡がある。また、坪谷の小丘陵には坪谷城跡が位置していた。赤松遺跡からは掘立柱建物跡が5棟検出されている。建久8年（1197）の「日向国図田帳写」に島津荘寄郡の内として見える。天正5年（1577）に伊東氏は島津氏に追われ、両城は島津氏の配下に入ったものと思われる。各地区の丘陵には廃絶した五輪塔群や板碑が点在している。

近世 天正15年（1587）の豊臣秀吉による九州仕置以降は高橋氏の領地となり、その後、有馬氏→三浦氏→牧野氏を経て、内藤氏が廃藩置県まで支配した。なお、元禄3年（1690）に農民の逃散が起こったため、翌年に坪谷・下三ヶの両村は幕府領となった。

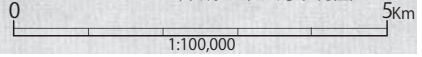
近現代 明治4年に延岡県となって以降、美々津県→宮崎県→鹿児島県→宮崎県となり、同17年には東臼杵郡に属することとなった。同22年の市制町村制施行により、4村が合併して東郷村となり、昭和44年の町制施行により東郷町が誕生した。平成18年2月25日に日向市に編入され、日向市東郷町となった。



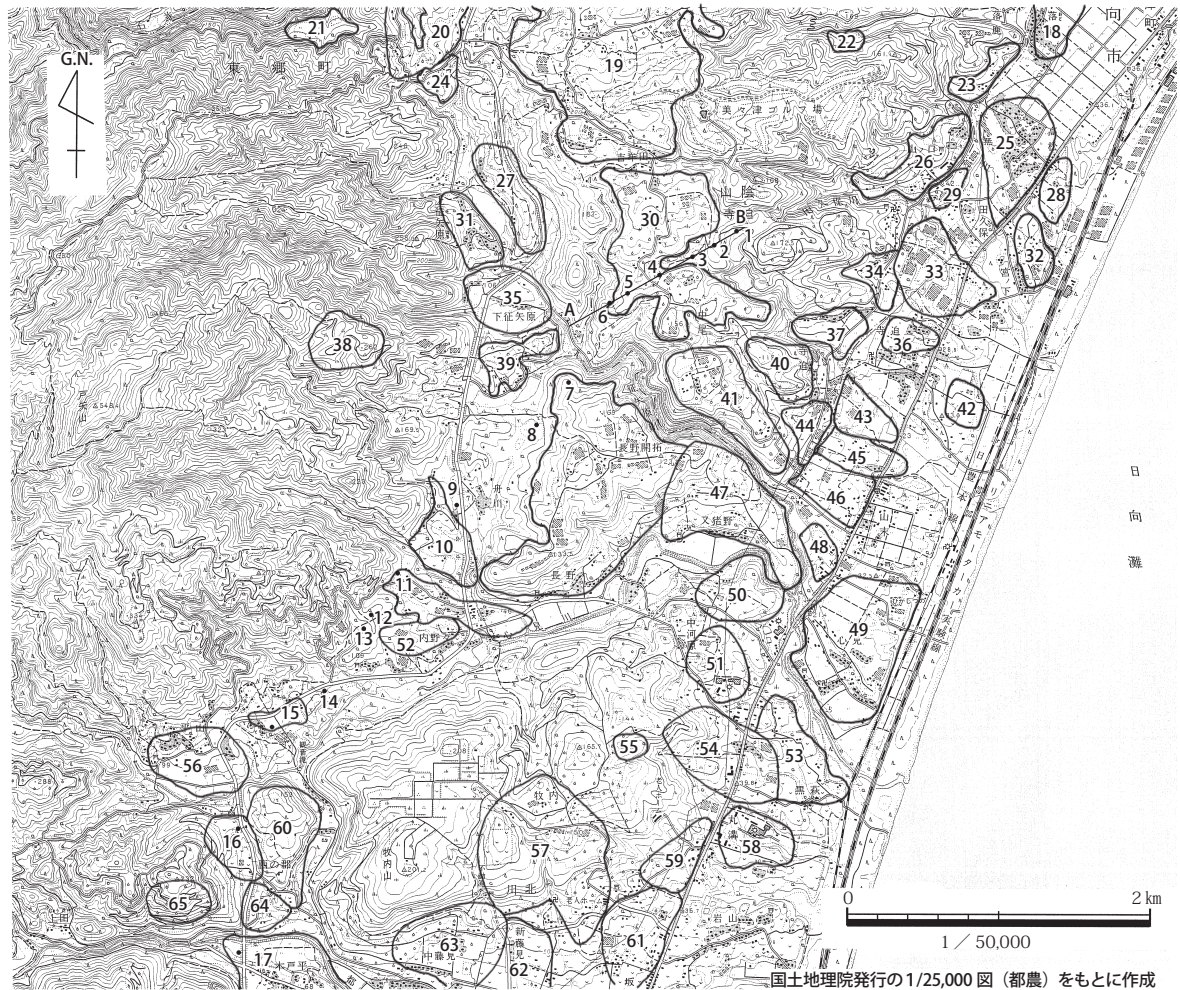
市町	番号	遺跡名
日向市	1	馬込遺跡第1地点
	2	馬込遺跡第2地点
	3	岡遺跡
	4	中ノ別府第2遺跡
	5	中ノ別府第3遺跡
	6	金ヶ浜第2遺跡
	7	金ヶ浜第3遺跡
	8	坂元第2遺跡
	9	坂元第3遺跡
	10	日平山ノ口第2遺跡
	11	日平山ノ口第3遺跡
	12	向原中尾第1遺跡
	13	向原中尾第2遺跡
	14	向原中尾第3遺跡
	15	向原中尾第4遺跡
	16	向原中尾第5遺跡
	17	向原中尾第6遺跡
都農町	18	長野遺跡
	19	舟川第2遺跡
	20	舟川第3遺跡
	21	舟川中原遺跡第1地点
	22	舟川中原遺跡第2地点
	23	内野々遺跡
	24	内野々第2遺跡
	25	内野々第3遺跡
	26	内野々第4遺跡
	27	平山下原遺跡
	28	西ノ郡第2遺跡
	29	木戸平第2遺跡
	30	木戸平第1遺跡
	31	俵石第2遺跡
	32	俵石第1遺跡

※太字表記は調査終了遺跡
(平成23年11月末現在)

国土地理院発行1/50,000図をもとに作成



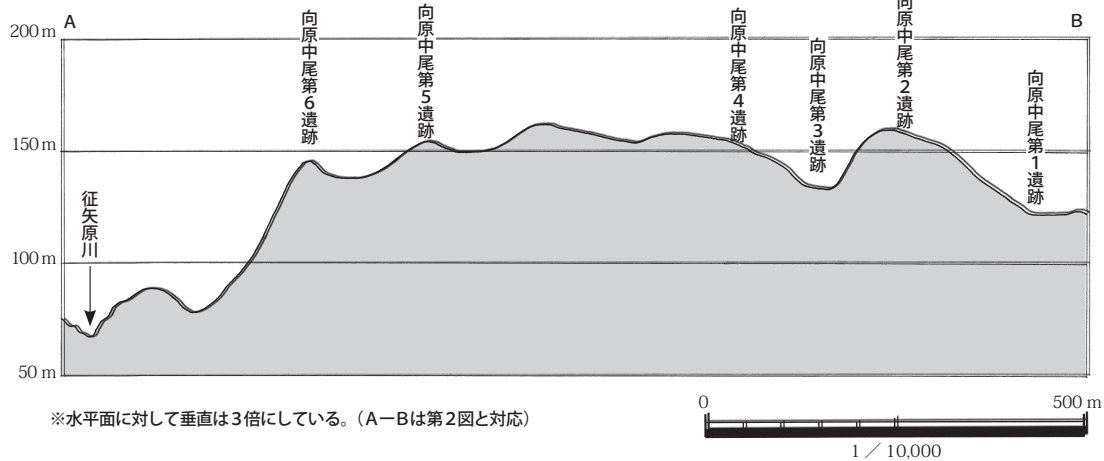
第1図 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図



国土地理院発行の1/25,000図(都農)をもとに作成

- | | | | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|------------|------------|------------|
| 1 向原中尾第1遺跡 | 2 向原中尾第2遺跡 | 3 向原中尾第3遺跡 | 4 向原中尾第4遺跡 | 5 向原中尾第5遺跡 | 6 向原中尾第6遺跡 | 7 長野遺跡 |
| 8 舟川第2遺跡 | 9 舟川第3遺跡 | 10 舟川中原遺跡 | 11 内野々遺跡 | 12 内野々第2遺跡 | 13 内野々第3遺跡 | 14 内野々第4遺跡 |
| 15 平山下原遺跡 | 16 西ノ郡第2遺跡 | 17 木戸平第2遺跡 | 18 落鹿遺跡 | 19 庭田庭田遺跡群 | 20 庭田小浜遺跡群 | 21 庭田小浜遺跡 |
| 22 日平第2遺跡 | 23 日平第1遺跡 | 24 坂下遺跡 | 25 高松遺跡 | 26 日平山ノ口遺跡 | 27 東平遺跡 | 28 霧島原遺跡 |
| 29 田久保遺跡 | 30 向原遺跡群 | 31 上征矢原遺跡 | 32 宮ノ下遺跡 | 33 前ノ原遺跡 | 34 山ノ口遺跡 | 35 下征矢原遺跡 |
| 36 中村遺跡 | 37 寺迫遺跡 | 38 舟川尾立遺跡 | 39 舟川遺跡 | 40 向原第1遺跡 | 41 向原第3遺跡群 | 42 寺迫下原遺跡 |
| 43 宮川遺跡 | 44 向原第2遺跡 | 45 山末大原第2遺跡 | 46 山末大原第1遺跡 | 47 又猪野原遺跡 | 48 心見往還上遺跡 | 49 心見遺跡 |
| 50 旧牧跡第2遺跡 | 51 旧牧跡第1遺跡 | 52 内野遺跡 | 53 上黒萩遺跡 | 54 白石第1遺跡 | 55 白石第2遺跡 | 56 平山遺跡 |
| 57 白水遺跡 | 58 久次牟田遺跡 | 59 境ヶ谷第2遺跡 | 60 西ノ郡第1遺跡 | 61 境ヶ谷第1遺跡 | 62 黒石遺跡 | 63 京塚遺跡 |
| 64 川神田遺跡 | 65 井手ヶ平遺跡 | | | | | |
- ※ 1～17は東九州自動車道(日向～都農間)関連遺跡

第2図 向原中尾遺跡群と周辺遺跡位置図



第3図 遺跡間地形断面模式図

第Ⅱ章 向原中尾第1・2遺跡

第1節 調査の概要と方法・経過

1 遺跡周辺の環境と調査区の設定

向原中尾第1遺跡と第2遺跡は市道を挟んで隣接する遺跡であるが、第1遺跡は尾根の中程から裾部に、第2遺跡は南へ伸びる尾根上に位置し、立地環境は大きく異なる。両遺跡の標高差は約33m、両遺跡間の距離は中心からの直線距離で約200m離れている(第3・4図)。第2遺跡が位置する尾根の西側と東側は谷になっており、風の通りがよいうえに標高が高い場所からは日向灘を望むことができ、見晴らしは非常によい(巻頭図版3)。また、第2遺跡は北から南へ伸びる尾根の傾斜が緩やかな場所にあり、西側の谷を挟んで第4遺跡を見通すことができる。これに対し第1遺跡は、谷間に位置するため風の通りはほとんどなく見晴らしもよくない。また、傾斜がかなり強く、調査中も上り下りにも苦慮するほどであった。さらに明治38年に開田に伴い築堤された寺迫溜池の影響もあるだろうが、水はけが悪く尾根裾に位置するため、調査期間中も雨天の翌日な

どは湧水や水たまりによって調査に支障をきたすほどであった。このように第2遺跡の立地環境は第1遺跡よりも格段によく、山間部に位置するものの生活環境には恵まれていた場所と思われる。

調査区の設定については、第1遺跡は調査区東側の南北に流れる水路の東側をA区、西側をB区、溜池部分をC区とした。B区は開田に伴う地形の改変により崖となっている部分があり、崖を境に南北に分けられていることから、南側をB-1区、北側をB-2区とした。B区は南北方向に傾斜した急斜面である。第2遺跡も第1遺跡B区と同様に地形の改変により崖となっている部分で調査区が東西に分けられていることから、東側をA区、西側をB区とした(第4図)。また、グリッドの設定においては、第1遺跡と第2遺跡は立地が異なり距離も離れているが一つの集落を構成していたと考えられるため、両遺跡にまたがるかたちで世界測地系を基準に10m×10mのグリッドを設定し、東西軸をアルファベット、南北軸を算用数字で表した(第5図)。



第4図 遺跡位置と周辺地形

2 発掘調査の方法

(1) 向原中尾第1遺跡

第1次調査

平成20年12月16日から平成21年1月6日まで、A区・B-1区のトレンチ調査を行った。A区の掘削は重機で、B-1区の掘削は当初から人力で行い、遺物は層位ごとに取り上げを行った。

第2次調査

平成22年6月28日から平成22年12月24日まで、B-1・B-2区・C区の発掘調査を行った。B-1区では当初重機で表土・造成土を掘削していたが、造成土から土器や石器が出土したため、人力での掘り下げに切り替えた。遺物はグリッドを四分割し、層ごとに取り上げた。またB-2区ではI層（表土）・II層（黒褐色土）を重機で掘削し、それ以下は遺物の出土が予想されたため人力で掘削していった。この結果、石核や剥片が出土したため個別に取り上げを行った。

(2) 向原中尾第2遺跡

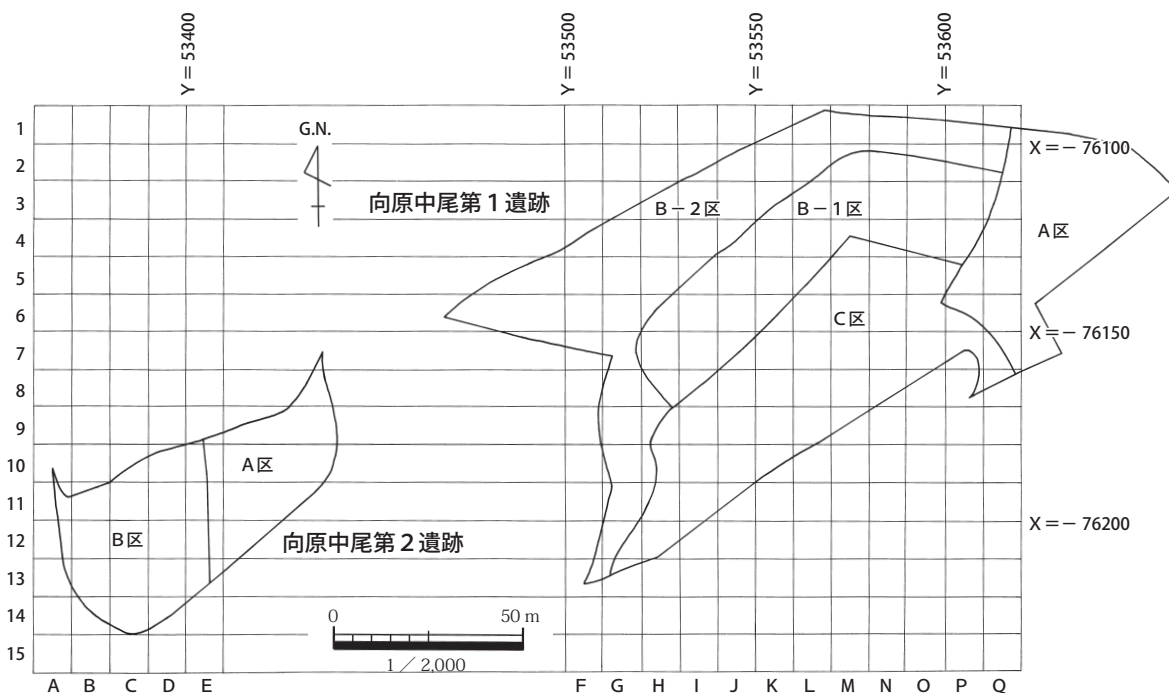
第1次調査

平成22年6月21日から平成22年7月6日まで、A区のトレンチ調査を行った。重機による掘り下げを行ったが、大部分は大きく削平されており、遺構は

検出されず、遺物もほとんど出土しなかった。

第2次調査

平成22年9月2日から平成22年12月28日まで、B区の発掘調査を行った。掘削前の段階で遺物が採集されたことから重機での掘削を表土のみとし、それ以下は人力で掘削した。この結果、竪穴建物跡を検出したが、竪穴建物跡の埋土上層の掘削中から遺物の集中がみられたため、これらは点上げ、又は遺構と考えられる範囲を四分割して取り上げた。掘削中に炭化物が検出されたことから、建築部材と考えられる大きさのもの（約3cm）のみ記録した。遺物は床面出土のものを図化し、それ以外のは点上げ又は建物跡を四または六分割して取り上げた。このため竪穴建物跡出土の遺物は検出面よりも上で出土したもの（埋土上出土遺物）、掘削中に出土したもの（埋土出土遺物）、床面で出土したもの、床面から掘方で出土したものに分けられる。またIV層の礫と遺物は点上げし、遺物のみを持ち帰った。後期旧石器時代の礫や遺物についても同様にした。なおSA3・4・5の床土、土坑埋土、SI14の炭化物を含んだ埋土は持ち帰り、フローテーションなどの分析に備えた。



第5図 グリッド配置図

3 調査の経過

(1) 向原中尾第1遺跡

第1次調査

平成20年度に用地の引渡しを終了したA区及びB-1区についてのトレンチ調査を行った。トレンチはA区に11箇所、B-1区に11箇所設定し掘削を行った(第4図)。この結果A区では遺構・遺物は確認されなかったが、B-1区では縄文時代から弥生時代にかけての土器や石器が出土し、遺物は現代に行われた土地の改変によって崖になっている北側斜面(B-2区)から流れ込んだ可能性が考えられた。このため、B-2区及びC区の調査が必要であると判断されたが、用地の引渡しを終了していなかったため、調査は平成22年度に持ち越した。

第2次調査

第1次調査の結果を受けてB-2区から掘削を行った。B-2区ではK-Ah(Ⅲ層)下位のIV層から石核や剥片が出土し、周辺に石器製作跡がある可能性が考えられた。しかし、調査の結果、この周囲では石器製作跡は確認されず、遺物の広がり認められなかった。

次に重機を投入してB-1区の調査を行い、造成土(Ⅱ層)掘削の際に石核や長頸壺の破片といった縄文時代から弥生時代にかけての土器や石器が多数出土した。B-1区では溜池の水位によっては1m 50cmから2m掘削すると下から湧水があり雨の多い夏場の掘削は困難を極めた。また造成土下位の包含層(Ⅳ～Ⅴ層)からは多数の縄文時代から弥生時代後期の土器や石器が出土した。これらは出土状況から標高の高い位置から流れ込んだ可能性が考えられ、現在崖になっている部分に遺構や遺物が存在した可能性が考えられる。これらの結果、向原中尾第1遺跡は集落の縁辺部であったことが確認された。

(2) 向原中尾第2遺跡

第1次調査

先に用地の引渡しを終了したA区のトレンチ調査を行った。トレンチは地形に沿って東西方向に6箇所設定し掘削を行った(第4図)。A区とB区の境は約4m削られ崖になっている。そのためA区の西側は土地の改変によって平坦になっており、表土下では地

山が確認できた。東側は斜面になっていたが、土器が数点出土したのみで遺構は検出できなかった。

第2次調査

次に用地取得の目途がついたB区の調査を行った。B区は掘削前の段階で弥生土器などが調査区内で採集され、K-Ah(Ⅲ層)の残りもよいことから、弥生時代以前の遺構や遺物は良好に残存していると考えられた。表土下の黒色土(Ⅱ層)の掘削の際に多量の弥生時代後期の土器や石器が出土し、K-Ah(Ⅲ層)上面で竪穴建物跡が6軒確認された(その後1軒は切り合っていたことが判明したため竪穴建物は合計7軒となった)。竪穴建物跡の掘削の際に炭化物の出土が非常に多いことが気になっていたが、実際に7軒中4軒の床面で炭化材が検出され、この他の2軒でも埋土中から炭化物が出土した。中でもSA3は建築部材の残りがよく、竪穴建物の上屋構造を考える上で貴重な資料を得ることができた。K-Ah(Ⅲ層)下位の褐色土(Ⅳ層)上面では集石遺構が17基検出された。このうちSI14では掘り込みの掘削中に多量の炭化物が確認され、掘り込みの中は土が真っ黒の状態であった。また褐色土(Ⅳ層)上面では石斧の埋納遺構の可能性が高い遺構が確認された。Ⅳ層では土器や石器が出土したが、特に石器においては粗製剥片石器の出土が多数を占めていることが注目される。

これに加えAT(Ⅶ層)上位の黄褐色土(Ⅴ層)・褐色土(Ⅵ層)では後期旧石器時代の遺物が出土していることから、向原中尾第2遺跡は後期旧石器時代から弥生時代終末期の間に集落が存在していたことが明らかとなった。

4 整理作業の方法と経過

整理作業は向原中尾第1遺跡の遺物量が少なかつたことから向原中尾第2遺跡と同時併行して行った。向原中尾第2遺跡の遺物は発掘調査の段階でほぼ完形の土器や接合する遺物が確認されていたことから、水洗いや注記の段階で接合できる遺物をまとめていった。注記において竪穴建物跡出土遺物は検出前に竪穴建物跡の直上のⅡ層で出土したものを「埋上」、竪穴建物跡の埋土掘削中に出土したものを「埋」、床面で出土したものを「床」、床面から掘方までの間で出

土したものを「床内」と注記した。堅穴建物跡出土の遺物は床面と埋土の土器の接合関係を確認した後、遺構間での接合関係の確認も行った。包含層出土の土器や石器についても接合関係の確認を行い、後期旧石器時代の遺物については向原中尾第1遺跡と向原中尾第2遺跡の接合関係も確認した。遺物の実測、トレースは埋蔵文化財センターで行ったが、一部を除く石器については業務委託している。

第2節 基本層序と土層堆積

向原中尾第1遺跡と第2遺跡は立地が異なるが、第1遺跡B-2区と第2遺跡は土の堆積状況がほぼ同様であった。しかしB-1区は北側が大きな開削を受けていることや、斜面の裾部にあたることから土の堆積状況が異なっていた。このため基本層序はそれぞれ別に作成した。

第1遺跡B-1区

基本層序はI～XI層に分けられる(第6図C-C'、巻頭図版3)。

- I層：暗褐色土層(表土)
- II層：暗褐色土層(造成土、遺物出土)
- III層：黒色土層(10YR1.7/1)
- IV層：黒褐色土層(10YR2/3、遺物包含層)
- V層：褐色土層(10YR4/4、遺物包含層)
- VI層：暗褐色土層(10YR3/3)
- VII層：黒褐色土層(10YR2/3)
- VIII層：黒褐色土層(10YR2/3)
- IX層：黒褐色土層(10YR2/3)
- X層：褐色土層(10YR4/6)
- XI層：黄褐色土層(10YR5/8)

第1遺跡B-1区のII層は、暗褐色土にIII層からV層のブロックが混じるのは、第1遺跡B-2区から続く斜面を削り、その土で南側の斜面を埋め立てることにより地形を改変したためと考えられる。そのためIV・V層に含まれていた遺物がII層に混入したと考えられる。また、第1遺跡B-1区には明確なK-Ahは堆積していないが、遺物を含むV層はK-Ahが基になっている可能性がある。このように第1遺跡B-1区は土地の改変や斜面の裾部にあ

たるため、流れ込みなどで土層の堆積は一定ではなく複雑である。

第1遺跡B-2区・第2遺跡

基本層序はI～IX層に分かれる(第6図A-A''・B-B')。

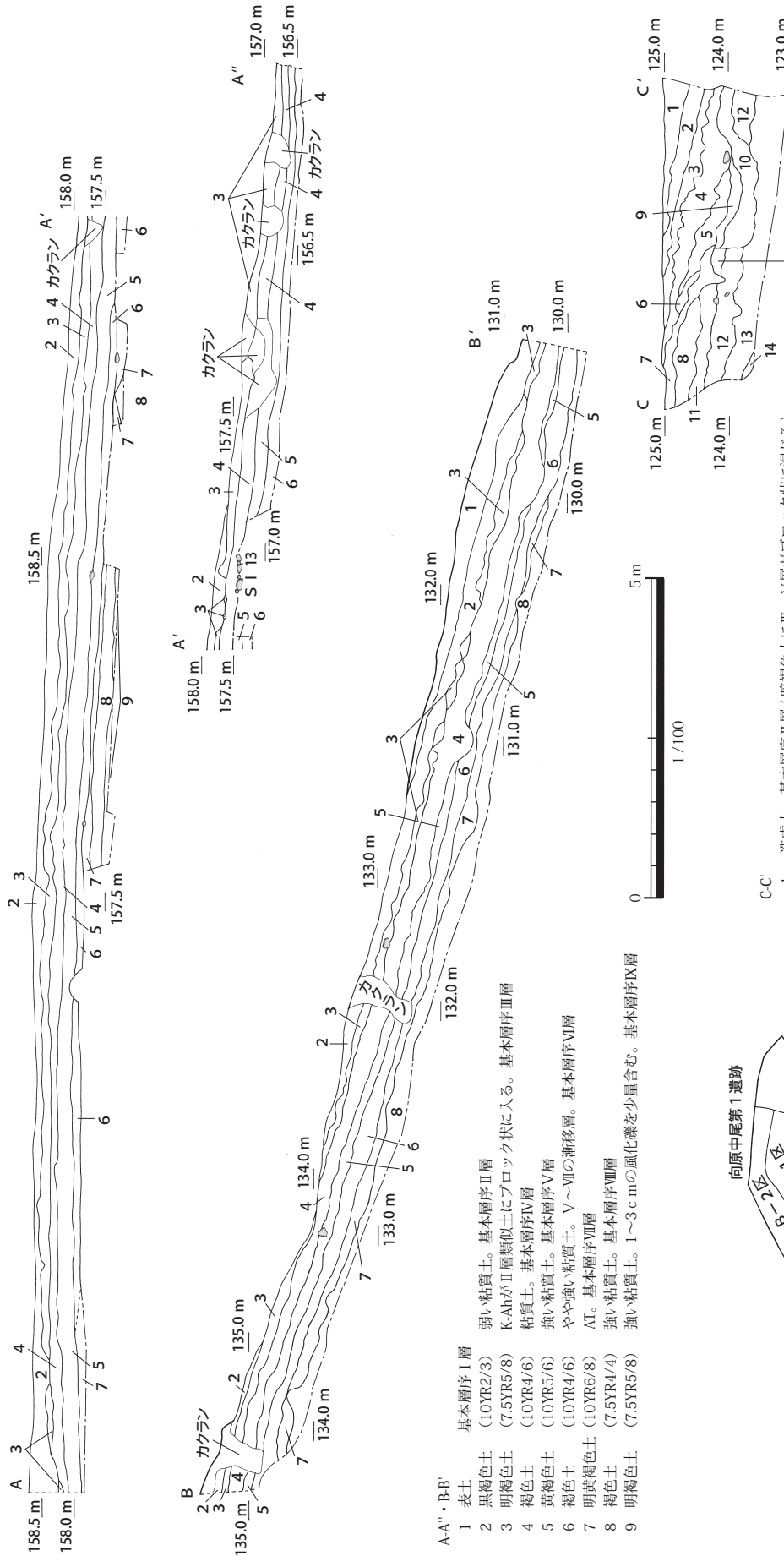
- I層：暗褐色土層(表土)
- II層：黒褐色土層(10YR2/3、遺物包含層)
- III層：明褐色土層(7.5YR5/8、K-Ah二次堆積層)
- IV層：褐色土層(10YR4/6、縄文時代早期)
- V層：黄褐色土層(10YR5/6、後期旧石器時代)
- VI層：褐色土層(10YR4/6)
- VII層：明黄褐色土層(10YR6/8、AT層)
- VIII層：褐色土層(7.5YR4/4)
- IX層：明黄褐色土層(7.5YR5/8)

第1遺跡B-2区・第2遺跡のII層は上層が表土であり表土の層厚もそれほど厚くないため、削平等を受けており堆積状況は安定していないと考えられる。またIII層もK-Ahが堆積しているがプライマリーな堆積ではなく、黒褐色土が混じる二次堆積である。VII層(AT)は第2遺跡の標高がもっとも高くなる比較的平坦な場所にものみ堆積しており、傾斜が急な場所では明確な堆積が確認できなかった。

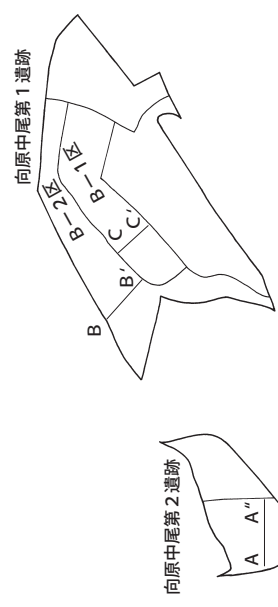
第1遺跡C区は遺構・遺物が確認されなかった。現在溜池になっており、梅雨の時期などに溜池の水位が上がるとC区は水没する状況であった。そのため、土壌は水の影響が非常に強かった。地形的には第1遺跡B-1・2区のように斜面が続いており、溜池が作られる前は南側へ下る谷地形を形成していたと思われる。(南・山本)



整理作業風景(接合)



- A-A'・B-B'
- 基本層序I層
 1 表土
 2 黒褐色土 (10YR2/3)
 3 明褐色土 (7.5YR5/8)
 4 褐色土 (10YR4/6)
 5 黄褐色土 (10YR5/6)
 6 褐色土 (10YR4/6)
 7 明黄褐色土 (10YR6/8)
 8 褐色土 (7.5YR4/4)
 9 明褐色土 (7.5YR5/8)
- 基本層序II層
 弱い粘質土。基本層序II層
 K-AhがII層類似土にブロック状に入る。基本層序III層
- 基本層序IV層
 粘質土。基本層序IV層
 強い粘質土。基本層序V層
 やや強い粘質土。V～VIIの漸移層。基本層序VI層
 At。基本層序VII層
- 基本層序VIII層
 強い粘質土。基本層序VIII層
 強い粘質土。1～3 cmの風化礫を少量含む。基本層序IX層



向原中尾第1遺跡

向原中尾第2遺跡

- C-C'
- 1 造成土 基本層序II層 (暗褐色土にIII～V層がブロック状に混じる)
 2 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性・しまりやや強い。基本層序III層
 3 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや強い。III～Vの漸移層か。基本層序IV層
 4 褐色土 (10YR4/4) 弱い粘質～砂質土。しまりやや弱い。K-AhにVI層がブロック状に少量混じる。基本層序V層
 5 褐色土 (10YR4/6) 砂質土。しまりやや弱い。K-Ahを母体に0.1～1 cmの礫・1 cmの炭化物粒をごく少量含む。
 6 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりやや強い。K-Ahを母体に0.1～0.3 cmの炭化物粒をごく少量含む。
 7 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりやや強い。IV層がブロック状に少量混じる。V～VIIの漸移層。基本層序VI層
 8 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや強い。暗褐色土がブロック状に少量混じる。0.1～1 cmの礫を少量含む。基本層序VII層
 9 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりやや強い。0.1～1 cmの礫を少量含む。0.1～0.5 cmの炭化物粒を少量含む。
 10 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりやや強い。0.1～1 cmの礫を少量含む。0.1～1 cmの炭化物粒をごく少量含む。
 11 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまり強い。0.1～3 cmの礫を少量含む。基本層序VIII層
 12 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまり強い。0.1～10 cmの礫を少量含む。基本層序IX層
 13 褐色土 (10YR4/6) 粘性強い、しまりやや強い。0.1～3 cmの礫をやや多く含む。基本層序X層
 14 黄褐色土 (10YR5/8) 粘性・しまり強い。0.1～10 cmの礫を不均一にやや多く含む。基本層序XI層



第6図 向原中尾第1・2遺跡土層断面図

第3節 後期旧石器時代の遺物

1 遺物の分布状況

向原中尾第1遺跡 遺構は検出されず、遺物も少量出土しているのみである。

向原中尾第2遺跡 後期旧石器時代の遺物はV層下部からVI層にかけて出土し、すべてVII層（AT）上位のものである。VII層（AT）の堆積は第2遺跡B区の北半分を確認されており、その範囲内で後期旧石器時代の礫・遺物が確認されている（第7図）。

礫はC11・12 Gr.を中心とした範囲に広がっており、大きさは10~20cmのものが多く、おおむね尾鈴山溶結凝灰岩である。大半の礫が被熱のためであろうか赤化していた。特にC11Gr.では長径3m、短径2mの範囲で礫が集中して分布していたが、掘り込みなどは確認されず、礫が散乱している状態であり、明確な礫群と認められるものはなかった。遺物は量的に少ないがスクレイパーや石刃などがあり、石材は珪質頁岩、流紋岩、ホルンフェルスなど多様である。礫と遺物の分布はほぼ重ならない。

このように礫や遺物は第2遺跡B区の最も標高が

高い平坦な場所から傾斜が緩やかな場所に広がっており、傾斜が強くなる場所ではほとんど出土していない。後期旧石器時代の礫・遺物が第2遺跡北半分を中心に確認できることから、第2遺跡B区調査区外の北側に遺構や遺物の分布が認められる可能性が考えられる。（南・山本）

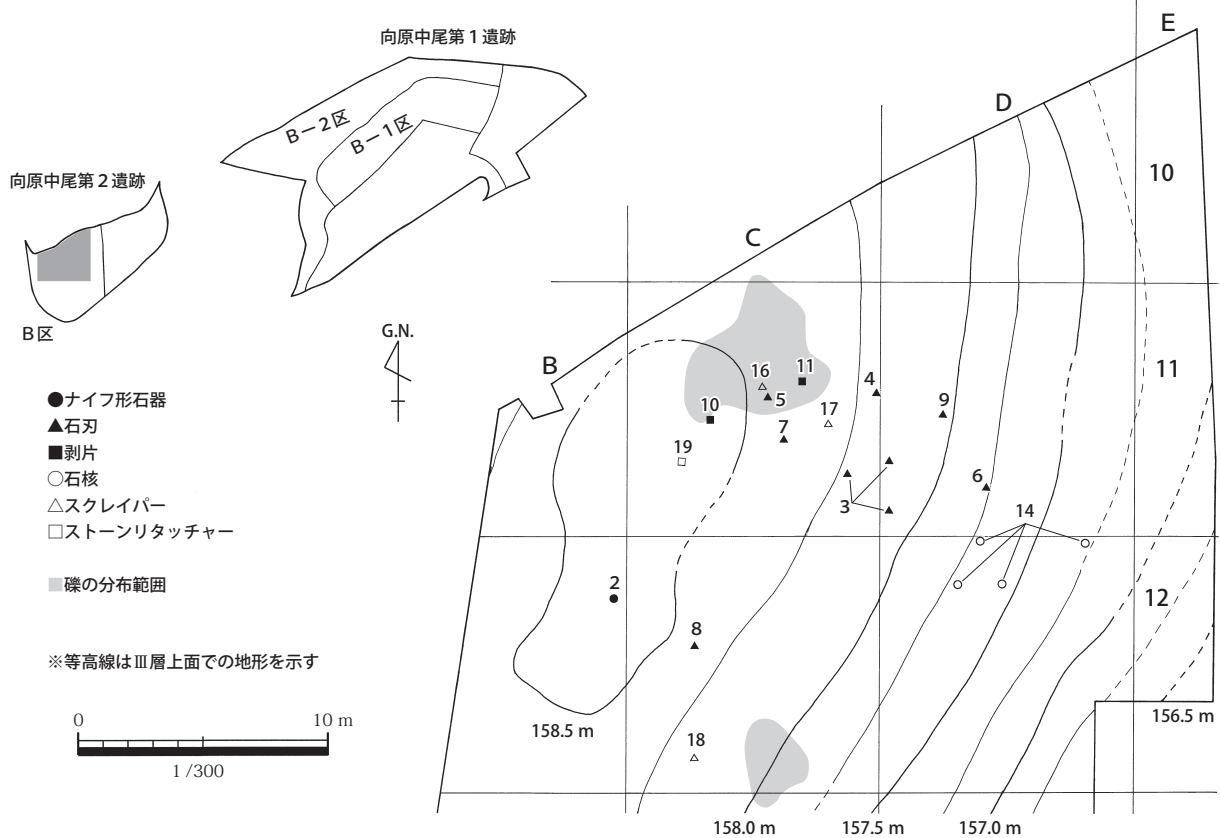
2 遺物（第8・9図、第1表、図版7）

後期旧石器時代の遺物はナイフ形石器、石刃、剥片、石核、スクレイパー、ストーンリッター等が出土した。遺物は第2遺跡B区北半分で多く出土している。遺物は後期旧石器時代以外の層から出土しているものもあるが、形態的に後期旧石器時代の遺物と考えられるものは本項に掲載している。

ナイフ形石器（第8図1・2）

1はチャート製の縦長剥片を利用している。両側縁とも裏面から細かな剥離を施す二側縁加工である。

2は珪質頁岩製の縦長剥片を利用している。下部は右側縁が裏面から、左側縁が表面から細かな剥離が施される基部加工である。左側縁の上部に裏面から剥離が施される。



第7図 向原中尾第2遺跡後期旧石器時代礫・遺物分布図

石刃 (第8図3~9)

3は頁岩製、4・7~9は珪質頁岩製、5・6は流紋岩製の石刃である。3~9は縦長剥片を利用している。3~5・9は右側縁、7・8は左側縁、6は両側縁に細かい剥離が施されている。3は右側縁下部に裏面からの剥離による抉りが入る。4~8は下部に自然面を残す。

剥片 (第8・9図10・11)

10・11は珪質頁岩製の縦長剥片である。10は右側縁に表面から剥離が施されていることから二次加工剥片とみられる。10は左側面に、11は左側面と下部に自然面を残す。

石核 (第9図12~15)

12・13はホルンフェルス製の石核であり、風化が著しい。14は珪質頁岩製、15は流紋岩製の石核である。

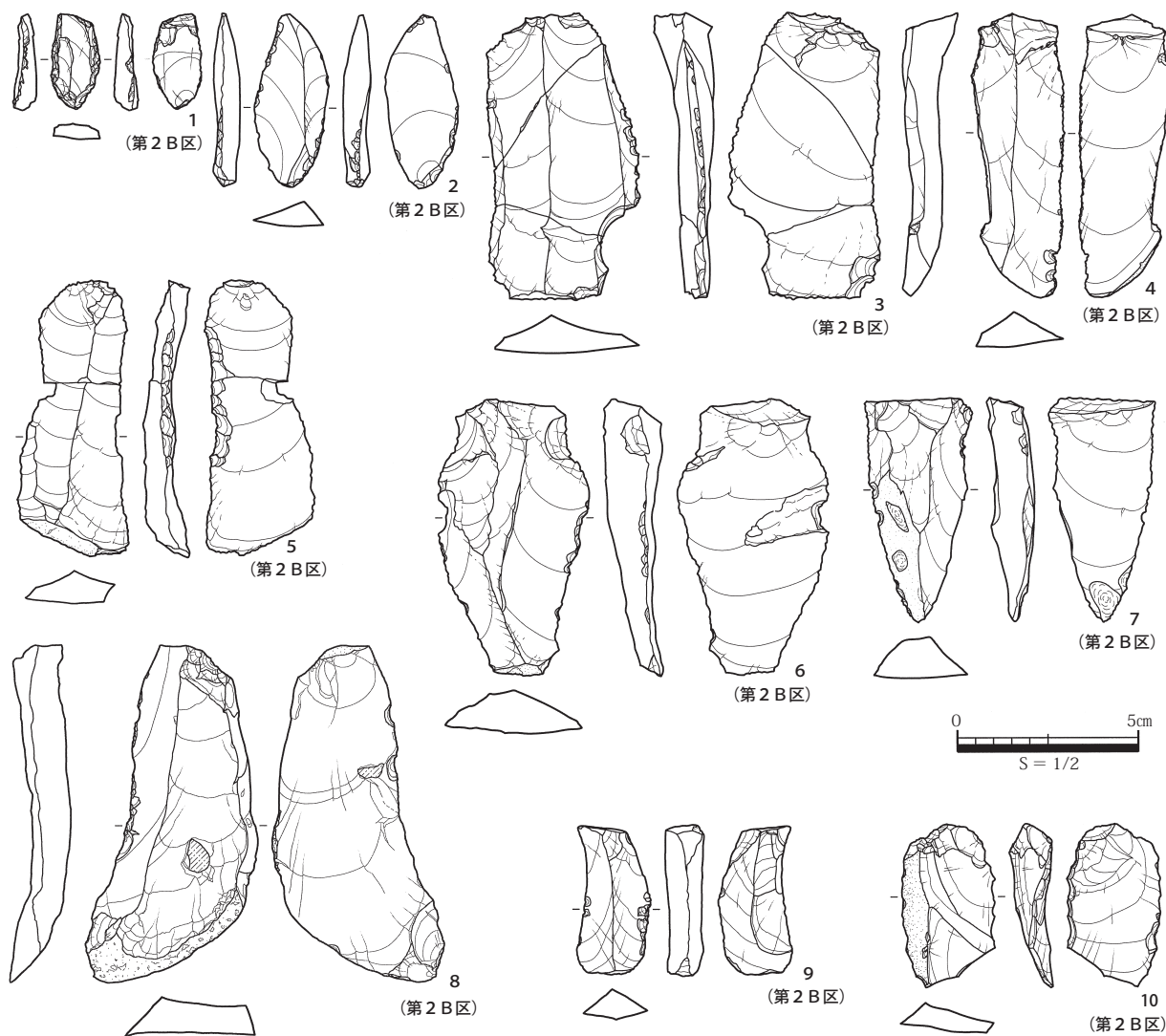
いずれも方向は様々だが大小の剥離がみられ、連続して剥離作業を行っていたとみられる。12は左側縁と下部、15は下部に剥離が施されているため、スクレイパーとして使用されていたと考えられる。13・15は裏面に、14は表面の一部に自然面が残る。

スクレイパー (第9図16~18)

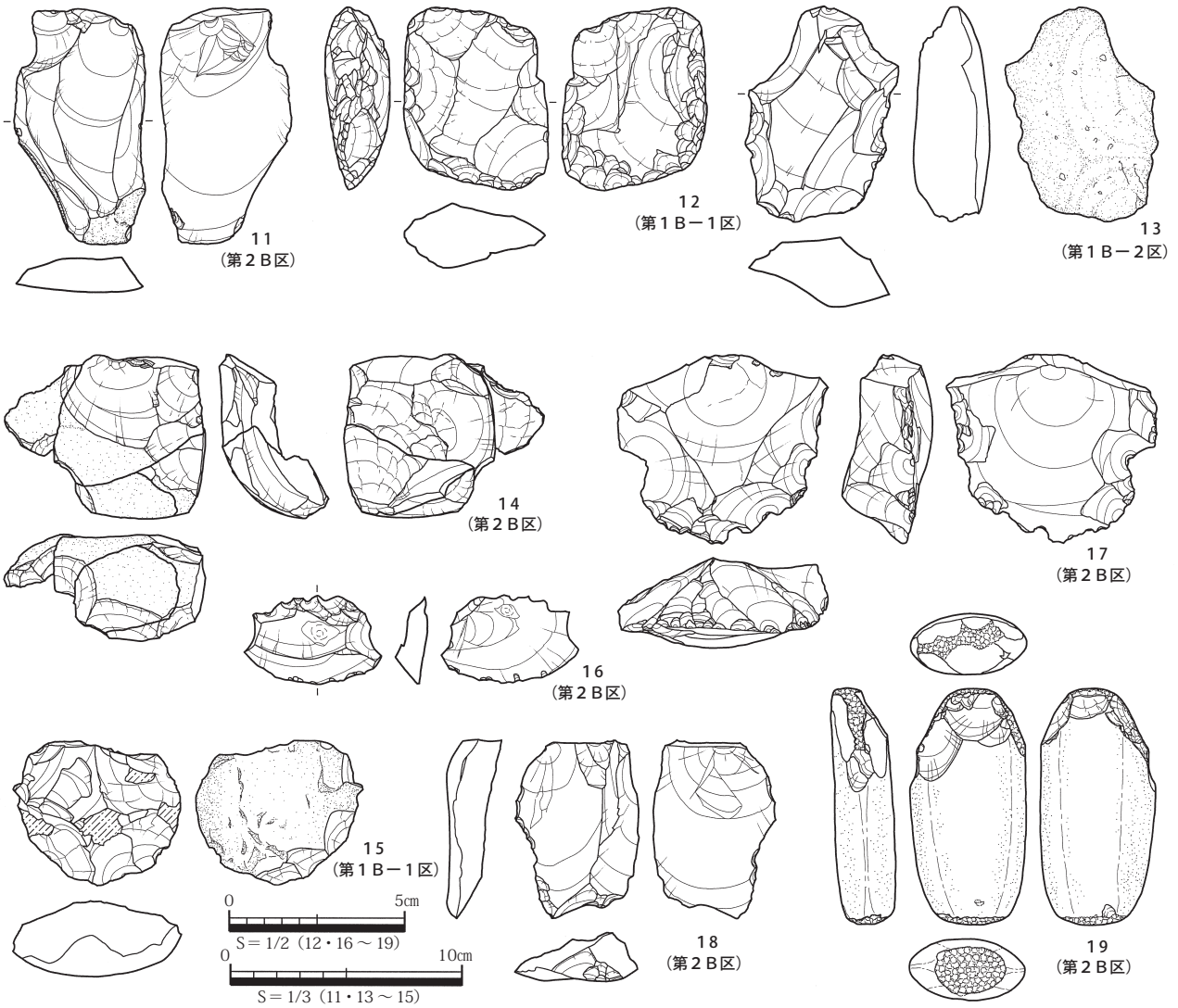
16は五ヶ瀬川流紋岩製、17・18は珪質頁岩製のスクレイパーである。16・17は横長剥片を利用している。16は下部に、17は右側縁と下部に、18は左側縁に刃部を成形する剥離が施されている。

ストーンリッター (第9図19)

19はホルンフェルス製のストーンリッターである。上・下部に敲打痕が残り、上部は敲打後に剥離が施されている。上・下部以外の面には自然面が残る。 (山本)



第8図 後期旧石器時代出土遺物実測図 (1)



第9図 後期旧石器時代出土遺物実測図(2)

挿図 番号	図版 番号	調査区	出土位置 取り上げ番号	出土 層位	器種	石材	法量 (cm, g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
1	図版7	第2B区	D11 SE	II	ナイフ形石器	チャート	2.7	1.3	4.1	2.4	
2	図版7	第2B区	525	IV	ナイフ形石器	珪質頁岩	4.8	2.1	0.8	6.0	
3	図版7	第2B区	82	IV	石刃	頁岩	8.0	4.3	1.9	39.9	3点接合
			519	VI下							
			532	VI							
			—	—							
4	図版7	第2B区	559	V	石刃	珪質頁岩	7.9	2.5	0.9	22.7	
5	図版7	第2B区	575	V下	石刃	流紋岩	7.7	3.0	1.3	19.5	2点接合
			576	V下							
6	図版7	第2B区	549	V	石刃	流紋岩	7.7	4.2	1.7	36.1	
7	図版7	第2B区	421	IV	石刃	珪質頁岩	6.3	3.0	1.3	22.2	
8	図版7	第2B区	457	IV上	石刃	珪質頁岩	9.4	4.2	1.0	51.8	
9	図版7	第2B区	408	IV下	石刃	珪質頁岩	4.1	1.8	0.9	7.9	
10	図版7	第2B区	560	V下	剥片	珪質頁岩	4.5	2.6	1.2	8.7	
11	図版7	第2B区	573	VI	剥片	珪質頁岩	10.1	5.7	1.5	132.3	
12	図版7	第1B-1区	J6	V	石核	ホルンフェルス	5.2	4.1	1.8	41.5	
13	図版7	第1B-2区	—	IV	石核	ホルンフェルス	9.2	6.2	3.3	183.9	
14	図版7	第2B区	151	IV	石核	珪質頁岩	7.0	8.6	3.5	180.1	4点接合
			242	V							
			266	IV							
			375	V上							
			—	—							
15	図版7	第1B-1区	—	II	石核	流紋岩	6.2	7.2	3.3	158.3	
16	図版7	第2B区	574	V下	スクレイパー	五ヶ瀬川流紋岩	2.5	3.9	0.9	7.5	
17	図版7	第2B区	424	V上	スクレイパー	珪質頁岩	5.4	6.0	2.6	71.2	
18	図版7	第2B区	493	V下	スクレイパー	珪質頁岩	5.1	3.5	1.6	18.1	
19	図版7	第2B区	384	IV下	ストーンリタッチャー	ホルンフェルス	6.7	3.3	1.7	63.5	

第1表 後期旧石器時代石器計測表

第4節 縄文時代の遺構と遺物

1 縄文時代早期の遺構と遺物

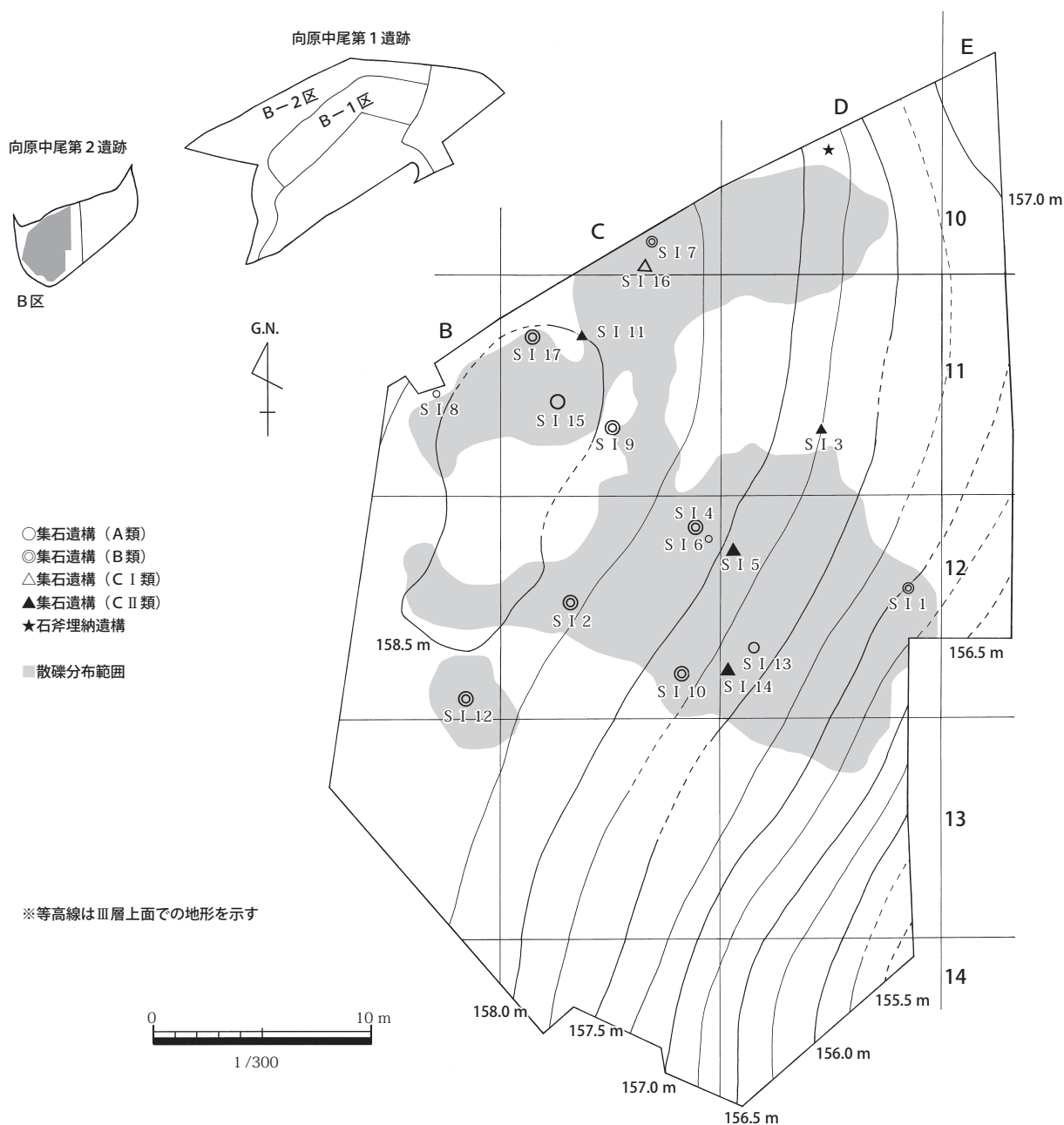
(1) 遺構・遺物の分布

向原中尾第1遺跡 遺構は、B-2区でピットが1基検出された(第11図)。遺物は、少量出土しており、B-1区を中心に石鏃や凹石などが出土している。

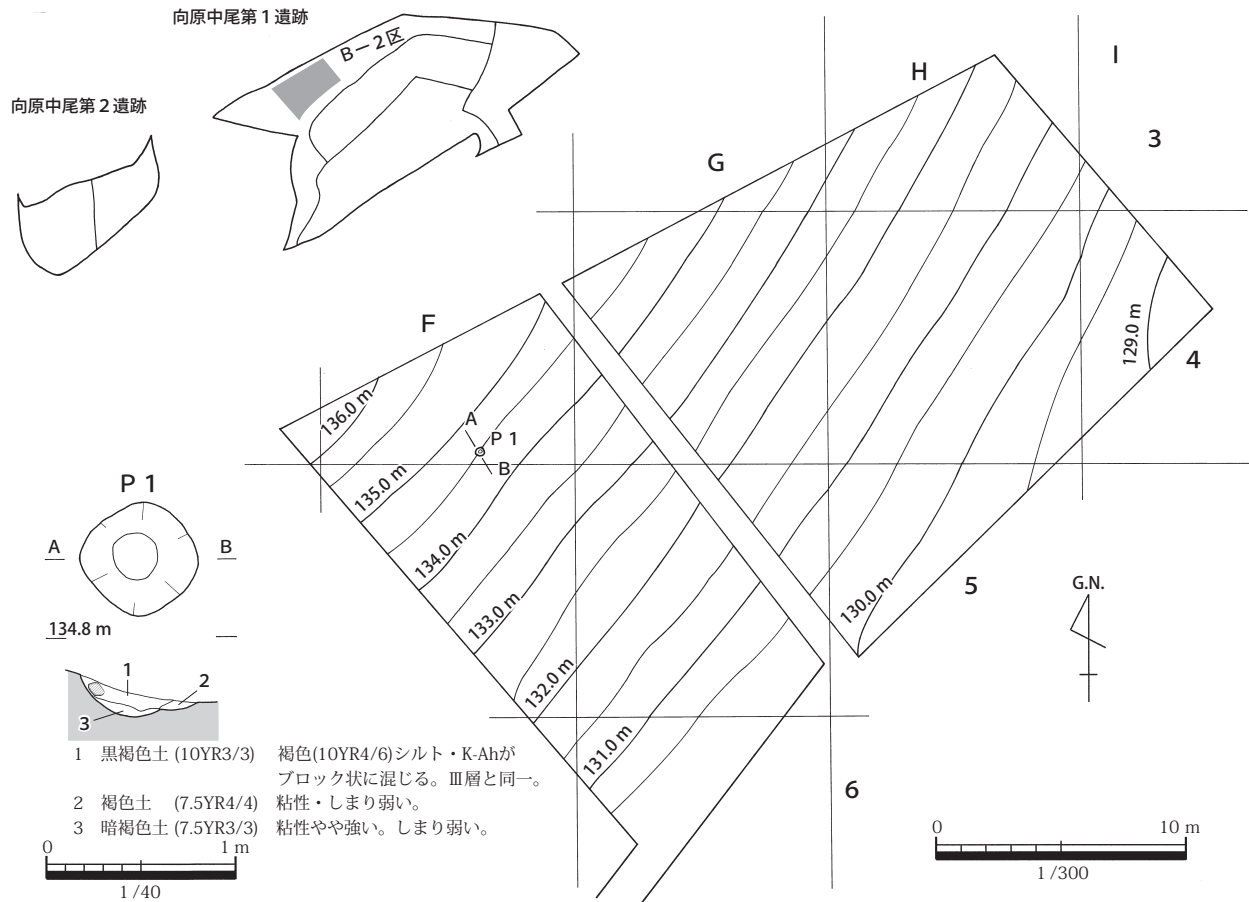
向原中尾第2遺跡 遺構は、B区で集石遺構が17基、石斧埋納遺構が1基検出された(第10図)。集石遺構はB区の中でも標高が最も高くなる平坦面から

東に下る緩やかな斜面で検出されたが、傾斜が強くなる場所では検出されなかった。またB区北半分を中心に散礫が確認されている。散礫には疎密があり、やや礫が集中する場所ではその下部において集石遺構が検出されている。散礫はほとんどが集石遺構と同質の石材である。

後述する弥生時代後期の竪穴建物跡の一部では、壁際などから同様の赤化した礫の破片が確認できるものもあった。また、SA5は竪穴建物構築の際に掘方がSI15に達している。これらのことから、今回確



第10図 向原中尾第2遺跡縄文時代早期遺構分布図



第11図 向原中尾第1遺跡B-2区縄文時代早期遺構分布図

認められた集石遺構は17基であったが、本来はさらに数基の集石遺構が散礫の範囲内に存在していたものと思われる。また集石遺構はB区調査区外の北側にも分布が広がる可能性が考えられる。

集石遺構以外には石斧埋納遺構と考えられる遺構がB区の北端で検出された。縄文時代早期の石斧埋納遺構は県内では少なく、貴重な資料を得ることができた。

(2) 集石遺構 (第2表、図版2・3)

第2遺跡B区で17基が検出された。集石遺構の上部には散礫が分布しており、上部の散礫を点上げた後に礫の集中がみられたものを集石遺構とした。集石遺構の検出面はⅣ層上面である。使用された石材はほとんどが尾鈴山溶結凝灰岩である。集石遺構には礫の集中箇所下部に掘り込みを伴うものや、掘り込みの底に配石が有るものがみられた。このため、検出された集石遺構を4つに分類し、分類ごとに掲載した。

- A類…掘り込み・配石が無いもの。4基
- B類…掘り込みは有るが、配石が無いもの。8基
- C類…掘り込み・配石が有るもの。5基
- C I類…配石が単数のもの。1基
- C II類…配石が複数のもの。4基

A類 (第12図)

A類にあたるものはS I 6・8・13・15である。A類は他の集石遺構に比べて礫の範囲が小さい傾向があり、礫の密度も比較的低い。特にS I 6・8は礫の密度が低く小さい。S I 13は礫の範囲は小さいが、礫が重なり合っており密度はS I 6・8よりは高い。S I 15は礫の範囲がやや大きく平面的に礫が分布している。いずれもほとんどの礫は被熱のためか赤化している。

B類 (第12・13図)

B類にあたるものはS I 1・2・4・7・9・10・12・17があり、集石遺構の約半数を占める。礫の範囲の大きさは0.8m前後 (S I 1・4・12) と1.1m前後

(S I 2・7・9・10・17) に分けられるが、掘り込みの形態や礫の密度には差異がみられない。礫はほぼすべて被熱のためか赤化している。B類で注意されるのは掘り込みのほぼ全体が礫で満たされているもの(S I 4・7・9・12)と、掘り込みの上層しか礫がみられないもの(S I 1・2・10・17)があるという点である。掘り込み内部の礫の構成や掘り込みの埋土の分層が可能かどうかは集石遺構の使用法や構築方法が影響している可能性があり、今後の発掘調査においてこれらの要因を検討する視点も必要だろう。掘り込みの埋土には炭化物がみられることから、掘り込みの内部で木材等を燃やすような行為が行われたと思われる。

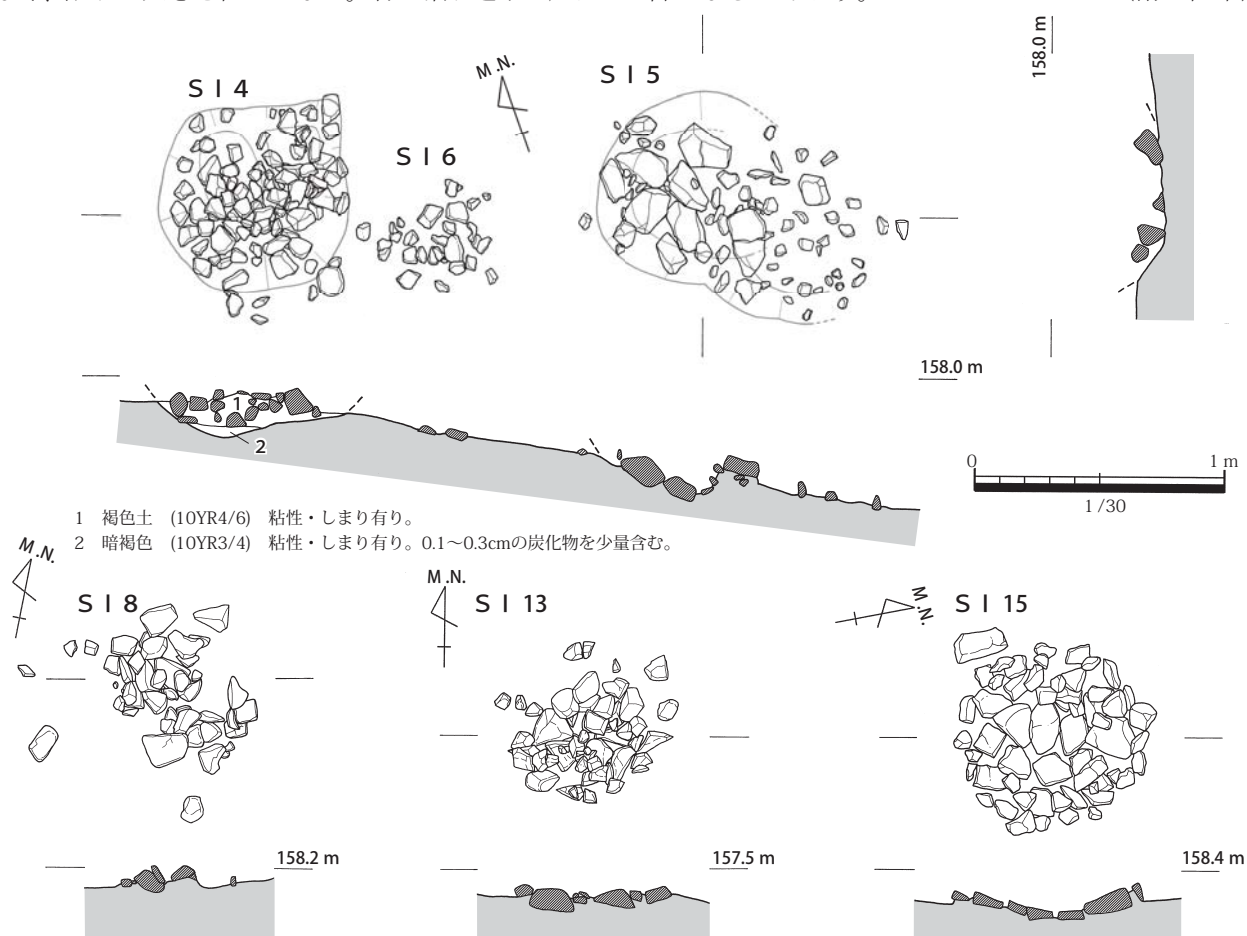
C I類 (第14図)

C I類にあたるものはS I 16である。S I 16は礫の密度が他のものに比べて低く、まとまる傾向はみられない。掘り込みは礫の分布範囲にわたるものではなく、配石の大きさ程しかない。特に掘り込みの底は

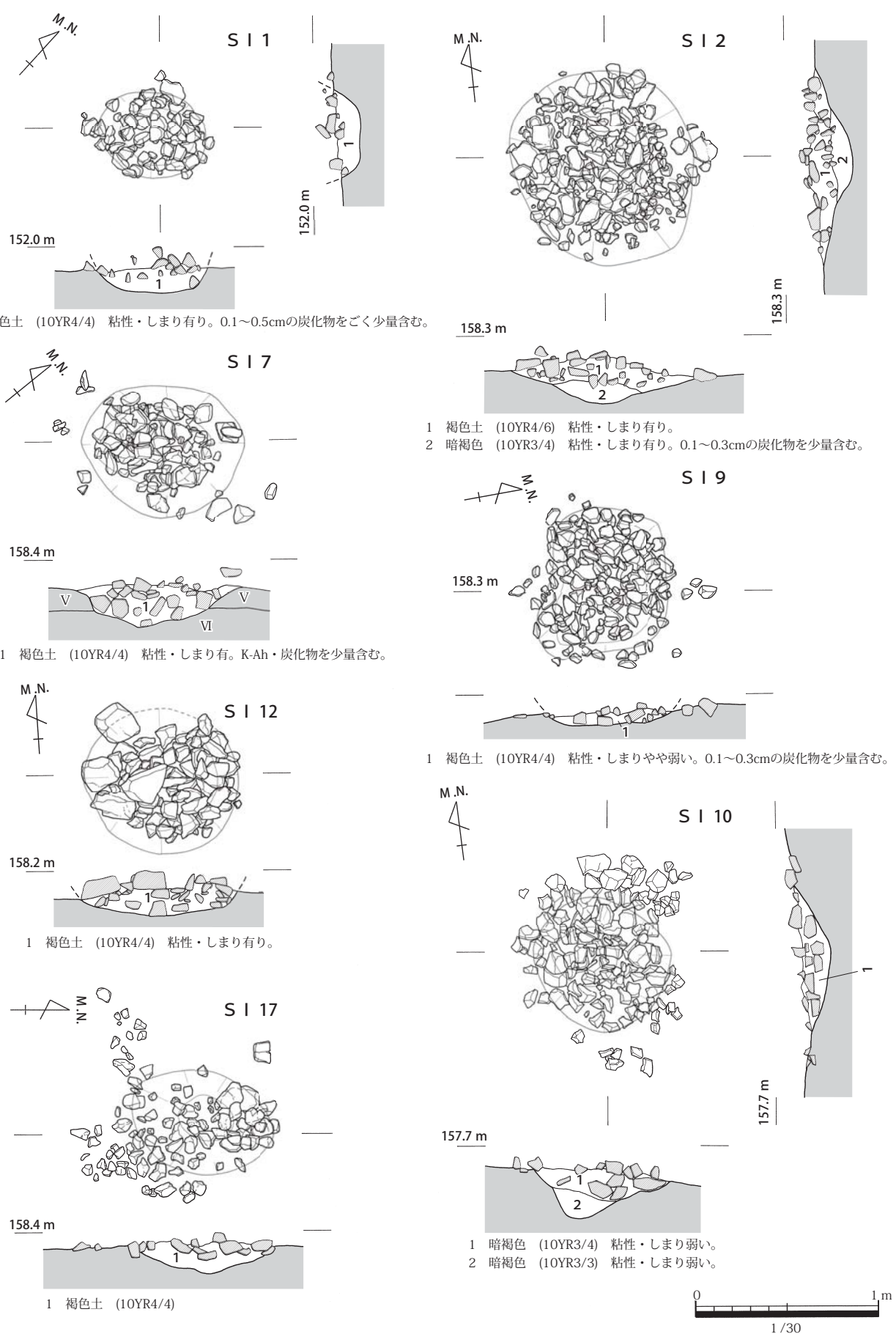
配石の大きさとほぼ一致しており、配石の大きさにあわせて掘られた可能性が考えられる。礫はいずれも赤化している。

C II類 (第12・14図)

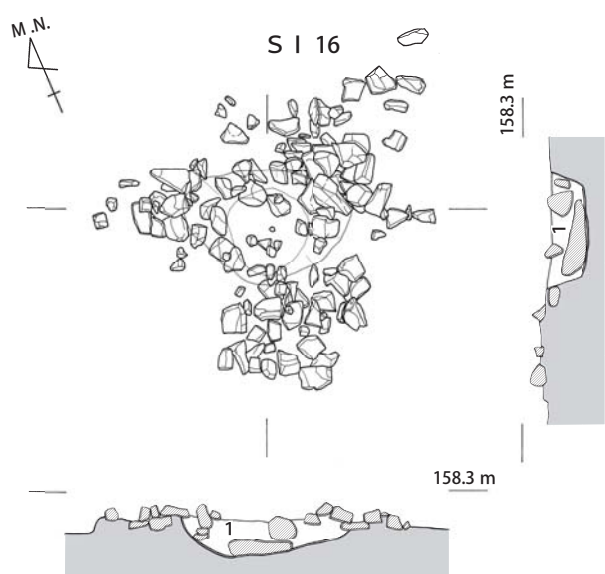
C II類にあたるものはS I 3・11・14である。S I 5も掘り込みと複数の配石を伴っていた可能性が考えられるが、残りが悪く不明である。礫はほとんどが赤化している。これらのうちS I 3・11の配石は30cm程度の大きな礫の周囲に20cm未満の礫が置かれているのに対して、S I 14は20cm前後の礫が掘り込みの底を覆うように並べられている。またS I 14は掘り込みの埋土が全体的に黒色化するほど炭化物が含まれており、炭層と呼んでもよいような状況であった。特に掘り込み最下層の4層は炭化物が多量に含まれており、3層を挟み2層でも炭化物が多く含まれていた。礫は1・2層に含まれている。このようにS I 14は今後、集石遺構の構造や使用法を考える上で重要な資料となるであろう。(南・山本)



第12図 向原中尾第2遺跡縄文時代早期集石遺構実測図(1)

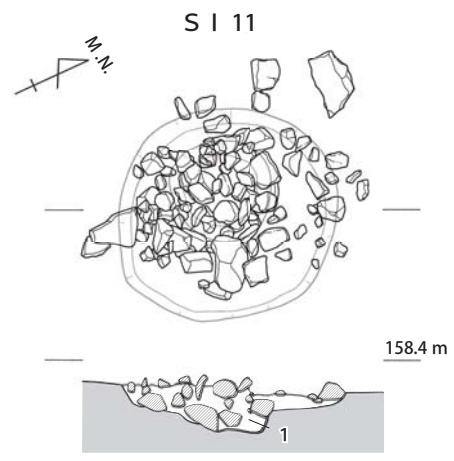


第13図 向原中尾第2遺跡縄文時代早期集石遺構実測図(2)



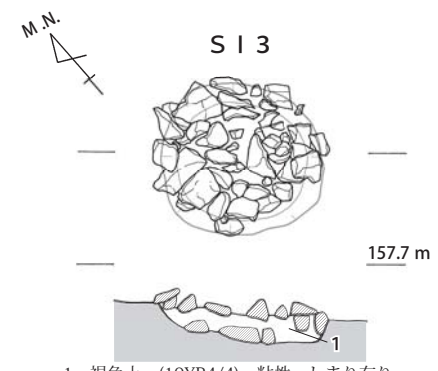
1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性・しまり強い。炭化物を少量含む。

S I 16 配石



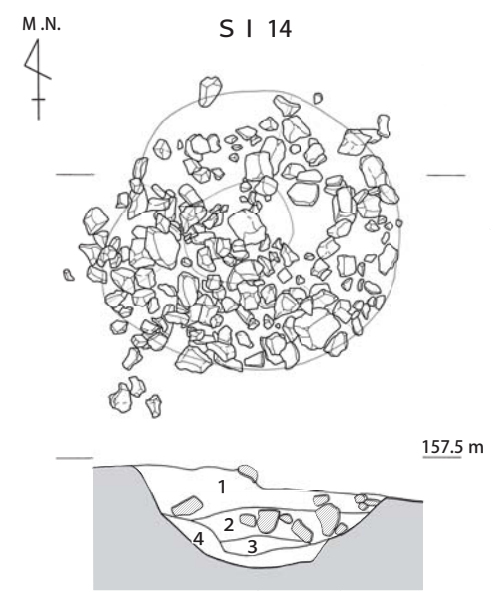
1 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまり有り。

S I 11 配石



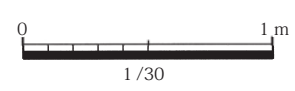
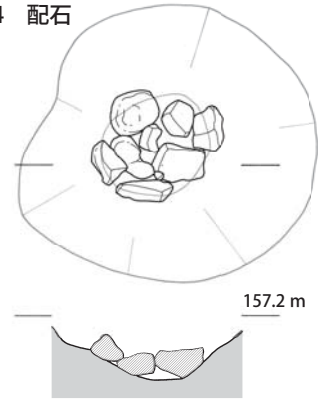
1 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまり有り。0.1~0.5cmの炭化物をごく少量含む。

S I 3 配石



1 褐色土 (10YR4/6)
 2 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物をやや多く含む。
 3 褐色土 (10YR4/4) 炭化物をやや多く含む。
 4 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物を非常に多く含む。

S I 14 配石



第 14 図 向原中尾第 2 遺跡縄文時代早期集石遺構実測図 (3)

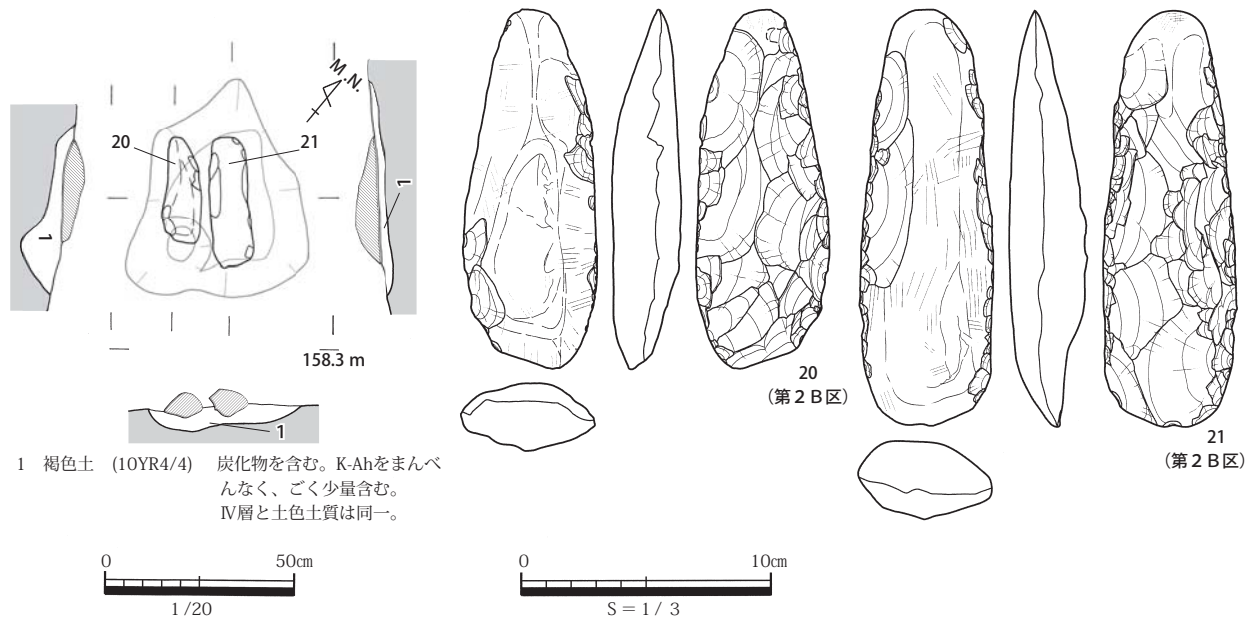
(3) 石斧埋納遺構 (第15図、第2表、図版3)

第2遺跡B区D10Gr.のIV層上面で検出された。石斧は南北方向から西に約40度傾いた軸に合わせて2本並んで出土し、この下に掘り込みを伴っていたため、石斧埋納遺構の可能性が考えられる。検出された場所は調査区北端の緩やかな斜面であるが、石斧はほぼ水平に高さを揃え、自然面を上、掘り込みからやや浮いた状態で置かれており、刃部は南東方向に向けられていた。掘り込みの埋土はIV層と同色同質だがしまりが弱く、炭化物やアカホヤの粒を少量含む。平面形態は不整形で、深さも一定ではなく、西側の石斧刃部の下は他の部分よりも深い。検出し

たIV層では縄文時代早期の土器や石器が出土しており、III層(K-Ah)上面では掘り込みが確認されなかったことから石斧の埋納時期も縄文時代早期と考えられる。(南・山本)

遺物 (第15図20・21、第4表、巻頭図版4)

遺物は20・21の石斧2点のみである。形態は短冊形に近く、刃部はやや丸く形成されている。石材はホルンフェルス製であり、表面に自然面が残存している。裏面は全体的に粗く加工されており、上端部は磨かれている。刃部は粗い加工のみであり、細かい加工は行われていない。21は両側縁に裏面から、細かい加工が施されている。(山本)



第15図 向原中尾第2遺跡石斧埋納遺構及び出土遺物実測図

遺構名	検出位置	図版番号	磔範囲 (m)		掘り込み (m)			配石	分類	備考
			長軸	短軸	長軸	短軸	深さ			
S11	D12 NE	図版2	0.72	0.58	0.58	0.47	0.15	×	B	
S12	C12 NW	図版2	1.12	1.03	1.05	0.99	0.25	×	B	
S13	D11 SW	—	0.70	0.62	0.64	0.60	0.11	複数	C II	
S14	C12 NE	図版2	0.92	0.70	0.77	0.75	0.18	×	B	
S15	D12 NW	図版2	1.31	0.80	(0.75)	0.71	?	複数	C II	掘方の一部は欠損、分類C IIの可能性有り
S16	C12 NE	図版2	0.57	0.45	—	—	—	×	A	
S17	C10 SE	—	1.21	0.83	0.87	0.72	0.23	×	B	
S18	B11 SE	—	0.95	0.86	—	—	—	×	A	
S19	C11 SW	図版2	1.13	0.95	0.83	0.72	0.07	×	B	
S110	C12 SE	—	1.21	0.99	0.75	0.73	0.27	×	B	
S111	C11 NW	図版3	1.13	0.98	0.87	0.83	0.18	複数	C II	
S112	B12 SE	図版3	0.85	0.76	0.83	(0.79)	0.15	×	B	掘方の一部は欠損
S113	D12 SW	図版3	0.73	0.64	—	—	—	×	A	
S114	D12 SW	図版3	1.36	1.28	1.17	1.10	0.37	複数	C II	炭化物が非常に多く、特に4層は黒色化している
S115	C11 SW	—	0.82	0.81	—	—	—	×	A	上部にSA5が構築されている
S116	C10 SE	—	1.43	1.35	0.68	0.45	0.17	単数	C I	
S117	C11 NW	図版3	1.16	1.13	0.77	0.57	0.17	×	B	
石斧埋納	D10 NW	図版3	—	—	0.58	0.49	0.10	—	—	

第2表 縄文時代早期遺構一覧表

(4) 遺物

遺物は土器や石器が出土しているが、第2遺跡B区北半分のなかでの分布の偏りなどはみられず、石器製作ブロックも確認されなかった。

また、縄文時代早期の遺物の多くはIV層からV層上面に含まれており、集石遺構の検出面もIV層上面までにおさまる。しかし、後期旧石器時代相当層のV層あるいはII層以上で出土した石器については、形態的に縄文時代早期のものと考えられるものは本節に掲載している。

土器 (第16図22~47、第3表、巻頭図版4)

22~26は外面に楕円押型文を施す。22・23・25・26は縦位、24は横位に施文し、楕円の粒は22・25・26が比較的丸く、23・24は細長い。22は押型文の施文後に一部ナデ消している。内面は22~24は横方向のナデ調整、25は貝殻条痕文の施文後に横方向のナデ調整、26は貝殻条痕文とナデ調整を施している。27は外面に縦位の山形押型文を施す。内面はナデ調整を施している。胴部の屈曲部にあたる破片であり、粘土紐の接合位置から剥離したと思われる。28は外面に横方向の貝殻条痕文を施す。内面はナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。29は外面に斜位の沈線文を施す。内面は横方向のナデ調整を施している。口唇部には貝殻背面押圧刻みを施している。30は外面に縦位のミミズバレ文を施す。胴部屈曲部に凹点状の押圧刻目を刻す貼り付け突帯が見られる。内面はナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。31は外面に浅い沈線文を施す。内面は横方向のナデ調整を施している。口唇部には棒状工具による押圧刻みを施している。32~38は外面に棒状工具による太い沈線文を施す。内面はナデ調整を施しており、33~38には指頭圧痕が残る。39・40は外面にミミズバレ状を呈する隆帯文を施す。内面はナデ調整を施している。41は外面に棒状工具による細い沈線文で綾杉文を施す。内面はナデ調整を施している。42は外面に横位と斜位の細い沈線文を施す。内面はナデ調整を施している。口唇内面側端部には棒状工具による横向きの「ハ」の字状の押圧刻みを施している。43は内外両面に丁寧なナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。44は内外両面に横方向のナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。45は外面に3条の細

く浅い沈線文を施す。内面は斜方向のナデ調整を施している。46は内外両面に横方向のナデ調整を施している。底部に木葉痕が残る。47は内面にナデ調整を施し、底に網代痕が残る。

石器 (第4・5表)

出土した石器の中でも粗製剥片石器が第2遺跡B区で多量に出土していることが注目される。IV~V層上面から出土した石器については、概ね縄文時代早期の遺物と考えられるが、一部は他の時期に含まれる可能性がある。なお、IV層から水晶の原石が出土している(図版11)。

本項では石器を器種ごとに分類して報告する。

石鏃 (第17図48~61、巻頭図版4)

48は珪質頁岩製、49はホルンフェルス製、50~52・54~57はチャート製、53・58~61は黒曜石製の打製石鏃である。基部は、48・49・52・56・58・59・61は抉りが深く、50・51・53~55は浅く、57は無い。60は基部が欠損しているため不明である。形状的には50~52・58は正三角形、48・49・54・56・57・59は二等辺三角形、53・55・60・61は五角形である。48~51・53・56~61は先端などが欠損している。

石槍 (第17図62・63、巻頭図版4)

62はホルンフェルス製、63は砂岩製の石槍であるが風化が著しい。両側縁に表裏両面から刃部を成形する細かい剥離が施されている。62・63は先端が欠損している。

石斧 (第17図64~68、図版7)

64・67・68は頁岩製、65・66はホルンフェルス製である。粗い加工を施したものが多く、66は上部が欠損し、67・68は下部が欠損する。65・67・68は自然面が残る。

礫器 (第17・18図69~73、図版7)

69・70はホルンフェルス製、71・73は砂岩製、72は頁岩製である。自然面を広く有し、69~72は上部に粗い加工を、73は周縁に粗い加工を施している。71は表裏両面に磨面が見られる。

石錘 (第18図74、図版7)

砂岩製の打欠石錘である。裏面に抉り部以外の大きな剥離がある。

スクレイパー (第18図75～77)

75は頁岩製、76は珪質頁岩製、77はホルンフェルス製である。75は下部に粗い剥離を施し、76は左側縁から下部にかけて粗い剥離を施し、77は右側縁から下部にかけて剥離を施し、刃部を成形している。75・77は裏面に、76は裏面の一部に自然面が残る。

石核 (第18図78～84)

78は珪質頁岩製、79は安山岩製、80～82・84はホルンフェルス製、83は黒曜石製である。82・84は風化しており、80～84は自然面を一部に残す。いずれも連続して剥離作業を行っていたとみられる。また78・79は左側縁に微細な剥離を施しており、スクレイパーとしての機能も有していたと考えられる。

剥片 (第18図85・86)

85は流紋岩製、86は珪質頁岩製の横長剥片である。86は下部に潰れが見られる。

粗製剥片石器 (第19・20図87～114、図版8)

尾鈴山溶結凝灰岩・ホルンフェルス・砂岩・頁岩の剥片で、平面形は円形～楕円形を呈する。断面は打点から下縁に向けて鋭利になる剥片である。全ての表面に自然面が残る。剥片と区別がつかないものも多く、厳密には分類しきれていない。ここでは形態や使用の有無などから4類に細分した。

I類 (第19図87～96)

二次的な加工が施されていないものを分類した。87・90は頁岩製、88・89・92は砂岩製、91・93・94はホルンフェルス製、95・96は尾鈴山溶結凝灰岩製である。96は上部に大きな剥離面がある。

II類 (第19図97～104)

I類の中で刃部に使用した痕跡が認められるものを分類した。刃部に潰れが見られるものが多く、スクレイパーとしての機能があったと考えられる。97～99・103はホルンフェルス製、100は頁岩製、101・102・104は砂岩製である。

III類 (第20図105～110)

組織的な刃部が成形されたものを分類した。スクレイパーや礫器などの機能があったと考えられる。105・108はホルンフェルス製、106・107は頁岩製、109・110は砂岩製である。107・109・110は細かい加工、105・106・108は粗い加工が施されている。

IV類 (第21図111～114)

比較的大型で、重量300g以上のものを分類した。礫器としての機能があったと考えられる。111・114は尾鈴山溶結凝灰岩製、112・113は砂岩製である。111～113は大きな剥離面があることから上記剥片類の石核に相当する可能性がある。112・114は組織的な刃部が成形されている。

敲石 (第21図115～118、図版8)

全て砂岩製である。表裏両面に磨面、周縁に敲打痕が見られる。115～117は欠損している。

磨石 (第21図119、図版8)

尾鈴山溶結凝灰岩製である。表裏両面に磨面が見られる。上部に剥離面があることから、粗製剥片類の石核に相当する可能性がある。

凹石 (第21図120、図版8)

尾鈴山溶結凝灰岩製である。表裏両面の中央に敲打による使用痕があり浅く窪む。磨面があり磨石の転用の可能性がある。石材は磨石と共通する。

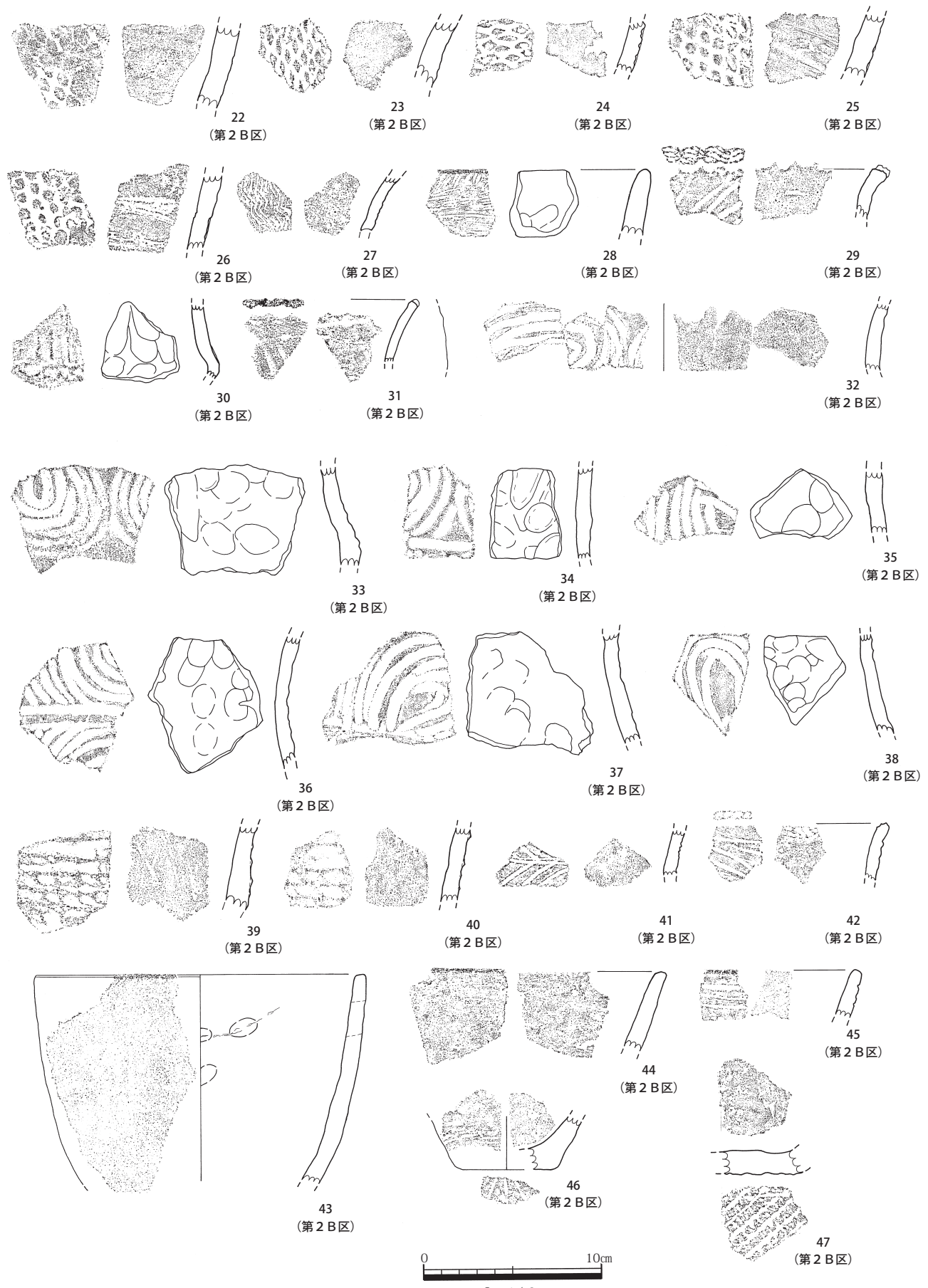
2 縄文時代後・晩期の遺物 (第22図121～129、第6表、図版8)

向原中尾第1遺跡B-1区に縄文時代後期後半～晩期の土器が出土している。

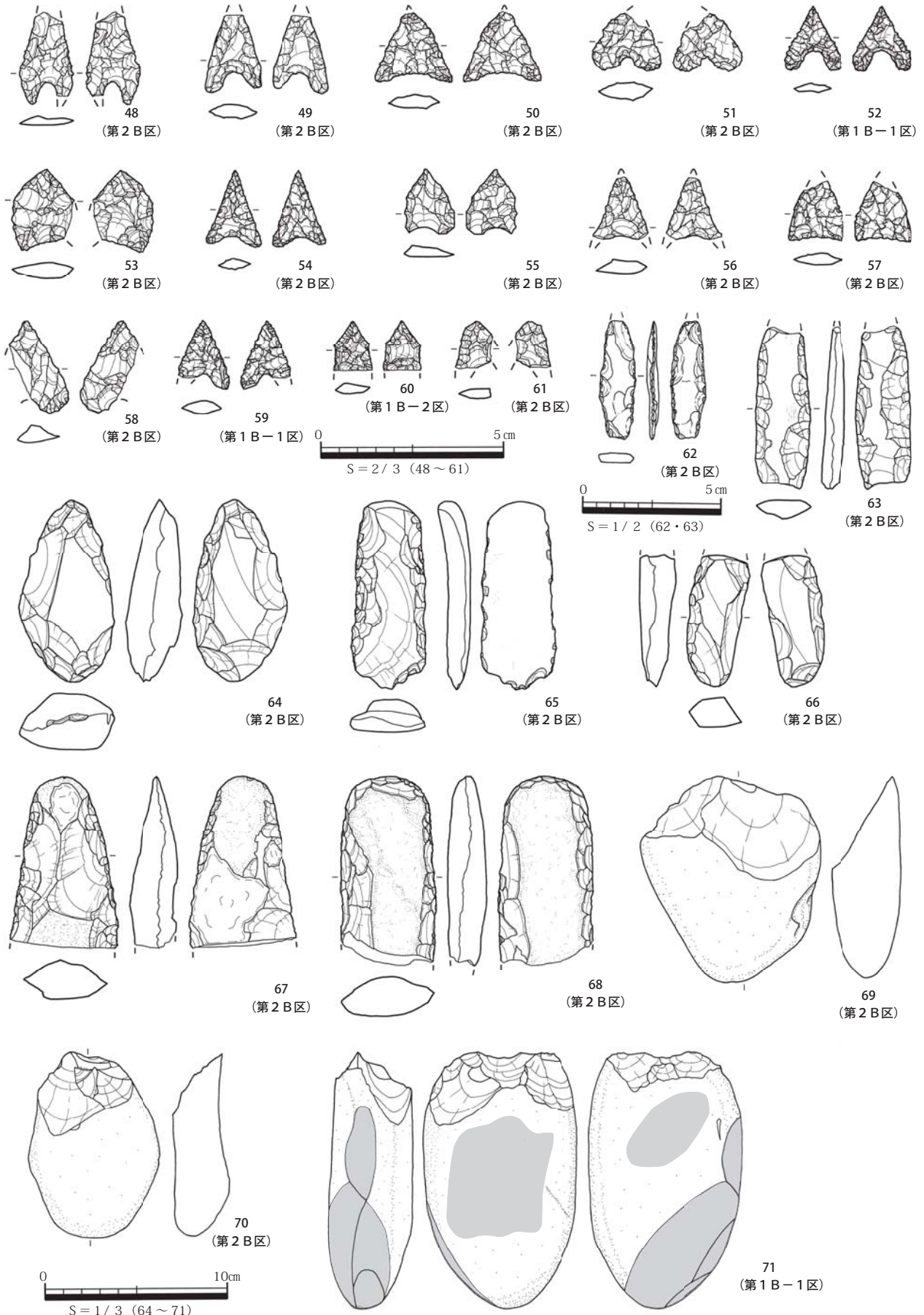
土器

121は外面が風化しているが丁寧なナデ調整で、斜方向の後に横方向のナデ調整を施し、内面に斜方向のナデ調整を施している。122は外面に斜方向のナデ調整を施し、内面は横方向のナデ調整を施している。123は内外両面に横方向のナデ調整を施している。口唇部はナデ調整により平坦に仕上げる。124の外面は全体的に煤が付着する。内外両面ナデ調整であるが、外面は風化している。121に似た器形である。125は外面に横方向のナデ調整を施す。内面は斜方向の後に縦方向のナデ調整を施している。口唇部は横方向のナデ調整により平坦に仕上げる。126は浅鉢であり、内外両面にミガキ調整を施している。外面は全体的に煤が付着する。127～129は外面に貼付突帯を施す。127・128はいわゆる無刻目突帯文土器である。129は晩期後葉の刻目突帯文土器である。内外両面とも貝殻条痕文を施す。127は口唇に近い部分は横方向のナデ調整、128は貝殻条痕文の上から斜方向のナデ調整を施す。

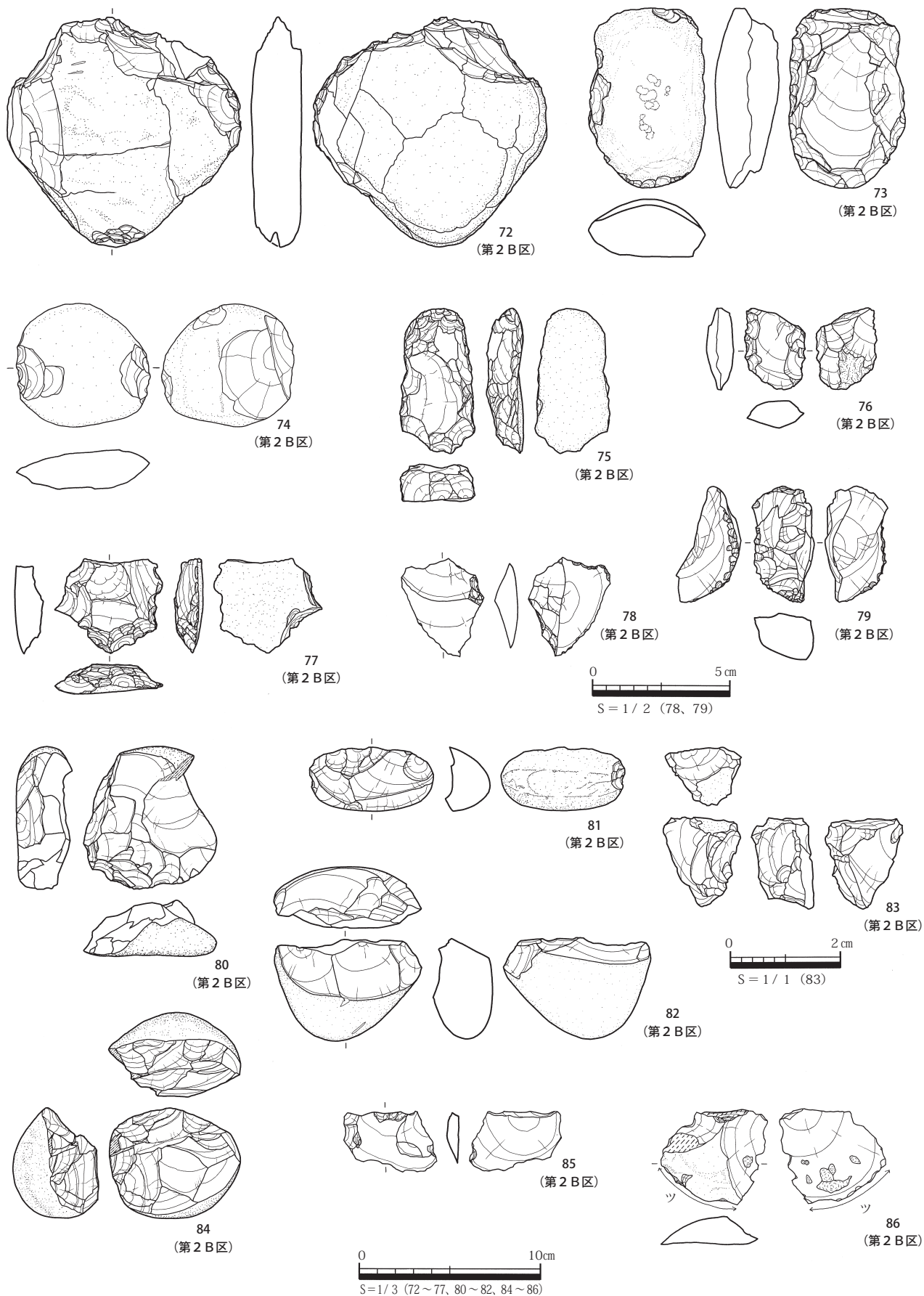
(山本)



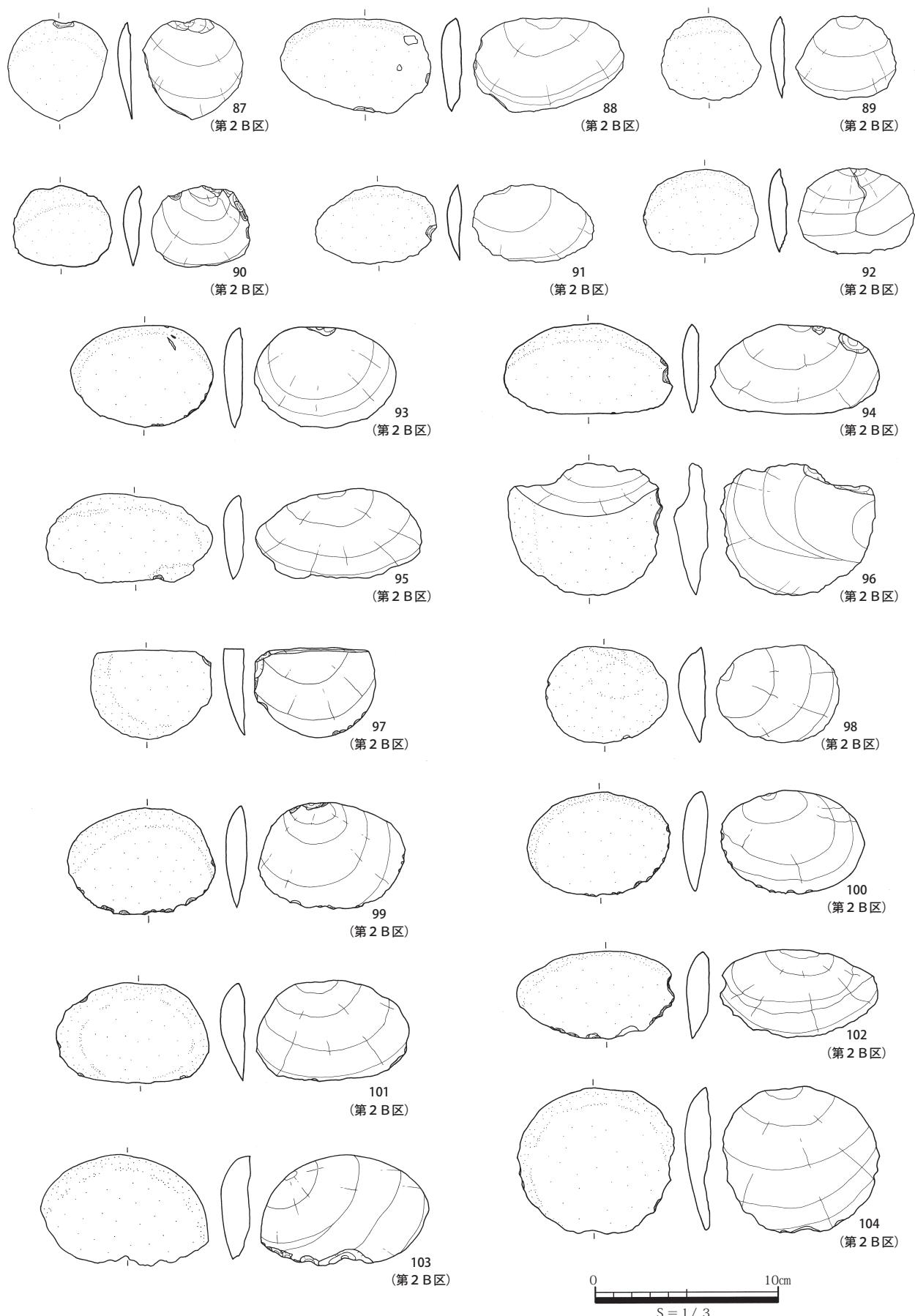
第16図 縄文時代早期出土遺物実測図(1)



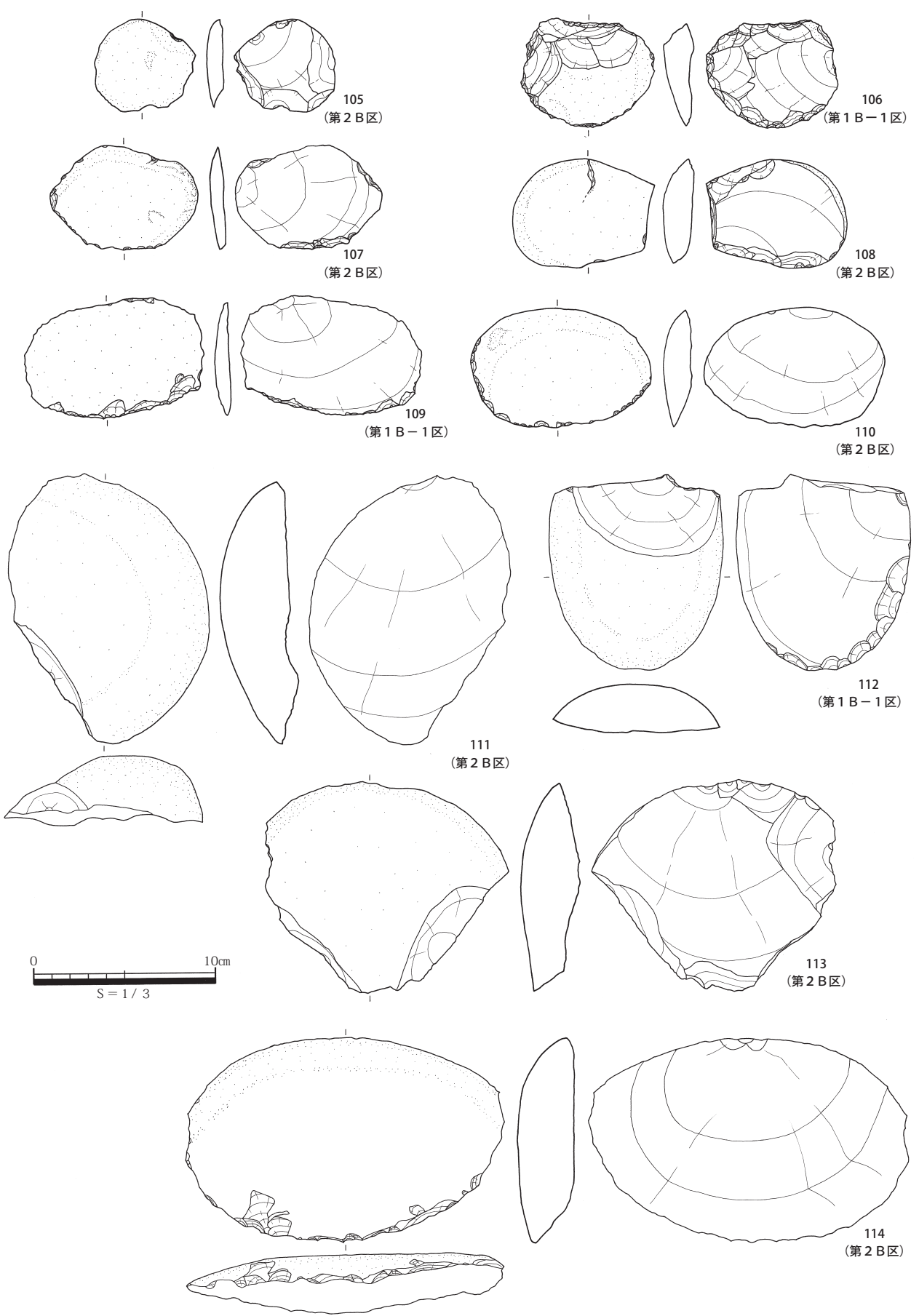
第17図 縄文時代早期出土遺物実測図(2)



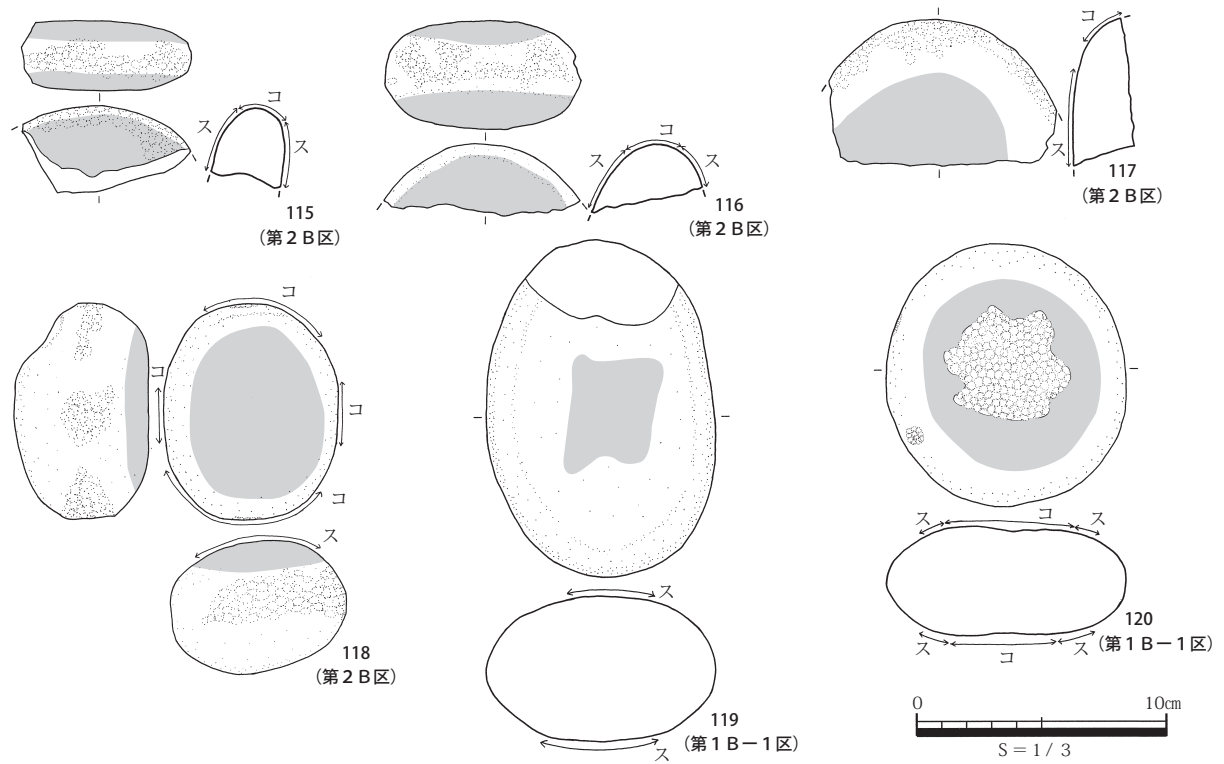
第18図 縄文時代早期出土遺物実測図(3)



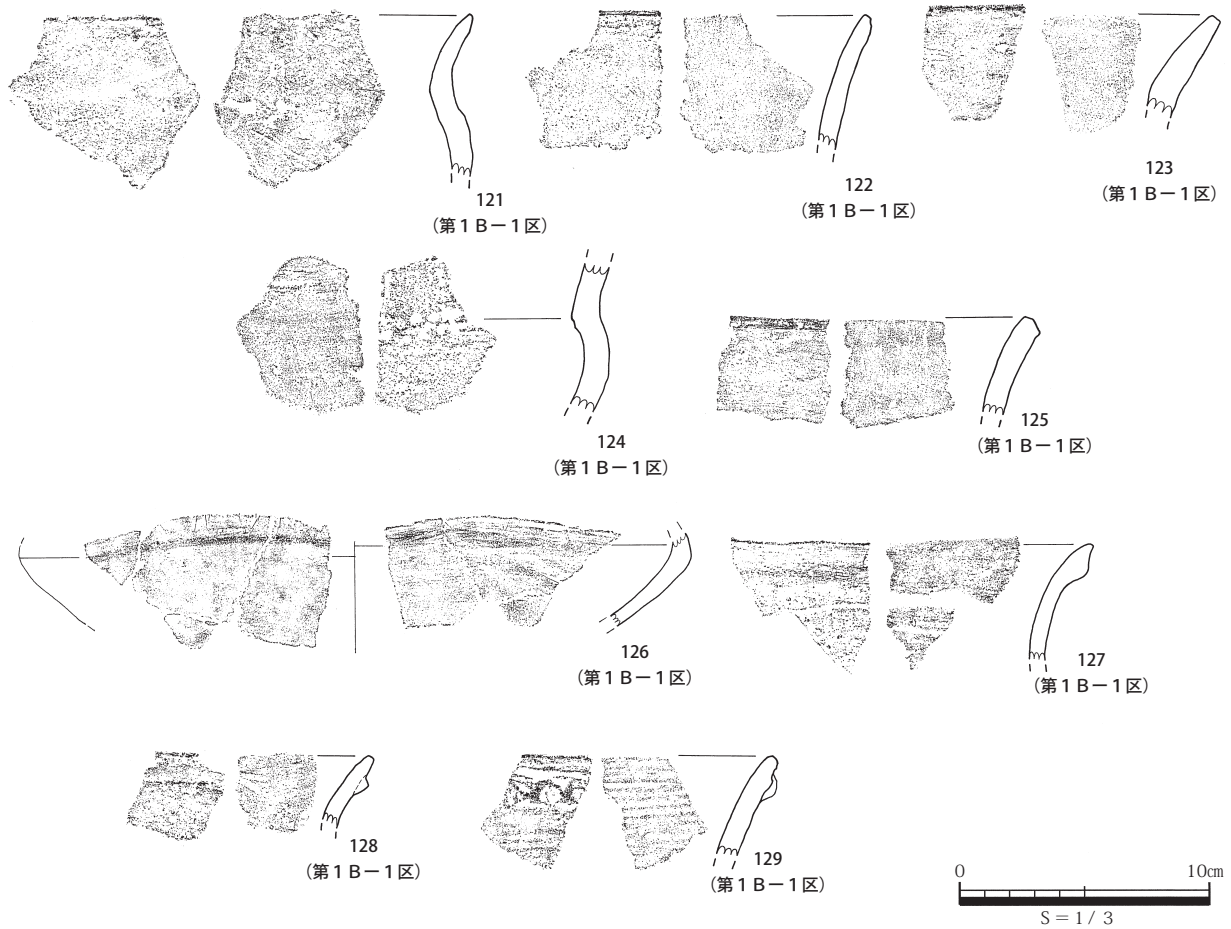
第19図 縄文時代早期出土遺物実測図(4)



第20図 縄文時代早期出土遺物実測図(5)



第21図 縄文時代早期出土遺物実測図(6)



第22図 縄文時代後・晩期出土遺物実測図

棟号	図版番号	調査区	出土位置 取り上げ番号	出土 層位	器種	部位	法量 (cm)	文様・調整等		色調		粘土	備考
								外面	内面	外面	内面		
22	巻頭4	第2B区	231	V上	深鉢	胴	—	楕円押型文→斜方向のナデ	横方向のナデ	橙 5YR6/6	褐 7.5YR4/3	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒を含む	
23	巻頭4	第2B区	341	IV下	深鉢	胴	—	楕円押型文	横方向のナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒・黒色光沢粒を含む	
24	—	第2B区	184	IV	深鉢	胴	—	楕円押型文	横方向のナデ	赤褐 5YR4/6	明赤褐 5YR5/6	2mm以下の灰白色粒・灰褐色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒・黒色光沢粒を含む	
25	—	第2B区	120	IV	深鉢	胴	—	楕円押型文	斜方向の貝殻条痕→横方向のナデ	赤褐 5YR4/6	明赤褐 2.5YR5/6	3mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒・黒色光沢粒を含む	
26	巻頭4	第2B区	273	V上	深鉢	胴	—	楕円押型文	横方向の貝殻条痕、ナデ	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	3mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒を多く含む	
27	—	第2B区	372	V上	深鉢	胴	—	長大な山形押型文	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	1mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を多く含む	手向山式か
28	—	第2B区	29	IV	深鉢	口	—	横方向の貝殻条痕文	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄 7.5YR5/3	にぶい黄 7.5YR5/3	3mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	内：黒変
29	巻頭4	第2B区	389	IV	深鉢	口	—	口唇部：貝殻表面押型刻み 口縁部：斜位の沈線文	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR5/4	1mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を多く含む	色調・粘土が他と異なる
30	—	第2B区	127	IV	深鉢	口	—	縦位のミミズバレ文、楕円部に粘土 細粒付、凹点状の刻み	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/3	4mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を多く含む	手向山式系
31	巻頭4	第2B区	568	IV	深鉢	口	—	口唇部：押圧刻み 口縁部：斜位の浅い沈線文	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR6/6	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の灰白色光沢粒を多く含む	
32	巻頭4	第2B区	SA 1 2+8	—	深鉢	胴	—	棒状工具による太い沈線文	ナデ	にぶい黄 7.5YR6/4	にぶい黄 7.5YR6/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	手向山式系
33	巻頭4	第2B区	146	IV	深鉢	胴	—	棒状工具による太い沈線文	ナデ、指頭圧痕	明黄褐 10YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を含む	手向山式系
34	—	第2B区	74	IV	深鉢	胴	—	棒状工具による太い沈線文	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を含む	手向山式系
35	—	第2B区	SA 7 18	—	深鉢	胴	—	棒状工具による太い沈線文	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	4.5mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を含む	手向山式系
36	巻頭4	第2B区	336	IV下	深鉢	胴	—	棒状工具による太い沈線文	ナデ、指頭圧痕	明黄褐 10YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	3mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を含む	手向山式系
37	巻頭4	第2B区	371	IV	深鉢	胴	—	棒状工具による太い沈線文	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を含む	内：黒変 手向山式系
38	—	第2B区	496	V上	深鉢	胴	—	棒状工具による太い沈線文	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	1mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を含む	手向山式系
39	巻頭4	第2B区	38	IV	深鉢	胴	—	ミミズバレ状を呈する隆帯文	ナデ	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒を多く含む	
40	—	第2B区	35	IV	深鉢	胴	—	ミミズバレ状を呈する隆帯文	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	1mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒を多く含む	
41	—	第2B区	388	IV	深鉢	胴	—	横位・斜位の細い沈線文	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	2mm以下の透明光沢粒を多く含む 1mm以下の灰白色粒を含む	
42	—	第2B区	152	IV	深鉢	口	—	口唇部：押圧刻み 口縁部：横位と斜位の細い沈線文	ナデ	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	1mm以下の赤褐色粒を含む 1mm以下の灰白色粒を含む	
43	—	第2B区	357	IV下	深鉢	口→胴	口：(18.2)	丁家なナデ、指頭圧痕	丁家なナデ、指頭圧痕	橙 7.5YR6/6	にぶい黄 7.5YR6/4	3mm以下の透明光沢粒を多く含む 2.5mm以下の灰白色粒を多く含む	粘土細痕
44	巻頭4	第2B区	364	IV下	深鉢	口	—	横方向のナデ、指頭圧痕	横方向のナデ、指頭圧痕	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を多く含む	外：糠付着
45	—	第2B区	533	V	深鉢	口	—	細く浅い3条の沈線文	斜方向のナデ	赤褐 2.5YR4/8	赤褐 2.5YR4/8	1mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色粒を多く含む	
46	—	第2B区	338	IV下	深鉢	底	底：(5.9)	横方向のナデ 底部：木の葉痕	横方向のナデ	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/1	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒を少量含む	底：木の葉底
47	—	第2B区	271	V上	深鉢	胴	—	底部：網代文	ナデ	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄 7.5YR5/4	1mm以下の浅黄褐色粒を多く含む 5mm以下の灰黄褐色粒を少量含む	底：網代文

第3表 縄文時代早期土器観察表

挿入 番号	図版 番号	調査区	出土位置 取り上げ番号	出土 層位	器種	石材	法量 (cm, g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
20	巻頭4	第2B区	石斧埋納遺構	IV	石斧	ホルンフェルス	14.3	5.3	2.8	229.0	石斧埋納遺構出土
21	巻頭4	第2B区	石斧埋納遺構	IV	石斧	ホルンフェルス	16.5	5.4	3.1	313.0	石斧埋納遺構出土
48	巻頭4	第2B区	102	IV	石鏃	珪質頁岩	2.5	1.5	0.4	1.0	上部・右基部欠損
49	巻頭4	第2B区	SA5-7	—	石鏃	ホルンフェルス	2.1	1.5	0.4	1.1	上部欠損
50	巻頭4	第2B区	101	IV	石鏃	チャート	1.9	2.1	0.3	1.3	上部欠損
51	巻頭4	第2B区	140	IV	石鏃	チャート	1.6	1.9	0.5	1.2	上部欠損
52	巻頭4	第1B-1区	J5 NE	V	石鏃	チャート	1.8	1.6	0.3	0.6	
53	巻頭4	第2B区	131	IV上	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	2.2	1.7	0.5	1.5	右基部欠損
54	巻頭4	第2B区	SA4-222	—	石鏃	チャート	2.1	1.5	0.3	0.7	
55	巻頭4	第2B区	B13 NE	II	石鏃	チャート	1.8	1.4	0.3	0.8	
56	巻頭4	第2B区	528	IV	石鏃	チャート	1.7	1.5	0.4	0.8	上部・基部欠損
57	巻頭4	第2B区	320	IV	石鏃	チャート	1.6	1.5	0.4	0.8	上部欠損
58	巻頭4	第2B区	326	IV	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	2.5	1.6	0.5	1.2	左基部欠損
59	巻頭4	第1B-1区	B-1 J6	V	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	2.0	1.4	0.4	0.7	左基部欠損
60	巻頭4	第1B-2区	B-2	IV	石鏃	黒曜石(霧島)	1.4	1.0	0.3	0.4	基部欠損
61	巻頭4	第2B区	319	IV	石鏃	黒曜石(姫島)	1.3	0.9	0.3	6.4	基部欠損
62	巻頭4	第2B区	16	IV	石槍	ホルンフェルス	4.3	1.4	3.5	2.4	上部欠損
63	巻頭4	第2B区	139	IV	石槍	砂岩	5.9	2.0	0.9	11.2	上部欠損
64	図版7	第2B区	501	V上	石斧	頁岩	9.9	5.2	3.2	168.9	
65	図版7	第2B区	581	V上	石斧	ホルンフェルス	10.3	4.1	1.8	79.4	
66	図版7	第2B区	189	IV	石斧	ホルンフェルス	7.2	3.0	2.0	54.0	上部欠損
67	図版7	第2B区	373	IV	石斧	頁岩	9.4	5.9	3.0	139.1	下部欠損
68	図版7	第2B区	351	V上	石斧	頁岩	10.3	5.2	2.2	176.0	下部欠損
69	図版7	第2B区	374	IV下	礫器	ホルンフェルス	11.2	9.8	3.7	437.3	
70	図版7	第2B区	199	IV	礫器	ホルンフェルス	10.5	7.2	3.0	278.2	
71	図版7	第1B-1区	B-1	II	礫器	砂岩	13.8	8.3	4.5	778.5	
72	図版7	第2B区	22	IV	礫器	頁岩	12.6	12.7	2.8	530.8	
73	図版7	第2B区	—	II	礫器	砂岩	9.9	6.4	3.6	28.5	
74	図版7	第2B区	214	IV上	石錘	砂岩	6.7	7.3	2.0	144.3	
75	—	第2B区	542	V上	スクレイパー	頁岩	7.9	4.1	2.0	79.1	
76	—	第2B区	428	IV	スクレイパー	珪質頁岩	4.5	3.3	1.5	22.7	
77	—	第2B区	98	V	スクレイパー	ホルンフェルス	5.1	5.9	1.7	50.0	

第4表 縄文時代早期石器計測表(1)

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置 取り上げ番号	出土 層位	器種	石材	法量 (cm, g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
78	—	第2 B区	328	IV下	石核	珪質頁岩	3.6	3.0	0.9	8.7	
79	—	第2 B区	498	IV下	石核	安山岩	4.3	2.3	2.4	16.4	
80	—	第2 B区	584	V上	石核	ホルンフェルス	7.8	7.3	3.1	158.5	
81	—	第2 B区	29	IV	石核	ホルンフェルス	3.5	6.8	2.4	62.7	
82	—	第2 B区	100	V上	石核	ホルンフェルス	5.5	8.1	4.3	183.2	
83	—	第2 B区	460	V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.6	1.4	1.2	2.2	
84	—	第2 B区	287	V上	石核	ホルンフェルス	6.1	7.2	4.7	232.0	
85	—	第2 B区	135	IV	剥片	流紋岩	3.3	4.5	0.7	10.6	
86	—	第2 B区	415	IV下	剥片	珪質頁岩	5.2	5.9	1.6	48.9	
87	—	第2 B区	289	IV	粗製剥片石器	頁岩	5.5	5.4	0.7	28.1	I類
88	—	第2 B区	52	IV	粗製剥片石器	砂岩	5.1	8.1	1.1	52.5	I類
89	—	第2 B区	237	IV	粗製剥片石器	砂岩	4.6	5.4	0.8	19.8	I類
90	—	第2 B区	524	V上	粗製剥片石器	頁岩	4.4	5.4	1.0	26.1	I類
91	—	第2 B区	327	IV	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.2	6.6	0.8	24.2	I類
92	—	第2 B区	126	IV	粗製剥片石器	砂岩	4.6	6.2	1.0	31.9	I類
93	—	第2 B区	439	V上	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.4	7.7	1.0	51.5	I類
94	—	第2 B区	545	V	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.9	9.1	0.9	58.0	I類
95	—	第2 B区	163	IV	粗製剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	4.9	9.0	1.1	46.6	I類
96	図版8	第2 B区	212	IV	粗製剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	7.2	8.4	1.8	115.5	I類
97	—	第2 B区	159	IV	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.8	6.5	1.1	45.7	II類
98	—	第2 B区	385	IV	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.3	6.7	1.4	52.2	II類
99	図版8	第2 B区	14	IV	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.6	7.8	1.2	67.0	II類
100	図版8	第2 B区	381	V上	粗製剥片石器	頁岩	5.6	7.7	1.4	65.4	II類
101	図版8	第2 B区	24	V上	粗製剥片石器	砂岩	5.5	8.3	1.4	64.4	II類
102	図版8	第2 B区	262	V上	粗製剥片石器	砂岩	4.8	8.5	1.2	64.3	II類
103	—	第2 B区	119	IV	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.6	9.2	1.5	111.6	II類
104	—	第2 B区	218	IV	粗製剥片石器	砂岩	8.0	8.5	1.4	95.5	II類
105	図版8	第2 B区	435	V	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.0	5.4	0.8	37.6	III類
106	図版8	第1 B-1区	J6	IV	粗製剥片石器	頁岩	6.0	7.3	1.6	66.0	III類
107	—	第2 B区	427	V上	粗製剥片石器	頁岩	5.7	8.0	0.9	44.4	III類
108	—	第2 B区	359	IV下	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.9	7.7	1.5	101.9	III類
109	図版8	第1 B-1区	K5 SE	IV	粗製剥片石器	砂岩	6.6	9.8	0.8	72.5	III類
110	図版8	第2 B区	186	IV	粗製剥片石器	砂岩	6.5	9.9	1.6	112.8	III類
111	図版8	第2 B区	53	IV	粗製剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	14.2	10.4	3.7	617.8	IV類
112	図版8	第1 B-1区	J5 NE	V	粗製剥片石器	砂岩	10.6	9.5	2.7	320.4	IV類
113	図版8	第2 B区	76	IV上	粗製剥片石器	砂岩	11.5	13.2	3.2	526.6	IV類
114	図版8	第2 B区	337	IV下	粗製剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	11.1	17.3	3.2	716.0	IV類
115	図版8	第2 B区	250	V上	敲石	砂岩	3.5	6.7	2.9	77.3	下部欠損
116	図版8	第2 B区	527	IV	敲石	砂岩	2.8	7.9	4.4	94.1	下部欠損
117	図版8	第2 B区	318	IV	敲石	砂岩	5.8	9.0	2.4	189.9	下部・裏面欠損
118	図版8	第2 B区	555	IV	敲石	砂岩	8.6	7.0	5.4	468.8	
119	図版8	第1 B-1区	K5 NW	V	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	13.4	9.1	5.8	996.8	赤化?
120	図版8	第1 B-1区	K5 NW	V	凹石	尾鈴山溶結凝灰岩	10.5	9.5	4.3	684.1	
—	図版11	第2 B区	200	IV	原石	水晶	3.4	2.8	2.4	29.2	写真図版のみ掲載

第5表 縄文時代早期石器計測表(2)

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置 取り上げ番号	出土 層位	器種	部位	法量 (cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
								外面	内面	外面	内面		
121	図版8	第1 B-1区	J6	IV	深鉢	口~胴	—	斜方向のナデ→横方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい褐 7.5YR5/4	3mm以下の明褐色を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を多く含む	外:煤付着
122	図版8	第1 B-1区	J5	V	深鉢	口	—	口唇部:横方向のナデ 口縁部:斜方向のナデ	横方向のナデ	橙 2.5YR6/6	橙 5YR6/6	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	
123	図版8	第1 B-1区	B-1	II	深鉢	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	微細な透明光沢粒を多く含む 1mm以下の灰白色粒を多く含む	
124	図版8	第1 B-1区	H20B76	IV	深鉢	頭~胴	—	横方向の丁寧なナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	7.5YR6/6	4mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	外:煤付着
125	図版8	第1 B-1区	B-1	II	深鉢	口	—	横方向のナデ	斜方向のナデ→縦方向 のナデ	明赤褐 5YR5/6	橙 5YR6/6	2.5mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	外:煤付着
126	図版8	第1 B-1区	K5SE	IV	浅鉢	胴	—	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	外:煤付着
127	図版8	第1 B-1区	J5NE	V	深鉢	口	—	貼付突帯、横方向のナデ	貝殻条痕文、横方向の ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	1mm以下の黒色光沢粒を少量含む 1mm以下の灰白色粒を多く含む	外:煤付着
128	図版8	第1 B-1区	H20B76	VII	深鉢	口	—	貼付突帯、横方向のナデ	貝殻条痕文→斜方向の ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR7/3	2mm以下の暗褐色を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を多く含む	
129	図版8	第1 B-1区	15NE	IV	深鉢	口	—	貼付突帯に刻目、貝殻条痕文→横方向のナデ	貝殻条痕文	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	2.5mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒を含む	

第6表 縄文時代後・晩期土器観察表

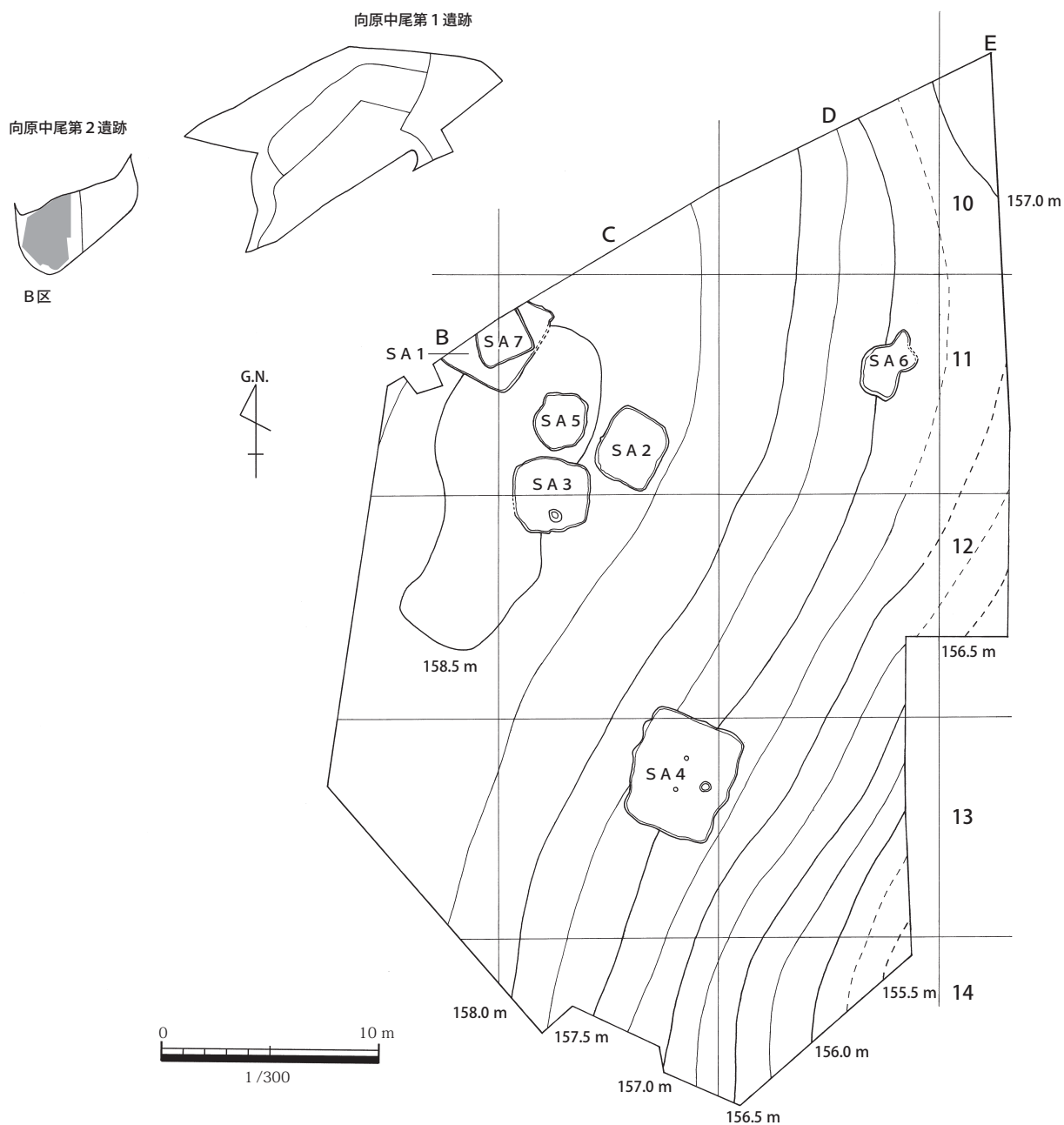
第5節 弥生時代以降の遺構と遺物

1 遺構と遺物の分布

向原中尾第1遺跡 遺構は、確認できなかった。遺物は、B-1区で土器や石器が出土している。特にB-1区中央部分では土器や石器が傾いたような状態で出土した。これは上部から遺物が流れ込んだか、廃棄されたものと考えられる。一方、B-2区では土器や石器はほとんど出土しなかった。

向原中尾第2遺跡 遺構は、Ⅲ層（K-Ah）上面において7軒の竪穴建物跡を検出し、そのうちS

A1・7の2軒は切り合っていた。竪穴建物跡のうちSA1～3・5・7は第2遺跡B区北半分の標高が高く平坦面になっている場所で検出した。ここからは東に日向灘を望むことができ、非常に見晴らしがよく、風通しもよい場所にあたる。冬場は風が強く吹くが地形的には居住に最適な場所といえる。これに対してSA4は南東方向へ下る斜面で検出した。この場所は斜面地ではあるが、傾斜は緩やかである。これよりも南東側においては傾斜が強くなる。SA6もSA4と同じく斜面地ではあるが、傾斜が



第23図 向原中尾第2遺跡弥生時代遺構分布図

緩やかな場所で検出している。

遺物は、B区ではⅡ層（黒褐色土）の掘削中に多数の土器や石器が出土し、調査区の南半分よりも北半分で多くの遺物が出土した。特に竪穴建物跡の直上から多く出土し、竪穴建物跡の埋土出土遺物と接合するものが多く見られた。そのため、竪穴建物跡は本来の掘り込み面を失っており、Ⅱ層のうち遺構直上の土は遺構埋土であった可能性が考えられる。そのため、竪穴建物跡の直上から出土したⅡ層の遺物は埋土上出土遺物として扱っている。

遺構外においても多くの土器や石器が出土している。第2遺跡B区においては竪穴建物跡の周囲で遺物が多く出土しており、傾斜が強くなる調査区南東側ではほとんど遺物が出土しなかった。このような状況から、SA4から北側の平坦面や傾斜の緩やかな場所に生活空間が広がっていたと思われる。

他の層で出土した遺物であっても当該期の遺物と思われるものについては本項に掲載している。

（南・山本）

2 竪穴建物跡と出土遺物（第7～11表）

SA1・7（第24図、図版4）

調査区北端にあり、SA1・7は切り合っていた。土層を検討した結果、SA1→SA7の順に構築されたと考えられる。

SA1

調査区北壁で土層確認を行うためのトレンチを掘削した際に検出した。全体の半分以上は調査区外であるが、平面形態は一辺4.3m程度の正方形であったと思われる。遺構の残存状況は深さ約30cmである。竪穴を掘った後に厚さ約15cmの土を貼ることにより床を作っている。貼床の土にはⅢ層とⅣ層の土がブロック状に含まれているため、竪穴を掘削した後にその排土を利用して貼床を行っていると考えられる。床面の高さはほぼ水平である。柱穴は確認されなかった。また、東側の壁際から約1mの範囲で、床面から検出面までの埋土全体に5～15cmの礫が確認できた。礫は材質や赤化しているものが多いことから、集石遺構と同質の石材と考えられる。

床面直上では炭化材が少量出土している。建物の

北西側で建物の軸に沿う方向で出土しており、垂木と考えられる。炭化材の径は10cm前後で、長さは約25cmである。また埋土には全体的に少量の炭化物が含まれていた。

（南・山本）

【SA1出土遺物】（第33図130～133、図版9）

甕（130）

底部にあたり、外面は工具によりナデ上げている。内面は底部に指頭圧痕が残り、ナデ上げられている。

壺（131）

大型の壺の底部にあたる。胎土には砂粒が多く混じる。底部が小さくわずかに窪む。外面は縦方向にミガキ調整を施し、内面は縦方向にナデ調整を施している。外面には煤が付着する。

高坏（132）

脚部にあたり、外面は縦方向のミガキ調整を施す。内面は工具による横方向の粗いナデ調整を施している。裾部との境に近い場所に4つの円形透かしが外面から穿孔されている。

石器（133）

頁岩製の石庖丁である。両側縁に抉りが入る。表裏両面は軽く磨く程度であるが、下部は丁寧に磨かれ刃部を研ぎ出している。

（山本）

SA7

SA1から軸が45°傾く形で構築され、SA1を切っている。SA1と同様に北側部分が調査区外であるため全体像はわからないが、平面形態は一辺2.3mほどの正方形であったと思われる。サイズの住居とするには小さいと考えられる。遺構の残存状況は深さ約30cmである。竪穴を掘った後に厚さ約15cmの土を貼ることにより床を作っている。床下の土は礫とK-Ahが混じる土と、K-Ahのブロックが混じる土の2つに分けられる。礫とK-Ahが混じる土は、貼床を行う前に整地を行ったもので、その上にK-Ahのブロックが混じる土で貼床を行ったものと考えられる。床面の高さはほぼ水平であり、SA1と高さは変わらない。柱穴は確認されなかった。

SA7においても床面直上では炭化材が少量出土している。方向は一定せず、多くは長さ約10cm程度である。北東側では乳白色の粘土の上に炭化材があ

り、その上に焼土が被さった状態で出土している。

【S A 7 出土遺物】（第39図201～204、図版9）

東側では長径約 30cm を超える礫が出土している。台石と考えられるが使用痕などは確認できなかった。付近から敲石（203）が出土している。

甕（201）

口縁部にあたり、内外両面に横方向のナデ調整を施す。口唇部は横方向のナデ調整により平坦に仕上げられ、わずかに窪む。

壺（202）

口縁部にあたり、外面は横方向のナデ調整の後に櫛描波状文を施す。内面は横方向のナデ調整を施している。

石器（203・204）

203 は尾鈴山溶結凝灰岩製の敲石である。表面に磨面があり、周縁に敲打痕が認められる。特に下部に強い敲打痕があることから主に下部が使用されていたと思われる。

204 は砂岩製の砥石である。表裏両面が砥面となる。特に表面は長軸方向に浅い溝状の窪みが認められる。また、上部と下部に敲打痕が認められる。

（山本）

S A 2（第25図、図版4）

調査区北西部にあり、S A 1・7の南東側に位置する。S A 3・5とは隣接しており、それぞれの間隔は約 1 m と非常に接近して構築されている。平面形態は長辺約 3.3 m、短辺約 2.8 m の隅丸方形である。遺構の残存状態は深さ約 20cm である。竪穴を掘った後に厚さ約 6 cm の土を貼ることにより床を作っている。貼床の土にはⅢ層～Ⅴ層の土がブロック状に含まれているため、竪穴を掘削した後にその排土を利用して貼床を行っていると考えられる。床面の高さはほぼ水平である。柱穴は確認されなかった。

S A 2でも床面直上で炭化材が出土した。炭化材は建物のほぼ中央と北側から出土している。中央の炭化材は長さ 10cm 前後、幅約 5cm の小さい炭化材が検出面から床面の間で出土した。また北側の炭化材は長さ約 25cm の棒状のものが長軸方向に、長さ約 10cm のものが短軸方向で出土しており、建物の構造材であったと考えられる。埋土には全体的に炭化物が含まれて

いることから、周辺に散らばった状態であった炭化物が廃絶後に流れ込んだものであると考えられる。

（南・山本）

【S A 2 出土遺物】（第34図134～139、図版9）

遺物は東側に集中して出土しており、小片が多い。

甕（134～139）

134 は口縁部～胴部にあたる。内外両面は横・斜方向の工具によるナデ調整を施している。口唇部は横方向のナデ調整により平坦に仕上げられており、外面に口唇部に沿って強い指頭圧痕が残ることから指でつまみながら平坦に仕上げたと思われる。

135・136 は口縁部にあたり、緩やかに外反する。135 の外面は斜方向のナデ調整を施し、内面は横・斜方向のナデ調整を施している。136 は内外両面に横方向のナデ調整を施している。135・136 の口唇部は横方向のナデ調整により平坦に仕上げられており、外面には全体的に煤が付着する。

137 は底部付近にあたり、外面は斜方向の工具によるナデ調整を施す。内面は横方向のナデ調整を施し、二次被熱のためか赤色変化している。下部の断面にも煤が付着している。

138 は小型甕の口縁部～底部にあたる。底部が傾斜しているため自立することができない。外面はナデ調整を施し、内面は斜方向の工具によるナデ調整を施しており、底部に指頭圧痕が残る。

139 は小型甕の口縁部～胴部にあたり、胎土や色調から 138 と同一個体と思われる。 （山本）

S A 3（第26・27図、図版5）

調査区の北西部にあり、S A 2・5と隣接している。平面形態は、一辺約 3.4 m の隅丸正方形である。遺構の残存状況は深さ約 20cm である。竪穴を掘った後に厚さ約 10cm の土を貼ることにより床と壁を作っている。貼床の土にはⅢ層とⅣ層の土がブロック状に含まれているため、竪穴を掘削した後にその排土を利用して貼床の土には多量の炭化物が含まれていた。床面の高さはほぼ水平である。柱穴は確認されなかった。また竪穴建物の南壁際で土坑が検出された。土坑の埋土の上層では炭化物が出土したが、下層ではほとんど出土しなかった。また土坑

の埋土にはK-Ahが少量含まれていた。

SA3では炭化材が良好な状態で出土した。炭化材は遺構検出の段階から多数確認された。このため埋土には全体的に炭化材が含まれていた。埋土の中でも3層は炭化材と焼土が暗褐色土に混じっている。この3層が1・2層のしまりの弱い土の直下に堆積しており、3層の下は床面であることから、建物廃絶後の早い段階で焼失し、その後に土が堆積したものと思われる。

床面からは長さ約10cm前後の炭化材が多く出土した。炭化材C6はこの中でも最大のもので長さ約1m、幅約14cmを測る。樹皮が残存しており、瘤状の木の節も残存していた。また、長さ約20cm以上の炭化材はほとんどが丸太状のものであった。このような状況から建物を建てる際の木材はほとんど加工することなく、木を切り出した状態で使用されていたと考えられる。一方で建物中央部分と南西部分には断面が板状や舟底形の炭化材が見られた。これらは長さが短いことから丸太状の木材とは異なる部分に用いられたと考えられる。また炭化材C7には木材を切り出した際の痕跡が残存していた。炭化材のほとんどは南北方向または東西方向に向きを合わせて出土したが、壁際ではほとんど残存していなかった。また長さ20cm以上の炭化材の多くは床面から出土していた。建物の東側では炭化材が重なり合った状態で出土しており、重なり方は東西方向の炭化材が倒れた上に南北方向の炭化材が乗っている状態であった。焼土は南側ではほとんどが炭化材の上から確認されたが、北側では炭化材の下から確認された。

床土をフローテーションした結果、赤色顔料の塊（巻頭図版4）が約0.5g確認された。（南・山本）

【SA3出土遺物】（第35図140～154、図版9）

遺物は床面と埋土で出土したが、貼床の中から出土するものもあった。遺物は遺構内でまんべんなく出土しており、ほとんどが小片である。貼床内に含まれていた遺物は床の構築時に混じった可能性が考えられる。

甕（140～151）

140～143は口縁部にあたり、緩やかに外反する。140～143は内外両面に横方向のナデ調整を施して

おり、外面に煤が付着する。

144～147は胴部にあたり、外面は横方向のナデ調整を施し、内面は斜方向のナデ調整を施している。144・146・147は外面に煤が付着する。

148は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。外面に斜方向のナデ調整を施し、内面に横・斜方向のナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。

149～151は底部にあたり、内外両面にナデ調整を施す。149～151は平底で、150は浅く窪みナデ調整を施している。149は内面に炭化材が付着している。

壺（152）

複合口縁壺の口縁部にあたる。外面に櫛描波状文を2条施し、内面は横方向のナデ調整を施している。

鉢（153）

口縁部が緩やかに内湾しており、内外両面に横方向のナデ調整を施している。

石器（154）

頁岩製の石庖丁であり、右半分が欠損している。全体的に磨かれており左側縁に挟りが入っている。下部に刃部を研ぎ出している。（山本）

SA4（第28図、図版6）

第2遺跡B区のほぼ中央に位置し、本遺跡の竪穴建物跡の中では最も規模が大きい。他の竪穴建物跡と離れて構築されており、SA3とは約10m離れている。また立地も異なっており、SA6を除く他の竪穴建物跡は標高の最も高い平坦面に構築されているのに対し、緩やかな斜面に構築されている。SA4から南東側は傾斜が強くなる。平面形態は長辺約5.4m、短辺約4.6mの隅丸長方形である。遺構の残存状況は深さ約60cmである。竪穴を掘った後に厚さ約20cmの土を貼ることにより床を作っている。貼床の土にはⅢ層とⅣ層の土がブロック状に含まれているため、竪穴を掘削した後にその排土を利用して貼床を行っていると考えられる。床面の高さはわずかに東側に向かって下がる。建物の南北方向の中軸線上に2つの柱穴が検出された。柱穴は北側が径約22cm、深さは掘方から約34cm、南側が径約20cm、深さは掘方から約36cmである。東側中央で土坑が検出された。土坑は径約50cmの

円形で、深さは約15cmである。埋土にはK-A hや黒色土のブロックが含まれていた。北側の柱穴の傍でもピットが検出されている。また、建物の北端が約10cm他の部分より高くなっており、掘方もこの部分が浅く掘られていることから、ベッド状の高まりになっていたと考えられる。

土坑のやや北側では床面からやや浮いた位置で長さ約12cm程度と約6cm程度の棒状の炭化材が出土した。SA4は他に炭化材が出土しておらず、埋土にもほとんど炭化材が含まれないことから、焼失建物とは考えられない。なお床面の数箇所焼土が検出されている。(石貫・山本)

【SA4出土遺物】(第36・37図155～191、図版9・10)

遺物は床面、埋土から出土している。床面では東壁際で口縁部を床面に向けて倒置されたような状態の甕(172、第29図)が出土し、西側では底部を欠損し倒置されたような状態の壺(174、第30図)が出土した。埋土中からも多くの土器や石器が出土している。また、SA3から出土した土器片と接合するものが見られた。外面にベンガラを塗布した土器片(188)が目される。また、9gの軽石(図版11)が1点出土している。遺物は、遺構の中央付近で多く出土し、ほぼ完形の土器や大きい破片のものが多くみられる。

甕(155～172)

155～161は口縁部にあたる。155～157は緩やかに外反していく。158～161は小さく外反して直線的に立ち上がる。155は外面に斜方向の工具によるナデ調整を施し、内面に横方向のナデ調整を施している。外面には全体的に煤が付着している。156は内外両面とも横方向の工具によるナデ調整を施している。157は内外両面とも横方向の工具によるナデ調整を施している。外面には全体的に煤が付着している。158は外面にナデ調整を施し、内面に横方向のナデ調整を施している。口唇部は横方向のナデ調整により平坦に仕上げている。159は内外両面とも横方向の工具によるナデ調整を施している。外面の一部には煤が付着する。160は横方向のナデ調整を施し、内面に横方向の工具によるナデ調整を施して

いる。161は外面に横方向のナデ調整を施し、内面にナデ調整を施している。

162～164は頸部～胴部にあたり、162・163は緩やかに内湾し、164は頸部で「く」の字状に強く屈曲する。162は内外両面とも横方向の工具によるナデ調整を施している。163は外面に斜方向の工具によるナデ調整を施し、内面に横方向の工具によるナデ調整を施している。164は内外両面に横方向のナデ調整を施している。162・163は外面に煤が付着する。

165～171は胴部～底部にあたり、165・166・168・170は底部が平底、169は底部が丸底である。167・171は底が欠損しているため不明である。165は外面に縦方向の工具によるナデ上げを施し、底付近に指頭圧痕が明確に残る。内面はナデ調整を施している。166は外面に縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面に斜方向のナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。167は外面に縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面にナデ調整を施している。外面には広い範囲に煤が付着する。168は外面に縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面に縦・横方向のナデ調整を施している。底には木葉痕が残る。169は外面に縦方向のナデ調整を施し、内面に斜方向のナデ調整を施している。外面には煤が付着する。170は外面に縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面に斜方向の工具によるナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。また、外面に煤が付着し、二次被熱による赤色変化が認められる。171は外面に縦方向のハケ目を施しており、内面は風化が著しく調整は不明である。

172は口縁部～底部にあたる。外面は口縁部に横方向の工具によるナデ調整を施し、頸部に指頭圧痕が残る。胴部～底部にかけては縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面は横方向の工具によるナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。外面の胴部中央より上には煤が付着している。

壺(173～183)

173・174は口縁～胴部にあたる。173は外面に横方向の工具によるナデ調整を施し、内面に横方向のナデ調整を施しており、頸部に指頭圧痕が残る。外面の胴部下部には煤が付着する。174は外面の口縁部

に横方向の工具によるナデ調整を施し、胴部に斜方向の工具によるナデ調整を施している。内面の口縁部に横方向の工具によるナデ調整を施し、頸部に指頭圧痕が残り、胴部に斜方向の工具によるナデ調整を施している。外面の胴部下には煤が付着する。

175～179は口縁部にあたる。175は口縁が大きく開き、内外両面ともナデ調整を施している。176は内外両面に横方向の工具によるナデ調整を施している。177は複合口縁壺である。外面に横方向の指ナデ調整後に櫛描波状文を施し、屈曲部には一条の沈線文を施している。178は小さく外反し直線的に立ち上がる。外面に櫛描波状文と連続刺突文を交互に3回施文し、下部には縦方向のミガキ調整を施している。内面に横方向のナデ調整を施している。179は小さく外反する。外面に横方向のナデ調整の後に櫛描波状文を2条施文している。内面はナデ調整を施している。

180は底部にあたる。底にナデ調整を施した後、ヘラによる十字のヘラ記号が施されている。内面は粗いナデ調整を施している。

181・182は頸部にあたる。181は胴部が内湾して「く」字状に屈曲する。内外両面ともナデ調整を施している。182は「く」字状に屈曲する。頸部には右上がりや左上がりの刻み目が施された貼付突帯を有する。内外両面にナデ調整を施している。

183は胴部にあたる。外面に斜方向のナデ調整を施しており、内面は著しい風化により調整は不明である。

鉢 (184～186)

184は口縁部～底部にあたる。外面の口縁部は横方向のナデ調整を施し、胴部は斜方向の工具によるナデ調整を施している。内面は縦方向の工具によるナデ調整を施している。底部は粗いナデ調整を施し、わずかに窪む。

185は頸部で内湾する。外面の口縁部に横方向のナデ調整を施し、胴部に縦方向の工具によるナデ調整を施している。内面の口縁部に横方向のナデ調整を施し、胴部に縦方向のナデ調整を施しており、内面底部には指頭圧痕が残る。

186は口縁部～胴部にあたり、口唇部がわずかに内湾する。内外両面に斜方向の工具によるナデ調整

を施している。

高坏 (187)

裾部にあたる。外面に横方向のナデ調整を施し、内面に斜方向のナデ調整を施している。円形透かしが外面から穿孔されている。透かしは1箇所だけ確認できる。

不明土器片 (188、巻頭図版4)

小片のため器種が不明であるがおそらく壺の胴部と思われる。外面は横方向のナデ調整を施し、内面は斜方向のナデ調整を施している。外面には赤色顔料がハケ状の工具により塗られている。この赤色顔料は分析の結果、ベンガラと同定されている。赤色顔料の詳細については第6節4に記載している。

石器 (189・190)

189・190は敲石である。189は砂岩製の棒状礫であり、上部が欠損している。下部には敲打痕が認められ、握手部分にもわずかながら磨面が認められるため手持ち用の磨石としても利用していたと考えられる。190は頁岩製であり、周縁の数箇所に敲打痕が認められる。また、表面には磨面が認められるため、磨石としても利用されていたと考えられる。

鉄器 (191)

鉄鏃の茎部にあたる。茎部には木質の残存が認められる。(山本)

SA5 (第31図、図版6)

調査区北西部にあり、SA2・3に隣接している。検出時は円形の土坑と思われたが、堅穴を掘った後に貼床をしていることから堅穴建物跡と判断した。平面形態は、東西方向2.4m、南北方向2.5mの不整形に張り出す円形である。サイズの的には、SA7と同様に住居とするには小さいと考えられる。遺構の残存状態は深さ約20cmほどである。堅穴を掘った後に厚さ約10cmの土を貼ることにより床を作っている。貼床の土にはⅢ層～Ⅴ層の土がブロック状に含まれているため、堅穴を掘削した後にその排土を利用して貼床を行っていると考えられる。床面の高さはほぼ水平である。柱穴は確認されなかった。

SA5の構築の際にはほかの堅穴建物跡と同様にまず堅穴を掘り込んでいたのであるが、堅穴の掘り

込みが下層にあった集石遺構(SI 15)に達している。貼床は集石遺構を構成する礫の上まで行われている。また、SA1と同様に壁際の埋土から礫が出土しているが、流れ込みによるものと考えられる。礫は材質や赤化しているものが多いことから、集石遺構と同質の石材と考えられる。

埋土に約1cmの大きさの炭化物を含むが、構造物になるような炭化材が出土していないため、周辺に散らばった状態であった炭化物が廃絶後に流れ込んだものであると考えられる。(南・山本)

【SA5出土遺物】(第38図192~199、図版10・11)

遺物は建物内の床面では北東部に集中しており、完形に近い甕が出土した。SA5出土の土器は他の竪穴建物出土の土器に比べ破片が大きく、散らばった状態で出土している。SA4も完形の土器の出土や破片の大きいものが多く、焼失建物との相違がみられる。埋土からも土器が多数出土している。また、北東隅に長径約20cmを超える礫が出土した。使用痕は確認されなかったが台石として使用されていた可能性が考えられる。

甕(第58図192~199)

192~194は口縁部~胴部にあたり、192は外面に斜方向の工具によるナデ調整を施し、内面に斜方向のナデ調整を施しており、頸部に指頭圧痕が残る。外面の広い範囲に煤が付着しており、二次被熱のためか赤色変化している。193は外面の胴部上部には平行タタキの後に斜方向のナデ調整を施し、下部には縦方向の工具による粗いナデ調整を施している。内面は横や斜方向のナデ調整を施し、頸部に指頭圧痕が残る。外面の広い範囲に煤が付着している。194は内外両面に横や斜方向のナデ調整を施す。外面の広い範囲に煤が付着している。

195は口縁部にあたり、外面に横方向の工具によるナデ調整を施し、内面に横方向のナデ調整を施している。口唇部は指ナデにより平坦に仕上げている。外面の広い範囲に煤が付着している。

196は頸部~胴部にあたり、外面に縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面に斜方向の工具によるナデ調整を施している。外面の上部に煤が付着する。

197・198は胴部にあたり、197は内外両面に斜方向の工具によるナデ調整を施している。外面の上部に煤が付着しており、下部は二次被熱のためか赤色変化している。198は外面に斜方向の工具による粗いナデ調整を施し、内面にナデ調整を施している。外面の広い範囲に煤が付着しており、二次被熱のためか赤色変化している。

199は底部にあたり、外面に斜方向のナデ調整を施し、内面にナデ調整を施している。二次被熱のためか赤色変化している。(山本)

SA6(第32図、図版6)

調査区の北東部にあり、他の竪穴建物とは離れている。立地場所は緩やかな斜面から傾斜が強くなる境目にあり、SA4とはほぼ同じ立地である。平面形態は、最大径約3.25m、最小径約1.85mであるが不整形である。遺構の残存状況は約10cmほどである。削平を受け、掘方の一部のみが残っているものだと考えられる。そのため貼床があったかどうかは判断できない。柱穴は確認されなかった。(南・山本)

【SA6出土遺物】(第38図200)

遺物は埋土から少量出土しており、床面からは遺物は出土していない。また周辺でも遺物の出土が少なかったことから、削平されたと考えられる。

甕(第38図200)

底部にあたる。内外両面にナデ調整を施している。(山本)

3 包含層出土の遺物(第40図、第12・13表)

ここではII層から出土した遺物を掲載する。遺物の分布には粗密があり、ほとんどが第1遺跡B-1区か第2遺跡B区の北半分から出土している。

弥生時代

甕(第40図205~213、図版11)

205は小型甕の口縁部にあたり、内外両面に横方向のナデ調整を施している。

206は口縁部にあたり、「く」の字状に屈曲し短く直線的に立ち上がる。外面の口縁部に縦方向のナデ調整を施し、胴部には斜方向の工具によるナデ調整を施し、内面はナデ調整を施している。口唇部は平坦に仕上げる。

207 は頸部～胴部にあたり、頸部の屈曲は弱い。内外両面に横方向のナデ調整を施しており、内面には指頭圧痕が残る。

208 は底部付近にあたる。外面には強いタタキを施し、内面は指によりナデ上げを施している。

209 は胴部にあたり、胎土に砂粒が多く含まれる。外面にタタキを施しており、内面は著しく風化しており調整は不明である。

210 は底部であり、上げ底となっている。外面に細かい縦方向のハケ目を施し、底はナデ調整を施している。

211 は胴部～底部にあたり、底部は平底である。外面は縦方向の工具による丁寧なナデを施し、内面は縦方向の指によるナデ上げを施している。

212 は底部にあたり、平底である。外面に縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面にナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。上部に煤が付着する。

213 は底部にあたり、丸底である。縦方向の工具によるナデ調整を施し、内面に縦方向の工具によるナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。

壺 (第40図214～218)

214 は口縁部にあたり、緩やかに外反する。内外両面に横方向のナデ調整を施している。口唇部はナデ調整により丸める。

215 は口縁部にあたり、外反して直線的に立ち上がる。内外両面に横方向の工具によるナデ調整を施している。外面に煤が付着する。

216 は長頸壺の口縁部にあたる。外面の下部に縦方向のハケ目を施した後で、横方向のナデによりナデ消している。上部に櫛描波状文を施している。不明瞭ではあるが櫛描波状文を施文した上から波状の頂点をずらして2回目の櫛描波状文を施文している。

217 は頸部にあたり、刻み目を施した突帯を有する。胴部に口縁部を接合した際に外面に粘土を余らせて突帯としている。突帯の施文は左上がりの浅い刻み目を右上がりの深い刻み目が切っている。外面には突帯の施文後に丁寧なナデ調整を施し、内面にナデ調整を施している。

218 は胴部にあたる。外面に横・斜方向のハケ目を施し、内面にナデ調整を施す。外面には剥離痕が

見受けられる。

鉢 (第40図219・220)

219 は口縁部～胴部にあたり、口縁部は摘み上げにより内湾する。外面に粗い斜方向のナデ調整を施し、内面に斜方向のナデ調整を施しており、指頭圧痕が残る。

220 は口縁部～胴部にあたり、緩やかに外反しながら立ち上がる。外面に横や斜方向のナデ調整を施し、内面に斜方向のナデ調整を施している。

高坏 (第40図221～223)

221 は坏部にあたり、接合部が剥離している。内外両面に斜方向のナデ調整を施している。

222 は脚部にあたる。内外両面にナデ調整を施している。円形透かしが外面から3箇所穿孔される。

223 は脚部にあたり、エンタシス状を呈する。外面に斜方向の丁寧な細かいミガキを施し、内面に粗いナデ調整を施している。円形透かしが外面から1箇所穿孔される。

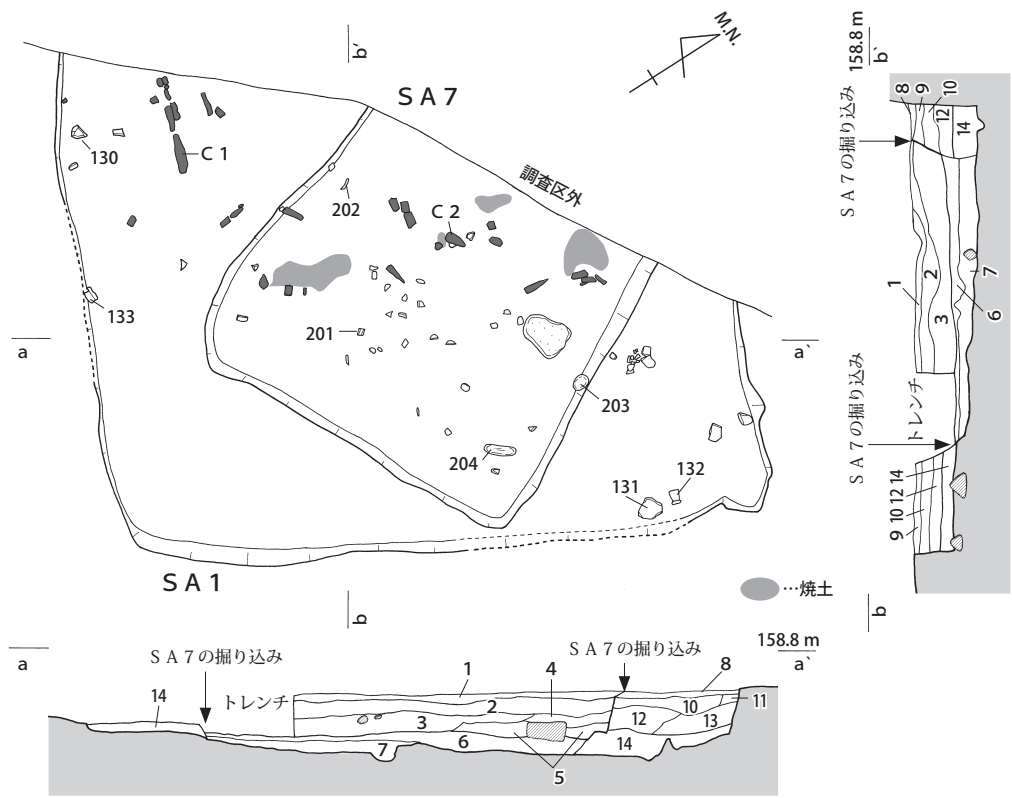
石器 (第40図225・226、図版11)

225 は砂岩製、226 は頁岩製の石庖丁である。225 は横長剥片を利用しており、下部に使用痕が見受けられる。両側縁は打ち欠きにより抉りが入れている。表面に自然面を残す。226 は全体的に磨かれているが、上部と表裏両面は軽く磨く程度である。下部は丁寧に磨かれ刃部を研ぎ出している。両側縁は打ち欠いた後に磨くことで抉りが入れている。

古代

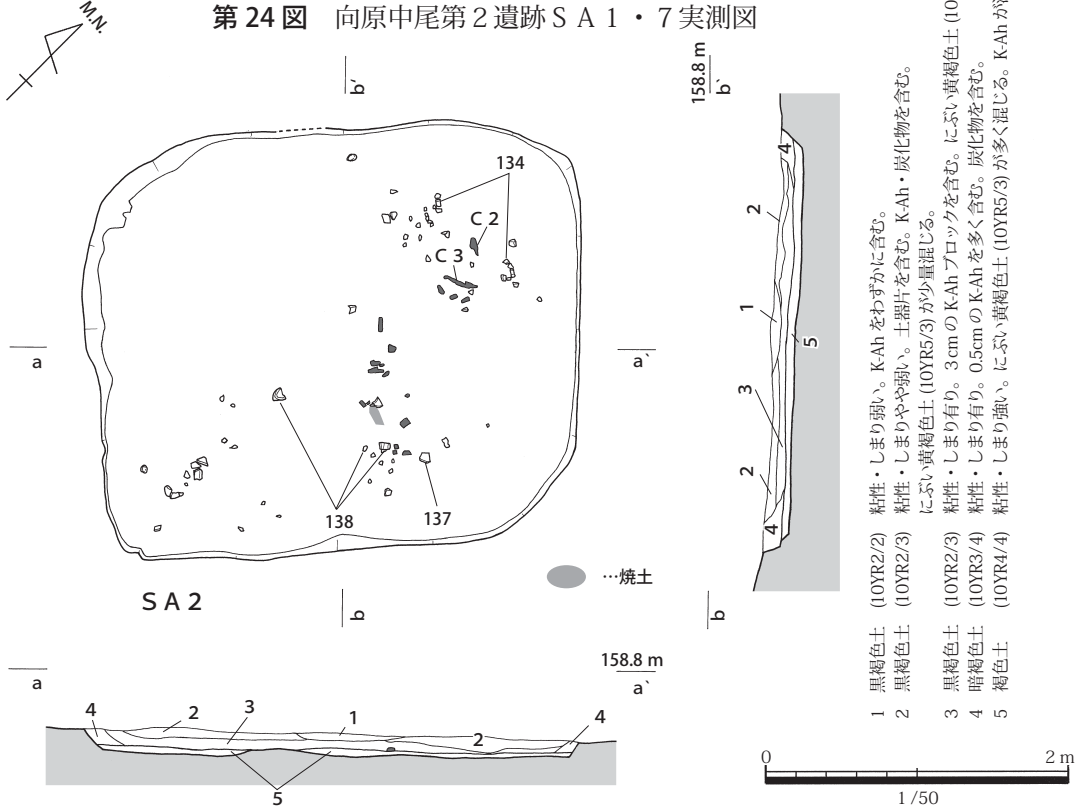
甕 (第40図224)

口縁部～胴部にあたり、口縁部が強く屈曲する。内外両面の口縁部に横方向のナデ調整を施し、胴部に斜方向の工具によるナデ調整を施している。口唇部はナデ調整により平坦に仕上げる。(山本)



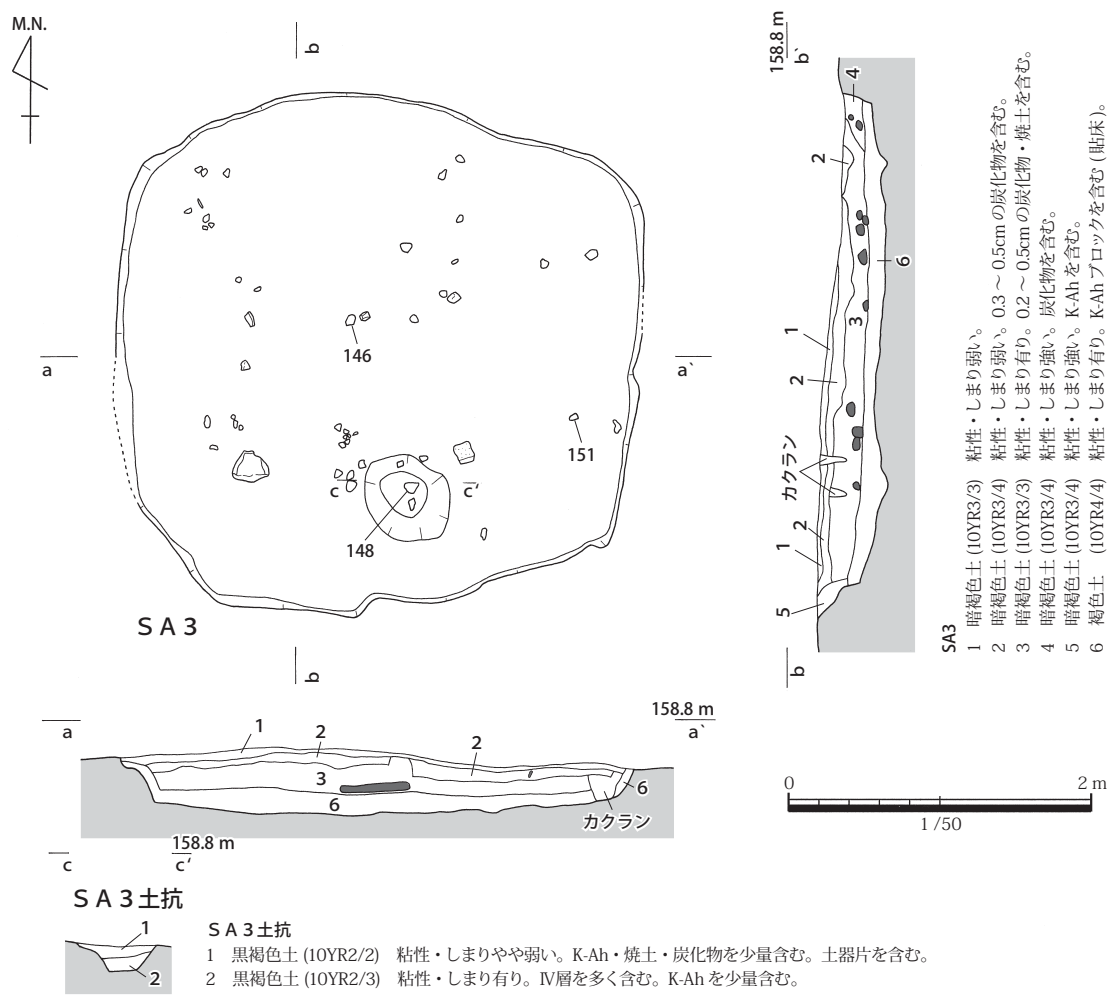
- SA1**
- 8 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりやや弱い。粒は細かく砂質に近い。
 - 9 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりやや弱い。炭化物を少量含む。
 - 10 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりやや弱い。K-Ah を少量含む。
 - 11 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりやや弱い。K-Ah が全体に混じる。
 - 12 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりやや弱い。K-Ah・炭化物を少量含む。
 - 13 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりやや弱い。K-Ah ブロックを含む。
 - 14 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性・しまり強い。K-Ah ブロックを含む (SA1 貼床)。
- SA7**
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりやや弱い。粒は細かく砂質に近い。
 - 2 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや弱い。K-Ah、炭化物を少量含む。
 - 3 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまり強い。K-Ah ブロック・炭化物を少量含む。
 - 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性・しまりやや弱い。K-Ah ブロック・炭化物を含む。
 - 5 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまり有り。K-Ah・炭化物を含む。
 - 6 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまり強い。K-Ah ブロックを含む。炭化物を多く含む (SA7 貼床)。
 - 7 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性・しまりかなり強い。K-Ah ブロック・礫が混じる (貼床下の整地土)。

第 24 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 1 ・ 7 実測図

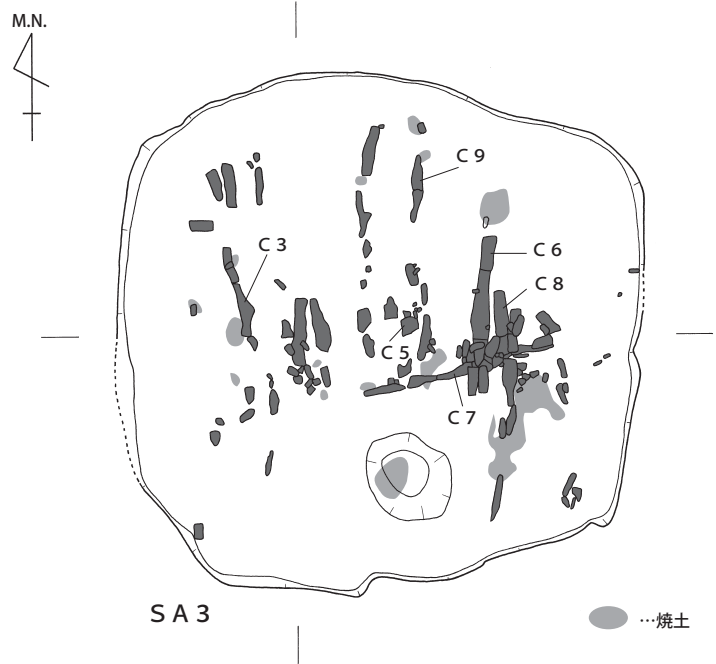


- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまり弱い。K-Ah をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや弱い。土器片を含む。K-Ah・炭化物を含む。にぶい黄褐色土 (10YR5/3) が少量混じる。
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまり有り。3cm の K-Ah ブロックを含む。にぶい黄褐色土 (10YR5/3) が混じる。
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまり有り。0.5cm の K-Ah を多く含む。炭化物を含む。
- 5 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまり強い。にぶい黄褐色土 (10YR5/3) が多く混じる。K-Ah が混じる (貼床)。

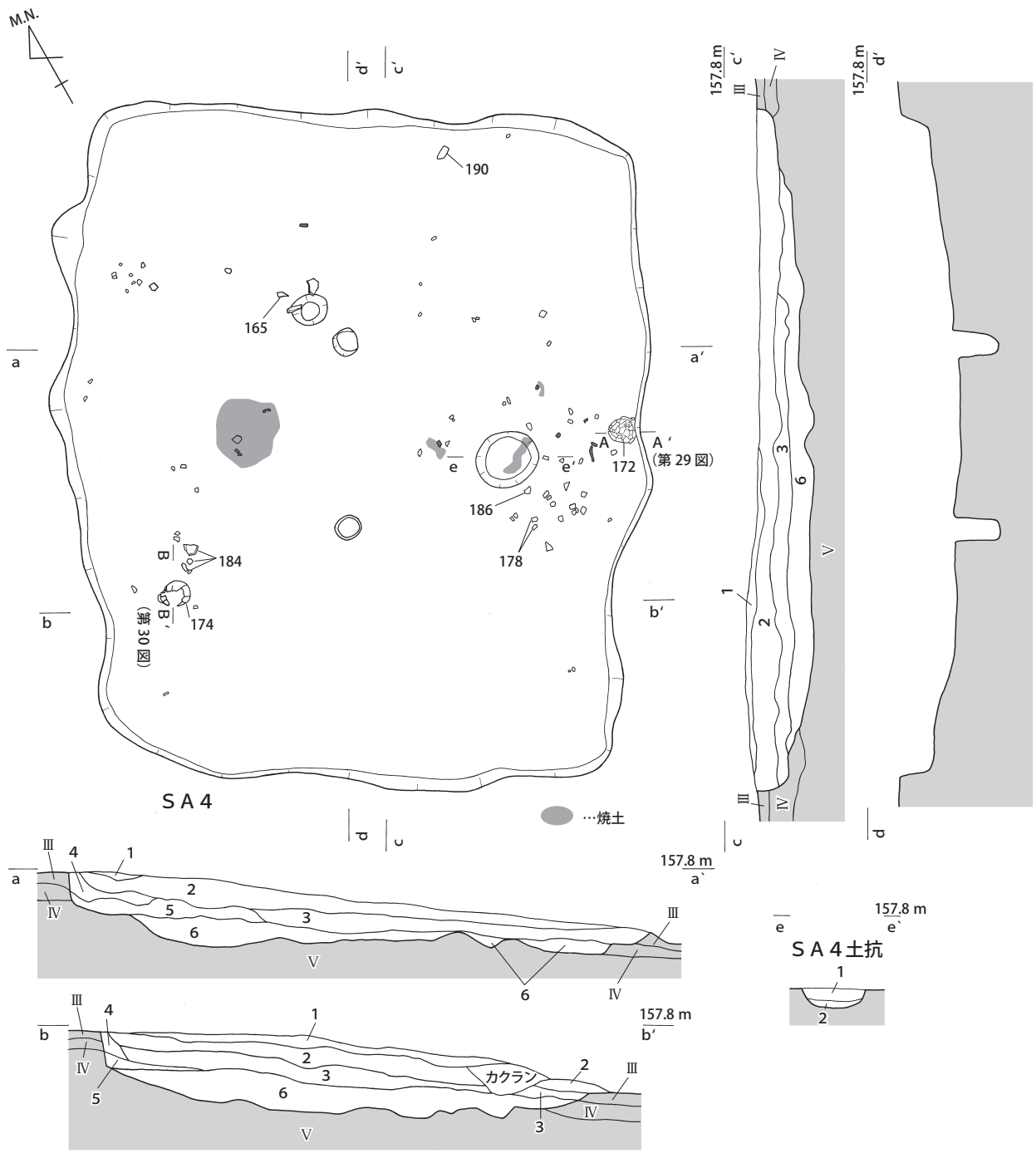
第 25 図 向原中尾第 2 遺跡 S A 2 実測図



第26図 向原中尾第2遺跡SA3実測図



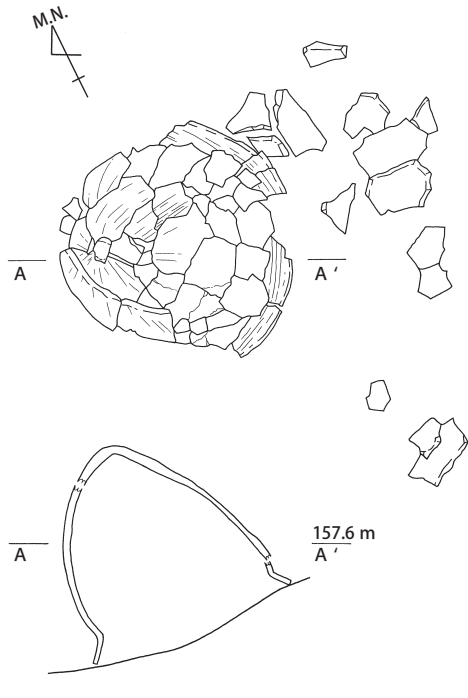
第27図 向原中尾第2遺跡SA3炭化材検出状況図



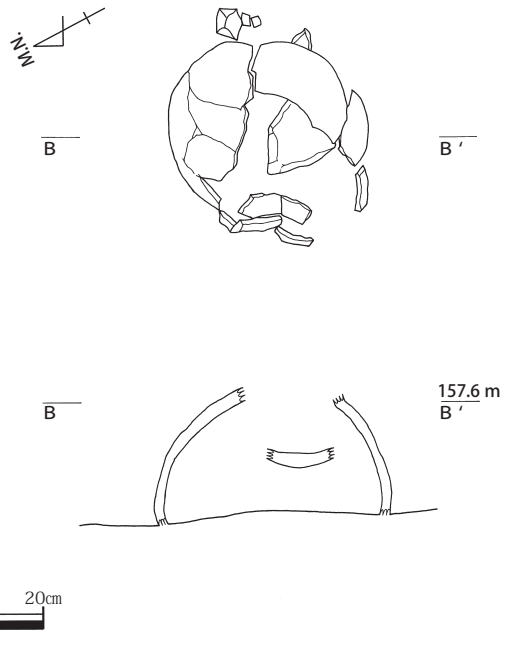
- SA4**
- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまり弱い。
 - 2 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや弱い、しまり弱い。0.1～0.5cmのK-Ahを含む。
 - 3 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや強い。0.1～1cmの黒色ブロックをやや多く含む。
 - 4 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりやや弱い。0.1～0.5cmのK-Ahを含む。
 - 5 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱い、しまりやや強い。0.1～0.5cmのK-Ah・褐色・黒色ブロックを含む。
 - 6 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまり強い。2～6cmのK-Ahブロックを含む(貼床)。

- SA4 土坑**
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりやや弱い。
 - 2 暗褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや強い。K-Ahブロック・黒色ブロックを少量含む。

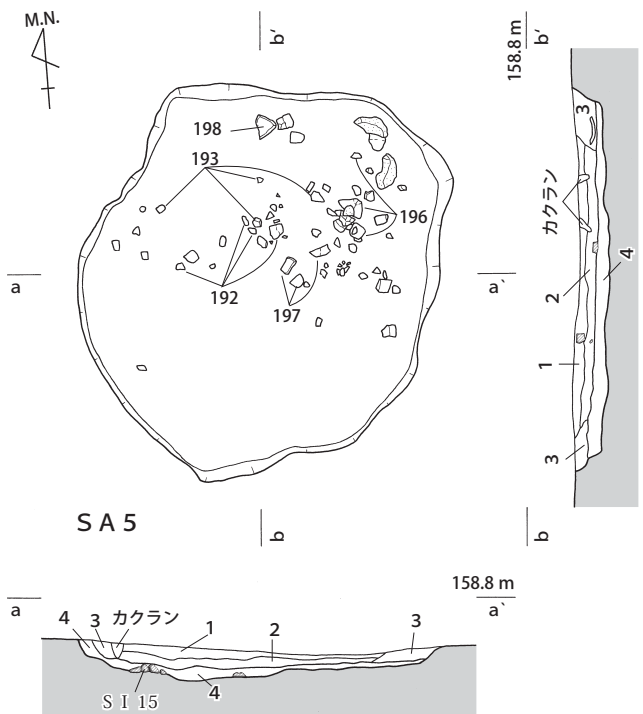
第28図 向原中尾第2遺跡SA4実測図



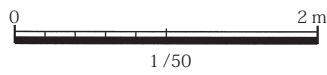
第29図 向原中尾第2遺跡 S A 4 甕 (172) 出土状況図



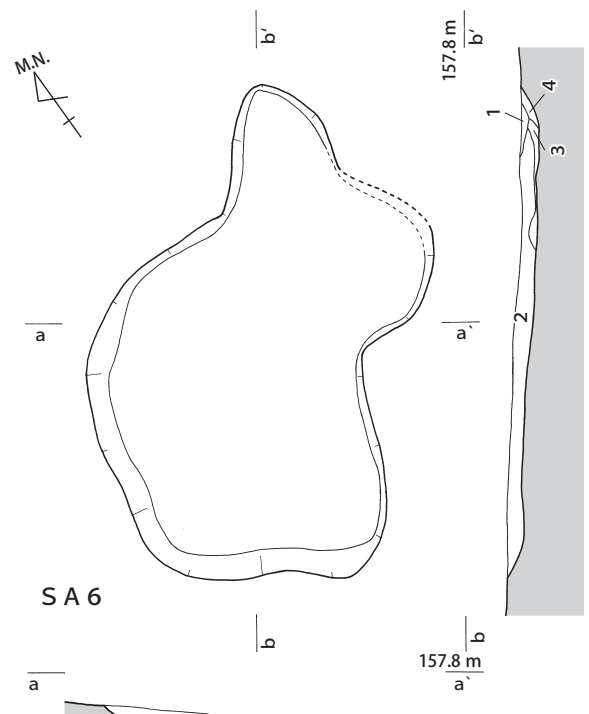
第30図 向原中尾第2遺跡 S A 4 壺 (174) 出土状況図



- SA5
- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまり弱い。0.2cmのK-Ah・炭化物を少量含む。
 - 2 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱い、しまり有り。1cmの炭化物・K-Ah粒を含む。
 - 3 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強い、しまり有り。炭化物・K-Ahを含む。
にぶい黄褐色土 (10YR5/4) が多く混じる。
 - 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまり強い。0.2~1cmのK-Ah・炭化物を含む。
暗褐色土 (10YR3/4) がやや多く混じる (貼床)。

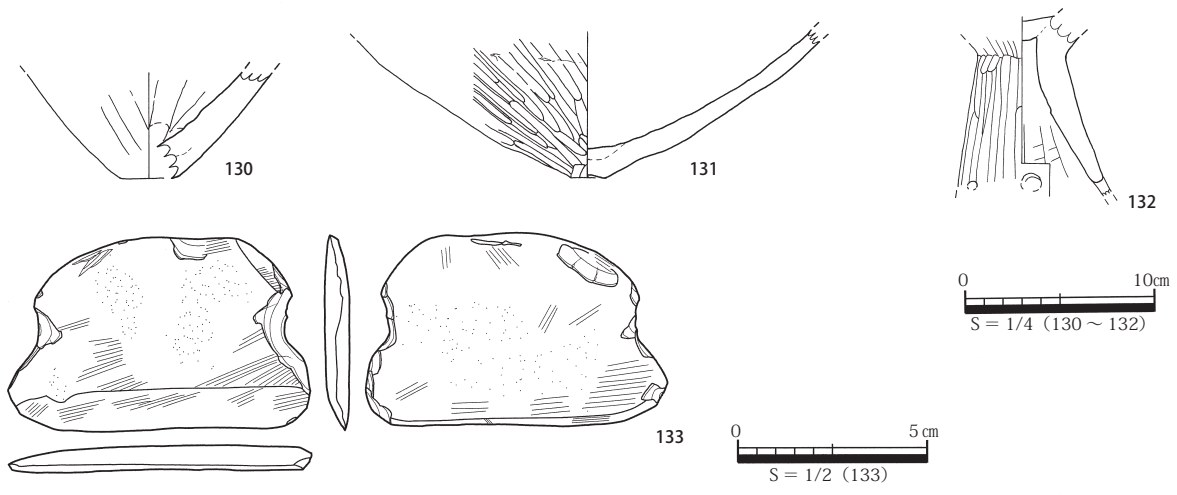


第31図 向原中尾第2遺跡 S A 5 実測図

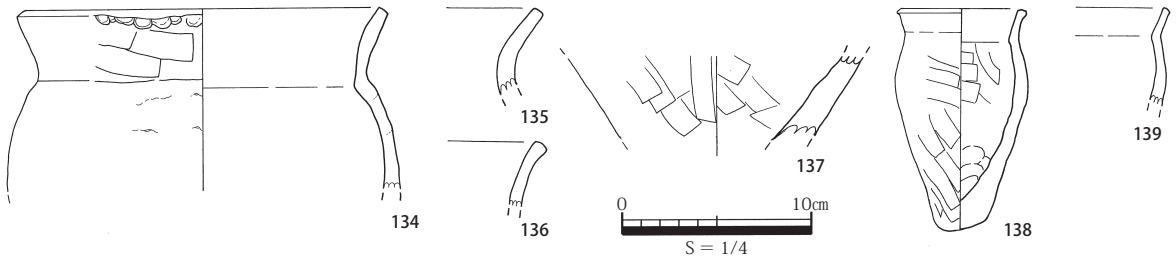


- SA6
- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 弱粘質土。しまりやや弱い。K-Ahを少量含む。
 - 2 褐色土 (10YR4/5) 粘質土。しまり有り。
 - 3 黄褐色土 (10YR5/6) 強粘質土。しまり有り。IV層を母体とする。
 - 4 暗褐色土 (10YR3/4) 弱粘質土。しまり弱い。

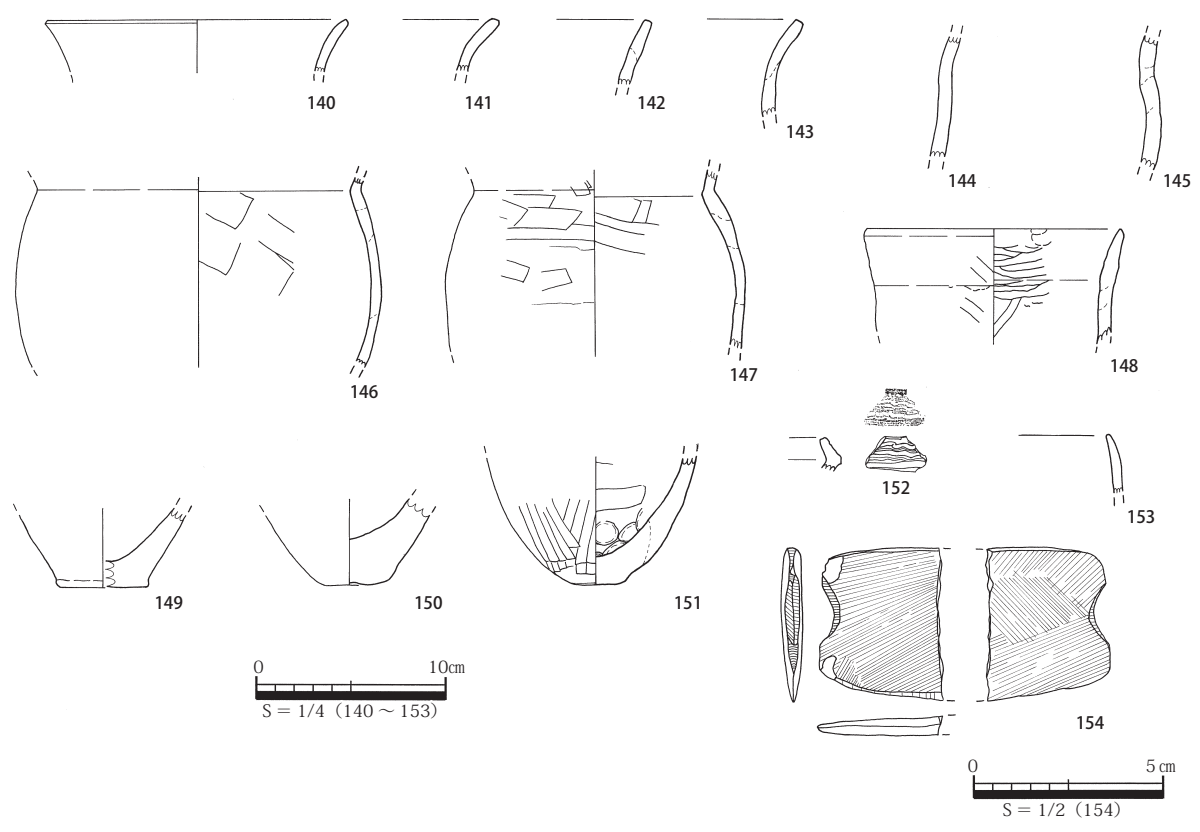
第32図 向原中尾第2遺跡 S A 6 実測図



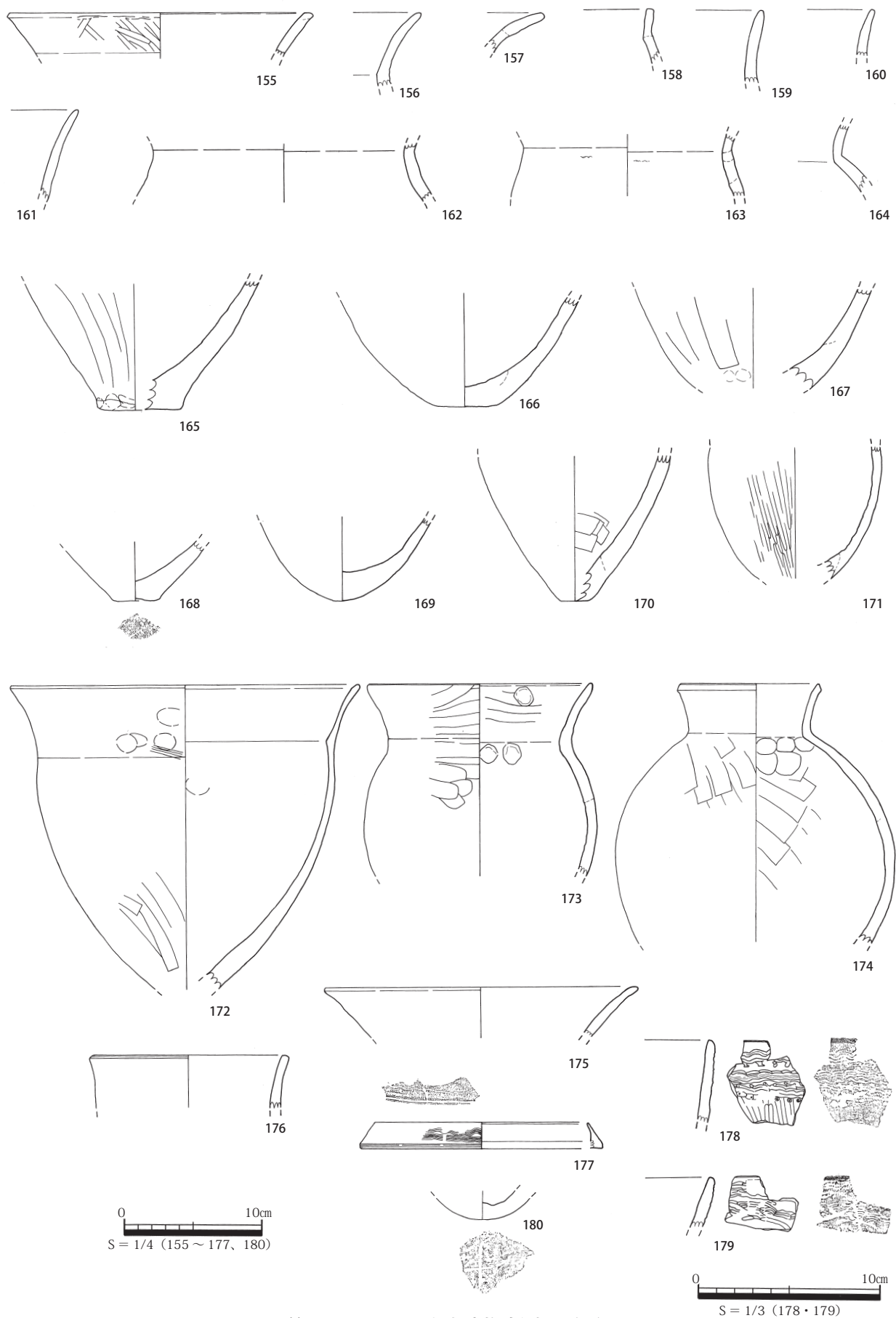
第33図 S A 1 出土遺物実測図



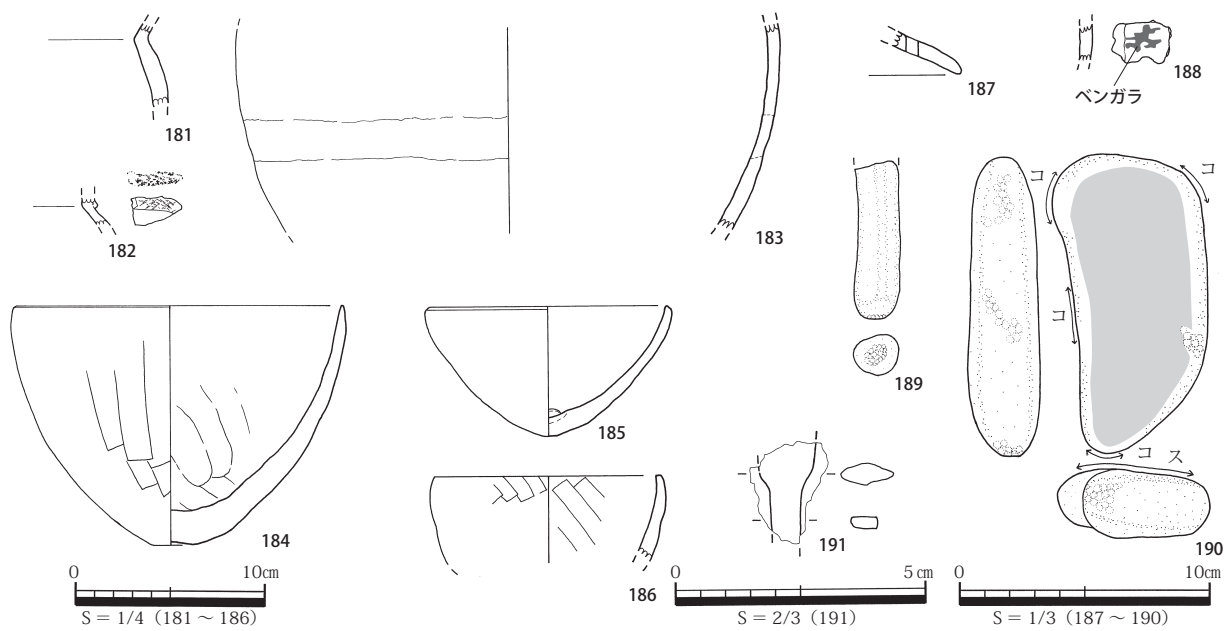
第34図 S A 2 出土遺物実測図



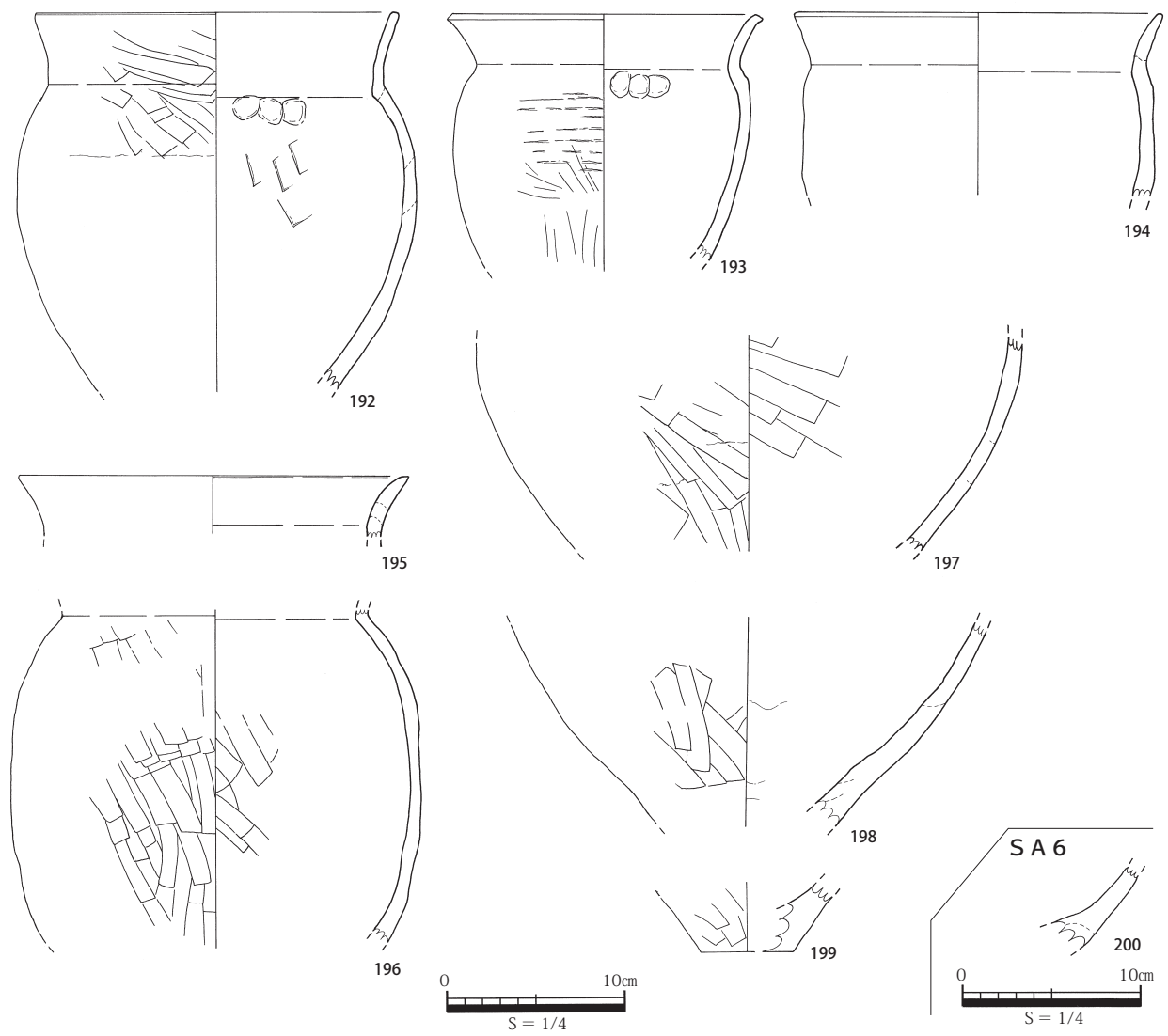
第35図 S A 3 出土遺物実測図



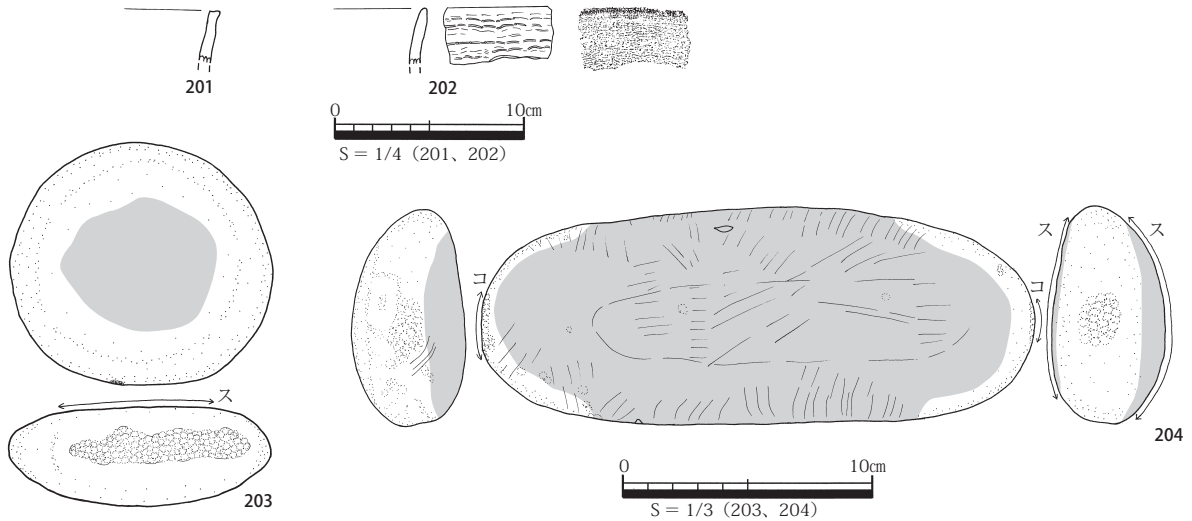
第36図 SA4出土遺物実測図(1)



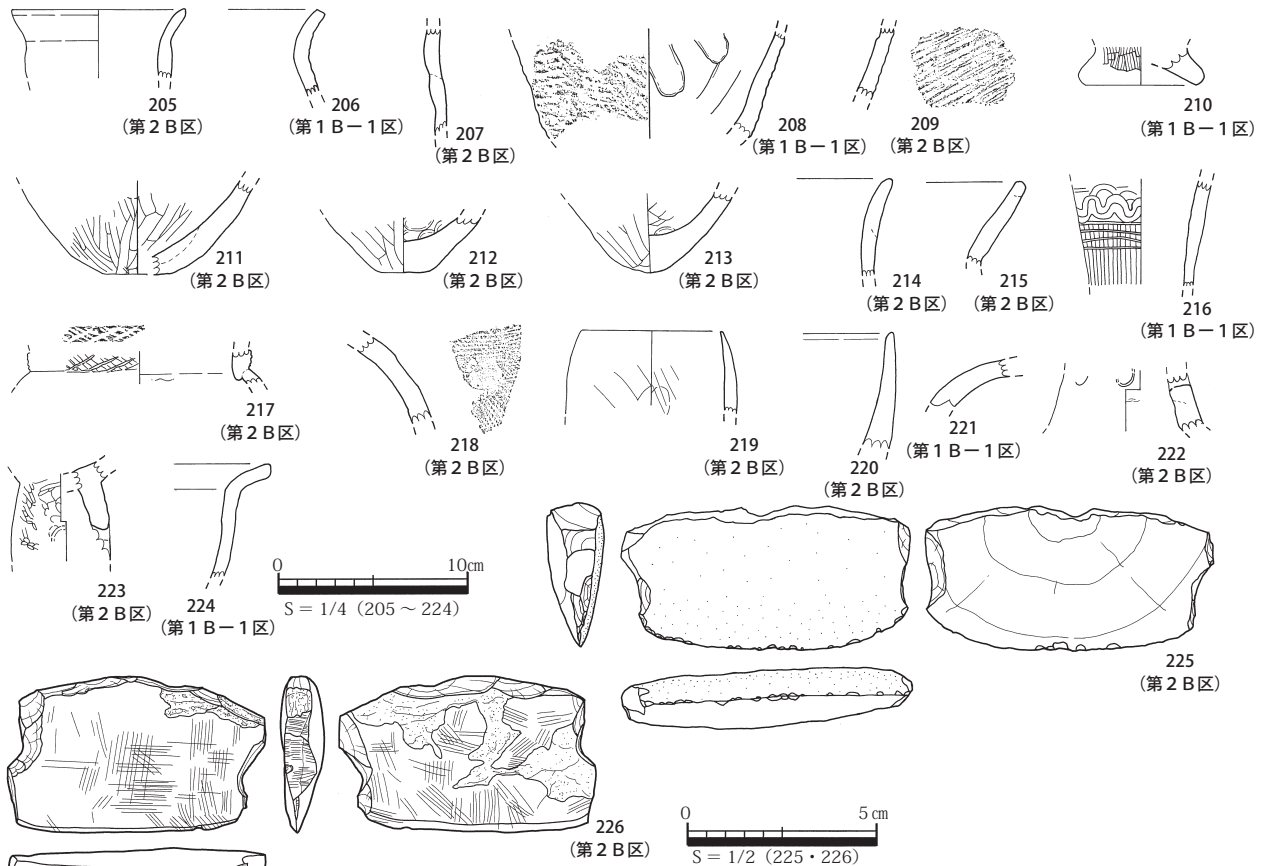
第37図 SA 4出土遺物実測図(2)



第38図 SA 5・6出土遺物実測図



第39図 SA7出土遺物実測図



第40図 包含層出土遺物実測図

遺構名	検出位置	図版番号	堅穴部			炭化材	貼床	年代測定(年BP)	備考	
			プラン	長軸(m)	短軸(m)					深さ(m)
SA1	C11 NW	図版4	方形	4.30	3.20	0.30	○	○	1855 ± 20	SA7に切られる
SA2	C11 SE	図版4	方形	3.26	2.78	0.18	○	○	1865 ± 20	
SA3	C11 SW	図版5	方形	3.44	3.40	0.22	◎	○	1865 ± 20	土坑1基、多量の炭化材が残る
SA4	C13 NE	図版6	長方形	5.40	4.64	0.60	—	○	—	ベット状遺構のような高まり、柱穴2基、土坑1基、ビット1基、少量の炭化物
SA5	C11 SW	図版6	円形	2.54	2.38	0.20	—	○	—	掘方がS115に達する
SA6	D11 NE	図版6	不明	3.24	2.00	0.12	—	—	—	残存状態が悪い
SA7	C11 NW	図版4	方形	2.26	(2.00)	0.44	○	○	1875 ± 20	SA1を切る

※年代測定の結果は1950年を基点として何年前かを示す(詳細は第II章6節1に記載)

第7表 弥生時代遺構一覧表

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	法量 (cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
								外面	内面	外面	内面		
130	—	第2B区	SA1	埋	甕	胴	底:(3.0)	縦方向の工具ナデ	縦方向のナデ、指頭圧痕	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10YR6/4	3mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明粒を多く含む	外:黒菱 粘土組織
131	図版9	第2B区	SA1	埋	壺	胴~底	底:1.8	縦方向のミガキ、指頭圧痕	縦方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	4mm以下の橙色粒を多く含む 3mm以下の灰白色粒を含む	外:煤付着
132	図版9	第2B区	SA1	埋	高坏	脚	—	脚部:縦方向のミガキ、 杯部:工具ナデ	横方向の工具ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	3mm以下の灰白色粒を含む 微細な透明光沢粒を多く含む	円形透かし
134	図版9	第2B区	SA2	埋	甕	口~胴	口:(18.6)	口唇部:揃み上げ 口縁~胴部:横・斜方向の工具ナデ	横・斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR7/8	5mm以下の灰褐色粒を含む 3mm以下の灰白色粒を含む	粘土組織
135	—	第2B区	SA2	埋	甕	口~頸	—	斜方向のナデ	横・縦方向のナデ	浅黄橙 10YR8/4	灰白 2.5Y8/1	3mm以下の灰白色粒を含む 2mm以下の黒色光沢粒を含む	外:煤付着 内:黒菱
136	—	第2B区	SA2	埋	甕	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	黒 10YR1.7/1	にぶい黄橙 10YR7/2	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	外:煤付着
137	—	第2B区	SA2	埋	甕	胴	—	斜方向の工具ナデ	横方向のナデ	にぶい橙 5YR6/4	橙 7.5YR7/6	5mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	外:煤付着
138	図版9	第2B区	SA2	埋+床内	甕	口~底	口:(6.6) 底:2.3 高:11.7	ナデ	斜方向の工具ナデ、指頭圧痕	にぶい黄褐 10YR5/4	褐灰 10YR5/1	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	138と139は同一個体か 小型甕 外:煤付着
139	—	第2B区	SA2	埋	甕	口~胴	—	ナデ	斜方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	138と139は同一個体か 小型甕
140	—	第2B区	SA3	床	甕	口	口:(15.8)	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	外:煤付着
141	—	第2B区	SA3	埋上	甕	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	黒 2.5Y2/1	黄灰 2.5Y6/1	1.5mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	外:煤付着
142	図版9	第2B区	SA3	床内	甕	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	明黄褐 10YR6/6	1mm以下の透明光沢粒を多く含む 1mm以下の黄褐色粒を含む	外:煤付着 粘土組織
143	図版9	第2B区	SA3	床	甕	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	3mm以下の灰白色粒を含む	外:煤付着 粘土組織
144	—	第2B区	SA3	埋上	甕	頸~胴	—	横方向の工具ナデ	斜方向のナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	微細な無色光沢粒を多く含む 2mm以下の灰白色粒を含む	外:煤付着 粘土組織
145	図版9	第2B区	SA3	埋	甕	頸~胴	—	横方向・斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	3mm以下の灰白色粒を含む	粘土組織
146	—	第2B区	SA3	埋	甕	頸~胴	—	横方向のナデ	斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/3	1mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒・黒色光沢粒を多く含む	外:煤付着 粘土組織
147	図版9	第2B区	SA3	埋	壺	頸~胴	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR6/2	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を多く含む	粘土組織 外:煤付着 内:黒菱
148	図版9	第2B区	SA3	埋	甕	口~頸	口:(13.8)	斜方向のナデ	横・斜方向のナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	1.5mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を多く含む	粘土組織
149	図版9	第2B区	SA3	床内	甕	底	底:(4.8)	丁寧なナデ	ナデ	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR4/3	1mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	内:炭化物付着
150	—	第2B区	SA3	埋+床内	甕	底	底:(3.0)	縦方向の工具ナデ 底部:ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	5mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を含む	外:黒菱 粘土組織
151	—	第2B区	SA3	埋+床内	甕	胴~底	底:(2.8)	縦方向の工具ナデ 底部:ナデ	斜方向の工具ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	外:黒菱 粘土組織
152	図版9	第2B区	SA3	埋	壺	口	—	櫛歯波状文、横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	1mm以下の灰白色粒を多く含む	複合口縁蓋
153	図版9	第2B区	SA3	埋上	鉢	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の明褐色粒を含む	
155	—	第2B区	SA4	埋	甕	口	—	斜方向の工具ナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を含む	外:煤付着 内:黒菱 粘土組織
156	図版9	第2B区	SA4	埋	甕	口	—	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄とう 10YR7/3	5mm以下の赤褐色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を含む	
157	—	第2B区	SA4	埋上+埋	甕	口	—	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	1mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を含む	外:煤付着
158	図版9	第2B区	SA4	埋上+埋	甕	口~頸	—	ナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 2.5Y7/1	4mm以下の暗赤褐色粒を多く含む 1mm以下の暗灰褐色粒を多く含む	粘土組織
159	—	第2B区	SA4	埋	甕	口	—	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	3mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な黒色光沢粒を少量含む	外:煤付着 粘土組織
160	—	第2B区	SA4	埋上	甕	口	—	横方向のナデ	横方向の工具ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 2mm以下の褐色粒を多く含む	
161	—	第2B区	SA4	埋上	甕	口	—	横方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5Y7/6	3mm以下の暗褐色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	
162	—	第2B区	SA3 SA4	床内 埋+床	甕	頸	—	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	褐灰 10YR6/1	にぶい黄橙 10YR7/4	5mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の赤褐色粒を少量含む	外:煤付着
163	図版9	第2B区	SA4	埋	甕	頸~胴	—	斜方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	3mm以下の灰白色粒を含む	外:煤付着 粘土組織
164	—	第2B区	SA4	埋	甕	頸~胴	—	横方向のナデ	横方向のナデ	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	2mm以下の灰白色粒を多く含む 2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	
165	図版10	第2B区	SA4	埋+床内	甕	胴~底	—	胴部:縦方向のナデ、指頭圧痕 底部:ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	7mm以下の赤褐色粒を多く含む 4mm以下の灰白色粒を多く含む	底:煤付着 粘土組織
166	図版10	第2B区	SA3 SA4	床内 埋	甕	胴~底	底:3.6	胴部:縦方向の工具ナデ 底部:粗いナデ	斜方向のナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR7/6	1mm以下の黒色光沢粒を多く含む 7mm以下の灰白色粒を含む	外:煤付着

第8表 弥生時代土器観察表(1)

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	法量 (cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
								外面	内面	外面	内面		
167	—	第2B区	SA3	埋	甕	胴～底	—	縦方向の工具ナデ	ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	4mm以下の灰白色粒を多く含む 9mm以下の黄灰色粒を少量含む	外：煤付着 内：黒炭 粘土細痕
168	—	第2B区	SA4	埋+床内	甕	底	底：(3.4)	縦方向のナデ、 底部：木葉痕	縦・横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐色 10YR5/2	5mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を多く含む	底：木の葉底
169	—	第2B区	SA4	埋+床	甕	胴～底	底：1.8	縦方向のナデ	斜方向のナデ	橙 7.5YR6/6	明褐色 7.5YR5/6	4mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を多く含む	外：スス付着
170	—	第2B区	SA4	埋	甕	胴～底	底：(2.1)	胴部：縦方向の工具ナデ 底部：ナデ	斜方向の工具ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	浅黄褐色 10YR8/4	3mm以下の灰白色粒を含む 1mm以下の橙褐色粒を含む	外：煤付着 内：黒炭 二次被熱による赤色変化
171	—	第2B区	SA4	埋	甕	胴～底	—	縦方向のハケ目	不明	明褐色 10YR5/6	橙 7.5YR6/6	3mm以下の灰白色粒を多く含む 2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	
172	図版9	第2B区	SA4	床	甕	口～底	口：(25.4)	口縁部：横方向の工具ナデ 胴部：縦方向の工具ナデ、指頭圧痕	横方向の工具ナデ、指頭圧痕	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/4	4mm以下の灰白色粒を少量含む 2mm以下の黒色粒を含む	外：煤付着 内：黒炭
173	図版9	第2B区	SA4	埋+床	壺	口～胴	口：(16.2)	横方向の工具ナデ	横方向のナデ、指頭圧痕	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	5mm以下の赤褐色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	外：煤付着 粘土細痕 178と181は同一個体
174	図版9	第2B区	SA4	埋	壺	口～胴	口：(10.1)	口縁部：横方向の工具ナデ 胴部：斜方向の工具ナデ	口縁部：横方向のナデ 頸部：指頭圧痕 胴部：斜方向の工具ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	4mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	外：煤付着・黒炭 粘土細痕
175	図版9	第2B区	SA4	埋	壺	口	口：(22.7)	ナデ	ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	3mm以下の橙褐色粒を多く含む 2mm以下の灰白色粒を含む	
176	図版9	第2B区	SA4	埋	壺	口	口：(14.2)	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR5/3	2mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の無色光沢粒を多く含む	外：煤付着
177	図版9	第2B区	SA4	埋	壺	口	口：(15.6)	横方向の指ナデ→櫛描波状文	横方向の指ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を含む	複合口縁壺
178	図版10	第2B区	SA4	埋+床	壺	口	—	櫛描波状文、連続刺突文、縦方向のミガキ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄褐色 10YR8/4	1mm以下の灰白色粒を含む 1mm以下の黒色光沢粒を含む	
179	図版10	第2B区	SA4	埋	壺	口	—	横方向のナデ調整→櫛描波状文	ナデ	浅黄褐色 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	2mm以下の灰白色粒を含む 2mm以下の赤褐色粒を含む	
180	—	第2B区	SA4	埋上	甕	底	—	底部：ナデ→ヘラによる十字の線刻	粗いナデ	にぶい橙 7.5YE	暗灰黄 2.5Y5/2	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	内：黒炭 粘土細痕 二次被熱による赤色変化
181	—	第2B区	SA4	埋上	壺	頸～胴	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	2mm以下の黒色光沢粒を多く含む 1mm以下の灰白色粒を含む	
182	—	第2B区	SA4	埋	壺	頸	—	貼付突起に刻み目、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm以下の褐色粒を少量含む	
183	—	第2B区	SA4	埋	壺	胴	—	斜方向のナデ	不明	浅黄褐色 10YR8/4	明黄褐色 10YR6/6	4mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の無色光沢粒を多く含む	外：煤付着 粘土細痕
184	図版10	第2B区	SA4	埋	鉢	口～底	口：(17.3) 底：2.7 高：12.6	口縁部：横方向のナデ 胴部：縦方向の工具ナデ 底部：粗いナデ	縦方向の工具ナデ	浅黄褐色 10YR8/4	黄褐色 10YR8/4	5mm以下の明褐色粒を多く含む 1mm以下の灰白色粒を多く含む	外：黒炭
185	—	第2B区	SA4	埋	鉢	口～底	口：(12.4) 高：(6.9)	口縁部：横方向のナデ 胴部：縦方向の工具ナデ	口縁部：横方向のナデ 胴部：縦方向のナデ 底部：指頭圧痕	橙 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR5/3	4mm以下の灰白色粒を多く含む 6mm以下の暗褐色粒を少量含む	粘土細痕
186	—	第2B区	SA4	床	鉢	口～胴	口：(12.0)	斜方向の工具ナデ	斜方向の工具ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR5/4	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の赤褐色粒をわずかに含む	
187	—	第2B区	SA4	埋上	高坏	裾	—	ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	1mm以下の褐色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	円形透かし
188	巻頭4	第2B区	SA4	埋	不明	胴	—	横方向のナデ	斜方向のナデ	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	微細な灰白色粒を多く含む 4mm以下のにぶい黄褐色粒を少量含む	外：赤色顔料付着
192	図版10	第2B区	SA5	埋+床内	甕	口～胴	口：(20.4)	斜方向の工具ナデ	斜方向の丁寧なナデ、指頭圧痕	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	2mm以下の灰白色粒を多く含む 2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	192と199は同一個体か 外：煤付着 粘土細痕 二次被熱による赤色変化
193	図版11	第2B区	SA5	埋+床内	甕	口～胴	口：(16.9)	タタキ→斜方向のナデ、縦方向の粗い工具ナデ	横・斜方向のナデ、指頭圧痕	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	外：煤付着
194	図版11	第2B区	SA5	埋	甕	口～胴	口：(20.7)	横・斜方向のナデ	横・斜方向のナデ	黄褐色 10YR8/6	浅黄褐色 10YR8/3	2mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒褐色粒を多く含む	外：煤付着 粘土細痕
195	—	第2B区	SA5	埋+床内	甕	口	口：(21.8)	横方向の工具ナデ	横方向のナデ	明黄褐色 10YR7/6	明黄褐色 10YR6/6	1mm以下の透明光沢粒を多く含む 2mm以下の灰白色粒を含む	外：煤付着 粘土細痕
196	図版11	第2B区	SA5	埋+床内	甕	頸～胴	—	縦方向の工具ナデ	斜方向の工具ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	3mm以下の灰白色粒を含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	外：煤付着 粘土細痕
197	—	第2B区	SA5	埋	甕	胴	—	斜方向の工具ナデ	斜方向の工具ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	5mm以下の灰白色粒を含む 5mm以下の赤褐色粒を含む	外：煤付着 粘土細痕 二次被熱による赤色変化
198	—	第2B区	SA5	埋	甕	胴	—	斜方向の粗い工具ナデ	ナデ	にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	2mm以下の灰白色粒・黒褐色粒を含む 1mm以下の黒色光沢粒を含む	外：煤付着 粘土細痕 二次被熱による赤色変化
199	—	第2B区	SA5	埋	甕	底	底：(5.2)	斜方向のナデ 底部：ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	4mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な無色光沢粒を多く含む	192と199は同一個体か 二次被熱による赤色変化
200	—	第2B区	SA6	埋上	甕	胴～底	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	粘土細痕
201	—	第2B区	SA7	埋	甕	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄褐色 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR6/4	1mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を多く含む	
202	図版9	第2B区	SA7	埋	壺	口	—	横方向のナデ→櫛描波状文	横方向のナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	暗灰黄 2.5Y5/2	1mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む 1mm以下の黒色光沢粒を含む	外：黒炭 内：黒炭

第9表 弥生時代土器観察表(2)

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	石材	法量 (cm, g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
133	図版9	第2B区	SA1	—	石廂丁	頁岩	5.1	8.0	0.7	40.7	挟り2
154	図版9	第2B区	SA3	—	石廂丁	頁岩	4.1	3.3	0.5	10.7	右半分欠損、挟り
189	図版10	第2B区	SA4	埋	巖石	砂岩	6.3	1.8	1.6	31.7	上部欠損
190	図版10	第2B区	SA4	床	巖石	ホルンフェルス	12.0	6.0	2.8	317.6	
203	図版9	第2B区	SA7	—	巖石	尾鈴山溶結凝灰岩	9.6	10.5	5.0	638.0	
204	図版9	第2B区	SA7	—	砥石	砂岩	21.9	8.7	4.5	1143.9	

第10表 弥生時代石器計測表

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	法量 (cm, g)	備考
191	—	第2B区	SA4	埋上	鉄鏃	茎	長さ: 2.1 鏃身部幅: 1.0 茎部幅: 0.6 鏃身部厚さ: 0.4 重量: 2.0	木質付着

第11表 弥生時代鉄器計測表

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	法量 (cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
								外面	内面	外面	内面		
205	—	第2B区	C13SW	II	甕	口～胴	口: (9.2)	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	小型甕 内: 黒変
206	—	第1B-1区	K5SW	IV	甕	口～頸	—	口縁部: 縦方向のナデ 胴部: 斜方向の工具ナデ	ナデ	にぶい橙 10YR7/4	にぶい橙 10YR7/4	4mm以下の褐色粒を多く含む 4mm以下の灰白色粒を多く含む	
207	—	第2B区	C11NE	II	甕	頸～胴	—	横方向のナデ	横方向のナデ、指頭圧痕	灰白 10YR8/1	にぶい黄橙 10YR7/3	2.5mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	粘土紐痕 外: 煤付着
208	—	第1B-1区	K5SE	V	甕	胴	—	タタキ	指ナデ	橙 2.5YR6/6	灰 7.5Y4/1	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒色粒を多く含む	
209	—	第2B区	D11NW	II	甕	胴	—	タタキ	風化により不明	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	4mm以下の赤褐色粒を多く含む 4mm以下の褐色粒を多く含む	外: 煤付着
210	—	第1B-1区	B-1	II	甕	底	—	底部: ナデ、縦方向のハケ目	—	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	3mm以下の褐色粒を多く含む 3mm以下の褐色粒を多く含む	
211	—	第2B区	D10NW+D10SE	II	甕	胴～底	底: (3.8)	縦方向の丁寧な工具ナデ	縦方向の指ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	黄灰 2.5Y6/1	3mm以下の褐色粒を含む 微細な透明光沢粒を含む	粘土紐痕
212	—	第2B区	D11SW	II	甕	底	底: 2.9	縦方向の工具ナデ	ナデ、指頭圧痕	にぶい橙 7.5YR7/4	黄灰 2.5Y6/1	4mm以下の褐色粒を含む 2mm以下の灰白色粒を含む	外: 煤付着 内: 黒変粘土紐痕
213	—	第2B区	E12NW	II	甕	底	—	縦方向の工具ナデ	縦方向の工具ナデ、指頭圧痕	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	3mm以下の透明光沢粒を含む 2mm以下の灰白色粒を含む	外: 黒変
214	—	第2B区	C13NE	II	壺	口	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	3mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を多く含む	粘土紐痕
215	—	第2B区	C12SW	II	壺	口	—	横方向の工具ナデ	横方向の工具ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	2mm以下の灰白色粒を含む	外: 煤付着
216	図版11	第1B-1区	B-1	II	壺	頸	—	櫛描波状文、縦方向のハケ目 一横方向のナデ	縦方向のナデ	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	4mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の褐色粒を含む	長頸壺
217	—	第2B区	E12NW	II	壺	頸	—	貼付突帯に刻み目、丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	4mm以下の明褐色粒を含む 3mm以下の灰白色粒を含む	粘土紐痕
218	—	第2B区	D11NW	II	壺	胴	—	横・斜方向のハケ目	横方向のナデ	にぶい赤褐 10YR7/4	浅黄色 2.5Y7/3	4mm以下の褐色粒を多く含む	
219	—	第2B区	表採	—	鉢	口～胴	口: (7.4)	口唇部: 摘み上げ 口縁部: 粗い斜方向のナデ	斜方向のナデ、指頭圧痕	橙 7.5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 2mm以下の明赤褐色粒を多く含む	外: 煤付着
220	—	第2B区	D11SW	II	鉢	口～胴	—	横・斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	2mm以下の灰白色粒を多く含む 微細な透明光沢粒を含む	外: 煤付着
221	—	第1B-1区	K5SW	IV	高坏	杯	—	斜方向のナデ	縦方向のナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	4mm以下の暗赤褐色粒を多く含む 1mm以下の灰白色粒を多く含む	接合痕
222	—	第2B区	D11NW	II	高坏	脚	—	ナデ	ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	3mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	粘土紐痕 円形透かし
223	—	第2B区	D11SW	II	高坏	脚	—	斜方向のミガキ	粗いナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	5mm以下の灰白色粒を多く含む 1mm以下の黒褐色粒を含む	円形透かし
224	—	第1B-1区	K5NW	V	甕	口～胴	—	口縁部: 横方向のナデ 胴部: 斜方向の工具ナデ	口縁部: 横方向のナデ 胴部: 斜方向の工具ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	以下の灰褐色粒を多く含む 2mm以下の灰白色粒を多く含む	

第12表 包含層土器観察表

挿図番号	図版番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	石材	法量 (cm, g)				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
225	図版11	第2B区	D10 SE	II	石廂丁	砂岩	3.8	7.7	1.5	56.4	挟り2
226	図版11	第2B区	D10 SE	II	石廂丁	頁岩	4.2	6.8	1.2	44.6	挟り2

第13表 包含層石器計測表

第6節 自然科学分析の結果

向原中尾第2遺跡では、放射性炭素年代測定、樹種・種実同定、蛍光X線分析を実施した。

放射性炭素年代測定と樹種同定は、竪穴建物跡の床面より検出した炭化材、集石遺構埋土4層の炭化材を試料とした。放射性炭素年代測定では、炭化材の年代及び、遺構の時期決定の参考にする目的で実施し、樹種同定は、建物構造材や木材利用状況を明らかにし、近隣森林の植生を推定するという目的で実施した。種実同定は、竪穴建物跡の床土・土坑、土器内埋土、集石遺構埋土のフローテーション作業を実施し、得られた種実を試料とし、当時の遺跡周辺の植生を復元すると共に、当時の植物利用の実態を推察する目的で実施した。蛍光X線分析は、フローテーション作業で得られた赤色顔料塊と土器付着の赤色顔料を試料とし、当時の赤色顔料の利用実態を推察する目的で実施した。

放射性炭素年代測定、樹種・種実同定は(株)古環境研究所に委託し、蛍光X線分析は別府大学文学部平尾良光教授の御協力を得て実施した。各分析の方法や結果の詳細については下記に掲載した。

1 放射性炭素年代測定

(1) 試料

放射性炭素年代測定の試料は、弥生時代終末期に相当する竪穴建物跡床面から出土した炭化材5点と、縄文時代早期に相当する集石遺構の埋土から出土した炭化材1点の計6点である(第14表)。

試料 No	地点・層準
No. 1	SA1 床面出土の炭化材 (C1)
No. 2	SA2 床面出土の炭化材 (C2)
No. 3	SA3 床面出土の炭化材 (C5)
No. 4	SA3 床面出土の炭化材 (C6)
No. 5	SA7 床面出土の炭化材 (C2)
No. 6	SI14 4層出土の炭化材 (C6)

第14表 放射性炭素年代測定試料一覧

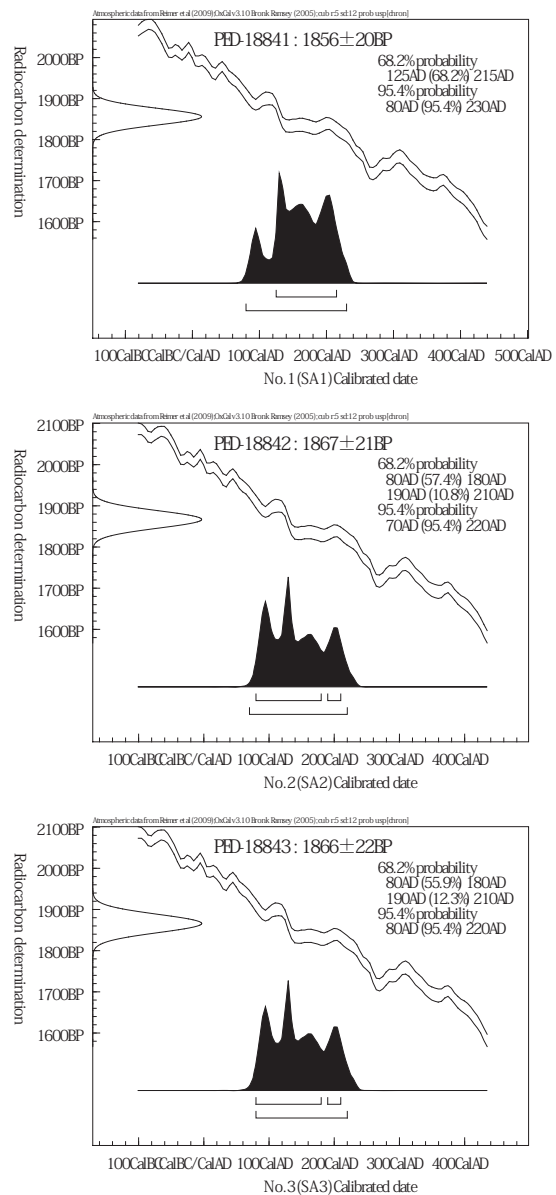
(2) 方法

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法で、樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象である。

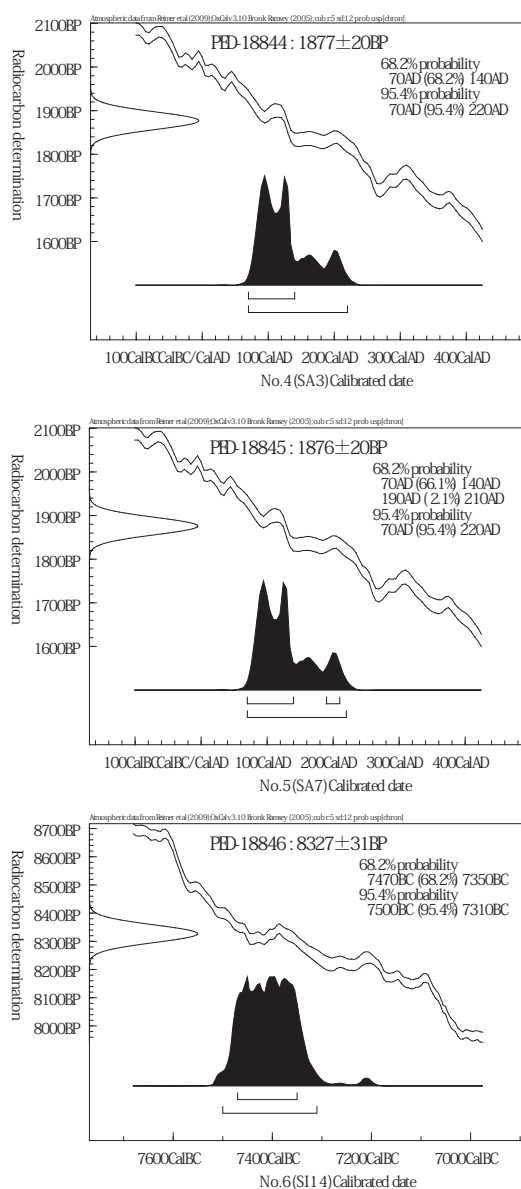
各試料を超音波洗浄後に、酸-アルカリ-酸処理の後、AMS (Accelerator Mass Spectrometry) 加速器質量分析法により年代を測定し、暦年較正した。

(3) 測定結果

加速器質量分析法 (AMS) によって得られた放射性炭素濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。第15表にこれらの結果を示す。なお、暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。



第41図 暦年代較正曲線図(1)



第 42 図 暦年代校正曲線図 (2)

試料 No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) ※	暦年校正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (校正年代) ※	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	-27.96 ± 0.14	1856 ± 20	1855 ± 20	AD125-215 (68.2%)	AD80-230 (95.4%)
2	-24.97 ± 0.19	1867 ± 21	1865 ± 20	AD80-180 (57.4%) AD190-210 (10.8%)	AD70-220 (95.4%)
3	-25.04 ± 0.16	1866 ± 22	1865 ± 20	AD80-180 (55.9%) AD190-210 (12.3%)	AD80-220 (95.4%)
4	-26.20 ± 0.17	1877 ± 20	1875 ± 20	AD70-140 (68.2%)	AD70-220 (95.4%)
5	-27.13 ± 0.19	1876 ± 20	1875 ± 20	AD70-140 (66.1%) AD190-210 (2.1%)	AD70-220 (95.4%)
6	-24.29 ± 0.18	8327 ± 31	8325 ± 30	BC7470-7350 (68.2%)	BC7500-7310 (95.4%)

※デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値とは、試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) のことである。
 ※ ^{14}C の半減期は5730年であるが、今回の分析ではLibbyの5568年を用いた。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2%確率) である。なお、下1桁を丸めない暦年校正用年代値も併記した。
 ※暦年代 (校正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅で表し、 $0x\text{Cal}$ の確率法により $1\text{シグマ}\sigma$ (68.2%確率) と 2σ (95.4%確率) で示した。

第 15 表 放射性炭素年代測定結果

(4) 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 では 1855 ± 20 年 BP (2 σ の暦年代で AD80 ~ 230 年)、No. 2 では 1865 ± 20 年 BP (AD70 ~ 220 年)、No. 3 では 1865 ± 20 年 BP (AD80 ~ 220 年)、No. 4 では 1875 ± 20 年 BP (AD70 ~ 220 年)、No. 5 では 1875 ± 20 年 BP (AD70 ~ 220 年)、No. 6 では 8325 ± 30 年 BP (BC7500 ~ 7310 年) の年代値が得られた。

2 樹種同定

(1) 試料

試料は、向原中尾第2遺跡の竪穴建物跡 SA 1、SA 2、SA 3、SA 7 から採取された炭化材 10 点である (第 16 表)。

(2) 方法

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。同定方法は、試料を割折して新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柁目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

同定結果を第 16 表と第 43 図に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

分析番号	遺構番号	出土位置	結果 (学名/和名)	
43	SA1	C1	<i>Diospyros</i>	カキノキ属
44	SA2	C2	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属
45	SA2	C3	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属
46	SA3	C3	<i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>	ツブラジイ
47	SA3	C5	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
48	SA3	C6	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
49	SA3	C7	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
50	SA3	C8	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
51	SA3	C9	<i>Meliosma</i>	アワブキ属
52	SA7	C2	<i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>	ツブラジイ

第 16 表 炭化材同定結果

ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* Schottky)
ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は単列のものと集合放射組織が存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

アワブキ属 (*Meliosma*) アワブキ科

横断面：小型の道管が単独ないし2～4個放射方向にむかって複合して散在する散孔材であるが、その複合部に1～2個の柔細胞をはさんでいるものが見られる。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

カキノキ属 (*Diospyros*) カキノキ科

横断面：中型から大型の道管が単独および2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列する傾向を示す。

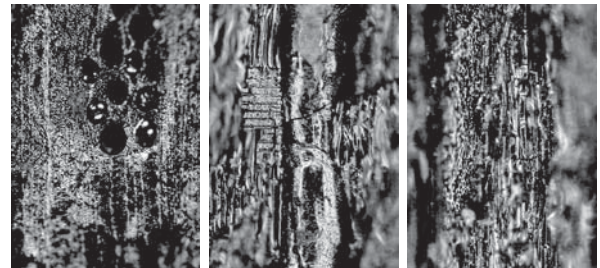
ハイノキ属 (*Symplocos*) ハイノキ科

横断面：小型で角張った道管が単独あるいは2～4個不規則に複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

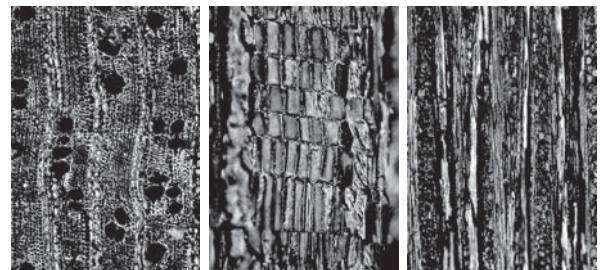
(4) 所見

樹種同定の結果、アワブキ属5点、ツブラジイ2点、ハイノキ属2点、カキノキ属1点が同定された。アワブキ属にはアワブキ、ヤマビワなどの種があり、アワブキは山地に生育する落葉高木、ヤマビワは暖地の常緑林内にはえる常緑小高木で湿潤を好む。ツブラジイは暖地の山野に生育する常緑高木で照葉樹

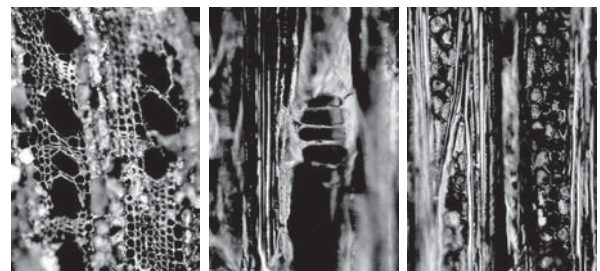
林の主要高木で二次林要素でもある。カキノキ属は暖地の山中に生育する落葉高木である。ハイノキ属は山地によく生育する常緑または落葉性の高木または低木である。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。



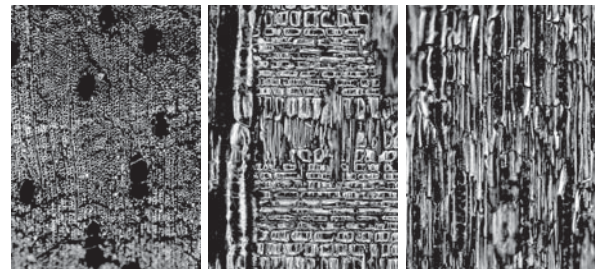
横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
1. 46 SA3 C3 ツブラジイ



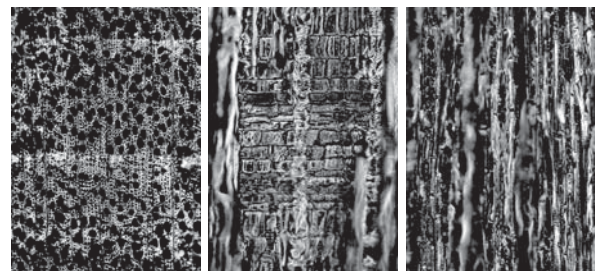
横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.4mm
2. 47 SA3 C5 アワブキ属



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
3. 51 SA3 C9 アワブキ属



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
4. 43 SA1 C1 カキノキ属



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
5. 45 SA2 C3 ハイノキ属

第43図 向原中尾第2遺跡出土の炭化材

3 種実同定

(1) 試料

試料は、向原中尾第2遺跡のS I 14、S A 3、S A 4、S A 5から採取された試料で、いずれも水洗選別済みの炭化物である。

(2) 方法

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。遺構埋土や堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。同定方法は、種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(3) 測定結果

種実同定の結果、樹木4、草本4の計8分類群が同定された。イネ計測値およびイネの粒形と大きさを第17・18表に示す。同定結果を第44図に示し、以下に同定根拠となる形態的特徴およびサイズを記載する。

コナラ属(*Quercus*) ヘソ ブナ科

長さ×幅：5.71 mm×5.73 mm

黒褐色で円形を呈す。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

カラスザンショウ(*Zanthoxylum ailanthoides* S. et Z.) 種子 ミカン科

長さ×幅：3.27 mm×2.72 mm

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

サンショウ属(*Zanthoxylum*) 種子 ミカン科

長さ×幅：2.59 mm×1.95 mm

黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

ブドウ属(*Vitis*) 種子 ブドウ科

長さ×幅：3.19 mm×2.60 mm

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

イネ(*Oryza sativa* L.) 果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚

の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。出土しているイネは最大値：5.24 mm×3.05 mm、最小値：3.86 mm×1.98 mmであった。イネの粒形とその大きさは短粒の小粒が一番多く、次に短粒の極小粒が多かった。この結果については第18表に表す。

アワ(*Setaria italica* Beauv.) 果実 イネ科

長さ×幅：1.25 mm×1.12 mm、1.20 mm×1.30 mm

黒色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

カヤツリグサ科(*Cyperaceae*) 果実

長さ×幅：2.43 mm×2.01 mm、1.96 mm×1.50 mm

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

キンバイザサ(*Curculigo orchioides* Gaertn.) 種子 キンバイザサ科

長さ×幅：3.25 mm×2.30 mm、2.90 mm×2.63 mm、3.35 mm×2.38 mm、2.91 mm×2.52 mm

漆黒で卵形体や楕円体を呈し、基部の片側から鉤状の太い突起がでる。へそは突起の先端の内側にある。

その他 炭化材片、芽、昆虫片、不明炭化物

(4) 所見

種実同定の結果、栽培植物としてはSA 3の床土でイネとアワ、土坑1でイネ、SA 5の床土でイネとアワが認められた。また、食用となるものとしてはSA 5の床土でブドウ属が認められた。草本種実では、キンバイザサやカヤツリグサ科が比較的多く認められた。これらの種実は食用にはならないため、周辺に生育していたものが何らかの形で混入したと考えられる。キンバイザサは20～30 cmほどの単子葉の草本であり、近畿以南から熱帯に分布し、山地の樹林下や海外沿いの草地などに生育する。樹木種実では、コナラ属、不明堅果類、カラスザンショウ、サンショウ属がわずかに認められた。コナラ属は、堅果が食用として利用された可能性が考えられる。カラスザンショウなどのサンショウ属は、集落周辺で二次林として分布する樹木である。なお、各遺構で多く認められた不明炭化物(種実以外)は、人の活動の遺存物と考えられる。

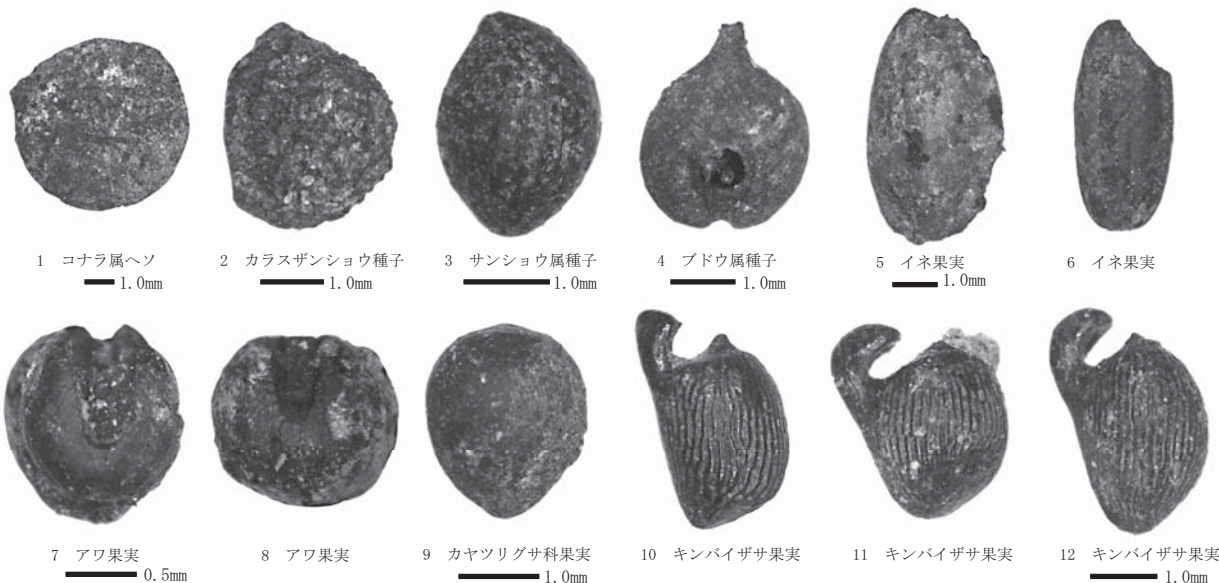
試料	長さ (mm)	幅 (mm)
1	4.64	2.26
2	3.86	1.98
3	4.77	2.70
4	5.24	3.05
5	4.74	2.83
6	4.70	2.70
7	4.27	2.27
8	5.00	2.70
9	4.39	2.27
平均値	4.62	2.53
最大値	5.24	3.05
最小値	3.86	1.98

第17表 イネ炭化果実計測値

粒形		粒大				合計
		極々小 〜 8	極小 〜 12	小 〜 16	中 〜	
長粒 L	2.6-3.0 Ll					
	2.3-2.6 Lm					
	2.0-2.3 Ls		1			1
短粒 S	1.8-2.0 Sl	1	2	1		4
	1.6-1.8 Sm			4		4
	1.4-1.6 Ss					
円粒 R	1.2-1.4 Rl					
	1.0-1.2 Rm					
合計		1	3	5		

※粒長 / 粒幅で粒形、粒長×粒幅で粒の大きさを表す。

第18表 イネの粒形と大きさ



第44図 向原中尾第2遺跡出土の炭化種子

4 蛍光X線分析

(1) 分析試料

蛍光X線分析試料は、向原中尾第2遺跡のSA3埋土のフローテーション作業で検出された赤色顔料の塊2点 (No.1 0.2g、No.2 0.3g) と、SA4埋土から出土した弥生土器 (188) に付着した1点 (No.3) である。

(2) 分析方法

試料の分析には蛍光X線分析法を用いた。蛍光X線分析とは、試料に一次X線を照射することで試料から二次X線が発生し、その強度と数を測定することで元素の種類と濃度を判別・計算する方法である。この分析方法は測定時間が短く、試料を非破壊で分析することができるため、文化財資料の化学組成測定に多く用いられる。

蛍光X線分析では、外部からX線を照射し、表面から発生する二次X線の強度と数を解析して化学組成を測定するため、試料表面に錆などがあれば、その化学組成が強く反映される。そのため、本来の組成とは異なる可能性が出てくる。今回分析する試料は赤色顔料なので、錆などの影響はないと考えられるが、土壌成分の影響を受けている可能性がある。

分析にはSII ナノテクノロジー社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 SEA5230A を使用した。測定条件は第19表に示す。

測定時間 (秒)	300
資料室雰囲気	大気
照射直径	φ 1.0mm
励起電圧 (kV)	50

第19表 蛍光X線の分析測定条件

(3) 結果

すべての試料の主成分はFe（鉄）であった。No.1とNo.2は同じスペクトルを示し、As（ヒ素）が鉄に次いで多く検出された。No.3はNo.1、2と異なるピークを示し、ヒ素成分は多く検出されなかった。No.1、2が鉄：ヒ素＝約155：1に対し、No.3は鉄：ヒ素＝約2,300：1であり、No.1、2のヒ素の含有量が非常に高い。各試料のスペクトル図は第45～47図、定量分析結果は第20表である。

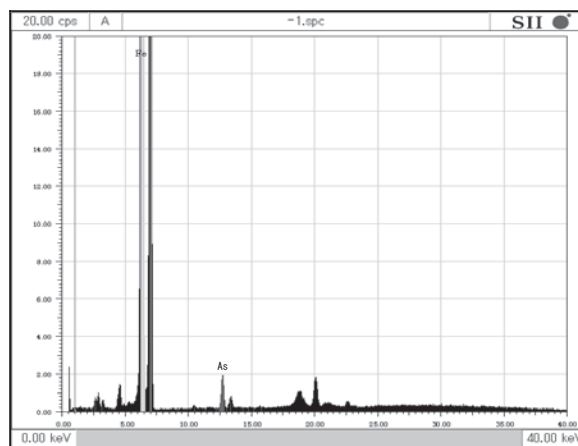
(4) 所見

市毛（1984）によると、日本の古代にみられる赤色には、ベンガラ、水銀朱、鉛丹がある。ベンガラは旧石器時代から、水銀朱は縄文時代から使用されていることが確認されている。ベンガラは酸化鉄であり、水銀朱は硫化水銀、鉛丹は酸化鉛である。

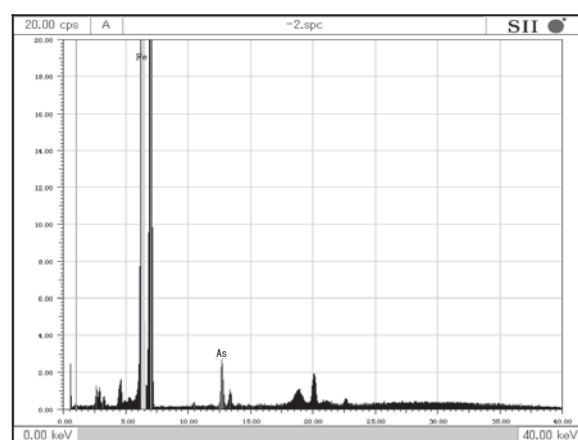
今回分析した試料には鉄成分が多く検出されたため、赤色系の顔料は鉄を主成分とするベンガラである。No.1・2は同じスペクトルを示しており、同一個体であったとも考えられる。鉄成分に加え、ヒ素成分が多く検出された。この酸化鉄に含まれるヒ素の由来については、大きく2つのことが考えられる。

1つは鉱山に関係するものである。これは酸化鉄が生成される際に、ヒ素と一緒に固まったものであると考えられる。矢彦沢ほか（1995）によると、ベンガラの主成分である鉄は、地下水とともに動きやすく、比較的容易にどこでも入手できると考えられるが、堀木（2008）は、パレススタイル土器の赤色顔料分析を行い、ベンガラから若干のヒ素と銅が検出されていることから、岐阜県大垣市金生山の赤鉄鉱をベンガラとして用いた可能性を示唆している。今井ほか（2004）によると、ヒ素は各地に存在する鉱床に密接に関連しており、大規模な鉱山のあった地域で明らかな高濃度を示すとされる。宮崎県のヒ素関連の大規模鉱山は、高千穂町にかつて存在した。高千穂周辺ではヒ素とともに銅も多く含まれる地域として知られるが、今回の試料には銅のピークを確認することができなかった。

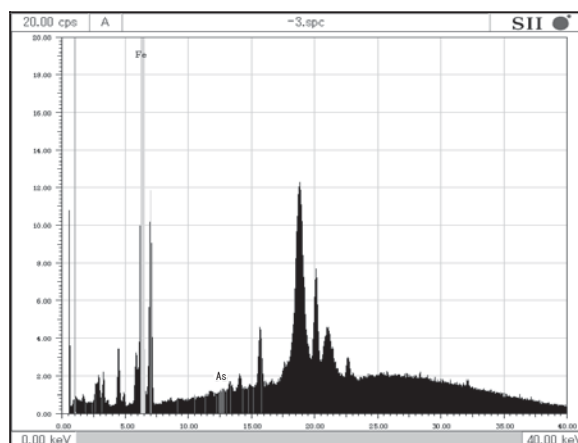
もう1つは含鉄泉に関係するものである。温泉地で酸化鉄が生成される際に、ゆっくり沈殿し固まるなかでヒ素を高濃度に含む場合がある（別府大学平



第45図 No.1 スペクトル図



第46図 No.2 スペクトル図



第47図 No.3 スペクトル図

	No.1 (SA 3埋土出土)	No.2 (SA 3埋土出土)	No.3 (SA 4出土土器)			
Fe0	98.47 (± 0.26) (wt%)	3002.152 (± 8.003) (cps)	98.62 (± 0.27) (wt%)	2707.754 (± 7.415) (cps)	99.87 (± 0.57) (wt%)	688.517 (± 3.992) (cps)
As0	1.53 (± 0.05) (wt%)	20.999 (± 0.725) (cps)	1.38 (± 0.05) (wt%)	16.929 (± 0.637) (cps)	0.13 (± 0.24) (wt%)	0.376 (± 0.728) (cps)

第20表 定量分析結果

尾良光教授の御教示による)。戸高(1998)では、「朱玉」試料の分析例には砒素やチタンが微量に含まれるものがあり、温泉湧出地の沈殿物を利用した可能性もありうると指摘している。南東九州でヒ素の分布が確認されている含鉄泉は、宮崎県えびの温泉、大分県別府温泉、鹿児島県指宿温泉などがあげられる。なお、宮崎県えびの市ではベンガラが採取でき、えびの市所在の島内地下式横穴墓群からは朱の付着した人骨が多数出土している。新富町では近世のベンガラ工房跡が調査され、褐鉄鉱の残滓や赤色顔料を混ぜてつくられた焙烙鍋片が出土している(顔料は未分析)。大分県別府市に所在する古墳(未報告)の石室内等のベンガラからはヒ素が多く検出されている(平尾教授の御教示による)。

今回の分析結果からは、産地の同定まで進めることができなかった。宮崎県内では縄文時代草創期の土器(国富町塚原遺跡で出土)をはじめとし、赤色顔料の分析の事例報告は多い。しかし、赤色顔料の由来についての分析事例が少ないのが実情である。ヒ素が高濃度に分布している地域は特定しやすいため、ヒ素を含むベンガラの産地の推定ができる可能性がある。今後、宮崎県内遺跡出土の赤色顔料の化学組成分析や、温泉地などの赤色堆積物等の分析を進める必要がある。

(5) 弥生時代後期の赤色顔料

向原中尾第2遺跡では赤色顔料の塊2点と、赤色顔料の付着した土器が1点出土した。今回の蛍光X線分析では、赤色顔料は鉄成分が多く含まれていたことからベンガラと推定され、またヒ素成分も多く含まれていることがわかった。ヒ素が高濃度に分布している地域は特定しやすいため、ヒ素を含む赤色顔料の産地の推定ができる可能性が出てきた。

向原中尾第2遺跡と同時期の赤色顔料の出土遺跡には、木戸平第2遺跡、前ノ田村上第1遺跡、赤坂遺跡、南平第3遺跡などがあげられる。

都農町に所在する木戸平第2遺跡では、間仕切りがある焼失建物の3号堅穴建物跡内の土坑から内面に赤色顔料が付着した小型の壺が2点出土しており、壺に赤色顔料を入れて搬入していた可能性を示唆する資料である。同様に川南町に所在する前ノ田

村上第1遺跡からも堅穴建物跡周辺から、内面に赤色顔料が付着した小型の壺が出土している。小型の壺内に付着した赤色顔料の分析結果は、酸化第二鉄が含まれていたことより、ベンガラだと推定されている。同遺跡からは床面から赤色顔料が集中する堅穴建物跡も検出されている。

高千穂町に所在する南平第3遺跡では、22号堅穴建物跡の埋土内部から赤色顔料が検出され、鉄を主成分とするベンガラであることがわかっている。

赤坂遺跡では、方形の焼失建物内から出土した磨石に赤色物質が付着しており、分析をした結果、ベンガラだと推定されている。これはベンガラを磨り潰して使用する際に用いられたものであろう。赤色顔料を磨石で磨り潰す行為は、縄文時代後期でも確認されており、宮崎市高岡町に所在する野遺跡では、同様の磨石が3点出土している。なおこれらの分析では鉄が多く含まれていたことから、ベンガラであると推定されている。

弥生時代終末期になると水銀朱が用いられるようになる。その傾向について、近藤(2002)では、(東平下円形周溝墓土壌内出土の水銀朱や推定持田古墳群出土四獣形鏡に付着していた水銀朱から)遺体が埋葬される最も重要な部分である主体部において、水銀朱が使用されていると述べている。

向原中尾第2遺跡での赤色顔料の分析により利用の一端を見ることができた。同時期の宮崎県内でのベンガラ採掘遺跡は確認されていないが、ヒ素を含むベンガラの産地が明らかになれば、ベンガラの採掘から流通経路までを解明することが可能である。本遺跡では炭化種子を得る目的でフローテーション作業を行っていた際に発見した赤色顔料塊であるため、正確な時期の特定が難しい。今後は時期の特定ができる土器等に付着した赤色顔料から、そのような事例を増やしていくことが重要である。

今回の赤色顔料の分析については、別府大学文学部平尾良光教授と同大学保存科学研究室の御協力の下に実施した。特に平尾教授からは分析結果に関する貴重な御助言を頂いた。また竹井眞知子氏には分析例についての御助言を頂いた。末筆ながら、感謝申し上げる次第である。(谷口)

	遺跡名	所在地	時期	付着および出土位置	主成分	想定される顔料	備考
1	塚原遺跡	国富町	縄文時代草創期	土器片に付着	Fe	ベンガラ	土器胎土に練り込まれた可能性あり
2	前ノ田村遺跡	川南町	縄文時代早期	土器片に付着	Fe	ベンガラ	
3	吉牟田遺跡	高原町	縄文時代後期	土器片に付着	Fe	ベンガラ	白色顔料（白色粘土を用いたもの）の付着した土器も出土している
4	的野遺跡	宮崎市高岡町	縄文時代後期	磨石に付着	Fe	ベンガラ	同様の磨石が2点検出され、ともに赤色顔料（ベンガラ）付着
5	宮崎市橋通東出土※	宮崎市	弥生時代	大型壺の肩部	Fe	ベンガラ	
6	赤坂遺跡	川南町	弥生時代後期	磨石に付着	Fe	ベンガラ	
7	前ノ田村上第1遺跡	川南町	弥生時代後期	壺に付着	Fe	ベンガラ	
8	向原中尾第2遺跡	日向市東郷町	弥生時代後期	土器片に付着、塊	Fe	ベンガラ	
9	南平第3遺跡	高千穂町	弥生時代後期	竪穴建物跡の埋土中	Fe	ベンガラ	
10	川床遺跡	新富町	弥生時代後期～古墳時代前期	周溝墓の底土出土 周溝墓出土土器の内部の土	Hg, Fe Fe	水銀朱 ベンガラ	水銀朱とベンガラを使い分けていた可能性を指摘
11	(推定) 持田古墳※	高鍋町	弥生時代終末期	鏡背に付着	S, (Fe), Hg	水銀朱	
12	東平下円形周溝墓※	川南町	弥生時代終末期	主体部内の土壌中	S, Fe, Hg	水銀朱	
13	初木地下式横穴墓群	国富町	古墳時代	玄室内の土	Fe	ベンガラ	
14	上野原地下式横穴墓※	小林市須木	古墳時代	朱玉	Fe	ベンガラ	
15	宗仙寺地下式横穴墓※	国富町	古墳時代	玄室内の土壌中	Fe	ベンガラ	
16	尾中原地下式横穴墓※	小林市	古墳時代	朱玉	Fe	ベンガラ	
17	飯盤地下式横穴墓53-1号※	国富町	古墳時代	朱玉	Fe	ベンガラ	
18	上野原地下式横穴墓1号※	都城市高崎町	古墳時代	玄室内	Fe	ベンガラ	
19	吉野古墳（南方）※	延岡市	古墳時代	石棺内部の土壌中	Fe	ベンガラ	
20	六野原地下式横穴墓31号※	国富町	古墳時代	玄室内の土壌中	S, Fe, Hg	水銀朱	
21	牧ノ原地下式横穴墓3号※	都城市高城町	古墳時代	出土人骨に塗布されている	Ca, Hg	水銀朱	
22	西都原古墳群13号※	西都市	古墳時代	土壇上土床下の河原石に付着	Fe	水銀朱	
23	島内地下式横穴墓群※	えびの市	古墳時代	出土人骨に塗布されている	S, Ca, Fe, Hg S, (Fe), Hg Fe	水銀朱 ベンガラ	水銀朱の利用が多く、全国的傾向とも一致 希少な水銀朱を頭部に使い、玄室内散布や壁面塗布にはベンガラを使用か？
24	不明※	県内出土	古墳時代？	土師器境内の土混じりの顔料	Fe	ベンガラ	地下式横穴墓内から出土した土師器境？

※は近藤（2002）による分析で、残りは報告書等に記載

第21表 赤色顔料および赤色顔料付着土器の分析結果集成

参考文献

1 放射性炭素年代測定

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2)

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51

中村俊夫（2000）「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の140年代』

2 樹種同定

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）『木材の構造』文永堂出版

島地 謙・伊東隆夫（1988）『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣

山田昌久（1993）「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究 特別1号』植生史研究会

3 種実同定

笠原安夫（1985）『日本雑草図説』養賢堂

笠原安夫（1988）「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究 第2巻 生業』雄山閣

佐藤敏也（1988）「弥生のイネ」『弥生文化の研究 第2巻 生業』雄山閣

南木睦彦（1991）「栽培植物」『古墳時代の研究 第4巻 生産と流通I』雄山閣

南木睦彦（1993）「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編 第四紀試料分析法』東京大学出版会

4 蛍光X線分析

市毛勲 1984『朱の考古学』雄山閣

戸高眞知子 1986「新富町川床遺跡出土赤色顔料の分析結果について」〔川床遺跡〕『新富町文化財調査報告書』第5集 新富町教育委員会

矢彦沢清充・両角秀俊・藤松仁・村上泰・森嶋稔 1995「弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来－フォッサマグナ東端地域を中心として」『考古学雑誌』第80巻第4号

平尾良光・山岸良二 1998「石器・土器・装飾品を探る」『文化財を探る科学の目②』国土社

- 戸高眞知子 1998「赤色顔料からみた葬送儀礼」『宮崎考古』第16号 宮崎考古学会
- 谷口武範他 1999「神殿B・C地区、南平第3遺跡、南平第4遺跡、中ノ原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第17集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 面高哲郎・竹井眞知子 2001「松元遺跡・井手口遺跡・塚原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第44集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 廣田晶子 2001「的野遺跡」『高岡町文化財調査報告書』第20集 高岡町教育委員会
- 近藤協 2002「宮崎県内遺跡出土の館蔵赤色顔料の化学分析結果から」『宮崎県総合博物館研究紀要』第24輯
- 今井登・寺島滋・太田充恒・御子柴（氏家）真澄・岡井貴司・富樫茂子・松久幸隆・金井豊・上岡晃・谷口政碩 2004『日本の地球化学図』産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 河野康男 2005「前ノ田村上第1遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第116集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 興侶慶一 2007「赤坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第151集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 柳田裕三 2007「吉牟田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第154集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 堀木真美子 2008「パレススタイル土器の赤色顔料」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』第9号
- 樋渡将太郎 2009「南原ベニガラ工房跡」『新富町文化財調査報告書』第52集 新富町教育委員会
- 黒木俊彦 2010「前ノ田村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第190集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 二宮満夫 2010「初木地下式横穴墓群」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第191集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 徳留洋志・今塩屋毅行 2012「木戸平第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第215集 宮崎県埋蔵文化財センター

第7節 総括

向原中尾第1・2遺跡の調査では、後期旧石器時代から弥生時代終末期までの遺構・遺物が確認された。日向市南東域に位置する寺迫地区における発掘調査は多くはなく、向原中尾第1・2遺跡および第三章で報告する向原中尾第4遺跡の調査によって、当地域の歴史を復元する上で重要な成果が得られた。

本節では向原中尾第1・2遺跡における時代ごとの様相やその位置について検討を進めることとする。

1 後期旧石器時代

A T上位の石器群 向原中尾第2遺跡のB区北半分、A T上位層（基本層序のV～VI層）にて石器や礫が良好な状態で出土した。礫群と認定できる遺構は検出されなかったが、標高の高い平坦な場所に礫が集中して分布する状況が確認できた。

このB区北半部のA T上位層で出土した旧石器は、ナイフ形石器・石刃・石核・スクレイパー等であり、その出土分布は礫の分布とはあまり重ならず、器種ごとに偏りが見られた。石刃・剥片・石核は近接して出土したが、接合したものは数点であり、折れたものが接合するだけであった。A T上位層で出土した旧石器の様相は、隣接する向原中尾第4遺跡における後期旧石器時代Ⅱ期の石器相と共通している。

石器石材の特徴 向原中尾第2遺跡B区北半分のA T上位層で出土した石器の石材は、流紋岩・珪質頁岩・ホルンフェルス・頁岩などである。中心となるのは流紋岩と珪質頁岩である。白色の五ヶ瀬川産流紋岩を石材とするスクレイパーも認められた。

上述のように、流紋岩と珪質頁岩製の石核・石刃・剥片が出土しているが接合できるものは少ない。

遺跡の様相 向原中尾第2遺跡のB区北半分は、石器の様相や接合関係から検討すると、石器製作の場というよりも、石器の調整を行った場所やキャンプサイトであったと位置づけられる。

一方、向原中尾第2遺跡B区の南半分や向原中尾第1遺跡でも遺構は検出されず、旧石器の出土もわずかである。B区北半分にて旧石器や礫が数多く出土した要因としては、地形と土層の堆積状況が影響していると考えられる。向原中尾第2遺跡B区北半分は丘陵頂部付近で、A Tの堆積が確認されたが、

他の調査箇所は傾斜地でATは堆積していない状況であった。すなわち、向原中尾第2遺跡B区北半分以外の調査箇所においては、傾斜地のために土層堆積が安定せず、良好な遺物包含層が形成されなかったと判断される。そのため、向原中尾第1遺跡で出土した数点の石器は流れ込みによるものと思われる。

このように、後期旧石器時代では、向原中尾第2遺跡の丘陵頂部部分や東側の緩斜面が生業の中心であったと考えられ、B区周辺にも遺構や遺物が広がる可能性は高いといえる。

2 縄文時代早期

(1) 向原中尾第2遺跡における様相

遺構の分布 向原中尾第2遺跡のB区北半分において、Ⅲ層(K-Ah)より下位のⅣ層～Ⅴ層上面で集石遺構が17基と石斧埋納遺構が1基検出された。両者ともに丘陵頂部の平坦面から東側に向けた緩斜面上にかけて分布する。

集石遺構 集石遺構は、形態上の特徴から4つに分類した(第Ⅱ章第4節)が、分類別に分布が偏るような状況ではない。これら集石遺構の分布域を覆うように散礫の広がり認められた。なお、集石遺構の分布域と弥生時代竪穴建物跡の分布域がほぼ重なりあうので、集石遺構は17基よりも本来は多く存在していたと考えられる。

石斧埋納遺構 Ⅳ層上面で検出された2本の石斧は、その下部に掘り込みを有する。石斧は自然面を上にして並べて置かれていた。さらに、掘り込みの埋土はⅣ層の土とほぼ変わらないにもかかわらず炭化物が微量に含まれるので、石斧を埋納した土坑と判断される。

遺構の時期 集石遺構や石斧埋納遺構は、検出層位から縄文時代早期の時期にあたる。

後述のように、遺構が検出されたⅣ層～Ⅴ層上面で出土した縄文土器は、楕円・山形押型文土器、前平式に類似した土器、手向山式土器や無文土器等があり、縄文時代早期の前葉～中葉に位置づけられる。

集石遺構や石斧埋納遺構は、検出層位や土器の編年観から縄文時代早期の前半期と位置づけられる。

なお、S I 14の埋土4層から出土した炭化材を放

射性炭素年代測定した結果、BC7500～7310年の年代値が得られたので、自然科学分析の結果からも裏付けられる。

出土土器 縄文時代早期の土器は、Ⅳ層～Ⅴ層上面にて出土した。楕円押型文と山形押型文の2種類の押型文土器、手向山式、前平式といった縄文時代早期前葉～中葉頃の一群である。出土量全体では、手向山式土器が主体的であり、屈曲部付近を中心とした資料が多い。なお、Ⅳ層で出土したミミズバレ状の微隆起突帯を有する土器(39・40)については、出土層位(位置)を優先して縄文時代早期の遺物としておきたい。無文土器は底部形態が不明であるが、早期前葉に位置づけておく。

石器と遺跡の性格 向原中尾第1・2遺跡とも石鏃が出土したが、先端や基部が欠損しているものが多い。これらは使用時に破損し廃棄したと考えられ、周辺で狩猟活動が行われていたものと思われる。

向原中尾第2遺跡では、土掘り用である打製石斧が7点出土したことから、遺跡周辺で植物採集が行われていた可能性がある。打製石斧に加えて敲石・磨石・粗製剥片石器なども出土したので狩猟によって得られた獲物や採集した食用植物などの加工を行っていたものと思われる。

すなわち、縄文時代早期の向原中尾第2遺跡においては、集石遺構を使用した調理、石鏃や石斧などを使用した狩猟・採集・伐採などの生業活動が行われ、粗製剥片石器といった石器製作も行われた空間であったと理解される。一方、向原中尾第1遺跡側は狩猟空間であった可能性が高く、また、谷をへだてて南東側に位置する向原中尾第4遺跡では縄文時代早期前半の土器が出土したことから、向原中尾第2遺跡を中心とした人間活動の広域的な展開が想定される。

(2) 向原中尾第1・2遺跡における石器石材

石器石材 向原中尾第2遺跡においては、縄文時代早期になると石器の出土量は後期旧石器時代と比較して急増する。石器石材はホルンフェルスが多く、砂岩、尾鈴山溶結凝灰岩、頁岩などがあり、少量ではあるが黒曜石やチャート、安山岩なども見られる。

黒曜石の産地は桑ノ木津留、霧島、姫島といった広範囲に及び、多くは石鏃の石材として用いられる。

ホルンフェルスや珪質頁岩、安山岩の石核が出土しており、剥片の出土も多くみられるため、これらの石材を用いた石器製作が行われたものと思われる。

粗製剥片石器 向原中尾第1・2遺跡では縄文時代早期の遺物包含層を中心に粗製剥片石器が出土した。類例としては宮崎市下那珂遺跡や川南町藏座村遺跡、都農町内野々遺跡などで出土している。下那珂遺跡や藏座村遺跡は砂岩・ホルンフェルス製が多く、内野々遺跡は尾鈴山溶結凝灰岩・砂岩が多い。

向原中尾第1・2遺跡では、尾鈴山溶結凝灰岩、ホルンフェルス、砂岩、頁岩製のものがみられ、量的な差はほぼ無い。しかし、大型のものに限っては尾鈴山溶結凝灰岩と砂岩製のものしかない。大型のものは現状の形態から元来は円礫に近い形態であったと考えられる。また、粗製剥片石器は向原中尾第2遺跡に集中していることから考えても、調理や加工などの目的で使用されたものと思われる。今後は製作技法や使用痕の分析から粗製剥片石器の実態を明らかにしていくことが必要である。(南・山本)

3 弥生時代の遺構と遺物

(1) 向原中尾第2遺跡における様相

竪穴建物跡 向原中尾第2遺跡のB区では、弥生時代の竪穴建物跡が7軒検出された。このうち4軒は「焼失建物」であった。支柱穴が検出できない(持たない)竪穴建物跡が多いのも特徴である。

竪穴建物の配置は、丘陵頂部の平坦面に5軒(SA1～3・5・7)、東側の緩やかな斜面地に2軒(SA4・6)が位置する。建物の主軸方向から、①群(SA1・2・4・6)と②群(SA3・5・7)の2つの群に分離できる。調査区内という限定された空間ではあるが3～4棟で一群をなしていたと解釈される。

竪穴部の面積は、20㎡(SA4)が最大で、16㎡(SA1)、12㎡(SA3)、9㎡(AS2)、4㎡(SA5・6)と面積に階梯的な差異が認められた。また、SA4では甕と壺が床面に倒置した状態で出土しており、何らかの意図をもって置かれたものと思われる。SA5では土器を投棄したような状態で出土しており、建物の廃絶後すぐに廃棄土坑と

して使われた可能性が考えられる。(今塩屋・山本)

出土土器 竪穴建物内からは土器や石器などが出土した。土器は弥生土器の甕・壺・鉢類がある。

甕は「く」の字形に屈曲する口縁部に平底の底部がつく形態が主体となる。これに安国寺式系の複合口縁壺(152・177)や口縁部が加飾された鉢・壺類(178・179・202・216)が伴う。

これらの土器群は、日向市東郷町鶴野内中水流遺跡のSA8や樋田遺跡のSA8、日向市美々津町百町原遺跡の周溝状遺構出土土器群と類似している。

従って、竪穴建物跡や包含層出土の弥生土器群は、日向市板平遺跡のI期段階にあたり、弥生時代終末期(庄内式併行期)に位置づけられる。なお、装飾付長頸壺(216)は、付近に弥生時代の墳墓や周溝状遺構の存在を類推させる資料である。(今塩屋)

出土石器 石器も竪穴建物跡内から多く出土した。石庖丁、磨石、敲石、砥石である。この石庖丁の石材は頁岩と砂岩である。近隣の川南町内に所在する遺跡から出土する石庖丁の石材は、ホルンフェルスが全体の84%で、頁岩が15%、砂岩が1%であるから、頁岩と砂岩の選択は稀なケースであったといえる。

磨石・敲石は縄文時代早期の場合と同様に砂岩と尾鈴山溶結凝灰岩が利用される。特にSA4からは棒状の小型の敲石が出土した。日向市東郷町鶴野内中水流遺跡SA5や、児湯郡川南町尾花A遺跡等に類例がある。

さらにSA4では軽石が出土しているが器種や使用方法等は不明である。日向市東郷町の樋田遺跡SA8にも類例がある。今後の比較検討や他地域での出土事例に注目しなければならない。(南・山本)

竪穴建物の時期 竪穴建物跡内から出土した土器群の形態的特徴から、7軒とも弥生時代終末期の時間幅に位置づけられる。

また、SA1とSA7の切り合い関係からは、SA7はSA1に後出することが判明している(第24図)。このSA7は建物主軸からみたグルーピングの②群に含まれるので、①群(SA1・2・4・6)から②群(SA3・5・7)への集落の変遷が想定される(第23図)。この場合、①・②群とも個々の竪穴建物は一定の距離を保って分布するあり方となり、②群

の時期には大型建物（20～16 m²）が減少する傾向が認められる。（今塩屋）

（2）自然科学分析の結果について

AMS年代 向原中尾第2遺跡のSA1・2・3・7出土の炭化材を放射性炭素年代測定した結果、その年代は1855±20年BP～1875±20年BP（AD70～220年）の幅に収まるという結果が出た。この年代幅に、出土土器の年代（終末期）も納まる。

建築部材の樹種 竪穴建物跡出土の炭化材は、樹種同定の結果、全て遺跡周辺もしくは近隣の地域で伐採が可能な樹種であることが判明した。特にSA3の炭化材は残りがよく、建築材の一部とみてよい。SA3では6点を同定したが、5点がアワブキ属であった。身近な木材の特性を熟知した上で、竪穴建物の建築部材として利用していたと考えられる。

種実同定 SA3・5の床土からイネとアワの炭化種実が検出された。SA3では石庖丁も出土していることから、コメやアワなどの栽培を行っていたと考えられる。向原中尾第2遺跡は、丘陵尾根上に立地するため、遺跡周辺の谷川沿いに広がる沼沢地が水田として利用されていたと考えられる。

このように、集落の中心は向原中尾第2遺跡となるが、丘陵尾根の裾部の向原中尾第1遺跡周辺まで生活空間は広がっていたものと思われる。（山本）

4 宮崎県域出土の石庖丁について

（1）宮崎県域における石庖丁概観

石庖丁は、弥生時代を中心に使用される石器で、その使用開始時期や終焉時期を検討することは水稻耕作の伝播と拡散や、生活用具が石器から鉄器に移行する過程を検討する上で重要である。

ここでは宮崎県域における石庖丁使用の様相を向原中尾第1・2遺跡が所在する耳川流域から小丸川流域を中心に検討していく。

向原中尾第2遺跡では4点の石庖丁が出土している。石庖丁が出土したのはSA1、SA3から1点ずつ、遺構外から2点の計4点である。形態は3点が略長方形であるが、1点は特殊な形態で刃部は直線的だが背部が湾曲する。形態差が顕著であるため前者をA類、後者をB類とする。また石庖丁の短辺にはす

べてに抉りが施されている。

宮崎県域においては弥生時代初頭の擦切石庖丁が延岡市古川や隣的美郷町西郷区峰ノ前等で出土しているが、分布は面的には広がらない。その後、弥生時代前期から中期にかけて多様な形態の石庖丁が使用されるようになり、弥生時代後期、特に弥生時代後期後葉において分布が一気に拡大し、量的にもピークを迎える（長津2004）。そして、宮崎県域における石庖丁の終焉については、古墳時代初頭まで下ることが指摘されている（長津2004）。

宮崎県域の石庖丁は、他地域でみられるような外湾刃半月形で2つの穿孔を有する形態のものもみられるが、多数を占めるのは本遺跡出土の石庖丁A類のような長方形の短辺に抉りを入れて穿孔を施さない形態のものである。

石庖丁が大量に出土した宮崎市下那珂遺跡では143点中98点に抉りが施され（甲斐編2004）、近年の調査で弥生時代から古墳時代の大規模集落であることが明らかになった川南町尾花A遺跡でも132点中113点に抉りが施されていた（松林他編2011）。

（2）石庖丁の分布

宮崎県域ではこれまで管見の限り687点の石庖丁が出土している。石庖丁の分布は日向灘沿岸では北が延岡市、南が宮崎市清武町、山側では北が高千穂町や美郷町、南が都城市で出土している。

特に宮崎市佐土原町下那珂遺跡では143点、川南町尾花A遺跡では132点の石庖丁が出土しており、川南町ではこの遺跡以外にも湯傘田遺跡で41点（松元編2007）、赤坂遺跡で15点（興梶編2007）と集中して石庖丁が出土する傾向がある。

このように川南町、特に小丸川下流域北岸に石庖丁分布の一つの中心があるが、地形的には小丸川流域から耳川南岸までが一つの平野として捉えられる。

向原中尾第2遺跡の周辺では耳川中流域の山間部に位置する日向市東郷町樋田遺跡で1点（谷口編1991）、名貫川下流域の児湯郡都農町新別府下原遺跡で2点（長津編1990）の石庖丁が出土している。

石庖丁はいずれも竪穴建物跡から出土しており、向原中尾第2遺跡と新別府下原遺跡出土の石庖丁には当地域で圧倒的多数を誇るホルンフェルス製のも

のが含まれていないことが特徴的である。

(3) 石庖丁の形態と石材について

向原中尾第2遺跡出土の石庖丁で注目されるのはB類のものである。

この形態の石庖丁は、石庖丁の出土が顕著な下那珂遺跡、尾花A遺跡で出土しており、この他は西都市新立遺跡、都城市池島遺跡で出土している。

一見して分布は、宮崎県の県央部にまとまっているように見えるが、下那珂遺跡や尾花A遺跡では全出土量の10%にも満たない。これに対して新立遺跡では16点中4点がB類と類似する形態である。

また新別府下原遺跡でも類似した形態の石庖丁が出土している。石庖丁の石材は、本遺跡では砂岩と頁岩であるが、多くの石庖丁が出土している川南町内の遺跡では、ホルンフェルスが全体の84%を占めており、頁岩が15%、砂岩が1%となっている。

本遺跡周辺の樋田遺跡は砂岩製、新別府下原遺跡は頁岩製であり、川南町内の遺跡とは石材が異なる。本遺跡周辺の遺跡から出土する石器の石材は、砂岩と頁岩のものが多くことから、石器に使用する石材の選択の違いか、入手できる石材の違いが起因すると考えられる。(南)

5 向原中尾第1・2遺跡の歴史的評価

向原中尾第1・2遺跡では後期旧石器時代から弥生時代終末期にかけての遺構・遺物が確認され、この間における土地利用の変遷や石器石材の獲得と消費、石庖丁の石材と形態の検討から時代ごとの遺跡内外をめぐる営みの一旦を明らかにすることができた。遠隔地との交流の可能性についても今後検討していかねばならない。

さらに、赤色顔料については今後の分析の増加や研究の進展によって産地の推定から流通経路に至るまでの解明が期待されよう(第II章第6節参照)。

本遺跡の所在する寺迫地区周辺では先行する発掘調査事例に乏しいため、向原中尾第1・2遺跡の歴史的評価をするには時期尚早の段階である。

しかし、縄文時代早期の集石遺構と石斧埋納遺構、弥生時代終末期の竪穴建物跡は、断続的であるにせよ各時代において一定期間の間に生活を営んだこと

を如実に示している。

後期旧石器時代における五ヶ瀬川流域の流紋岩の入手や、弥生時代終末期における石庖丁にみる地域間交流が示すように、行動・交流の範囲は宮崎地域の北半全体に及んでいたものと思われる。

向原中尾第1・2遺跡は、後期旧石器時代・縄文時代早期・弥生時代終末期とも、拠点集落とはいえないが、立地条件の良さから各時代において人々が交わる場として機能していたものと位置づけられる。

今後は当地域の特質や社会変化の過程を捉える巨視的な視点と、出土遺物の比較検討から生業活動の展開を明らかにする微視的視点の両面から遺跡の性格を明らかにすることが必要となろう。(南・山本)

参考文献

- 近藤協編 1987「赤松遺跡・下水流遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第1集 東郷町教育委員会
- 長津宗重編 1990「新別府下原遺跡」『都農町文化財調査報告書』第3集 都農町教育委員会
- 谷口武範編 1991『樋田遺跡』東郷町教育委員会
- 緒方博文編 1994『百町原地区遺跡』日向市教育委員会
- 八木澤一郎 1994「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会
- 高橋誠編 1999「鶴野内中水流遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第16集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 松永幸寿 2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号 宮崎考古学会
- 甲斐貴充編 2002「蔵座村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第53集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 太川裕晴編 2003「ハッ山遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第7集 東郷町教育委員会
- 日高広人・柳田裕三 2003「宮崎県の集石遺構と炉穴」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会・宮崎考古学会
- 甲斐貴充編 2004「下那珂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第90集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 長津宗重 2004「日向における石庖丁の展開」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』愛媛大学法文学部
- 太川裕晴編 2007「仲野原遺跡」『日向市文化財調査報告書』日向市教育委員会
- 興沼慶一編 2007「赤坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第151集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 松元一浩編 2007「湯牟田遺跡(二次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第152集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 八木澤一郎 2009「集石遺構とその機能」『縄文時代の考古学』5 同成社
- 松林豊樹・竹田享志編 2011「尾花A遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第195集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 松田博幸・今塩屋毅行 2011「板平遺跡(第3・4次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 小船井順・今塩屋毅行・原口耕一郎・谷口めぐみ編 2011「内野々遺跡 内野々第2・第3遺跡 内野々第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第202集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 中田憲治編 2011「働女木遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第205集 宮崎県埋蔵文化財センター

第Ⅲ章 向原中尾第4遺跡

第1節 第1次調査、第2次調査の概要

1 第1次調査

平成20年11月17日から平成20年12月1日まで市道を挟んで西側部分で第1次調査を実施した。調査対象面積3,520㎡のうち190㎡の重機及び人力によるトレンチ調査を実施した。調査対象地は平坦面であり南西に向かって斜面が続いている。

調査の結果、調査対象面積の大部分は削平を受けており、また土層の堆積状況が良好な箇所についても遺物が散漫に分布するのみであることが判明した。これは造成に伴う地形の改変や、周辺の地形から調査対象地の北側の丘陵部分が遺跡の主体であると想定されることが要因として考えられる。以上の理由から第1次調査対象とした地区の残り3,330㎡は調査除外地として調査を終了した。

2 第2次調査

平成21年8月5日から平成21年8月31日まで第2次調査を実施した。調査対象面積6,250㎡のうち地権者の了解を得た60㎡について重機及び人力によるトレンチ調査を実施した。調査の対象地は、市道を挟んで東側に位置する東西に延びる尾根の北側斜面地及び台地の北西側斜面地、及び水田部分である。尾根の北側斜面では、一部見られない箇所はあるもののK-Ah層が確認でき、その下位の層から剥片が出土している。

この斜面地の北東側の谷部は水田が開削されているが、K-Ah層は見られないもののVI層から剥片が出土している。調査区の南東側は広大な台地となっており、その北西斜面では、K-Ah層及びV層の残りは部分的であったが、VI層以下は比較的残存状況がよく、やや平坦な箇所を中心にV層から縄文時代早期の土器片や旧石器時代の細石刃核・剥片が出土した。その他にも、K-Ah降灰以降のII層や表土からは石錘・弥生土器が出土した。

この調査では、遺構は検出できなかったが、V層（後期旧石器時代末～縄文時代早期）からVI層（後期旧石器時代A以降）の遺物包含層が台地北西側の斜面地に良好に残存していることが確認できた。

第2節 第3次調査の概要

1 第3次調査の経過

平成22年4月26日から平成22年12月28日（調査日数128日）まで、第2次調査の結果を受けて、調査を実施した。調査対象範囲は、南西に延びる尾根の北側斜面及び水田部分・台地の北西斜面地に加え、新たに鶏舎跡部分を加えられ面積は5,430㎡であった。調査前は調査区の北側から南側にかけては山林で、西側は開削された水田であった。

調査にあたり、調査区内を北西側から1区とし、6区まで任意に区画した。調査は、調査区内に残っていた枝葉、鶏舎跡のコンクリートを重機で除去することから始まった。その後、表土の除去を開始した。表土除去後の各調査区の様相は以下の通りである。

1区は調査区北西に位置し、調査区全体の中で最も標高の低い調査区である。水田開削による影響を多少受けてはいたものの、全調査区の中で土層の堆積状況は最も良好であった。2区は全体が斜面地であり、IV層が0.5～0.6m程と厚く堆積している。3区は南西から北西に向かって緩やかに傾斜している。4区は南西から北東に向かって傾斜している。5区南東側は調査区内で最も造成土が厚く盛られていた場所であり、攪乱も多く存在した。また、北東側は調査区の中でも最も傾斜の強い場所であった。6区は調査区が一番東に位置する。現状は台地の端部であったが、I層直下はVII層となっており堆積状態は良好とはいえず、遺物はI層上の造成土中から出土した。

【調査日誌抄】

平成22年

- | | |
|----------|------------------------------|
| 4月26日（月） | 現場事務所・駐車場への進入路の整地。 |
| 4月30日（金） | 仮設道路の設置。 |
| 5月6日（木） | 枝葉、コンクリートの除去。 |
| 5月11日（火） | 表土掘削。 |
| 5月17日（月） | 作業員雇用開始。1区掘削開始。 |
| 5月25日（火） | 3区にて陥し穴状遺構（SC1～4）をK-Ah上面で確認。 |

- 6月9日(水) 1区IV層中より礫群(S I 1)を検出。
A Tの堆積を確認。
- 6月11日(金) 1区VI層中より礫群(S I 2・S I 3)を検出。A T直下(VI層上)より礫群(S I 4)検出。
- 7月22日(木) 2区掘削開始。
- 8月24日(火) 1区調査終了。
- 9月3日(金) 3区II層より土坑(S C 5)検出。
- 9月22日(水) 5区III層より陥し穴状遺構(S C 6)を検出。
- 10月6日(水) 空中写真撮影終了
- 10月31日(日) 体験発掘
- 11月9日(火) 3区IV層中より礫群(S I 5)検出。
- 11月25日(木) 3区IV層中より陥し穴状遺構(S C 7)検出。
- 12月24日(金) 埋め戻し終了。
- 12月28日(火) 器材撤去。

2 整理作業の経過

整理作業は平成23年1月から埋蔵文化財センター内で開始し、水洗、注記、計測、接合、実測、製図を経て、平成24年2月に終了した。

石器は接合作業を行いながら、見た目、手触りを重視して、石材を分類した。

礫の整理は水洗、注記、計測、接合の各作業を実施した。計測は礫の法量、重量、石材を記録した。

第3節 調査の記録

1 調査の方法

調査の便宜上、第2次調査で出土した遺物については、第2次調査における基本層序で層位の注記を行っている。

本遺跡は丘陵地上に立地し、地形の主軸が国土座標の軸に対して斜めになり調査に支障を来す恐れがあったためグリッドは地形に沿って設定を行った。

掘削は表土除去を重機で行った後、IV層検出まで全面人力による掘削を行い、V層より下位は10×10mグリッドのうち1/4を掘削し、遺物が集中して出土した場所を中心に掘削範囲を広げて調査を行った。

出土遺物の取り上げに関してはトータルステーションで出土層位を記録し、取り上げを行った。

2 基本層序

基本層序を設定するにあたって、1区T38の北壁を土層観察用の壁面として利用した(第1図第3次調査)。土層は色調、土質によりI～VII層までの層に分層した。

また、本遺跡では、土層中にいくつかの火山灰が確認された(第III章第9節参照)。K-Ahは調査区全体に、A Tは1区の一部に純粋な堆積が見られ、その他の場所ではブロック状に含まれる層を確認している。

基本層序

I層：黒色土層(Hue 7.5YR 2/1)

粘質は弱く、締まりは強い。K-Ahが3～5mm程の粒子で含まれる。

遺物包含層

II層：橙色土層(Hue 7.5YR 6/8)

粘質は無い、砂質土で締まりは強い。

K-Ah

III層：黒褐色土層(Hue 5YR 2/1)

粘質は弱く締まりはやや強い。1～2mm程の橙色粒子が極少量まばらに含まれる。

縄文時代草創期・早期遺物包含層

IVa層：明褐色土層(Hue 7.5YR 5/6)

粘質はやや弱く、締まりはやや強い。2～3mm程の橙色粒子がまばらに全体的に含まれ、IVb層よりも淡い色調である。

後期旧石器時代遺構検出層・遺物包含層

IVb層：暗褐色土層(Hue 10YR 3/4)

粘質はやや弱く、締まりはやや強い。1～2mm程の赤い小石、白い小石が所々入り20cm程の大きな礫が含まれる場所が一部存在する。

後期旧石器時代遺構検出層・遺物包含層

V層：褐色土層(Hue 7.5YR 4/4)

粘質は無い、砂質土。締まりは普通。

1～2mm程の白色粒子

を含む。AT

VIa層：暗褐色土層 (Hue 7.5YR 3/3)

粘質、しまりは普通。1～2mm程の白色粒子を含む。VIa層とVIb層は色調が非常に似ているが、VIa層はVIb層に比べしまりが弱く軟らかい。

後期旧石器時代遺構検出層・遺物包含層

VIb層：明褐色土層 (Hue 7.5YR 5/6)

粘質は強く、締まりはやや強い。3～10cm程の礫を多く含む礫層である。

後期旧石器時代遺物包含層

VII層：褐色土層 (Hue 7.5YR 4/6)

粘質は非常に強く、締まりも強い。拳大の大きな礫が所々入る。

地山 (基盤層)



整理作業風景 1 (トレース作業)



整理作業風景 2 (版下作成作業)



教育普及活動 1 (発掘体験)



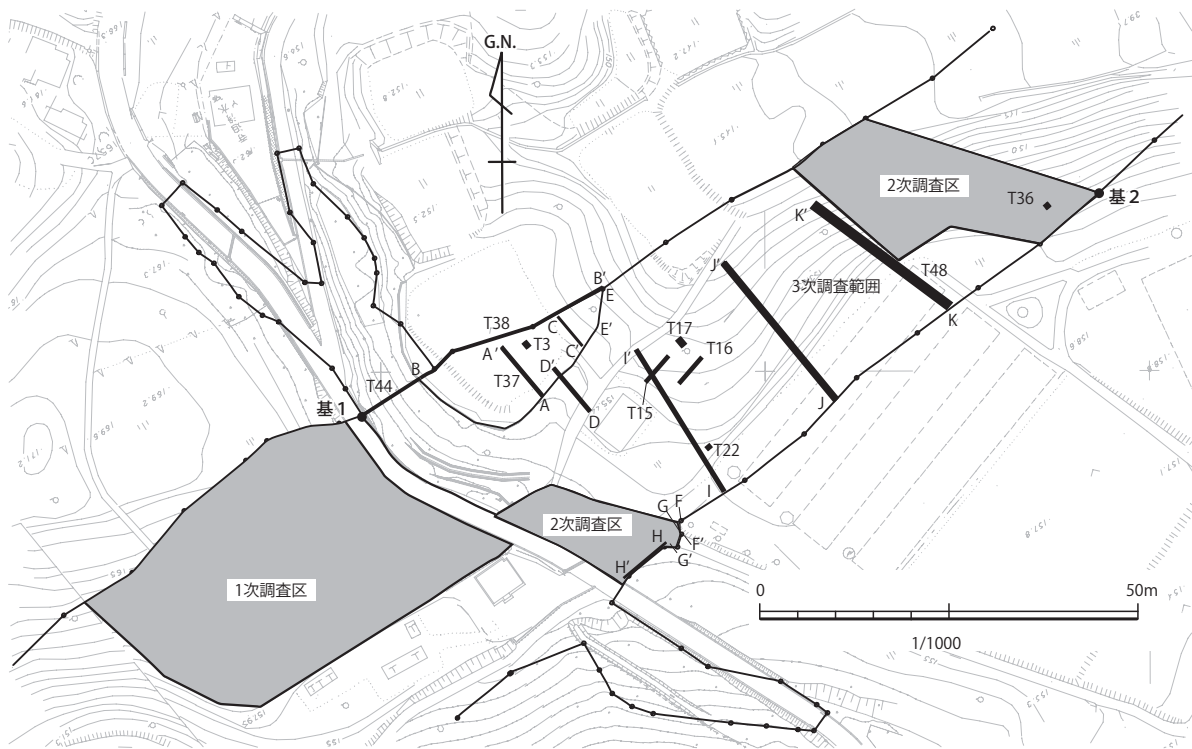
教育普及活動 2 (陥し穴状遺構説明風景)

第3次調査

第2次調査

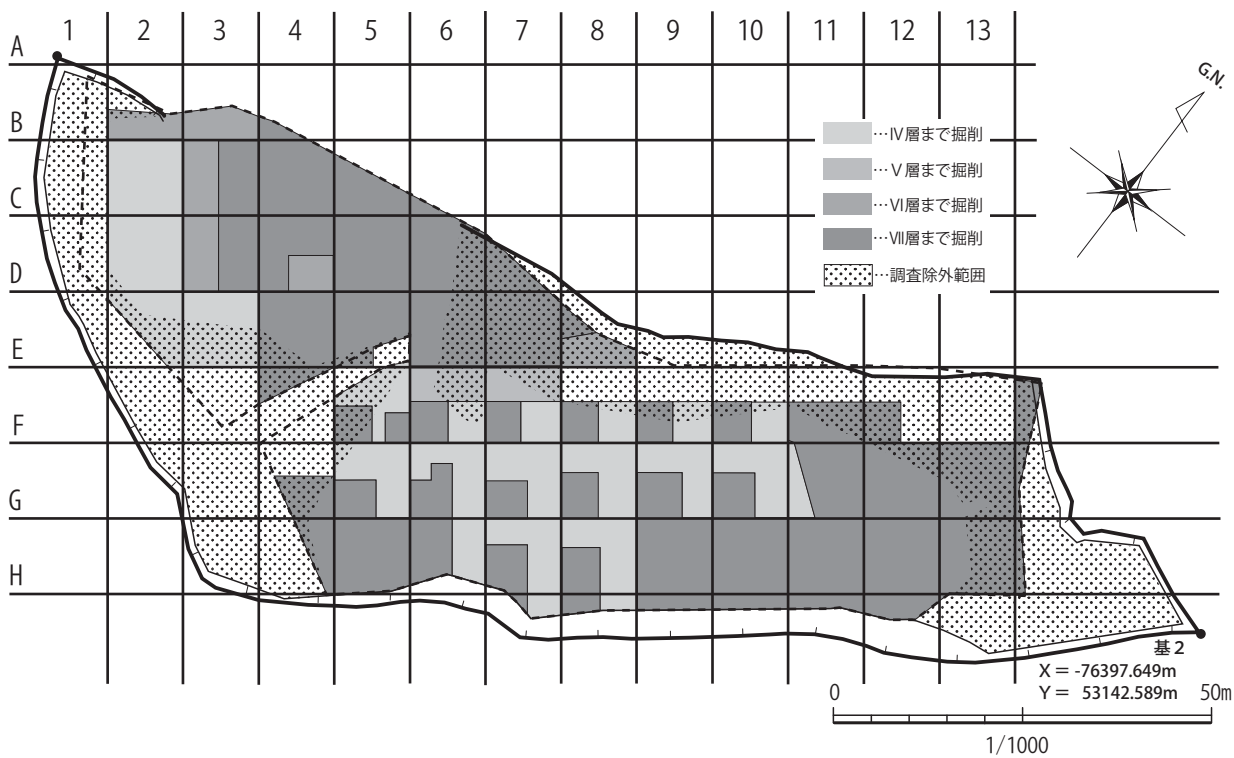
層番号	層名	層番号
	表土	I層
I層	黒色土層	II層
	黒色土層 (K-Ah) を含む層	III層
II層	鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah)	IV層
III層	黒褐色粘質土層 (縄文時代草創期・早期)	V層
IV a層	明褐色粘質土層 (後期旧石器時代)	VI層
IV b層	暗褐色粘質土層 (後期旧石器時代)	VII層
V層	始良 Tn 火山灰層 (AT)	VIII層
VI a層	暗褐色粘質土層 (後期旧石器時代)	
VI b層	明褐色粘質土層 (後期旧石器時代)	IX層
VII層	褐色粘質土層 (地山)	X層

第1図 向原中尾第4遺跡基本土層図



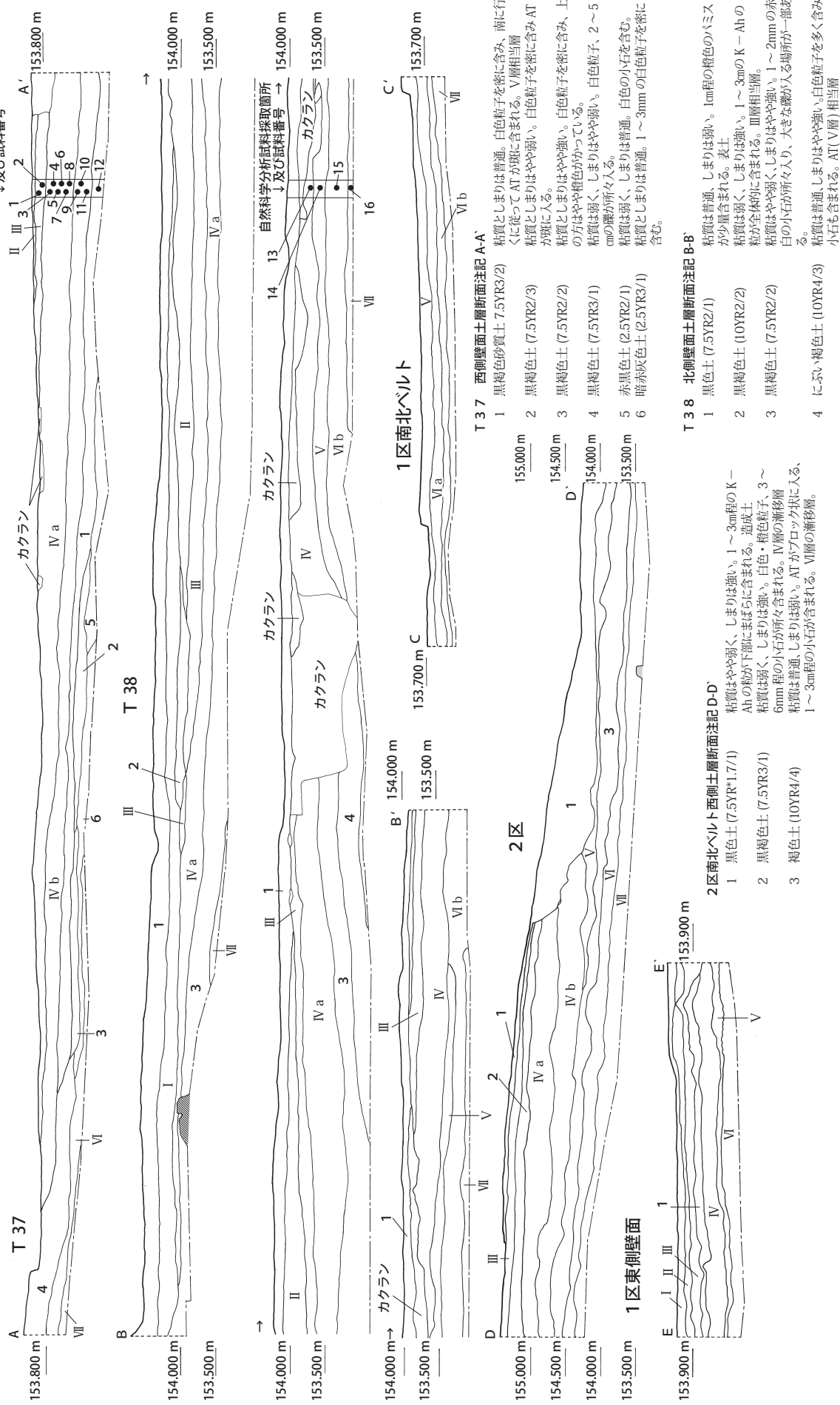
第2図 調査区と周辺地形図及びトレンチ配置図

基1
X = -76432.119m
Y = 52975.099m



第3図 向原中尾第4遺跡グリッド配置図及び掘削範囲図

自然科学分析試料採取箇所
↓及び試料番号



1区東側壁面注記 E-E
1 黒褐色土 (7.5YR3/1)

粘質は普通、しまりはやや強い。層上部は黒色土が混ざり、層中、層下部は黒褐色土が全体的に混ざる。III層からIV層への漸移層

2区南北ベルト西側土層断面注記 D-D'
1 黒色土 (7.5YR*1.7/1)
2 黒褐色土 (7.5YR3/1)
3 褐色土 (10YR4/4)

粘質はやや弱く、しまりは強い。1~3cm程のK-Ahの粘が下部にまばらに含まれる。造成土
粘質は弱く、しまりは強い。白色・褐色粒子、3~6mm程の小石が所々含まれる。IV層の漸移層
粘質は普通、しまりは弱い。ATがブロック状に入る。1~3cm程の小石が含まれる。VI層の漸移層。

T 38 北側壁面土層断面注記 B-B'
1 黒色土 (7.5YR2/1)
2 黒褐色土 (10YR2/2)
3 黒褐色土 (7.5YR2/2)
4 にぶい、褐色土 (10YR4/3)

粘質は普通、しまりは弱い。1cm程の橙色のハミスが少量含まれる。表土
粘質は弱く、しまりは強い。1~3cmのK-Ahの粘が全体的に含まれる。III層相当層。
粘質はやや弱く、しまりはやや強い。1~2mmの赤白の小石が所々入り、大きな礫が入る場所が一部ある。
粘質は普通、しまりはやや強い。白色粒子を多く含む。小石も含まれる。AT(V層)相当層

T 37 西側壁面土層断面注記 A-A'
1 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2)
2 黒褐色土 (7.5YR2/3)
3 黒褐色土 (7.5YR2/2)
4 黒褐色土 (7.5YR3/1)
5 赤黒色土 (2.5YR2/1)
6 暗赤吹色土 (2.5YR3/1)

粘質としまりは普通。白色粒子を密に含み、南に行くに従ってATが含まれる。V層相当層
粘質としまりはやや弱い。白色粒子を密に含みATが窺に入る。
粘質としまりはやや強い。白色粒子を密に含み、上の方はやや褐色がかっている。
粘質は弱く、しまりはやや強い。白色粒子、2~5cmの礫が所々入る。
粘質は弱く、しまりは普通。白色の小石を含む。
粘質としまりは普通。1~3mmの白色粒子を密に含む。

第4図 向原中尾第4遺跡土層断面図 (1)

向原中尾第4遺跡

第4節 後期旧石器時代の調査

1 時期の設定

後期旧石器時代の遺物は、IV a層～VI b層にかけて出土している。調査区内にはATを含む層が見られ、AT下位で遺物も出土していることからAT降灰以前を後期旧石器時代I期、AT降灰以降を後期旧石器時代II期として報告をおこなう。

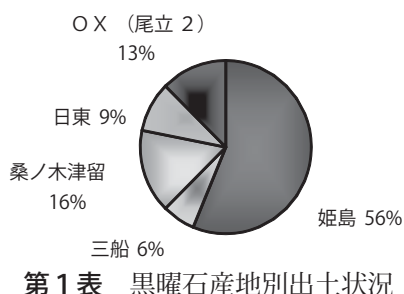
2 遺構に対する基本的な考え方

礫群

IV層以下から検出した周囲と比較して礫のまとまりが見られ、5個以上の構成礫があるもの、赤化した礫を含むものを礫群と認定した。記録は調査員による手測りによる実測を行っている。

3 石材の分類基準（第2表）

石器石材は色調、礫面の特徴、手触り、風化の状況などを重視し分類を行った。各石材の同定にあたっては、松本茂の協力を得て、橋本が決定した。黒曜石は、肉眼により観察される特徴をもとに産地分類を行った。分類の結果、黒曜石I類は姫島産、黒曜石II類は桑ノ木津留産、黒曜石III類は大口日東産、黒曜石IV類は三船産、黒曜石V類はOX（尾立第2）とした。



石材名	小分類	略称	石器石材の特徴
流紋岩			白色に風化し、流離構造が観察されるものもある。風化にはツヤがあるもの、粉を吹くもの等バリエーションがみられる。新鮮面は黒色緻密。
ホルンフェルス		Hol	黒色でツヤがあるものと灰白色斑がまざるものがある。礫面は滑らかである。風化面が黄色で、粉を吹いたかのような状態になっているもの。風化面が灰色あるいは白色であり、粉を吹いたかのような状態になっているもの。
凝灰岩		Tu	表面はざらついていて黄褐色を呈し、1mm～5mm大の粒を含む。
安山岩		An	手触りがザラザラとする。青灰色に風化するガラス質の安山岩。
頁岩		SH	黒灰色を中心とし、薄い層状に剥離する。
チャート		Ch	青、白、赤等カラーバリエーションが多い。無光沢のものも存在する。
水晶			無色透明で光沢がある。石英の中でも特に透明度が高いもの。
砂岩		Sn	黄褐色から黄土色を呈し、肉眼で砂粒が確認できるもの。青灰色を呈する。礫面は滑らかで重量がある。
尾鈴山溶結凝灰岩		Os	新鮮面は灰白色を呈し、白色に風化する。

黒曜石	I類	Ob ①	特徴	
			産地	特徴
黒曜石	II類	Ob ②	透過性が高く、銚色を呈する。わずかに白色の不純物や気泡を含むものもある。(人吉桑ノ木津留産)	透過性が高く、銚色を呈する。わずかに白色の不純物や気泡を含むものもある。(人吉桑ノ木津留産)
	III類	Ob ③	黒色で透過性が低いもの、黄白色の不純物を多く含む。薄い剥片状のものは透過性を持つ。(大口日東産)	黒色で透過性が低いもの、黄白色の不純物を多く含む。薄い剥片状のものは透過性を持つ。(大口日東産)
	IV類	Ob ④	透過性が高く、僅かに茶色を帯びた黒色を呈する。1mm以下の黄白色の不純物を疎らに含む。(三船産)	透過性が高く、僅かに茶色を帯びた黒色を呈する。1mm以下の黄白色の不純物を疎らに含む。(三船産)
	V類	Ob ⑤	青みがかつた黒褐色を呈す。剥離面は磨りガラス状で透過性が低い。礫面はクレーター状の細かな凹凸をもつ。(OX)	青みがかつた黒褐色を呈す。剥離面は磨りガラス状で透過性が低い。礫面はクレーター状の細かな凹凸をもつ。(OX)

第2表 石器石材分類表

第5節 後期旧石器時代I期の遺構と遺物

1 調査方法（第3図）

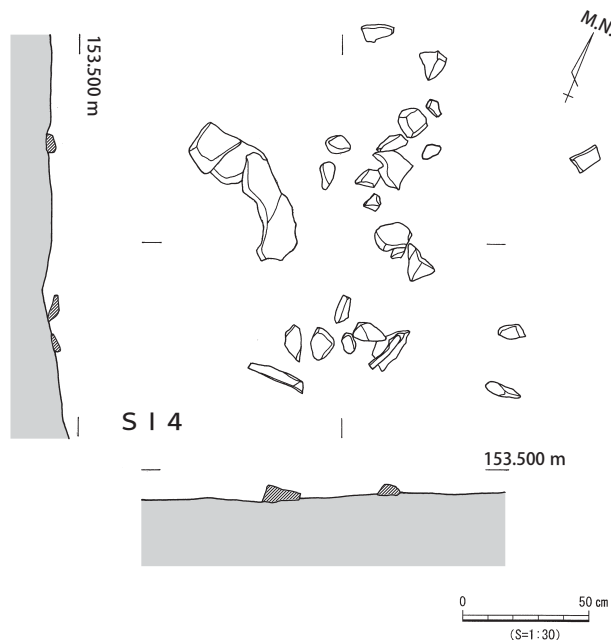
I期とした石器群はV層(AT) 下位より検出した石器である。第3節で触れたように、V層下の調査はATの堆積が明確でなかった3区～5区に関しては大グリッドの内4分の1の小グリッドを掘削する方法で調査を行い、ATの堆積が面的に見られた1区に関してはAT下位は全てVII層まで掘削を行った。

2 遺構

礫群（第6・7図）

SI 4

1区VI a層より礫群を1基検出した。SI 4はV層直下より礫の頭が検出され、礫の設置面はVI層であった。すべてが尾鈴山溶結凝灰岩で構成され、そのほとんどの礫面が赤化していた。礫は0.1m～0.4mの大きさで、他の礫群の礫よりも大きい礫で構成されている。



第6図 後期旧石器時代I期礫群実測図

礫群名	出土位置	礫範囲 (m)	石材	赤化状況	黒色付着物	礫の密度	総重量 (kg)	総個数 (個)	接合状況
SI 4	1区 V層下	1.02 × 1.36	尾鈴山溶結凝灰岩	部分的に赤化した礫が多い	多数の礫に黒色付着物有り	普通	21.9	26	3点接合

第3表 後期旧石器時代I期礫群観察表

3 遺物出土分布状況 (第8～10図)

本遺跡における後期旧石器時代I期における出土遺物の半数は、剥片などの素材となる石器であり、製品はあまり出土していない。そのため、器種ごとの分布図では広がりに変化が現れにくいため、石材ごとの分布による変化を掲載し比較検討を行った。

遺物の出土状況を見てみると、1区と3区に遺物が集中している。これは、AT下位の層を面的に調査した場所(1区)と、25パーセントの掘削を行った場所(3～5区)との差であるようにも考えられる。しかし、先にも述べた様にAT下位の25パーセントの掘削を行った箇所は、遺物の出土があった場合、周囲掘削の範囲を広げた調査を行っている。そのことから考えても、1区と3区に遺物が集中する状況は調査範囲によるものではなく、本来の遺物の分布状況によるものである。

この分布図から、当遺跡における後期旧石器時代I期の主体を占める石材はチャート、頁岩、ホルンフェルスであることがわかる。その中でも、頁岩は他の石材とは異なり剥片だけでなく、製品や石核などにも広く用いられている。それに対して、黒曜石、凝灰岩、水晶、尾鈴山溶結凝灰岩などは少数の出土であり、その内容は剥片やチップなどが中心で、製品はほとんど見られない。

4 出土遺物 (第11・12図)

後期旧石器時代I期の石器は101点出土し、器種はナイフ形石器やスクレイパーなどの製品が9点で、その他の遺物は剥片や石核などの素材となる石器が多くを占める。

ナイフ形石器 (第11図1・2)

2点出土し、1は1区のV層下部からVI層上部の間で出土した頁岩製の二側縁加工の背面上部から下部にかけて対向調整の見られる小型のナイフ形石器である。基部は右側面からの丁寧な剥離により成形がされている。2は3区のV層相当層から出土した頁岩製の小型のナイフ形石器である。1に比べると、幅広の基部には礫面が広く残る。

スクレイパー (第11図3・4)

1区V層下VI a層上と3区V層より2点出土した。3は、凝灰岩製で左側面に薄い刃部をつけている。4は頁岩製で、左側面に刃部が形成される。末端部にも側縁からの剥離による厚めの刃部が形成される。

石刃 (第11図5～7)

1区D5グリッドより3点出土した。5・6は頁岩製、7はホルンフェルス製である。5は背面に頭部調整がされている。3点とも、背面と腹面の剥離が同一方向から施されている。

微細剥離剥片 (第11図8)

1区D5グリッドVI層より1点出土。頁岩製で、左側縁から末端部にかけて微細な剥離が見られる。

石核 (第11図9～12)

1区と3区より4点出土。9と11は頁岩製、2点とも上方と下方からの剥離が多数行われている。10と12は流紋岩製。10は背面のみの剥離だが、不定方向からの剥離が多数施されているが、腹面には剥離が施されておらず、礫面が広く残る。12は背面と腹面に剥離が施され、両面とも不定方向からの剥離が多数施されている。残核は厚みを帯びた菱形となっている。

接合資料 (第12図13・14)

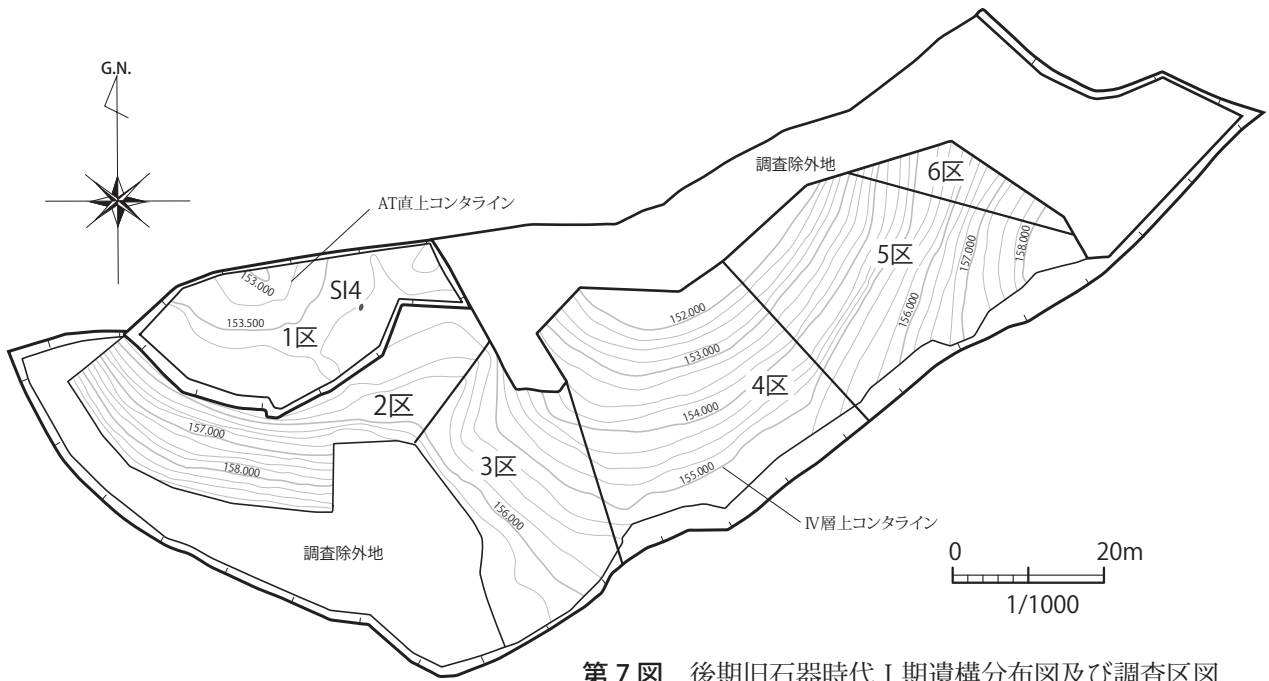
I期での唯一の接合資料であり、1区より出土した水晶製の2点(13・14)の接合である。上からの打撃による剥離を施されている。

剥片 (第12図15～20)

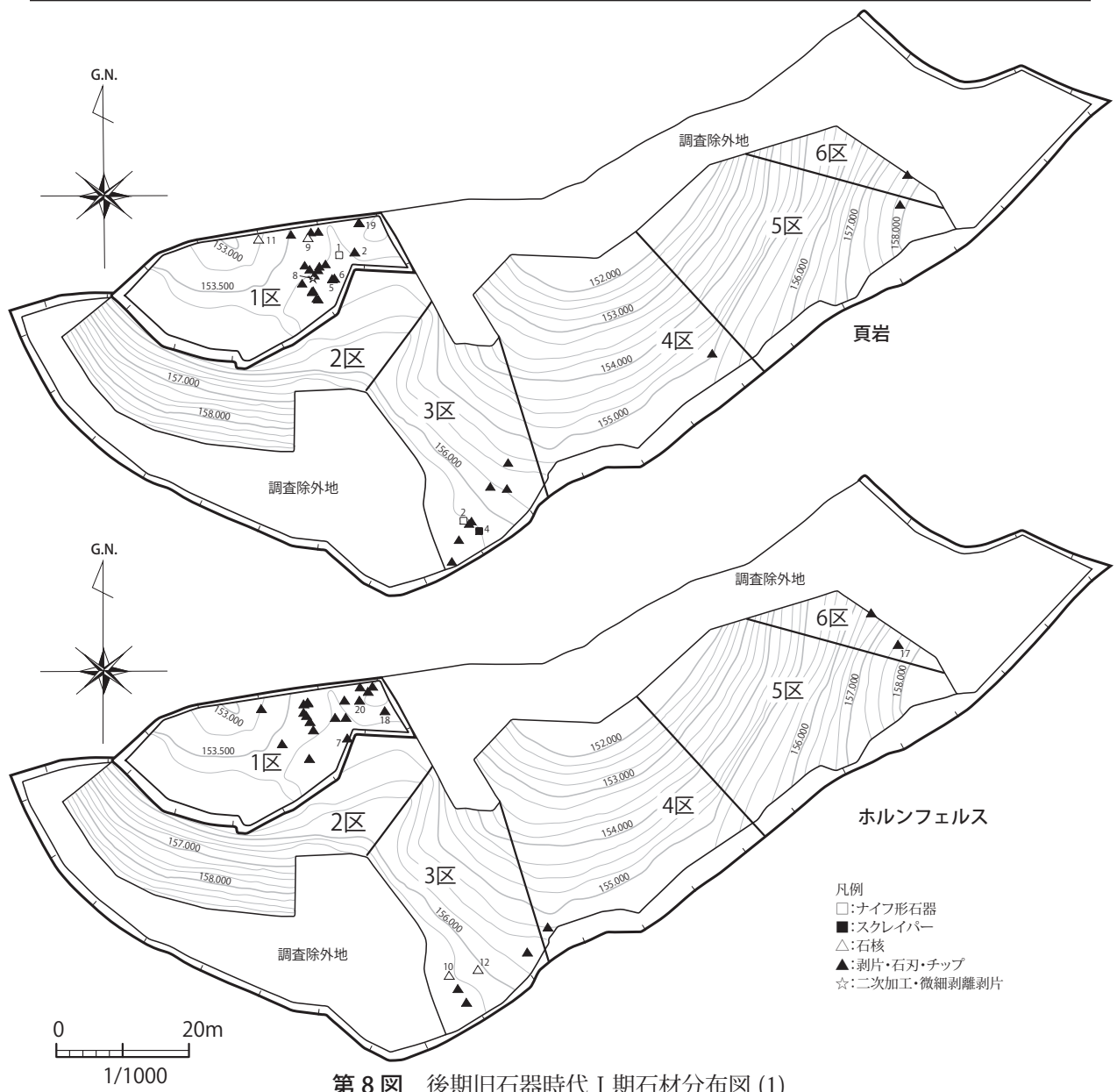
1区、3区、6区より出土した6点を掲載。15・16は幅広剥片であり、16は背面に広く礫面を持つ。17～20は縦長剥片であり、17は背面の上方からの剥離が多数施されている。20はホルンフェルス製の大きな剥片で、背面は不定方向からの多数の剥離が行われる。右側面上部から下部にかけては礫面が残り、腹面には剥離面が広く残る。

敲石 (第12図21～25)

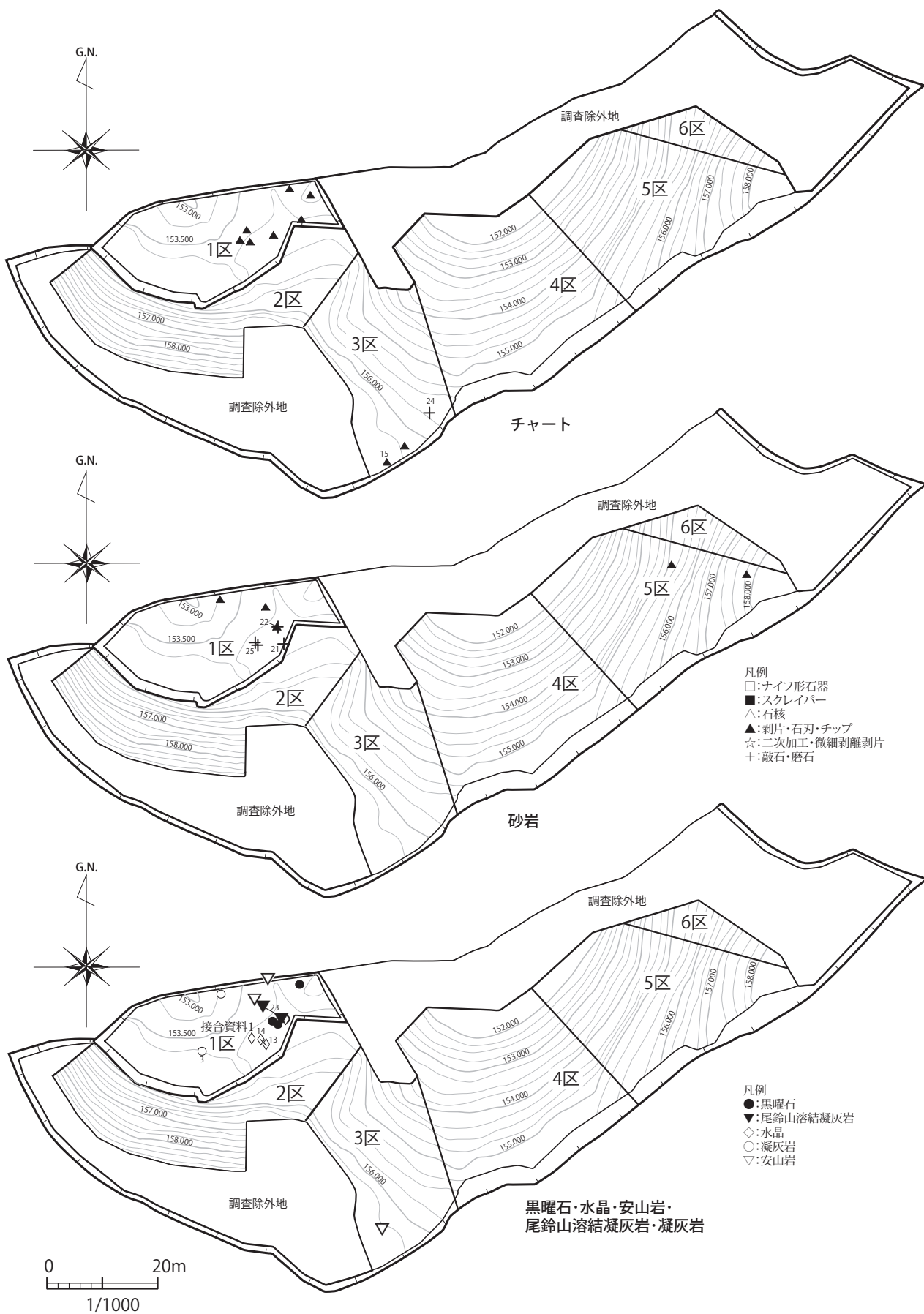
1区と3区から6点出土し、その素材となった礫の形態としては棒状礫が多い。24は3区から出土し、それ以外は1区から出土している。また、24はチャート製で、VI層下部からの出土である。24は地山であるVII層に非常に近い位置から出土しており、明確な敲打痕は不明瞭であるが、使用の痕跡も考えられるため掲載した。21、23、25は砂岩製である。21は、上端と下端に敲打痕が見られると共に、表面中央に窪みがある。そのことから、凹石の可能性も考えられる。23は尾鈴山溶結凝灰岩の円礫で、中央部に敲打痕が広く見られ、下端部にも敲打痕が見られる。また、後期旧石器時代I期における尾鈴山溶結凝灰岩製の石器はこの23の1点のみである。



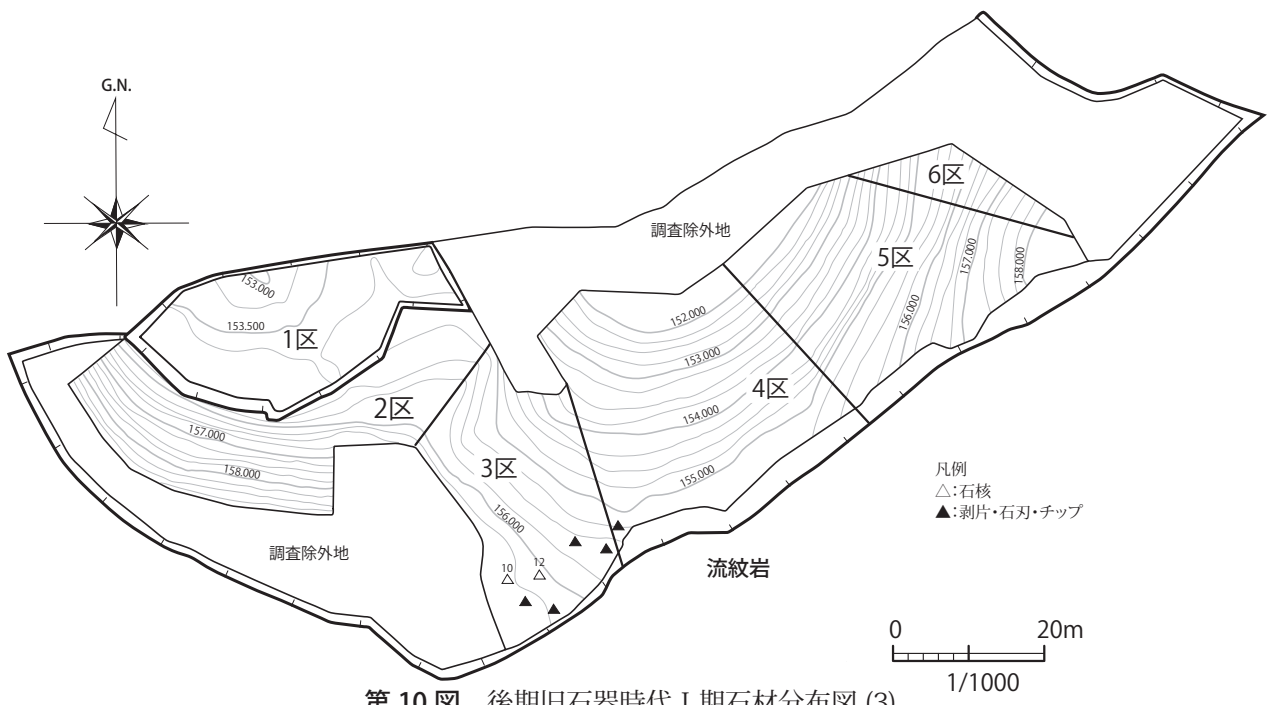
第7図 後期旧石器時代I期遺構分布図及び調査区図



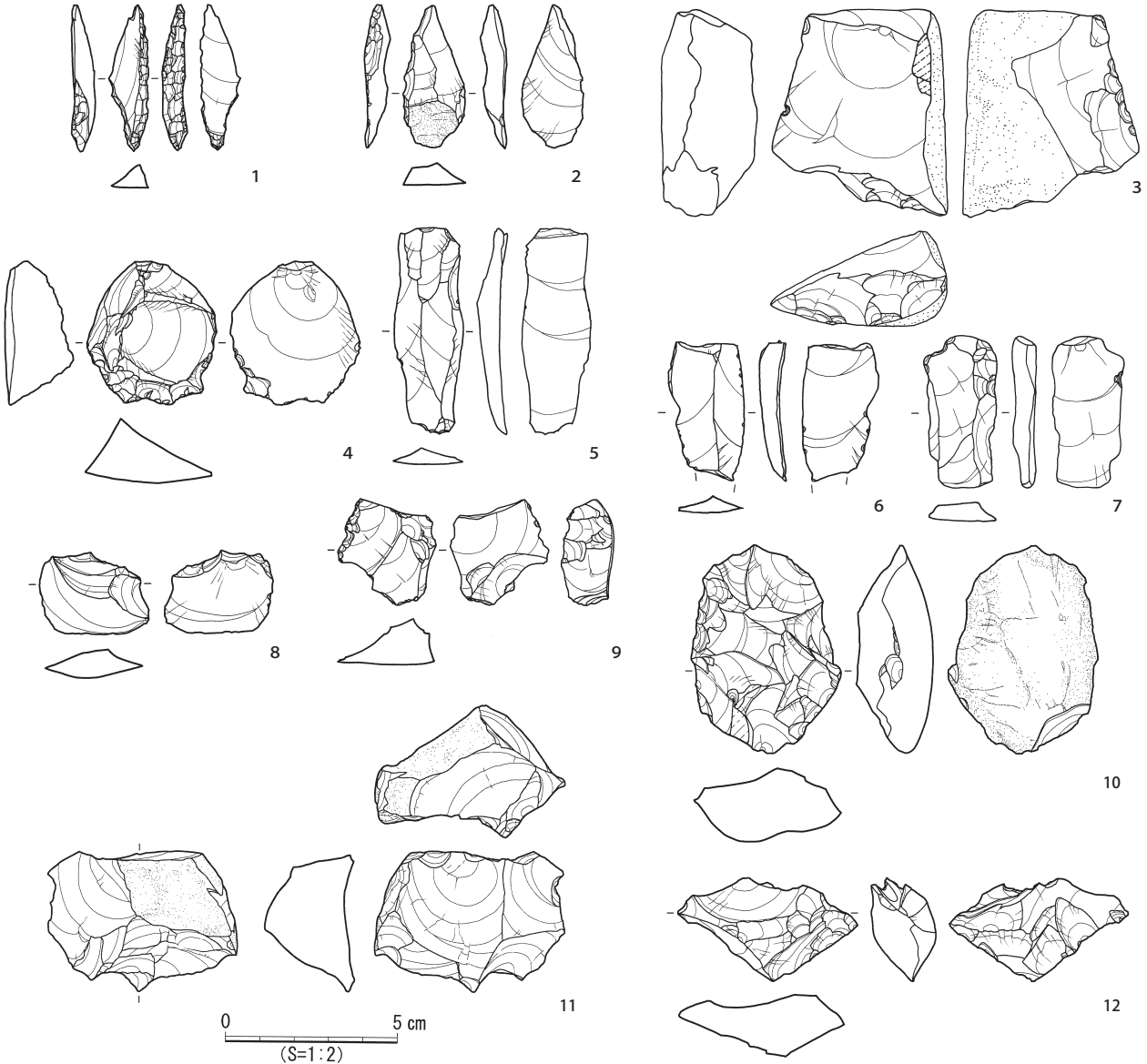
第8図 後期旧石器時代I期石材分布図(1)



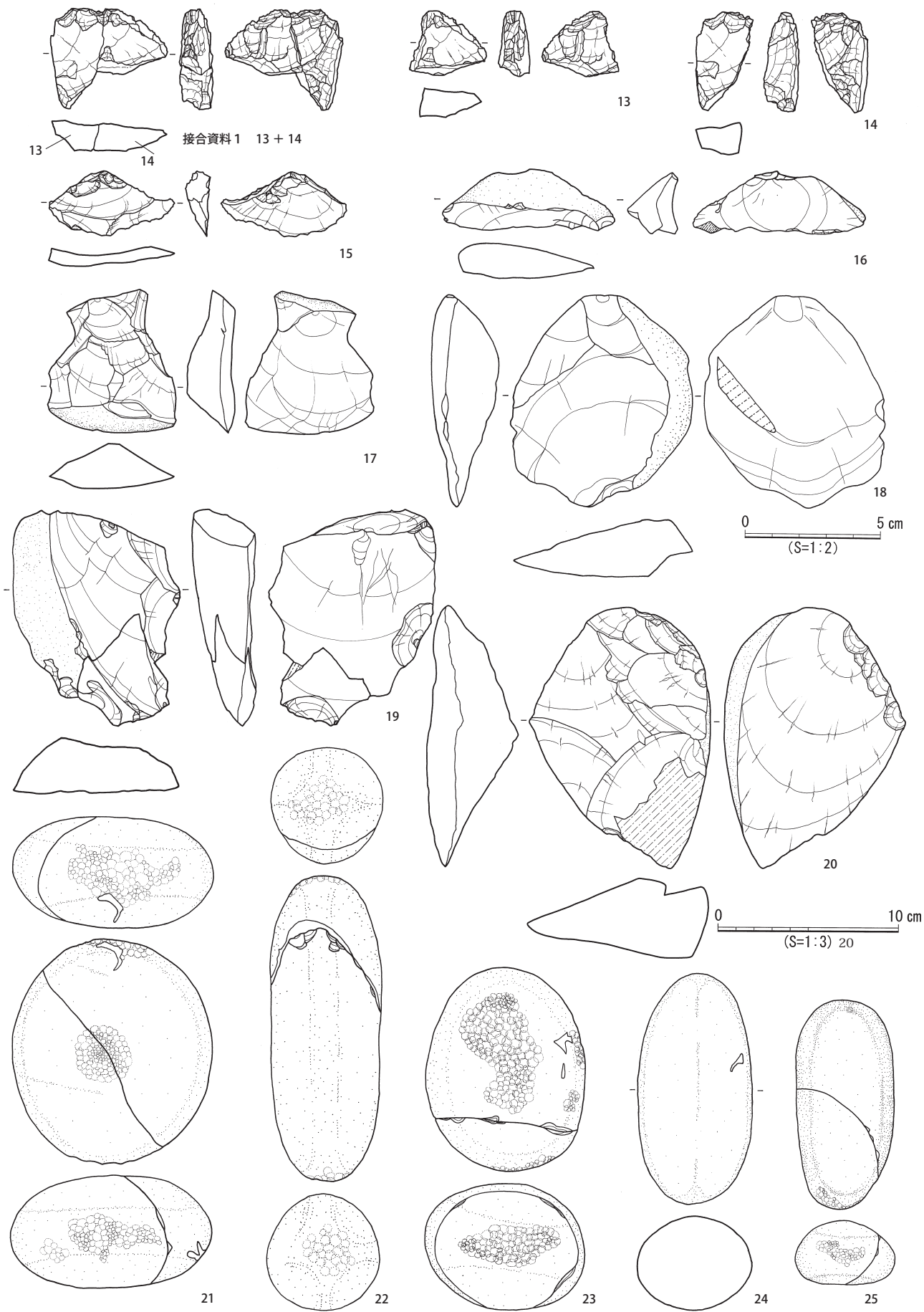
第9図 後期旧石器時代I期石材分布図(2)



第10図 後期旧石器時代I期石材分布図(3)



第11図 後期旧石器時代I期石器実測図(1)



第12図 後期旧石器時代I期石器実測図(2)

第6節 後期旧石器時代Ⅱ期の遺構と遺物

Ⅱ期とした石器群はA T降灰以降のⅣa層、Ⅳb層より検出した遺構及び出土した石器である。Ⅱ期に当たるⅣ層は、ほぼ全面調査をおこなっている。

1 遺構 (第13・14・15図)

Ⅳa層より礫群を4基、土坑を2基検出した。

礫群 (第13・14図)

Ⅳa層より検出した。そのうち1区からは3基、3区からは1基を検出した。礫群実測図は平面図と垂直分布図で示している。垂直分布図は礫の下端と長さを表している。

S11

1区北側より検出。礫は10cm～20cm程の尾鈴山溶結凝灰岩で、全体的に赤化しており破碎礫がほとんどであった。

S12

1区東側より検出。礫は10cm～20cm程の全体的に赤化した尾鈴山溶結凝灰岩で、破碎礫がほとんどであった。

S13

1区東側より検出。礫は10cm～20cm程の全体的に赤化した尾鈴山溶結凝灰岩で、破碎礫がほとんどであった。

S15

3区北側より検出。礫は3cm～8cm程の小さな礫で構成されており、礫は全体的に赤化した尾鈴山溶結凝灰岩であり、一部には黒色顔料が付着する礫も見られる。

土坑 (第13・15図)

3区でSC8、5区でSC10の計2基を検出した。両土坑からも杭の跡は検出できず、埋土は陥し穴状遺構よりも軟らかい特徴を持つ。

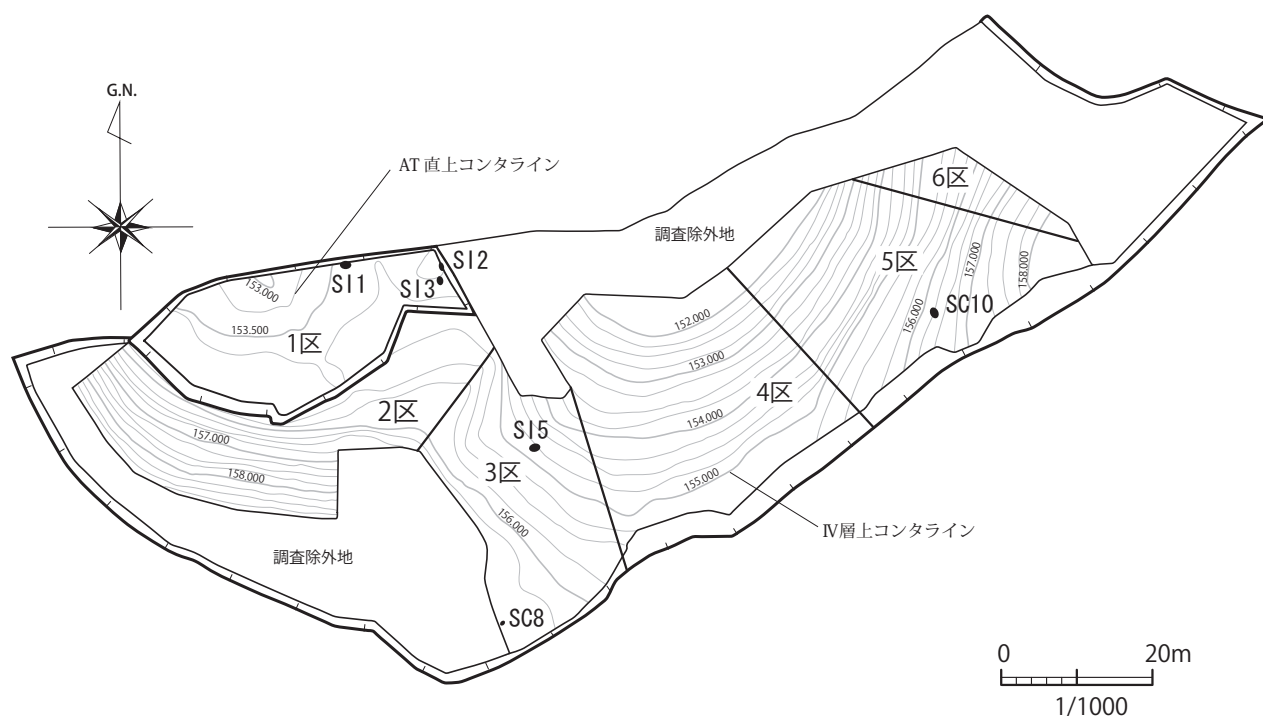
SC8は3区Ⅳ層上面で検出した楕円形プランの土坑で直径は0.68mで、埋土はやや固い。

SC10は5区Ⅳ層上面で検出した円形プランの土坑で直径は0.78mである。

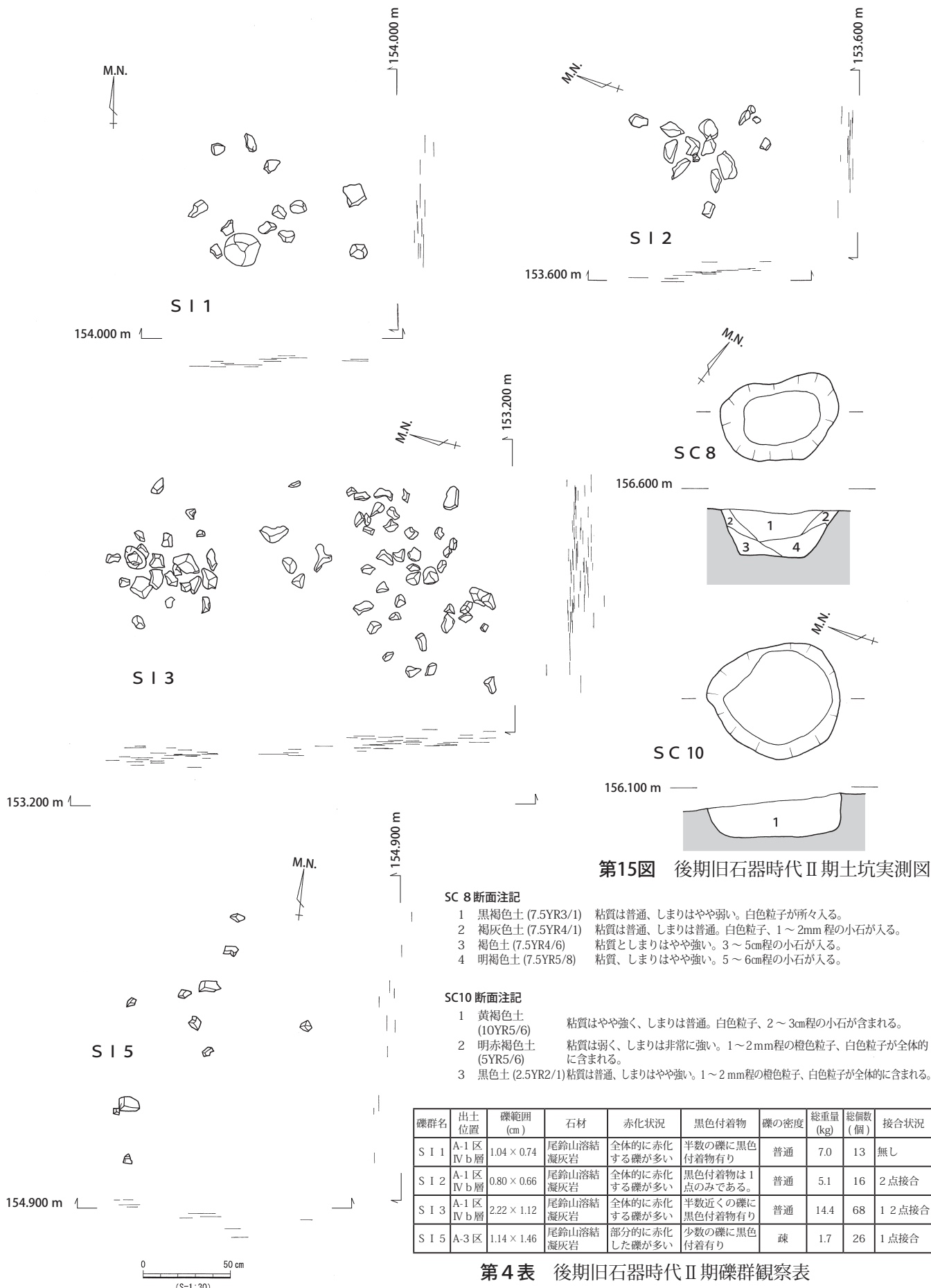
検出した土坑の直径は1m以下であり、陥し穴状遺構と比べるとプランも小さい特徴を持つ。

2 遺物出土分布状況 (第16図)

本遺跡における後期旧石器時代Ⅱ期における出土遺物の内容は、後期旧石器時代Ⅰ期と同様剥片などの素材となる石器が中心であり、製品はあまり出土していない。遺物は、調査区の中で土層の堆積が比較的安定した1区と斜面地部分の3区に集中する。出土数の多い石材としては、頁岩・流紋岩・ホルンフェルス・チャートなどが多く出土している。その中でも、頁岩と流紋岩は剥片だけでなく製品としても多く用いられている。それに対して、黒曜石・尾鈴山溶結凝灰岩・水晶・凝灰岩・安山岩などは少数の出土であり、その内容は剥片やチップなどが中心であり、製品としてはあまり用いられていない。そのことから、当遺跡の中で製品に用いられた石材についてはある程度の選別がされていた可能性が考えられる。



第13図 後期旧石器時代Ⅱ期遺構分布図



第15図 後期旧石器時代Ⅱ期土坑実測図

SC 8 断面注記

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘質は普通、しまりはやや弱い。白色粒子が所々入る。
- 2 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘質は普通、しまりは普通。白色粒子、1~2mm程の小石が入る。
- 3 褐色土 (7.5YR4/6) 粘質としまりはやや強い。3~5cm程の小石が入る。
- 4 明褐色土 (7.5YR5/8) 粘質、しまりはやや強い。5~6cm程の小石が入る。

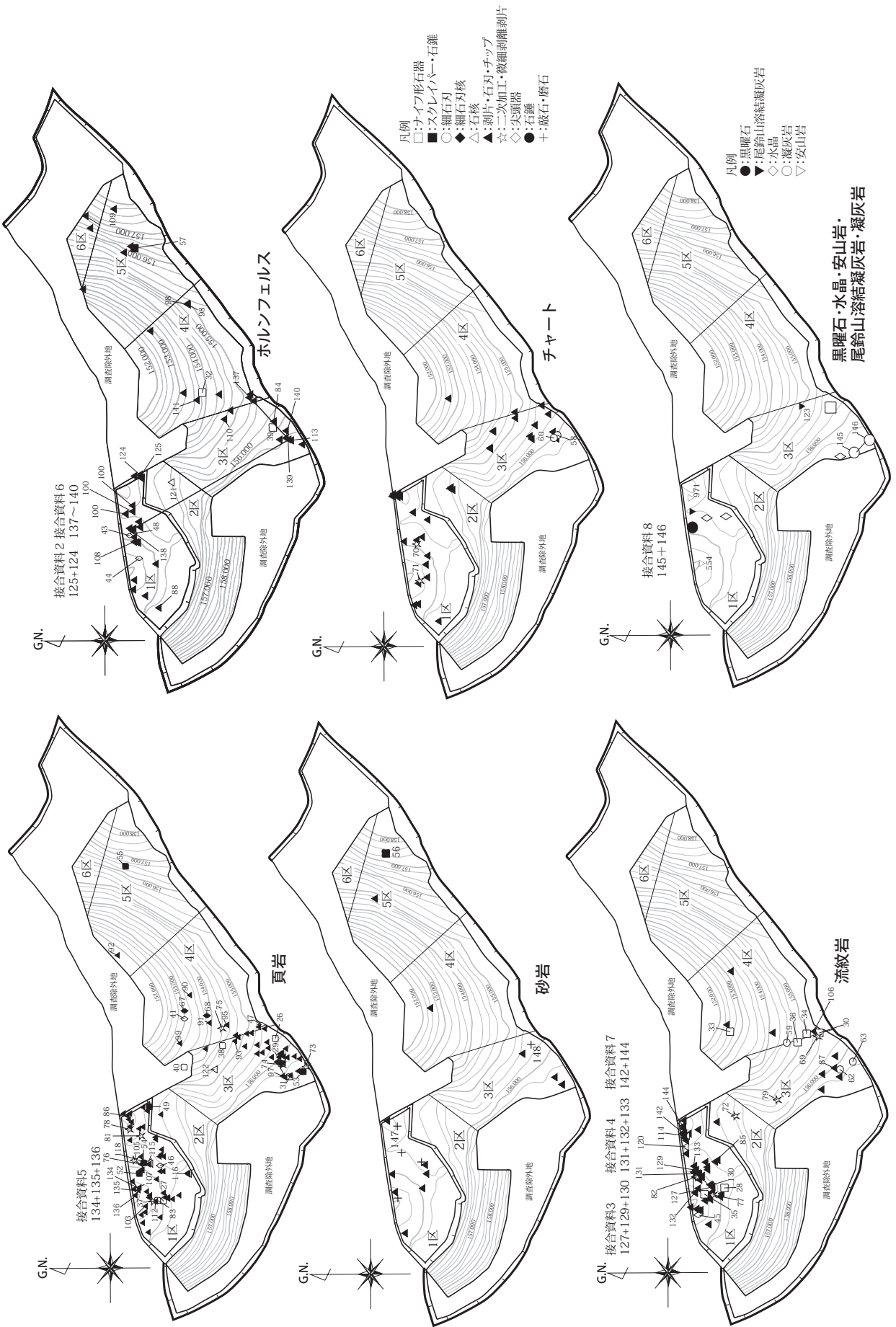
SC10 断面注記

- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 粘質はやや強く、しまりは普通。白色粒子、2~3cm程の小石が含まれる。
- 2 明赤褐色土 (5YR5/6) 粘質は弱く、しまりは非常に強い。1~2mm程の橙色粒子、白色粒子が全体的に含まれる。
- 3 黒色土 (2.5YR2/1) 粘質は普通、しまりはやや強い。1~2mm程の橙色粒子、白色粒子が全体的に含まれる。

礫群名	出土位置	礫範囲 (cm)	石材	赤化状況	黒色付着物	礫の密度	総重量 (kg)	総個数 (個)	接合状況
S 1 1	A-1区 IV b層	1.04 × 0.74	尾鈴山溶結凝灰岩	全体的に赤化する礫が多い	半数の礫に黒色付着物有り	普通	7.0	13	無し
S 1 2	A-1区 IV b層	0.80 × 0.66	尾鈴山溶結凝灰岩	全体的に赤化する礫が多い	黒色付着物は1点のみである。	普通	5.1	16	2点接合
S 1 3	A-1区 IV b層	2.22 × 1.12	尾鈴山溶結凝灰岩	全体的に赤化する礫が多い	半数近くの礫に黒色付着物有り	普通	14.4	68	1 2点接合
S 1 5	A-3区	1.14 × 1.46	尾鈴山溶結凝灰岩	部分的に赤化した礫が多い	少数の礫に黒色付着有り	疎	1.7	26	1点接合

第4表 後期旧石器時代Ⅱ期礫群観察表

第14図 後期旧石器時代Ⅱ期礫群実測図



第 16 図 後期旧石器時代Ⅱ期石材分布図

3 出土遺物（Ⅱ期・Ⅲ期）（第17～23図）

後期旧石器時代Ⅱ期の石器は330点出土し、131点を掲載した。石器の内容は、ナイフ形石器や剥片尖頭器、スクレイパー、細石刃、石錐などの製品が42点でその他は剥片や石核などの素材が多くを占める。また、細石刃、細石刃核については、基本層序Ⅲ層下部からⅣ層上部で出土している。このことから、Ⅳ層中には後期旧石器時代Ⅱ期とその後続の時期が混在していると考えられる。そこで、細石刃、細石刃核を後期旧石器時代Ⅲ期とし後期旧石器時代Ⅱ期の石器と併せて掲載した。

ナイフ形石器（第17図26～40）

14点出土した。34・37はⅢ層上からの出土であるため、原位置は保たれていない。26～28、31・32は長軸に対して斜軸の刃部を持ついわゆる狸谷型である。

剥片尖頭器（第17図41～44・47・48）

6点出土した。41はⅢ層の出土であり、原位置を保っていないが後期旧石器時代の遺物であるため掲載した。

角錐状石器（第17図45・46）

1区より2点出土した。45は流紋岩製である。46は頁岩製で、基部が欠損後、新たな剥離を行った形跡が残る。

スクレイパー（第17・18図49～54・56・57）

1区、3区、5区より8点出土した。頁岩と流紋岩製が大半を占めるが、56は砂岩製、57はホルンフェルス製の礫素材を用い、右側面に刃部を持つ類似した形である。

石錐（第18図55）

5区より1点出土した。石器の形状と、Ⅳ層に近いⅢ層下部からの出土であるため旧石器として報告した。両側縁に細かな剥離を施し、錐部を成形している。

細石刃（第18図58～64）

1区、3区から7点出土した。石材はチャートと流紋岩で、細石刃核と接合したものはなかった。一部分欠損したものが多くあったが、64は完形である。

細石刃核（第18図65～68）

1区、3区、4区から4点出土した。65～67の残核形は円錐形である。68は頁岩製の船底形状の残核形を持つ。

二次加工剥片（第19図69～83）

1区、3区、4区より出土した15点を掲載。石材は流紋岩、頁岩、チャートである。81は左側縁に細かな剥離を施している。大半のものは、側縁から中央に向かう二次加工が施されている。

石刃（第19図84～96）

1区、3～5区より13点出土した。石材は頁岩、流紋岩、ホルンフェルスである。背面と腹面の剥離が同一方向から施されるものと、背面と腹面が90度異なる方向から剥離が施されたものの2つが見られる。93は背面と腹面の剥離が同一方向から施され、背面と腹面の左側に微細剥離が施されている。

剥片（第19・20図97～113）

1区、3～5区から出土した22点を掲載している。石材はホルンフェルス、チャート、頁岩、流紋岩である。97～109は2点もしくは、3点の剥片の接合がされているが1点の遺物として掲載する。各剥片の詳細については、第7表を参照。

石核（第21図114～123・125）

1区、2区、3区から出土した11点を掲載している。石材は流紋岩、頁岩、ホルンフェルス、尾鈴山溶結凝灰岩である。大半が多方向から多数の剥離を不規則に行っている。122は上部と下部の剥離のみで、中央部分は礫面が残る縦長の石核である。121と123は、腹面に礫面を残した剥離が施されている。

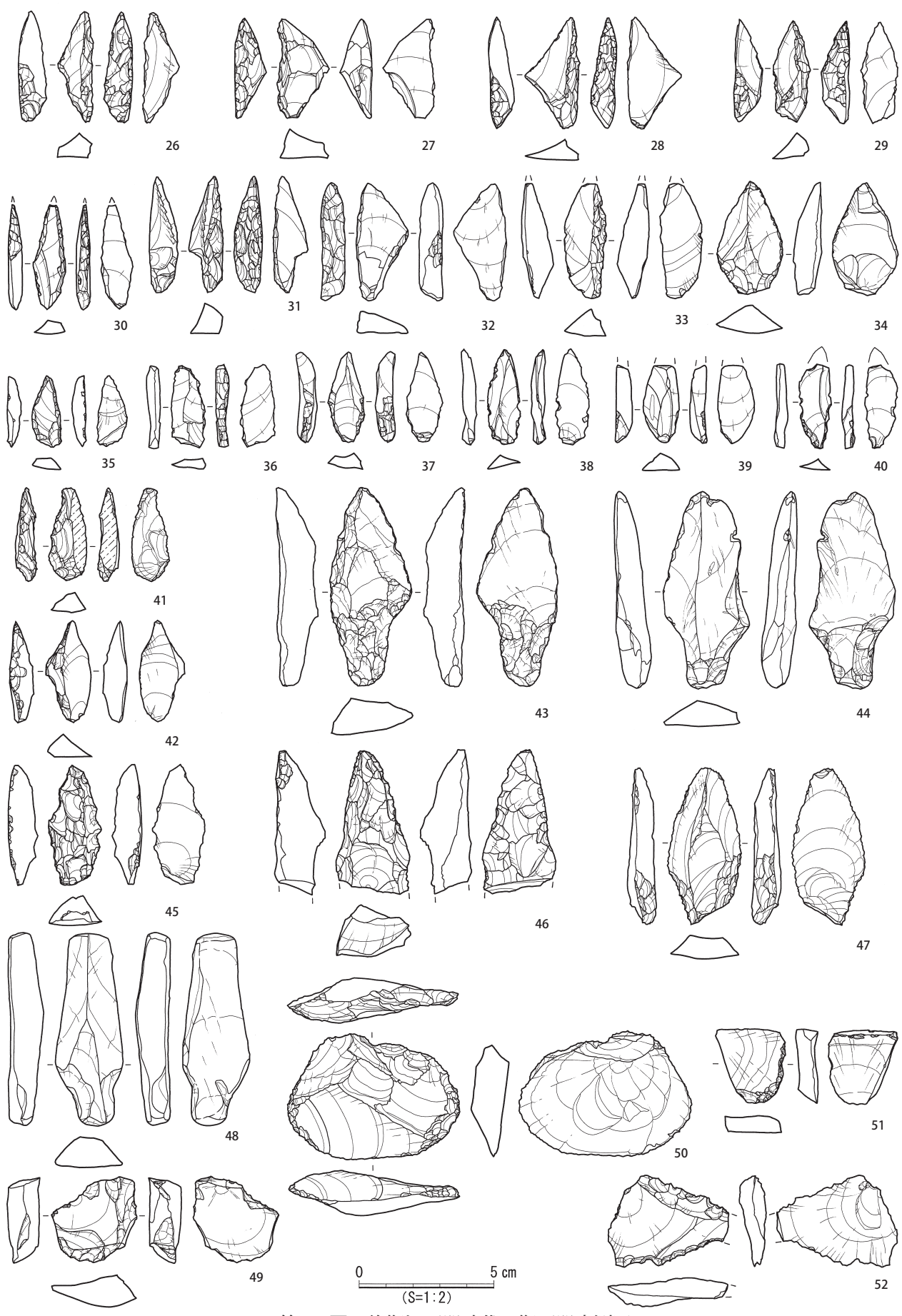
接合資料（第22図124～146）

7点の接合資料を掲載している。

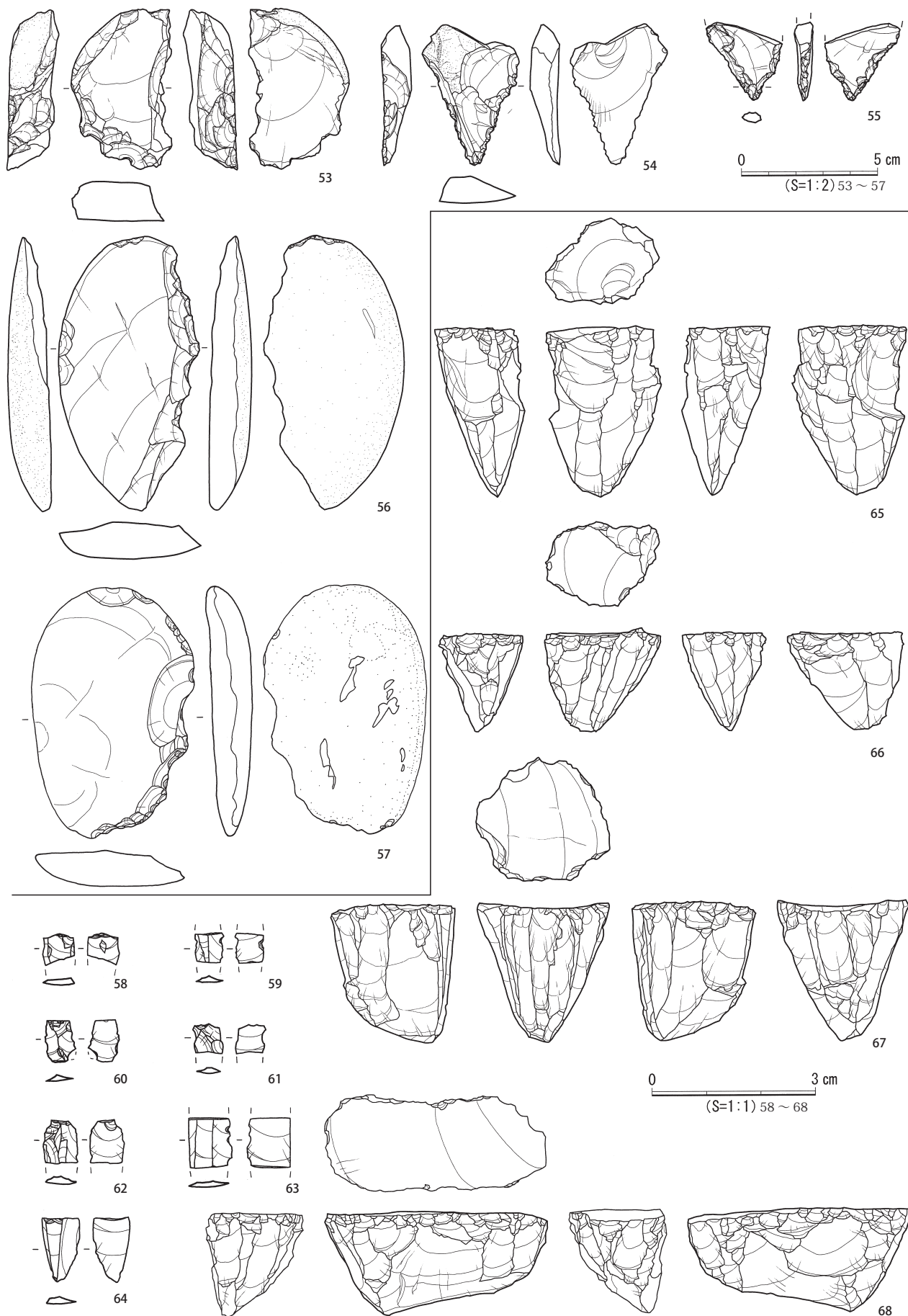
接合資料2はホルンフェルス2点（石核、剥片）の接合。125の腹面は礫面を残し、背面は上部方向からの多数の剥離が施されており、124も上部方向からの打撃による剥離によって剥がされたものと考えられる。接合資料3は5点の流紋岩の剥片（126～130）の接合で、上部からの打撃による剥離が行われている。接合資料4は流紋岩の剥片3点（131～133）による接合である。接合資料5は頁岩の剥片3点（134～136）による接合である。接合資料6はホルンフェルスの剥片5点（137～141）による接合であり、他の接合資料と異なり離れた位置関係にある剥片同士が接合関係にある。接合資料7はホルンフェルスの剥片3点（142～144）による接合である。接合資料8は凝灰岩の剥片2点（145・146）による接合である。

敲石（第23図147・148）

1区と2区から出土した砂岩製の棒状礫を用いた、長さ12cm程の2点が出土した。147は上部から下部に向かって形状が細くなっており、下端に敲打痕が見られる。148は上端と下端に敲打痕が見られる。



第17図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図



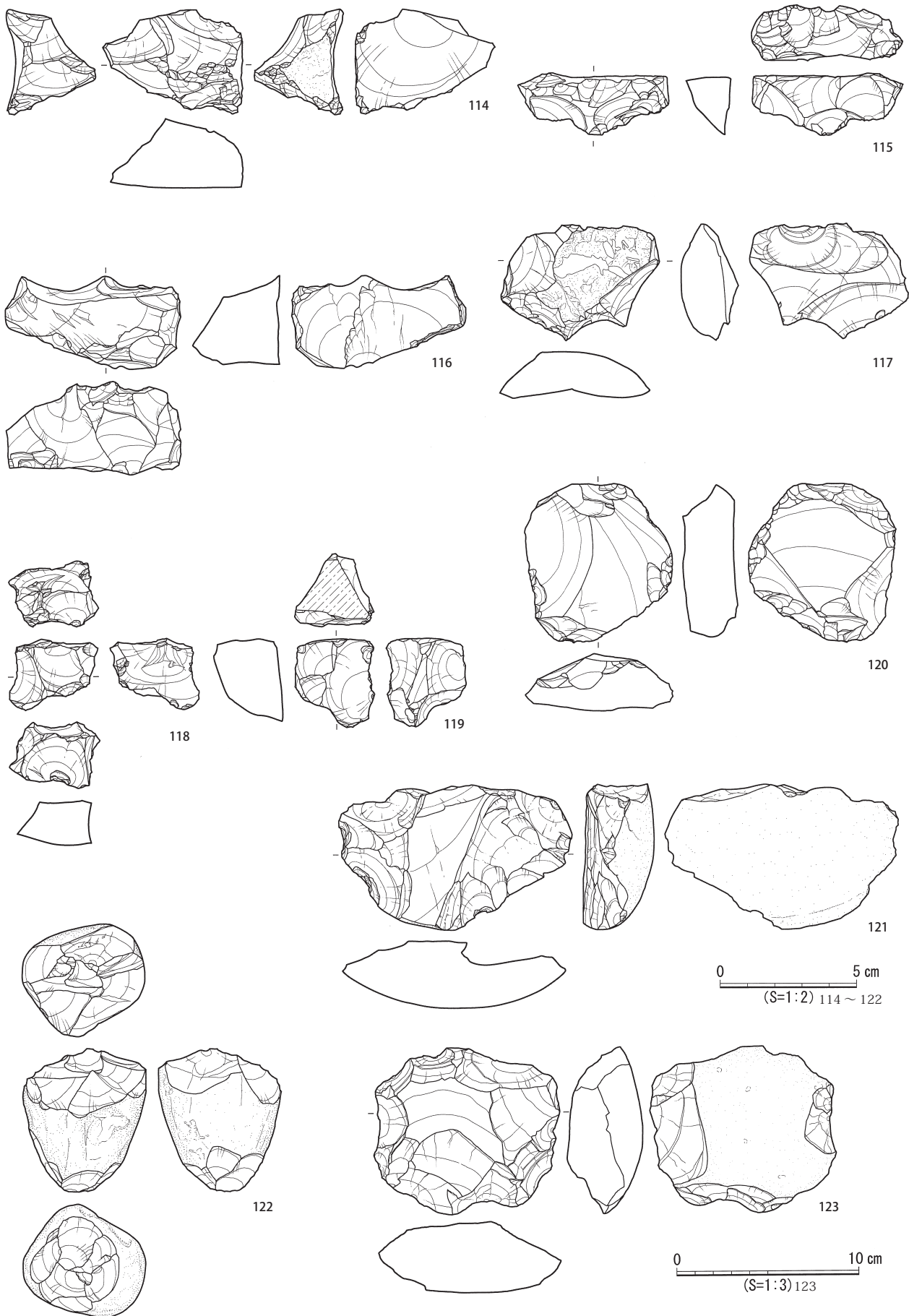
第18図 後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(1)



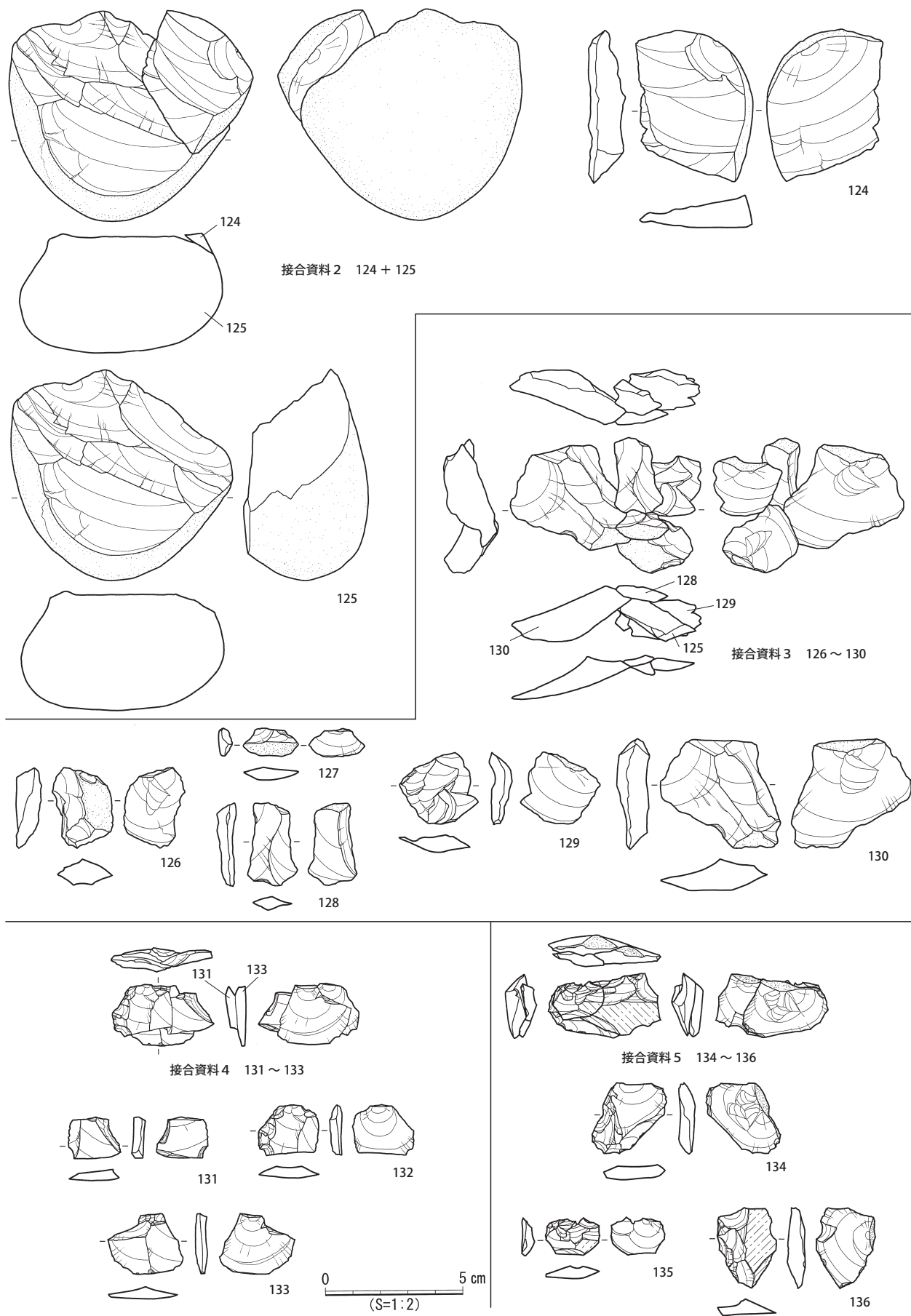
第19図 後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(2)



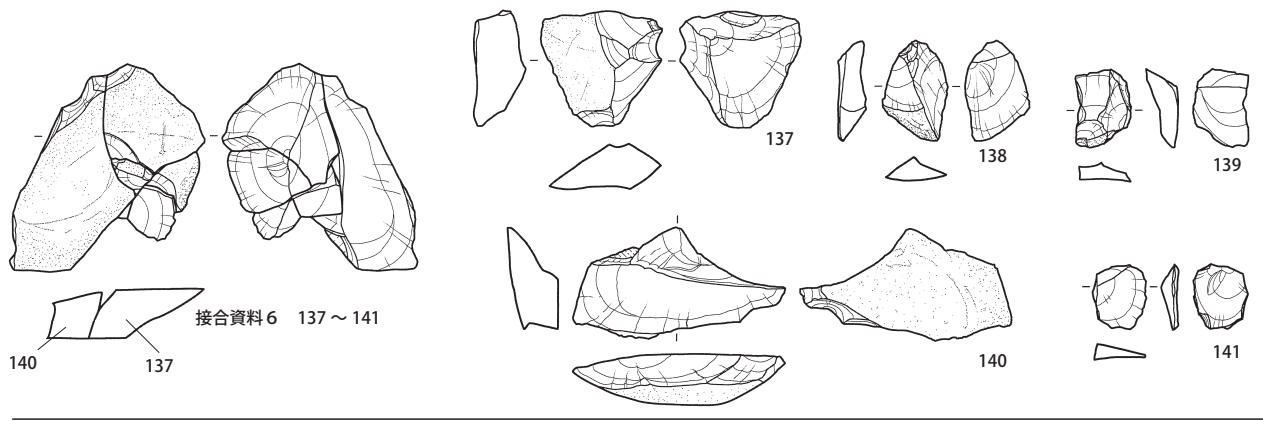
第20図 後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(3)



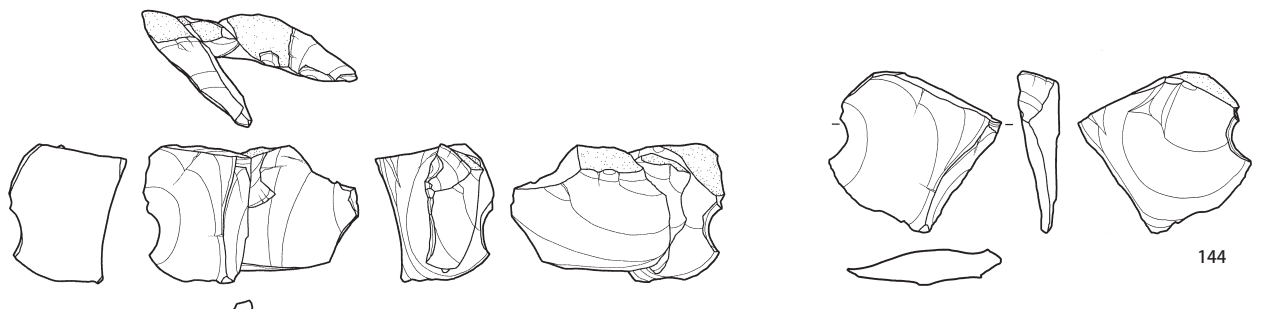
第 21 図 後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図 (4)



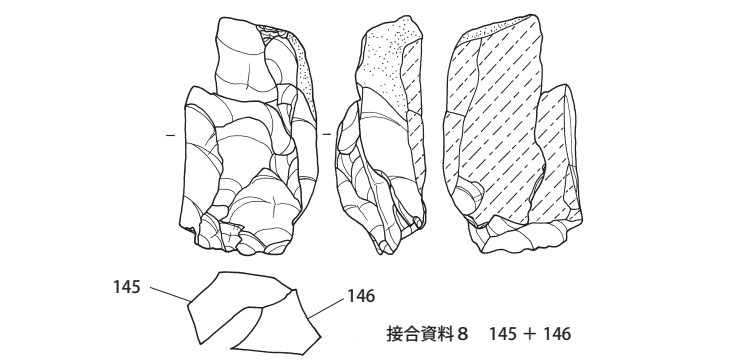
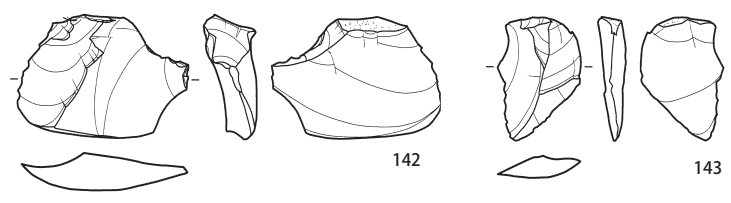
第 22 図 後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(5)



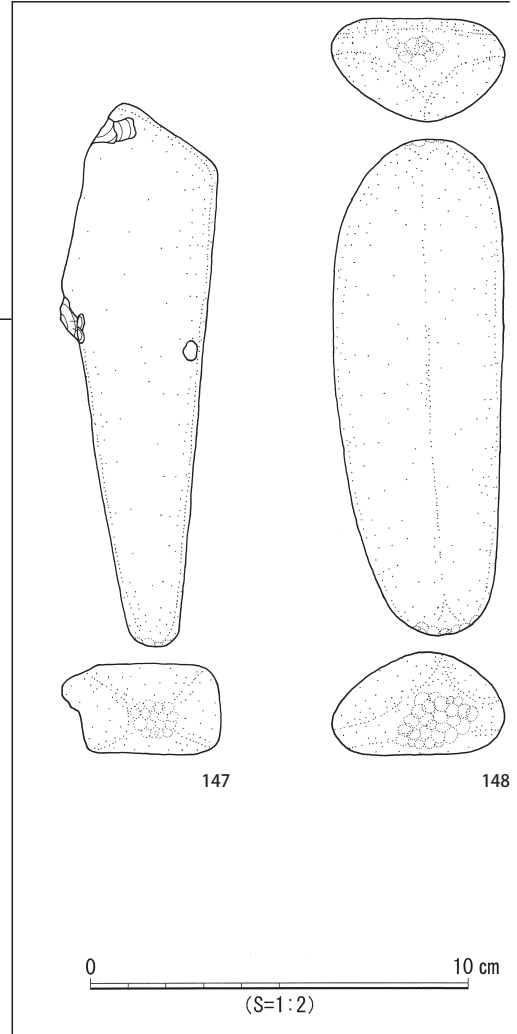
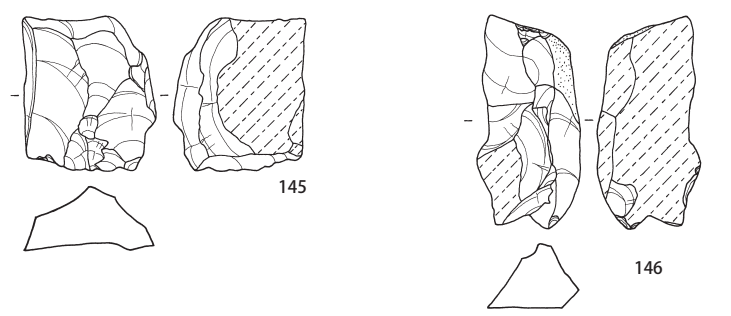
接合資料6 137~141



接合資料7 142~144



接合資料8 145 + 146



第23図 後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石器実測図(6)

第7節 縄文時代草創期・早期の遺物

縄文時代草創期・早期はⅡ層（K-Ah）降灰以前のⅢ層出土の遺物を報告する。当遺跡における草創期については、当該時期の土器は出土していないが、有舌尖頭器(第26図169・170)が出土している。そして、Ⅲ層からは縄文時代早期の土器が多く出土している。このことから、Ⅲ層中には縄文時代草創期と早期が混在していた可能性が考えられる。そのため、縄文時代草創期・早期という形で報告を行う。また、Ⅲ層は調査に関しては第3図からもわかるように、調査区内のほぼ全域を調査した。

なお、草創期・早期の遺構は検出されていない。

1 遺物出土分布状況（第24図）

遺物の分布は調査区全域に広がっており、後期旧石器時代Ⅰ期、Ⅱ期と比較すると、斜面地である3区や4区、5区からの遺物の出土が多くなる傾向になっている。

この時代の主体となる石材は、流紋岩・ホルンフェルス・頁岩・砂岩・チャートであることがわかる。中でも、チャートと砂岩は他の石材とは異なり剥片だけでなく、製品としても広く用いられている。チャートは、石鏃などの狩猟具として多く用いられ、砂岩は石錘などの漁撈具として多く用いられている。それに対して、黒曜石、凝灰岩、尾鈴山溶結凝灰岩、水晶、安山岩などは少数の出土であり、その内容は剥片やチップなどが中心である。

2 出土遺物（第24～28図）

縄文時代草創期・早期の遺物は土器や石器など354点が出土した。石器の内容は、有舌尖頭器2点、石鏃19点、石匙3点、石錘10点、石斧4点、礫器3点である。遺物の大多数を、石核や剥片などの素材が占め、その中で73点を掲載している。

3 早期の土器（第25図149～168）

Ⅲ層出土あるいは、形態的に早期と考えられる土器を22点掲載する。

貝殻条痕文系

6点を掲載している。

149は胴部、150～153は口縁部である。149は、外面に斜位の貝殻条痕文を施し、器壁は厚手である。150は口唇部に平坦面を作り、外面に横位の貝殻条痕文を施した後に、縦位の貝殻刺突文を施し、器壁は厚手である。151は口唇部を丸く作り、口縁部外面の狭い範囲に貝殻腹縁による刺突を施し、器壁は厚手である。152は口唇部に平坦面を作り、口縁部外面に横位の貝殻条痕文を施し、器壁は厚手である。153は口唇部に平坦面を作り、口縁部外面に横位の貝殻条痕文を施し、器壁は厚手である。

山形押型文系

12点出土している。155は平坦な口唇部に貝殻による刺突文を施し、外面は縦位の山形押型文が施される。内面口縁部上部にも、山形押型文を施す。器壁は薄手である。外面、内面共に摩耗が激しい。160と161は、口縁から頸部にかけての部分である。外面にはっきりとした山形押型文を施し、口唇部を平坦に作り出したのち、横位の山形押型文を施す。内面の口縁部にも縦位の山形押型文を施し、器壁は薄手である。胎土や焼成から、2点は同一個体の可能性が考えられる。

162と163は胴部の小片である。外反する外面に、貝殻条痕による曲線文が施される。器壁は、厚手である。胎土や焼成具合などから、2点は同一個体の可能性が考えられる。164は口唇部に平坦面を作り、外反する外面に横位の貝殻条痕文を施す。口縁部上部から口唇部内面には、縦位の貝殻条痕文が施され、器壁は薄手である。

167は胴部の小片である。外反する外面には、横位と縦位と斜位に筋の見られる工具による浅い格子状の沈線文が施され、器壁は薄い。胎土には、金雲母を多く含む。

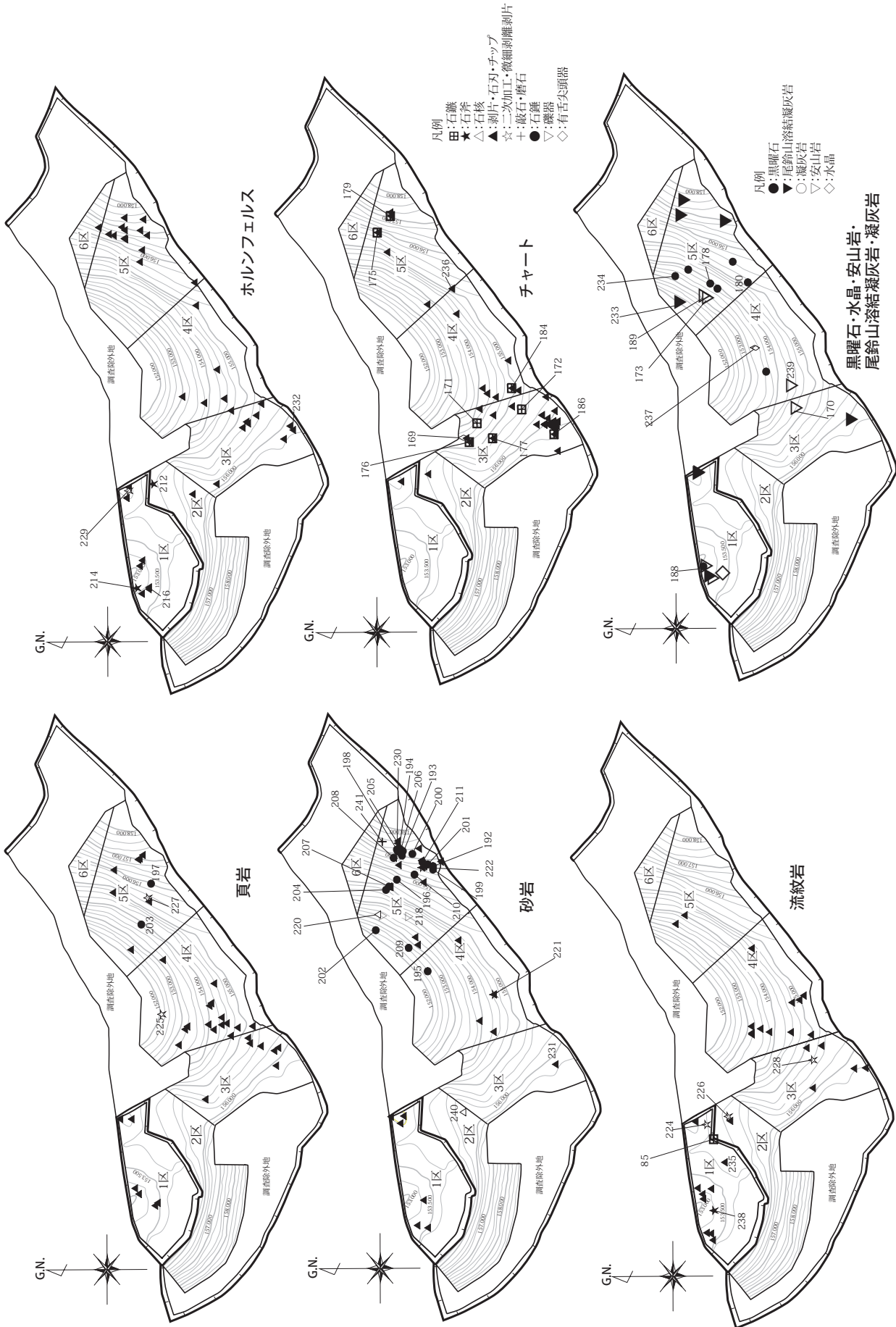
土器片加工品

168の1点のみの出土である。円形をしており、周辺を研磨により成形する。外面は無文、内面は摩耗が激しく施文の有無は不明である。

4 草創期の石器

有舌尖頭器（第26図169・170）

3区Ⅲ層下位から木葉形の平面形態をした2点が



黒曜石・水晶・安山岩・
尾鈴山溶結凝灰岩・凝灰岩

※等高線は1区はV層上面、2～5区はIV層上面での地形を示す。

第24図 縄文時代草創期・早期石材分布図

出土している。169 は白色の無光沢チャート製、170は169よりもやや小ぶりの安山岩製である。2点の断面形態は、楕円形である。

5 早期の石器

石鏃 (第26図171～187)

1区、3～5区より17点が出土した。平面形態としては二等辺三角形のものと、正三角形のものがあるが、大半は二等辺三角形である。基部の特徴としては、基部を深く抉った凹基式の鍬形鏃が多く出土している。178と174は黒曜石製で、両側縁を鋸歯状に成形している。

石匙 (第26図188～190)

1区、4区、5区より3点出土した。石材と形状は、188は安山岩、190はチャートで扇形、189は安山岩で基部が横長の特徴的な形をしている。扇形をした188、190の基部は厚みがあるのに対して、189の基部は薄手である。

スクレイパー (第26図191)

1区より1点出土した、石材はチャートである。幅広剥片を素材とし、両側面に鋸歯状の刃部が形成される。形態的に旧石器時代のものである可能性も考えられたが、Ⅲ層上部からの出土であるため縄文時代早期の遺物として掲載した。

石錘 (第26図193～211)

Ⅲ層中で、18点出土した。他の遺物が調査区内全域で出土するのに対して、石錘は4区と5区のみ出土である。石材の大半を砂岩が占めるが、203は円形気味の頁岩である。使用石材の形態としては、楕円形のものが多く、円形気味のものには203と204のみである。打ち欠きは、長軸の両側打ち欠きが多数である。しかし、194・205は片側のみの打ち欠きであり、そのため未製品の可能性も考えられる。192は側縁に施された打ち欠き付近に、黒色付着物がまばらに付着している。

石斧 (第26・27図212～214・217)

1区、2区、5区より4点出土しており、全てホルンフェルス製である。212・213・217は打製石斧で、上部が欠損している。212と217は大変よく似たホルンフェルスが用いられており、2点とも刃部の幅が狭く、両側面から細かな剥離により刃部が形成されて

いる。214は石斧の未製品と考えられ、215と216の剥片が接合し接合資料9を形成する。

礫器 (第27図218～220)

5区のⅢ層を中心に出土した3点を掲載する。218は側縁を囲うように、剥離が施されており円盤形石器の可能性も考えられる。219と220は、背面の剥離が上方から下方に向かって規則的に施され、腹面には礫面を広く残している。石核の可能性も考えられるが、剥離に規則性が見えることからここでは礫器として報告を行った。

二次加工剥片 (第27・28図221～229)

1～6区より出土した9点を掲載する。221・222は砂岩製で、2点とも大きめの二次加工剥片である。221の背面は広く礫面が残っており、右側に僅かに剥離が施され、腹面中央部には広い剥離面が残り、上方と下方からの二次加工剥離が施される。

剥片 (第28図230～237)

1区、3～5区より出土した8点を掲載する。230と231は砂岩製で、礫素材を用い礫面形状は扁平な円礫状となっている。234は黒曜石製である、肉眼観察では南九州産と考えられる。南九州産の黒曜石の小片はこの他にも微量出土している。235は流紋岩の縦長剥片であるが、頭部の剥離の状況などからナイフ形石器の未製品の可能性も考えられる。

石核 (第28図238・240)

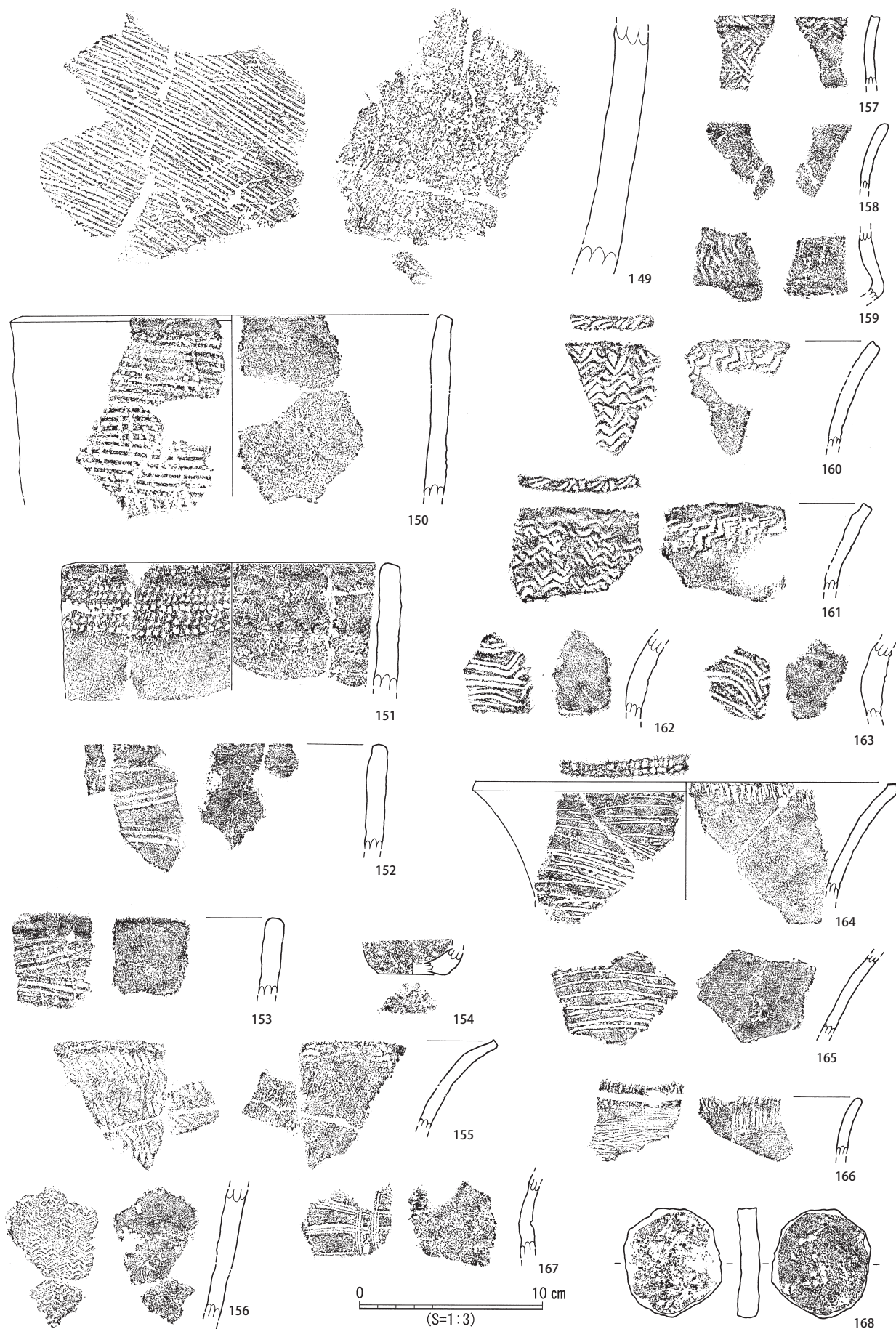
1区と2区より出土した2点を掲載する。238は流紋岩製で腹面に不定方向からの剥離を多数施す。240は砂岩製で、背面は上部からの規則的な剥離が施されている。この石核から、231の様な蛤の形をした剥片が剥離された可能性が考えられる。

敲石 (第28図241)

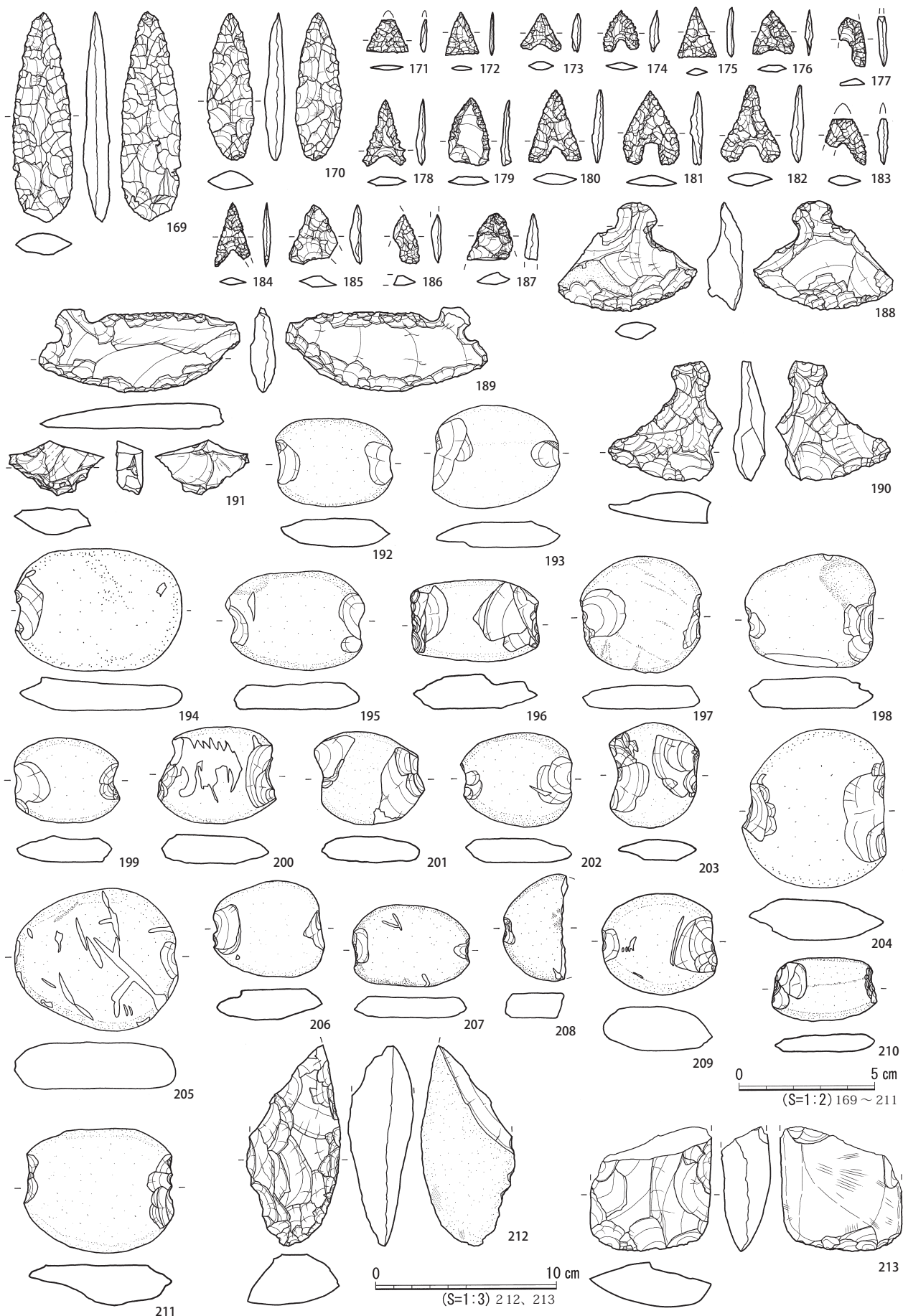
5区より1点出土した242は砂岩製で、上端と下端に僅かに敲打痕がある。

原石 (第28図239)

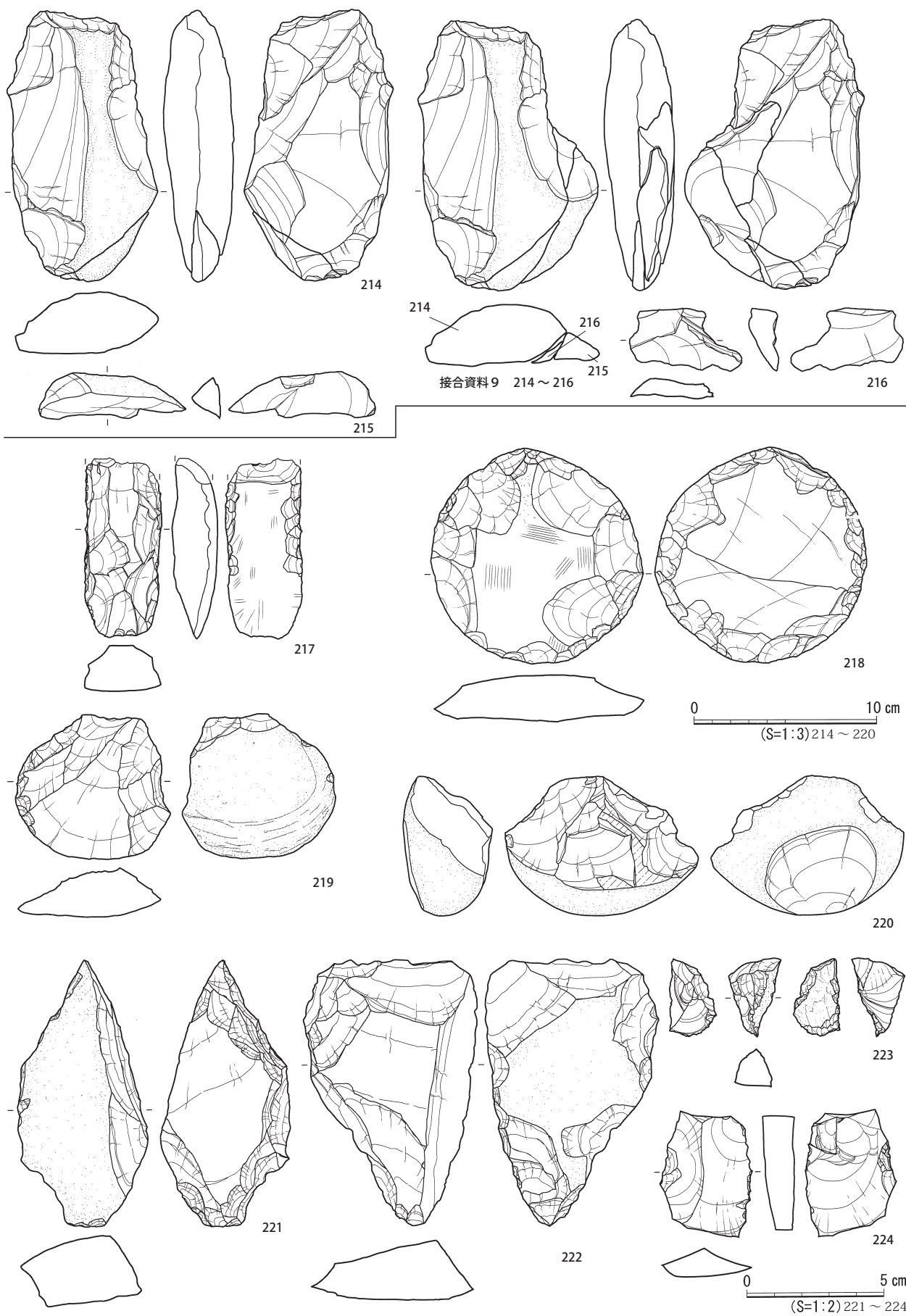
239は姫島産安山岩の原石であることから、搬入品と考えられる。姫島産の安山岩は、石匙(第26図188)などの製品にも用いられている。また、姫島産の黒曜石も石鏃などの製品として用いられており、未報告資料の中にも姫島産黒曜石のチップが少量存在する。



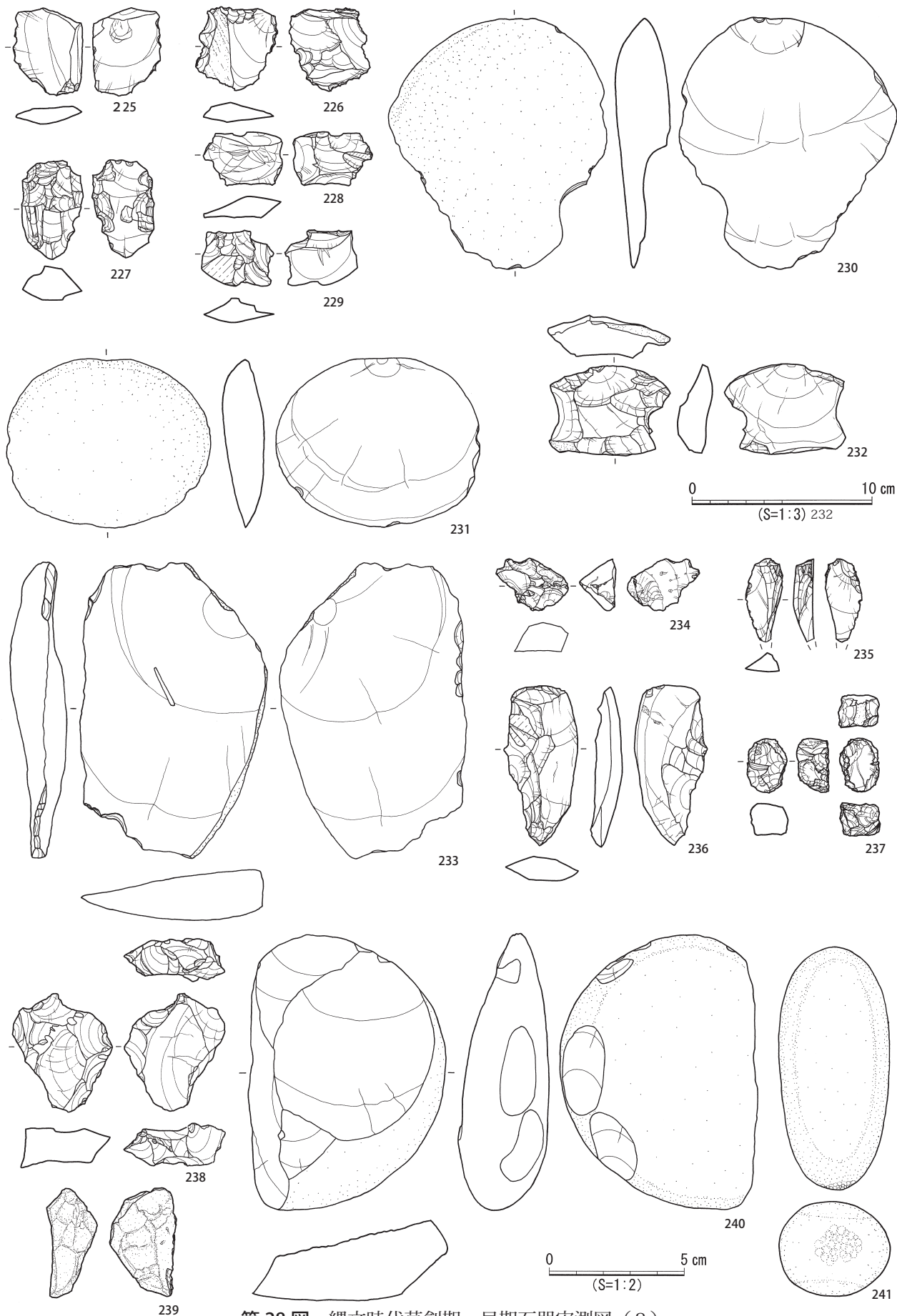
第 25 図 縄文時代早期土器実測図



第 26 図 縄文時代草創期・早期石器実測図 (1)



第 27 図 縄文時代草創期・早期石器実測図 (2)



第 28 図 縄文時代草創期・早期石器実測図 (3)

第8節 K-A h 降灰以降の遺構と遺物

II層 (K-A h) 面で検出した遺構及びI層 (K-A h 降灰以降) の出土遺物及び表面採集資料等の報告を行う。

1 遺構 (第29～38図)

II層 (K-A h) 上面で、斜面地部分である3区～6区にかけて7基の陥し穴状遺構を検出した。これらの陥し穴状遺構は、調査区斜面地の中央部の谷部分に、等高線に直交して列状に並ぶような位置関係にある。

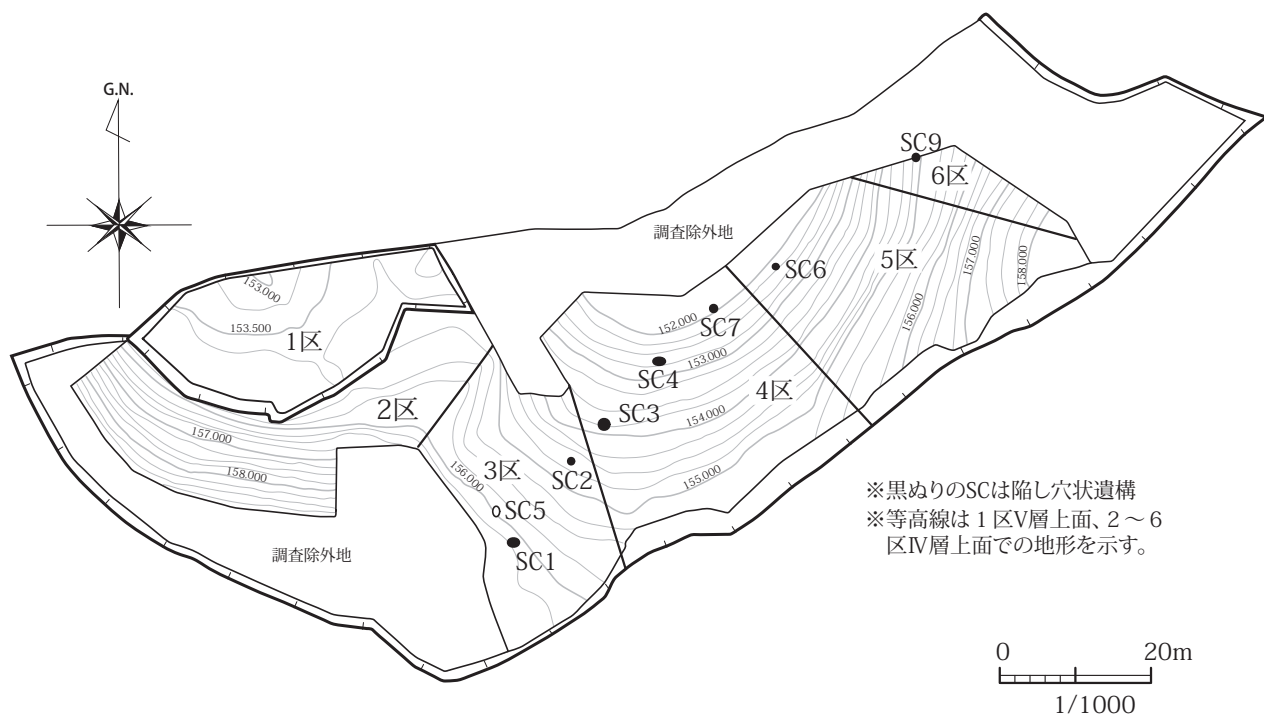
また、II層上面から、土坑を1基検出している。この土坑は、直径0.5m程と、陥し穴状遺構の半分ほどの大きさであり、埋土の状態も陥し穴状遺構の埋土と比べると非常に軟らかくしまりは弱い。

SC 1 (第29・30図)

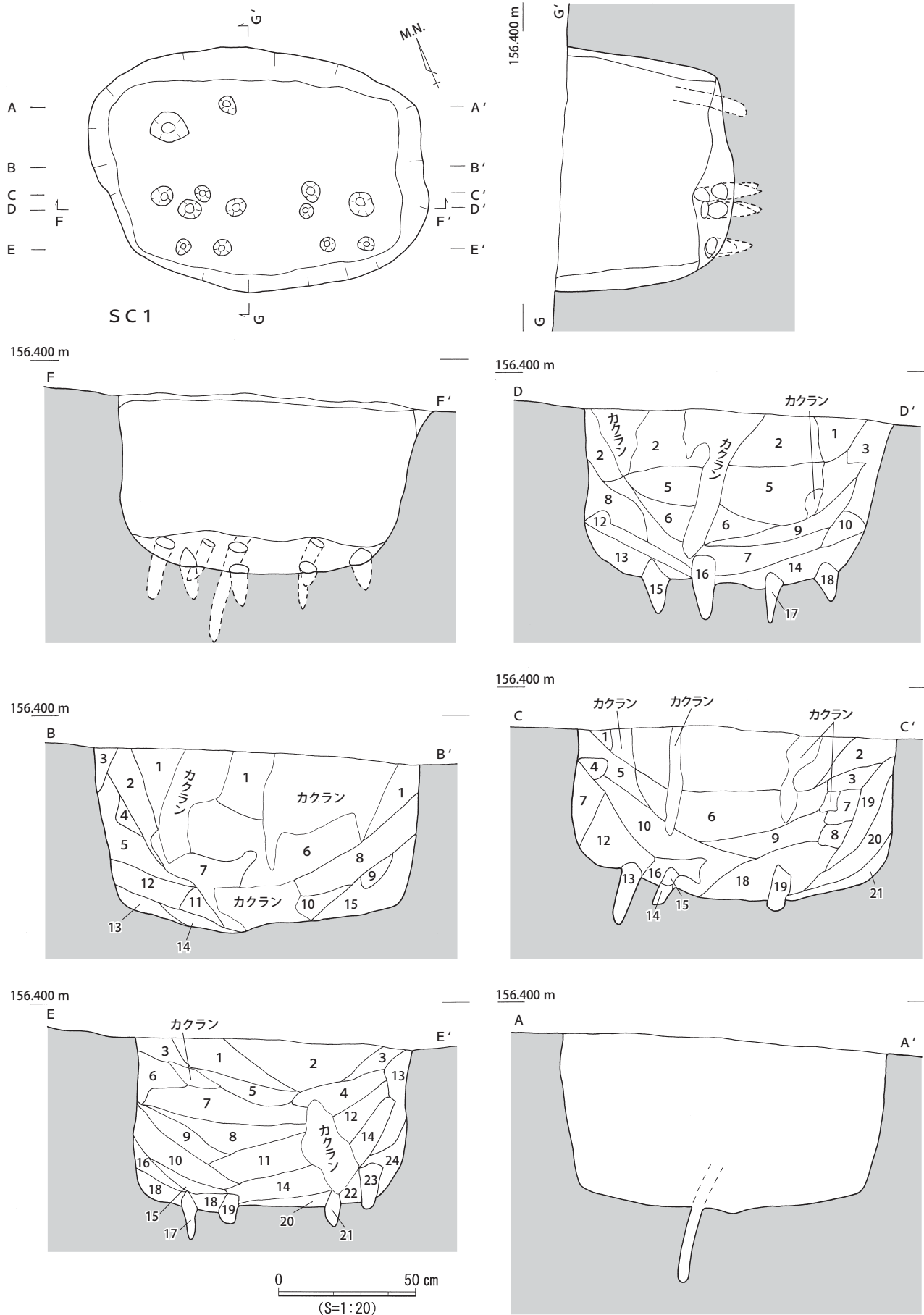
SC 1は3区南側に位置し、長径1.2m、短径0.9m、残深0.65mで検出面の平面形態は楕円形を呈する。検出面は、II層 (K-A h) 上面である。底部は褐色土層 (VII層) にまで達していた。底部では杭状痕跡を13本検出し、そのほとんどは南側に集中する。しかし、北側でも2本検出したことから北側にも数本の杭痕が存在した可能性が考えられる。杭状痕跡は、直径6～10

cm程度で、床面からの深さは5～20cm、床面から上に3～20cm程伸びているものもある。杭状痕跡の埋土は黒褐色土 (2.5Y3/1～10YR2/2)、褐色土 (7.5YR4/4～10YR4/6)、極暗褐色土、明褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土など暗めの土色を中心とした様々な土色が存在し、いずれも粘質は弱く、しまりも弱いものが大半を占める。

陥し穴状遺構の埋土の主体は、黒褐色土である。埋土は大きく上部・中部・下部の3つに分けることができる。埋土上部は主に黒褐色土 (7.5YR3/1～10YR2/3) であり、粘質は弱く、しまりは強く固い。混合物は、白色・K-A h・橙色の粒子が全体的に入る。また上部から中部にかけての端部には、崩落したと考えられるしまりの弱い暗褐色土、褐色土、黒色土が堆積している。その他に、しまりの非常に弱い黒色土の攪乱も入っている。埋土中部の主体は、黒褐色土 (7.5YR3/2～10YR2/3) で粘質は弱く、しまりも弱い。混合物は白色・橙色・褐色・K-A hの粒子が全体的に入り、K-A hのブロックが所々入る。埋土下部も主体は、黒褐色土 (5YR2/1～10YR2/3) であり、粘質は普通で、しまりは強い。混合物は白色・橙・褐色・K-A hの粒子が全体的に入り、一部炭化物も入る。



第29図 K-A h 降灰以降遺構分布図



第30図 SC1実測図

B-B' 断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は弱く、しまりは強いK-Ah粒子、白色粒子が密に含まれる。
2	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質はやや弱く、しまりはやや強い、K-Ah粒子、白色粒子が密に含まれる。
3	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質はやや弱く、しまりはやや強い、2~3mm程の小石が少量入る。
4	灰黄褐色土 (10YR4/2)	粘質は普通で、しまりは弱い白色粒子、褐色粒子が所々入る。
5	褐色土 (10YR4/4)	粘質はやや弱く、しまりはやや強い1cm程のK-Ahの粒が所々入る。
6	黒褐色土 (7.5YR2/2)	粘質はやや弱く、しまりも強い1mm程のK-Ah粒子が全体的に入る。
7	暗褐色土 (7.5YR2/3)	粘質は強く、しまりも強い2~3mm程のK-Ah粒子と細かい白色粒子が含まれる。
8	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質は普通で、しまりは強いK-Ahの粒子が全体的に入り白色粒子が塊に入る。
9	黒褐色土 (10YR2/3)	粘質は普通で、しまりは強いK-Ahのブロック。
10	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は弱く、しまりは強い2~3mm程のK-Ahの粒子や白色粒子が全体的に入る。
11	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	粘質は普通で、しまりは強い白色粒子や褐色粒子が少量入る。
12	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質はやや弱く、しまりは強い白色粒子2~3mm程のK-Ah粒子が所々入る。
13	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	粘質は普通で、しまりは強い白色粒子が少量入る。
14	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質は弱く、しまりは強い炭化物が少量入る。
15	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は普通で、しまりも普通2~3mm程のK-Ah粒子が全体的に入る。

C-C' 断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は弱く、しまりは強い褐色粒子白色粒子が全体的に入る。
2	黒褐色土 (10YR 2/ 3)	粘質は普通で、しまりは強い2~3mm程のK-Ahの粒子が全体的に入る。
3	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は普通で、しまりは強いK-Ahがまばらに入る。
4	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質は普通で、しまりは強い褐色粒子が入る。
5	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は弱く、しまりは強い白色粒子、褐色粒子が全体的に含まれる。
6	黒色土 (10YR2/1)	粘質は弱く、しまりは強い白色粒子、褐色粒子、褐色粒子が全体的に含まれる。
7	黒色土 (5YR*1.7/1)	粘質はやや弱く、しまりはやや強い白色粒子、褐色粒子が全体的に含まれる。
8	暗褐色土 (7.5YR3/4)	粘質はやや弱く、しまりもやや強いK-Ahのブロックである。
9	黒色土 (7.5YR2/1)	粘質は弱く、しまりは強い1~2mmの褐色粒子、褐色粒子、白色粒子が全体的に入る。
10	黒褐色土 (5YR2/1)	粘質は弱く、しまりは強い褐色粒子、褐色粒子が全体的に入る。
11	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質はやや弱く、しまりはやや強い褐色粒子、白色粒子が少量入る。
12	暗褐色土 (7.5YR3/4)	粘質は普通で、しまりも普通1~2mm程の褐色粒子、白色粒子が全体的に入る。
13	褐色土 (10YR4/6)	粘質は弱く、しまりは非常に弱い黒褐色土の粒子が全体的に入る杭の跡。
14	明褐色土 (7.5YR5/6)	粘質は普通で、しまりは弱い黒褐色土の粒子が入る杭の跡。
15	黒褐色土 (2.5Y3/1)	粘質はやや弱く、しまりは非常に弱い褐色の粒子が入る杭の跡。
16	褐色土 (7.5YR4/4)	粘質は普通で、しまりは弱い白色粒子が所々入る。
17	暗褐色土 (7.5YR2/3)	粘質は弱く、しまりは非常に弱い杭の跡。
18	黒褐色土 (7.5YR2/2)	粘質は弱く、しまりは強い1~3mm程のK-Ahの粒が全体的に密に入る。
19	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は普通で、しまりは強いK-Ahが全体的に入る。
20	黒褐色土 (10YR2/3)	粘質は普通で、しまりはやや弱いK-Ahの粒子が密に入る。
21	褐色土 (10YR4/6)	粘質は普通で、しまりはやや強い。

SC 2 (第29・31図)

SC 2は3区に位置し、長径 1.35m、短径 0.9m、残深 0.4 m、検出面の平面形態は楕円形を呈する。検出面はII層 (K-Ah) であり、重機による表土除去の際に検出した。検出時の埋土上面も、非常にしまりが強く固い。

検出できた杭状痕跡は7本で、壁面近くと中央部に集中している。杭状痕跡の数は、SC 1の13本と比較すると少ない。しかし、SC 1の杭状痕跡が南側に集中するのに対して、SC 2の杭状痕跡は数こそ少ないものの、全面に広がりが見られる。杭状痕跡の穴の直径は7~10 cm程度、陥し穴状遺構の埋土上面から、杭状痕跡を検出した深さは40 cm程下の場所である。そして、杭状痕跡の検出面から下へ伸びる杭状痕跡の深さは5~40 cm、床面から上には3~10 cm程伸びているものもある。杭状痕跡の埋土は黒褐色土 (7.5YR3/1~10YR2/3)、褐色土 (7.5YR4/3)、暗褐色土 (10YR3/3) など暗めの色を中心とした土色であり、いずれも粘質は弱く、し

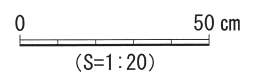
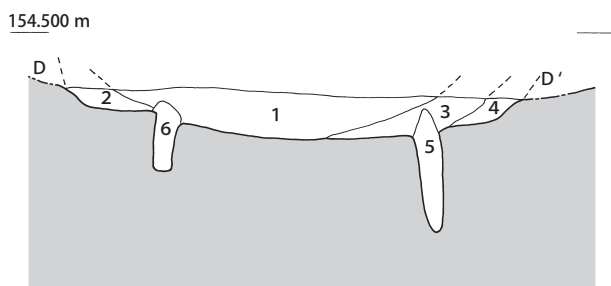
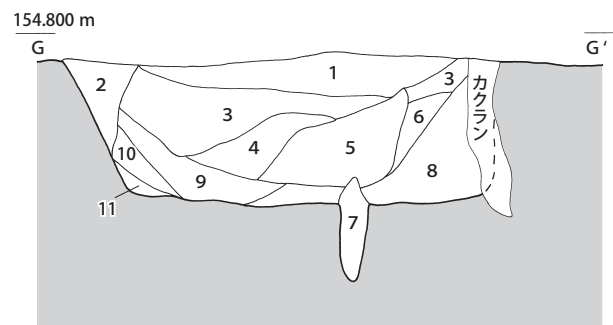
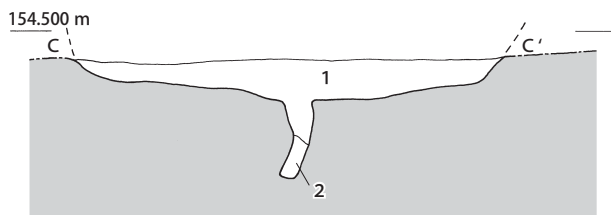
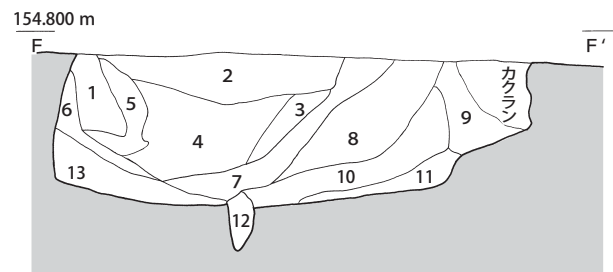
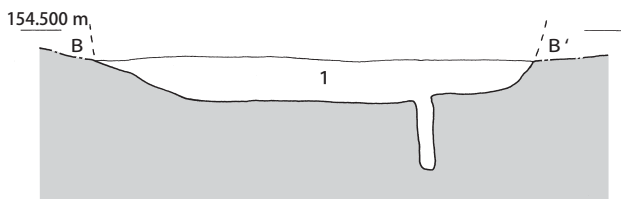
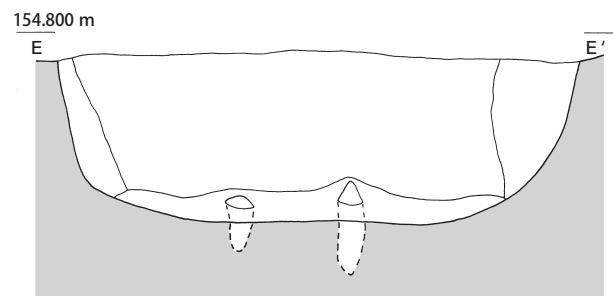
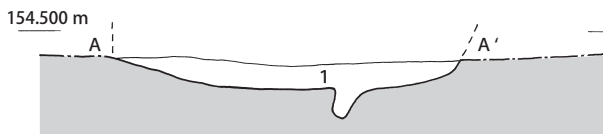
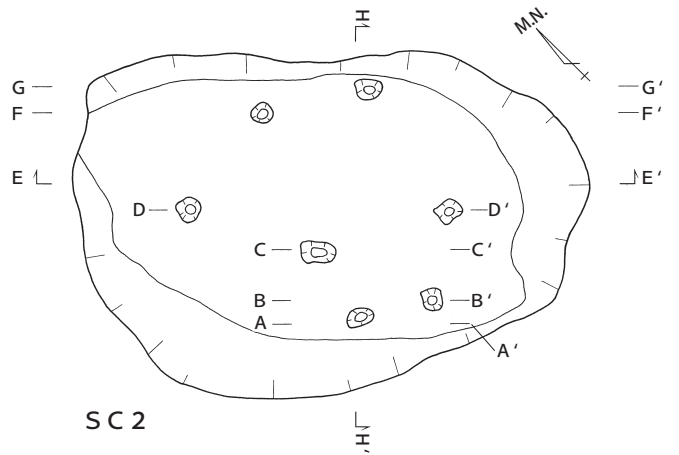
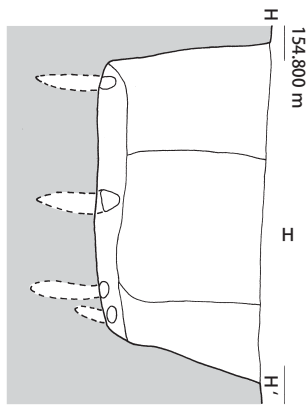
D-D' 断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質普通で、しまりも普通K-Ahが全体的に入る。
2	黒色土 (10YR2/1)	粘質は弱く、しまりは非常に強い白色粒子、褐色粒子が全体的に入る。
3	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	粘質は普通で、しまりは非常に弱いK-Ahが全体的に入る。
4	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質は普通で、しまりは強い白色粒子、褐色粒子が密に全体的に入る。
5	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は弱く、しまりは強い白色粒子、褐色粒子が全体的に入る。
6	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は弱く、しまりは非常に強い白色粒子、1~2mm程の褐色粒子が全体的に入る。
7	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質は普通で、しまりはやや弱い白色粒子、褐色粒子が全体的に入る。
8	暗褐色土 (7.5YR3/3)	粘質は普通で、しまりも普通褐色粒子がまばらに入る。
9	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質はやや弱く、しまりは強い白色粒子K-Ahの粒が全体的に入る。
10	暗褐色土 (7.5YR3/4)	粘質は普通で、しまりは強いK-Ahのブロックである。
11	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は弱く、しまりは強い白色、褐色粒子がK-Ahの粒が全体的に入る。
12	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質は普通で、しまりも普通褐色、褐色粒子が全体的に入る。
13	褐色土 (7.5YR4/4)	粘質は普通で、しまりはやや強い全体的に暗褐色粒子がまばらに入る。
14	褐色土 (10YR4/6)	粘質は普通、しまりも普通白色粒子、褐色粒子を少量含む。
15	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	粘質は普通で、しまりは強い黒色、白色粒子を含む杭の跡。
16	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質はやや弱く、しまり強い褐色粒子が全体的に入る杭の跡。
17	褐色土 (7.5YR4/4)	粘質は普通で、しまりは強い褐色の粒が入る杭の跡。
18	暗褐色土 (7.5YR3/3)	粘質は普通で、しまりは強いK-Ahの粒子、褐色粒子が含まれる杭の跡。

E-E' 断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は普通で、しまりは強い白色粒子が全体的に入る。
2	黒色土 (10YR1.7/1)	粘質は普通で、しまりは弱い白色粒子、褐色粒子が全体的に入る。
3	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質は弱く、しまりは非常に強いK-Ahの粒子が全体的に入る。
4	暗褐色土 (10YR3/4)	粘質は普通で、しまりはやや弱いK-Ahが全体的に入る。
5	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は弱く、しまりは強い褐色粒子白色粒子が入る。
6	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質は普通で、しまりは弱い白色粒子が少量入る。
7	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は弱く、しまりは強い白色粒子K-Ahが全体的に入る。
8	黒褐色土 (10YR2/3)	粘質は弱く、しまりは強い白色粒子、褐色粒子が全体的に入る。
9	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質は普通で、しまりも普通、褐色、白色粒子が入る。
10	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質は弱く、しまりは強い白色、褐色、褐色粒子が入る。
11	褐色土 (7.5YR4/4)	粘質は弱く、しまりはやや強い褐色粒子、褐色の小石が入る。
12	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質はやや弱く、しまりもやや弱い褐色、褐色粒子を含む。
13	灰黄褐色土 (10YR4/2)	粘質は普通で、しまりは弱い褐色粒子を含み全体的に砂質である。
14	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質は普通で、しまりはやや弱い褐色、褐色の粒子を含む。
15	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は普通で、しまりはやや強い白色、褐色、褐色粒子を含む。
16	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	粘質は普通で、しまりも普通、褐色粒子を含む。
17	褐色土 (7.5YR4/3)	粘質は普通で、しまりは強い白色粒子を含む杭の跡。
18	褐色土 (10YR4/4)	粘質は普通で、しまりは強い白色粒子を含む。
19	明褐色土 (7.5YR5/6)	粘質は普通で、しまりは弱い褐色粒子を含む杭の跡。
20	褐色土 (7.5YR4/3)	粘質は普通で、しまりも普通白色・褐色粒子を含む。
21	にぶい黄褐色土 (7.5YR5/4)	粘質は普通で、しまりは弱い褐色粒子が入る杭の跡。
22	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	粘質はやや強く、しまりは弱い褐色粒子を含む。
23	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は普通で、しまりは強い褐色・褐色粒子が全体的に入る杭の跡。
24	にぶい黄褐色土 (10YR5/4)	粘質は普通で、しまりも普通白色・褐色粒子が含まれる。

まりは弱いものから強いものなど幅が広いことを確認した。埋土の主体は、黒褐色土 (5YR 2/1~10YR3/2) である。埋土は大きく上部・中部・下部の3つに分けることができる。埋土上部は主に黒褐色土 (7.5YR2/2~10YR2/2) と黒色土 (7.5YR*1.7/1) であり、粘質は弱く、しまりは強く固い。混合物は、白色・褐色の粒子が全体的に入る。また上部から中部にかけての端部には、崩落したと考えられる砂質の黒色土が堆積している。その他に、しまりの非常に弱い黒色の攪乱も入っている。埋土中部の主体は、黒褐色土 (5YR2/1~7.5YR3/2) と暗褐色土 (5YR3/2~10YR3/3) で粘質は弱く、しまりは強い。混合物は白色・褐色・褐色・K-Ahの粒子が全体的に入る。埋土下部の主体は、黒褐色土 (7.5YR3/1~10YR2/2) であり粘質は弱く、しまりは非常に強い。混合物はK-Ahの粒や小石を含み、白色、褐色粒子も少量入る。また底部の壁面付近には、K-Ahのブロックも一部入る。



第31図 SC 2実測図

SC2 A-A' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (5YR 2/1)	粘質は弱く、しまりは強い。2～3mm程のK-Ahの粒がまばらに入る。

SC2 B-B' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は弱く、しまりは非常に強い。2～3mm程のK-Ahの粒、白色粒子を含む。

SC2 C-C' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は弱く、しまりは非常に強い。1～2cm程のK-Ahの粒が所々入り、白色粒子がまばらに入る。
2	褐色土 (7.5YR4/3)	粘質は普通、しまりは弱く褐色粒子が少量入る。杭状痕跡

SC2 D-D' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質は弱く、しまりは強い。白色粒子、橙色の粒が全体的に入る。
2	暗褐色土 (7.5YR3/4)	粘質は弱く、しまりはやや強い。K-Ahがブロック状や粒状に入る。
3	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は弱く、しまりは普通。1～2cm程の橙色の粒が入る。
4	褐色土 (10YR4/4)	粘質は普通、しまりはやや強い。橙色の粒子が少量入る。
5	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質、しまりは普通。白色粒子が少量入る。杭状痕跡。
6	黒褐色土 (10YR2/3)	粘質、しまりは普通。白色粒子が少量入る。杭状痕跡。

SC2 F-F' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質、しまりは普通。白色、橙色粒子が全体的に入る。
2	黒色土 (7.5YR*1.7/1)	粘質は弱く、しまりは強い。橙色粒子が少量入る。
3	黒褐色土 (5YR2/1)	粘質は弱く、しまりは強い。白色粒子が少量入る。
4	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質、しまりは普通。5mm程のK-Ahの粒が全体的に入る。
5	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質はやや弱く、しまりは普通。砂質ざみで、K-Ahが全体的に入る。
6	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質、しまりは普通。1cm程のK-Ahの粒、白色粒子が全体的に入る。
7	黒褐色土 (10YR2/2)	粘質はやや弱く、しまりは普通。橙色粒子K-Ahが全体的に入る。
8	黒色土 (10YR2/1)	粘質、しまりは普通。白色、橙色粒子が全体的に入る。
9	黒色土 (7.5YR2/1)	粘質は弱く、しまりは普通。砂質気味であり、白色、橙色粒子が全体的に入る。
10	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質はやや弱く、しまりはやや強い。橙色の粒、2～3cm程の小石を含む。
11	極暗褐色土 (7.5YR2/3)	粘質、しまりは普通。橙色、白色粒子が全体的に入る。
12	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質は弱く、しまりは強い。橙色、白色粒子が少量入る。杭状痕跡。
13	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は弱く、しまりは強い。橙色、白色粒子が少量入る。

SC2 G-G' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (7.5YR2/2)	粘質は弱く、しまりはやや強い。白色粒子、橙色の粒がまばらに入る。
2	灰褐色土 (7.5YR4/2)	粘質は普通、しまりはやや弱い。白色、橙色粒子が全体的に入る。
3	暗赤褐色土 (5YR3/2)	粘質は普通、しまりはやや弱い。K-Ahが全体的に入る。
4	灰褐色土 (5YR4/2)	粘質、しまりは普通。K-Ahの粒が全体的に入る。
5	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質は弱く、しまりはやや強い。K-Ahの粒が所々入る。
6	黒色土 (10YR2/1)	粘質は弱く、しまりはやや強い。K-Ahの粒がまばらに入る。
7	褐色土 (7.5YR4/3)	粘質は弱く、しまりは強い。白色粒子が少量入る。杭状痕跡。
8	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質は強く、しまりは非常に強い。K-Ahの粒が所々入る。
9	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は弱く、しまりは非常に強い。K-Ahの粒が全体的に入る。
10	黄褐色土 (10YR5/6)	粘質は弱く、しまりはやや弱く砂質気味である。K-Ahのブロック。
11	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質は弱く、しまりは強い。白色粒子が少量入る。

SC3 (第29・32図)

SC3は4区のT 46 近くに位置し、直径 1.3m、短径 1.05m、残深 0.6m、検出面の平面形態は楕円形を呈する。検出面はII層 (K-Ah) であり、重機による表土除去の際に検出した。検出時の埋土上面も、非常にしまりが強く固かった。

検出できた杭状痕跡は 12 本で、主に中央部分に集中する。杭状痕跡の配置はSC1やSC2と比較すると、雑然としており数も多い。

杭状痕跡は、SC3の埋土上面から 60 cm程下の床面で検出している。検出した杭状痕跡の直径は5～10 cm程度で、床面から5～30 cm程伸びているものもある。杭状痕跡の穴の埋土は黒褐色土、黒色土が多くしまりは弱く、粘質はやや弱い。

陥し穴状遺構の埋土の主体は、黒色土と黒褐色土である。埋土は上部・端部・底部の3つに分けることができる。埋土上部は、黒色土 (10YR2/1～10YR1.7/1) であり、粘質は弱くしまりは強い、混合物は橙色のパミスが全体的に入る。埋土端部は、黒褐色土 (5YR3/1～10YR2/2) であり、粘質は弱くしまりは強い。混合物はK-Ahの粒子、橙色のパミスが所々入り、K-Ahのブロックも所々見られる。

埋土下部は、褐色土で粘質はやや強く、しまりは普通。白色粒子がまばらに入る埋土と、褐灰色土で粘質は弱く、しまりは強く、K-Ahの粒子が入る埋土である。

SC4 (第29・33・34図)

SC4は3区に位置し、長径 1.5 m、短径 1.3 m、残深 0.84 m。検出面の平面形態は楕円形を呈する。検出面はII層 (K-Ah) であり、重機による表土除去の際に検出した。検出時の埋土上面も、非常にしまりが強く固かった。また、SC4は今回検出した7基の陥し穴状遺構の中では最も残りがよく、残深 0.84 mは当遺跡の中で最も深い事例である。

検出できた杭状痕跡は 16 本、壁面付近から多く検出している。反対側の東側は西側に比べ、若干の空白が見られる。また、SC4の杭状痕跡の特徴としては複数の杭をまとめて底部に設置したと考えられる、八つ手状に分岐した杭状痕跡をHH' とKK' の2面で確認している。そして、JJ' とKK' で検出した杭状痕跡は、埋土上の検出面か

ら40 cm程下の場所からの検出であり、他の杭状痕跡と比べると高い場所での検出となっている。これは、壁面に杭が刺さっていた可能性を考えられるのではないだろうか。あるいは、床面から伸びた杭がこのJ J`との高さまで伸びていた可能性を示すのではないだろうか。

杭状痕跡は底面から10～20 cm程の深さに伸びる。杭の埋土は、灰黄褐色土(10YR4/2)、や黒色土(10YR3/1)であり、粘質は普通で、しまりはやや弱い。

陥し穴状遺構の埋土の主体は黒色土で、土色や土質などから3つに分けることができる。埋土上部は黒色土(10YR2/1)であり、粘質は普通でしまりは強く、K-Ahの粒子、暗褐色土のブロックが含まれる。埋土中部は黒色土(10YR2/1)であり、粘質はやや弱く、しまりは普通である。混合物は暗褐色土のブロックが全体的に入る。また、埋土中部には上からの落ち込みと考えられるしまりの強い暗褐色土のブロックも含まれる。下部の特徴は黒褐色土(10YR3/1～3/2)で、粘質は普通、しまりはやや弱く、K-Ah粒子、暗褐色土のブロックを含む。その他に、長径40 cm程の大きな礫を杭痕の直上で検出した。

SC6 (第29・35図)

SC6は4区北西に位置し、長径1.2m、短径1.1m、残深0.6m、検出面の平面形態は楕円形を呈する。SC6の周辺はK-Ahの残りが悪い場所であったため、Ⅲ層での検出である。検出時の埋土の上面は、他の陥し穴状遺構より締まりは弱かった。

検出できた杭状痕跡は4本と他の遺構よりも少ない。杭状痕跡は埋土上面から60～70 cm程下の底面での検出である。杭状痕跡の配置は、壁側にやや寄っている。SC6の底面では、規則性のある杭の配置状況は確認できなかった。そしてSC6は、当遺跡で今回検出した陥し穴状遺構の中で最も杭状痕跡が少ない検出事例である。

検出した杭状痕跡の穴は、直径6 cm程度で、床面からの深さは10 cm、床面から上に2 cm程杭状痕跡が伸びているものもある。杭の埋土はにぶい黄褐色土、褐色土、暗褐色土など明るめの土色を中心とした土色が存在し、粘質はやや弱いものから強いものまで幅があるが、しまりは全て弱い特徴を持つ。

遺構の埋土の主体は、黒褐色土である。埋土は大きく

上部・中部・下部の3つに分けることができる。

埋土上部の主体は黒色土(7.5YR2/1～10YR2/1)であり、粘質、しまりはやや弱い。混合物は、白色・橙色・褐色などの粒子、パミスが少量入る。また上部から中部にかけては、しまりの非常に弱い黒色土の攪乱が入っている。

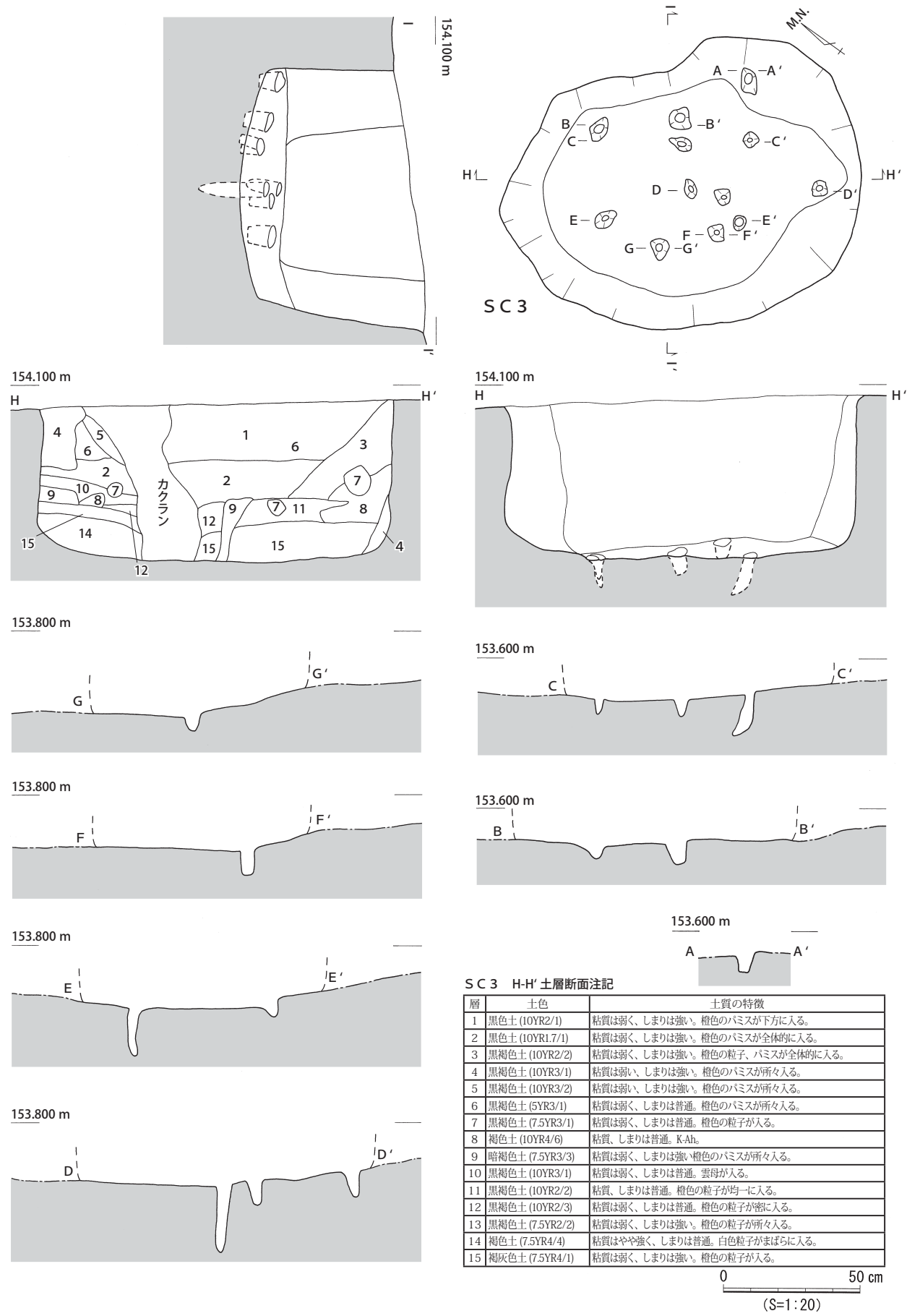
埋土中部の主体は、黒褐色土(10YR3/1～10YR3/2)で粘質はやや弱く、しまりは普通。混合物は白色・橙色・褐色などの粒子、橙色のパミス、白色、橙色の小礫、雲母を含む。埋土下部の主体は、にぶい褐色土(7.5YR5/3～5/4)であり、粘質は普通からやや強く、しまりはやや弱い。混合物は白色・橙色の粒子、礫を含む。SC6は、他の陥し穴状遺構と異なり、埋土中に明確なK-Ahの堆積が確認できていない。そのため、SC6は、K-Ah降灰以前に作られた可能性も考えられる。

SC7 (第29・36図)

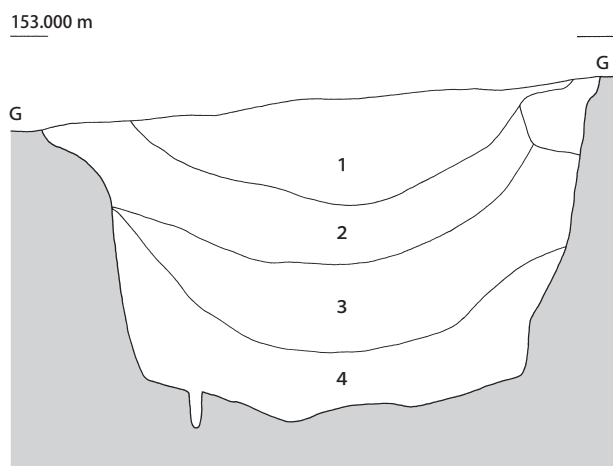
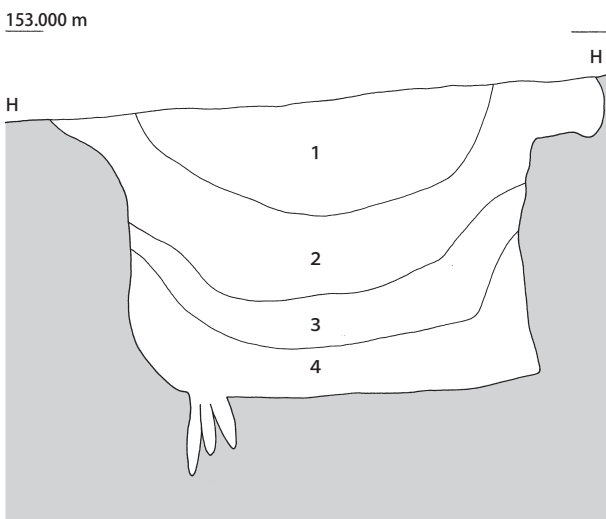
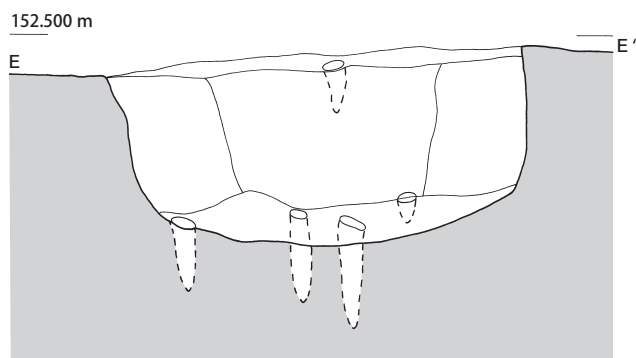
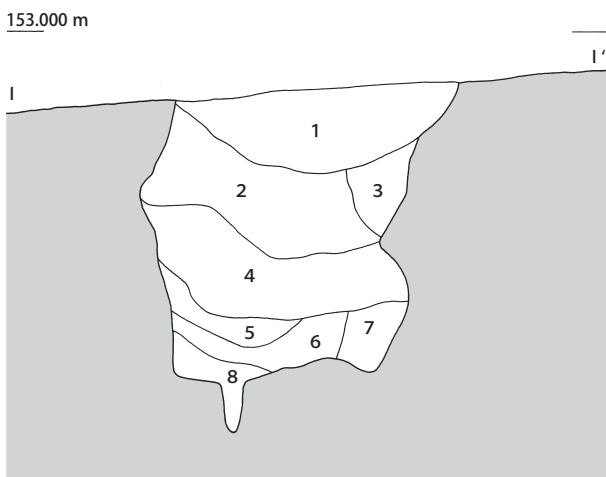
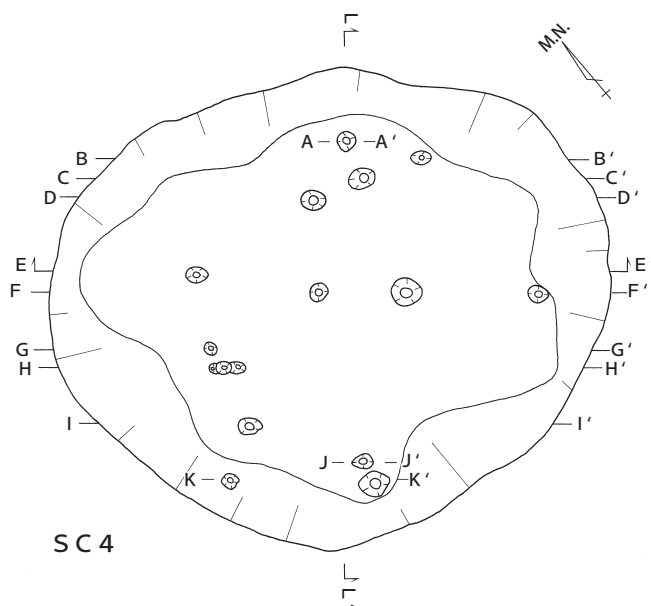
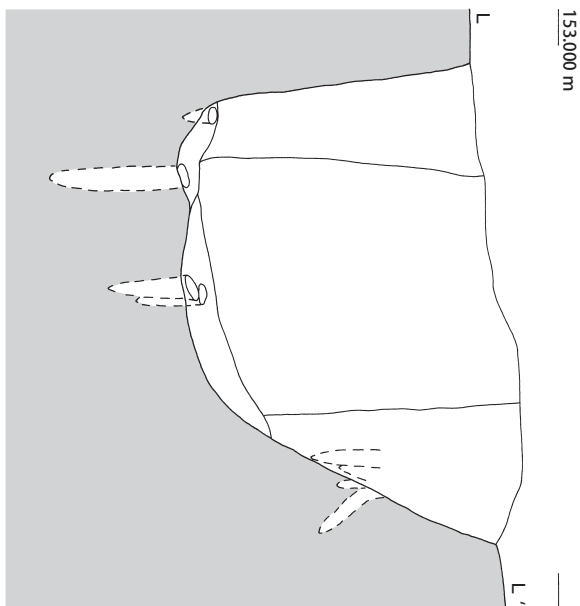
SC7は5区に位置し、長径1.28m、短径0.6m、残深0.26m、検出面の平面形態は楕円形を呈する。検出面は他の陥し穴状遺構と異なり、Ⅲ層での検出であった。検出時、SC7の検出面には木が生えており当初はその根の攪乱土坑の可能性も考えられたが木を伐採し、半截を行ったところ底面より横1列に並ぶ杭状痕跡を確認したため陥し穴状遺構とした。検出できた杭状痕跡は6本で、中央部に横1列に並んでいる。他の陥し穴状遺構と比べると、杭状痕跡の数は少ない。しかし、杭の配置は他と異なり長軸上に並んで配置されている。杭状痕跡の検出面は、SC7の底面である。

杭状痕跡の穴の直径は6 cm程度で、床面からの深さは18 cm～30 cmである。杭の埋土の主体は黒褐色土で、粘質、しまりはやや弱い。

遺構埋土の主体は黒褐色土で、粘質・しまりは普通。褐色土のブロックやK-Ah粒子が含まれる。埋没過程としては初めに、粘質はやや弱く、しまりは普通の一部に黒褐色を含むにぶい黄褐色土の埋没した後、粘質、しまりは普通である一部に褐色土のブロックやK-Ah粒子を含む黒褐色土が埋没している。K-Ah面で検出したSC1～SC4の底部付近の埋土と似た特徴を持ち、遺構のプランも楕円形という共通点を持つことから、SC7もK-Ah降灰以降に作られたと考えられる。



第32図 SC3実測図

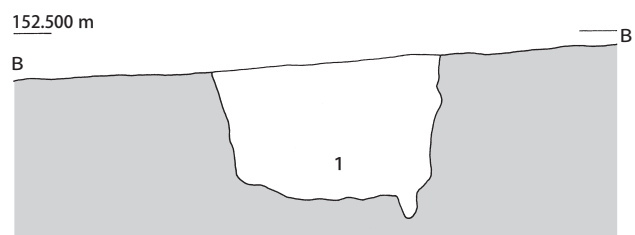
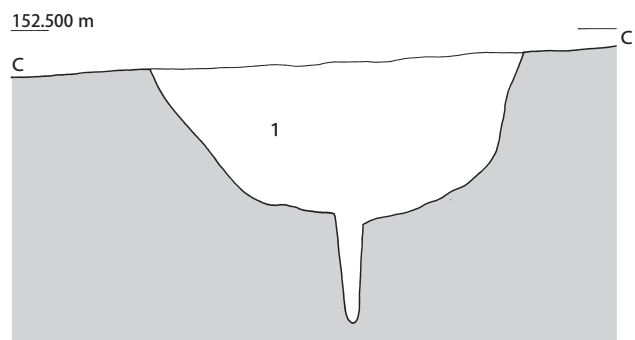
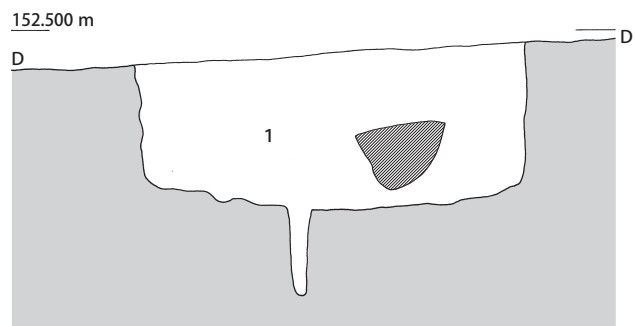
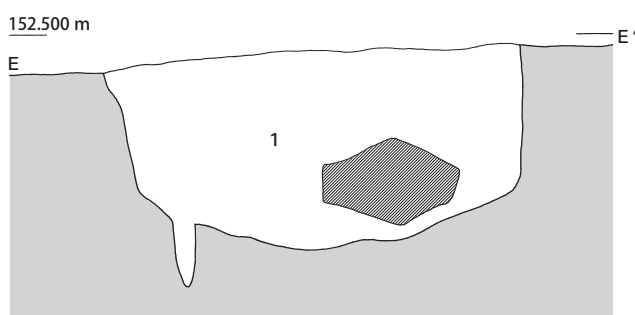
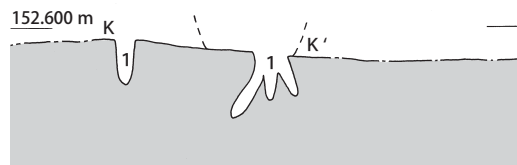
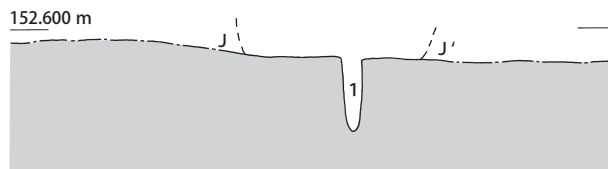
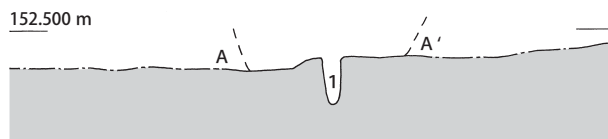
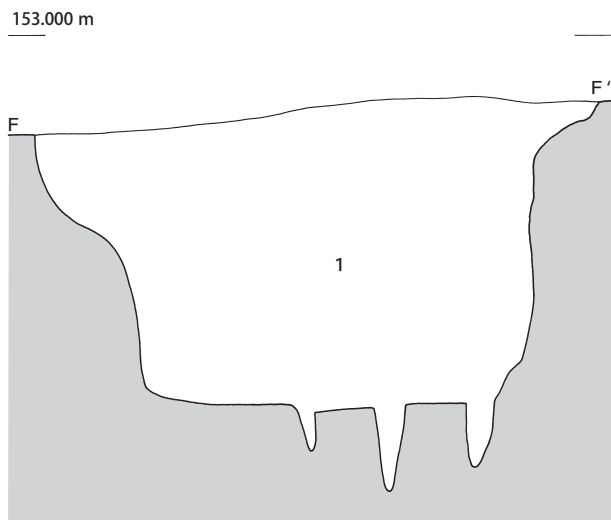


SC 4 H-H'・G-G' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒色土 (10YR2/1)	粘質は普通、しまりは強い。一部にK-Ah粒子を含む。
2	黒色土 (10YR2/1)	粘質は普通、しまりは強い。層全体にK-Ah粒子と暗褐色土のブロックを含む。
3	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は普通、しまりはやや弱い。K-Ah粒子と暗褐色土、黒色土を含む。
4	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は普通、しまりはやや弱い。層全体にK-Ah粒子、暗褐色土、黒色土を含む。
5	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質は普通、しまりはやや強い。部分的にK-Ah粒子を含む。

0 50 cm
(S=1:20)

第33図 SC 4実測図(1)



SC 4 A-A' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒色土 (10YR2/1)	粘質はやや弱く、しまりは普通である。

SC 4 J-J'・K-K' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は普通で、しまりはやや弱い。一部に黒色土、暗褐色土を含む。

SC 4 I-I' 土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒色土 (10YR2/1)	粘質は普通、しまりは強い。一部にK-Ah粒子、暗褐色土を含む。
2	黒色土 (10YR2/1)	粘質は普通、しまりは強い。一部にK-Ah粒子、暗褐色土のブロックを含む。
3	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は普通、しまりはやや弱い。層全体にK-Ah粒子、黒色土のブロックを含む。
4	黒褐色土 (10YR3/2)	粘質は普通、しまりはやや弱い。層全体にK-Ah粒子、黒色土、暗褐色土のブロックを含む。
5	暗褐色土 (10YR3/3)	粘質は普通、しまりは強い。黒色土のブロックとK-Ah粒子を含む。
6	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は普通、しまりはやや弱い。暗褐色土を少し含む。
7	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は普通、しまりはやや弱い。K-Ah粒子、暗褐色土を少し含む。
8	灰黄褐色土 (10YR4/2)	粘質としまりはやや弱い。K-Ah粒子、暗褐色土、黒褐色土を含む。

SC 4 F-F' 土層断面注記

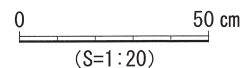
層	土色	土質の特徴
1	黒色土 (10YR2/1)	粘質はやや弱く、しまりは普通である。K-Ah粒子を含む。

SC 4 E-E'・D-D' 土層断面注記

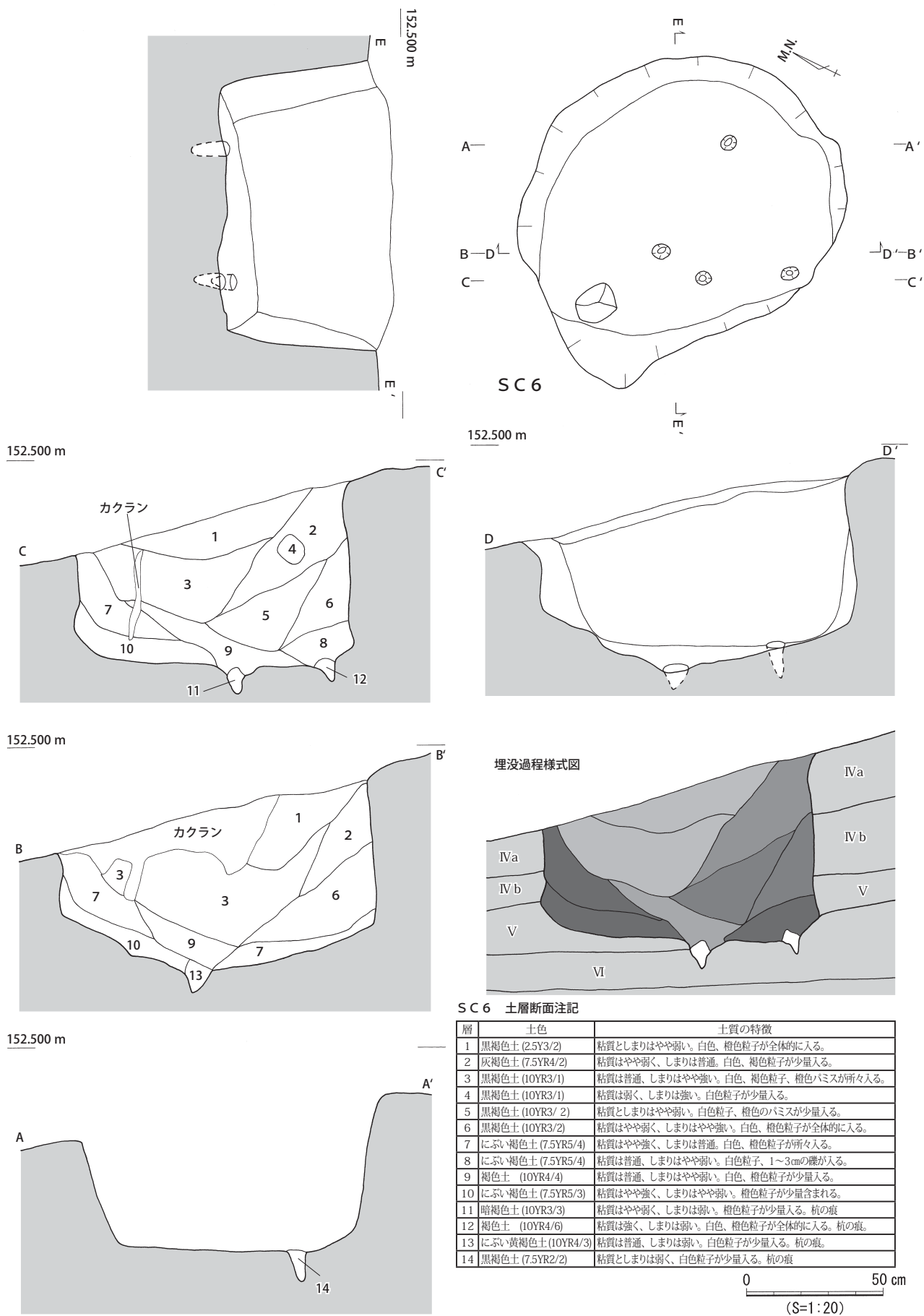
層	土色	土質の特徴
1	黒色土 (10YR2/1)	粘質はやや弱く、しまりは普通である。全体的に暗褐色土をブロック状に含み、K-Ah粒子を部分的に含む。大きな礫が底部付近に入る。

SC 4 C-C'・B-B' 土層断面注記

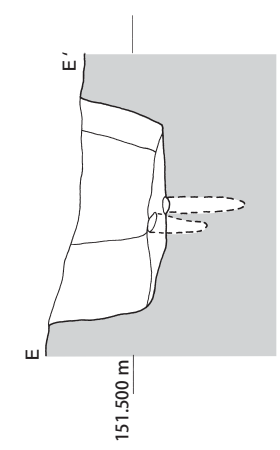
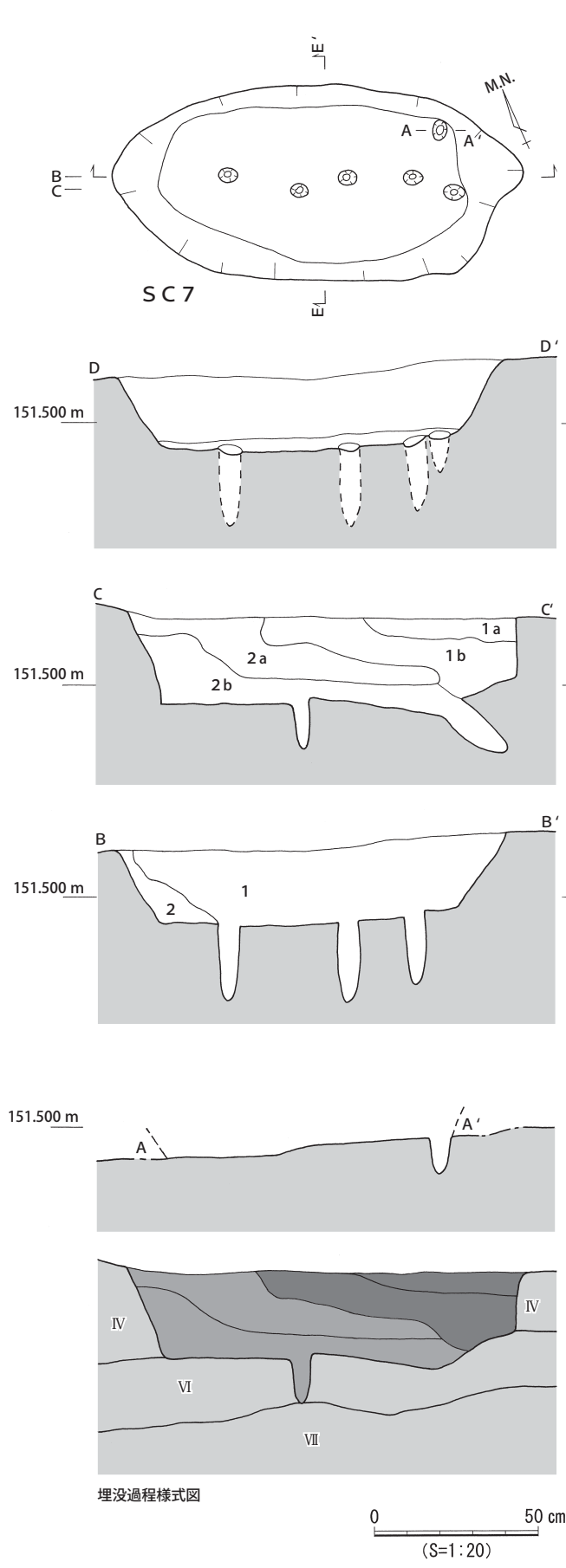
層	土色	土質の特徴
1	黒色土 (10YR2/1)	粘質はやや弱く、しまりは普通である。全体的に暗褐色土をブロック状に含む。



第34図 SC 4実測図(2)



第35図 SC 6実測図



SC7 C-C' 土層断面断面

層	土色	土質の特徴
1a	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質、しまりは普通。一部に褐色土のブロックやK-Ahを含む。
1b	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質、しまりはやや弱い。一部に褐色土のブロックやK-Ahを含む。
2a	にぶい黄褐色土 (10YR3/3)	粘質はやや弱く、しまりは普通。一部に黒褐色土を含む。
2b	にぶい黄褐色土 (10YR3/3)	粘質はやや弱く、しまりはやや弱く。一部に黒褐色土を含み土色は暗い。

SC7 B-B' 土層断面

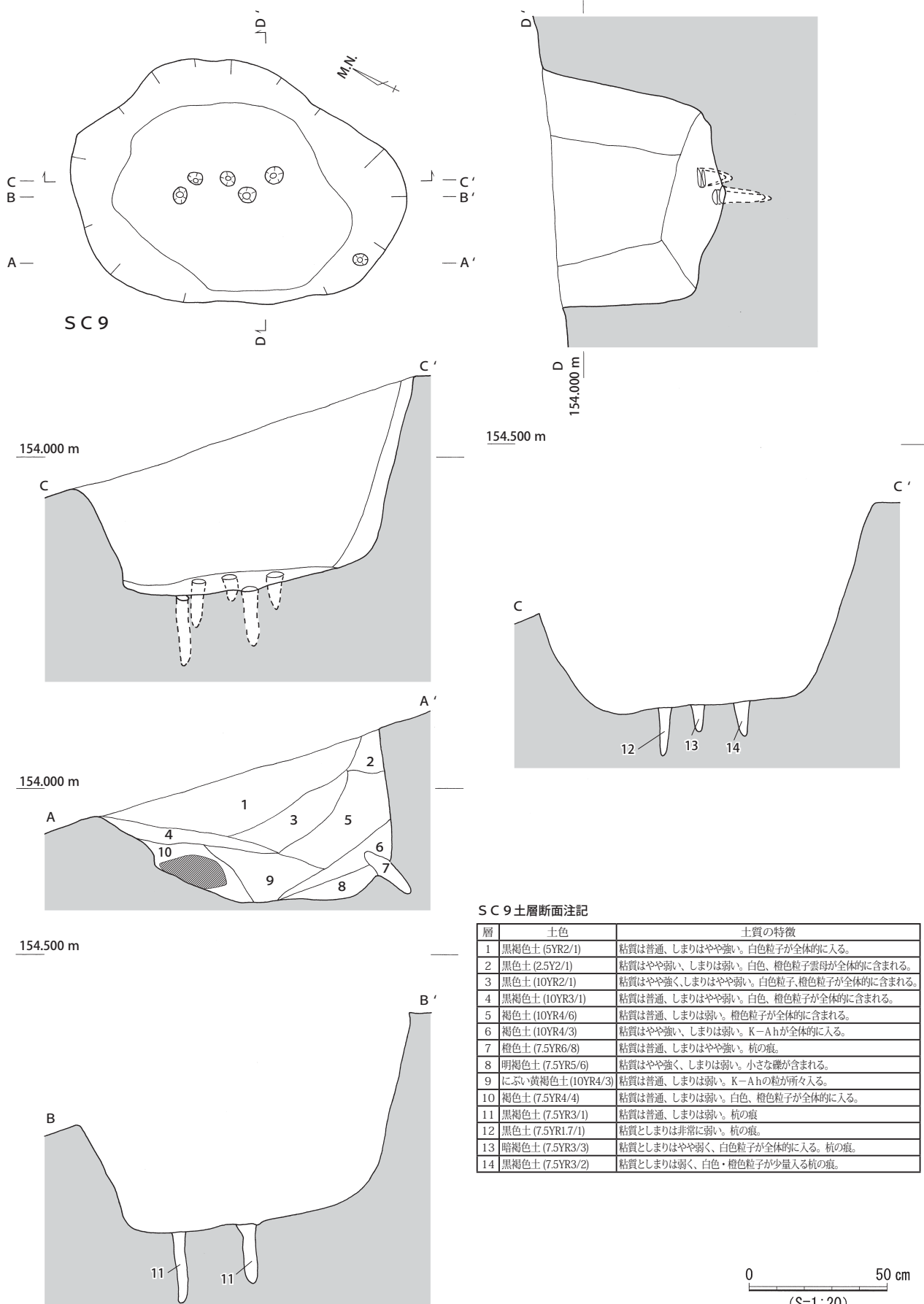
層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質、しまりは普通。一部に褐色土のブロックや黒色土を含む。
2	にぶい黄褐色土 (10YR3/3)	粘質はやや弱く、しまりはやや弱く。一部に黒褐色土を含み土色は暗い。

SC9 (第29・37図)

SC9は6区に位置し、IV層で検出した。長径1.2m、短径0.84m、残深0.5m、検出面の平面形態は楕円形を呈する。SC9を検出した付近はIV層の堆積が薄く、IV層のすぐ下は大きな礫を含むVII層となっていた。そのため、杭状痕跡の検出は期待していなかったが6本の杭状痕跡を検出することができた。杭状痕跡は中央部に集中して横一列に並んで検出し、一部壁面付近から検出したものもある。杭状痕跡の穴は直径6cm程度で、底面からの深さは10cm~20数cmである。杭状痕跡の埋土は橙色土、黒褐色土、暗褐色土の土色のものがあり、粘質は普通から弱く、しまりは弱い特徴を持つ。

埋土の特徴としては、検出面の埋土が黒褐色土で、粘質は普通、しまりがやや強く白色粒子が全体的に入る特徴を持つ。検出面から底面の間には、粘質はやや弱く、しまりは弱い黒色土が堆積している。床面付近には、K-Ahを含んだしまりの弱い褐色土が堆積している。床面の直下はVII層の人頭大の礫が含まれる層となっている。SC9の年代は、IV層検出ではあるが他の陥し穴状遺構と同様に楕円形であり、埋土の内容も似ていることからK-Ah降灰以降のものであると考えられる。

第36図 SC7実測図



SC9土層断面注記

層	土色	土質の特徴
1	黒褐色土 (5YR2/1)	粘質は普通、しまりはやや強い。白色粒子が全体的に入る。
2	黒色土 (2.5Y2/1)	粘質はやや弱い、しまりは弱い。白色、橙色粒子雲母が全体的に含まれる。
3	黒色土 (10YR2/1)	粘質はやや強く、しまりはやや弱い。白色粒子、橙色粒子が全体的に含まれる。
4	黒褐色土 (10YR3/1)	粘質は普通、しまりはやや弱い。白色、橙色粒子が全体的に含まれる。
5	褐色土 (10YR4/6)	粘質は普通、しまりは弱い。橙色粒子が全体的に含まれる。
6	褐色土 (10YR4/3)	粘質はやや強い、しまりは弱い。K-Ahが全体的に入る。
7	褐色土 (7.5YR6/8)	粘質は普通、しまりはやや強い。杭の痕。
8	明褐色土 (7.5YR5/6)	粘質はやや強く、しまりは弱い。小さな礫が含まれる。
9	にぶい黄褐色土 (10YR4/3)	粘質は普通、しまりは弱い。K-Ahの粒が所々入る。
10	褐色土 (7.5YR4/4)	粘質は普通、しまりは弱い。白色、橙色粒子が全体的に入る。
11	黒褐色土 (7.5YR3/1)	粘質は普通、しまりは弱い。杭の痕
12	黒色土 (7.5YR1/1)	粘質としまりは非常に弱い。杭の痕。
13	暗褐色土 (7.5YR3/3)	粘質としまりはやや弱く、白色粒子が全体的に入る。杭の痕。
14	黒褐色土 (7.5YR3/2)	粘質としまりは弱く、白色・橙色粒子が少量入る杭の痕。

第37図 SC9実測図

土坑 (第29・38図)

SC5

3区Ⅱ層(K-Ah)上面で、SC5を検出した。平面形状は、不定形である。土坑底面から杭状痕跡は検出できず、埋土も陥し穴状遺構と比較して非常に軟らかい特徴を持つ。土坑の長径は0.9m、検出面からの深さは0.3m。埋土の状況としては、本調査で出土した土坑の中で最も軟らかく、締まりも弱い。埋土中にはK-Ahがブロック状に入る。

検出した土坑の直径は1m。他の陥し穴状遺構と異なりSC5は長さが1m以下で、埋土の状況も異なる。陥し穴状遺構の特徴の一つである、杭状痕跡も確認できないことからSC5は土坑と考えられる。

2 出土遺物

K-Ah降灰以降の遺物としては、土器や石器などが出土している。掲載遺物の中には、表面採集などの資料も合わせて報告を行っている。

縄文土器 (第39図242~246)

縄文時代中期の土器が出土している。

242と243は胴部に縄文を施す。244から246は口頸部に近い部分で、頸部から口縁にかけてキャリパー状に内湾し、胴部には僅かに赤色顔料が付着するものもある。

弥生土器 (第39図247~249)

247は弥生時代中期(石川編年Ⅲ~Ⅳ期)の壺の肩部である。肩部には3条のコの字形凸帯が貼り付けられる。

248は甕の胴下部で、内面と外面はナデであろうが、剥離が激しく、確実な調整は不明瞭である。

249は、甕の底部で、内面と外面はナデであろうが、剥離が激しく、確実な調整は不明瞭である。底部には指押さえが見える。

石錘 (第39図250~274)

25点を掲載している。楕円形の薄手の砂岩を素材として多く用い、長軸に打ち欠きが施されている。273は右側のみの打ち欠きで、裏面は大きな剥離が施されている。274は赤みを帯びた砂岩で、左側に多くの剥離が施される。石錘の大半は砂岩であるが、頁岩製のものも少数みられる。

石斧 (第40図275~276)

打製石斧と磨製石斧の2点を掲載する。2点とも原位置は保たれておらず、採集資料である。2点とも下部が欠損

し、石材は非常によく似たホルンフェルスを用いている。

磨石 (第40図277)

1点のみの採集資料で、表面、裏面に磨り面が残る。右半分が欠損している。

剥片 (第40・41図278~283・285)

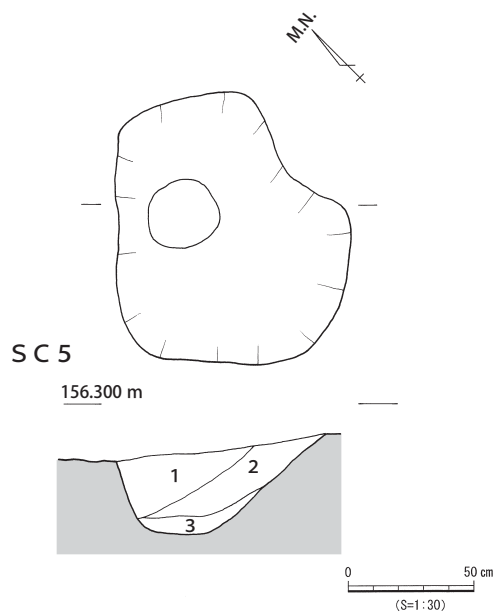
6点の採集資料で、石材は全て砂岩である。278~283は礫素材を用い、礫面の形状は扁平な円礫状となる蛤形の剥片である。285は背面に礫面を広く持ち、腹面は上部からの剥離が施される。

二次加工剥片 (第41図284)

1点のみの採集資料で、頁岩製の縦長剥片の側縁に二次加工が施される。

石核 (第41図285~289)

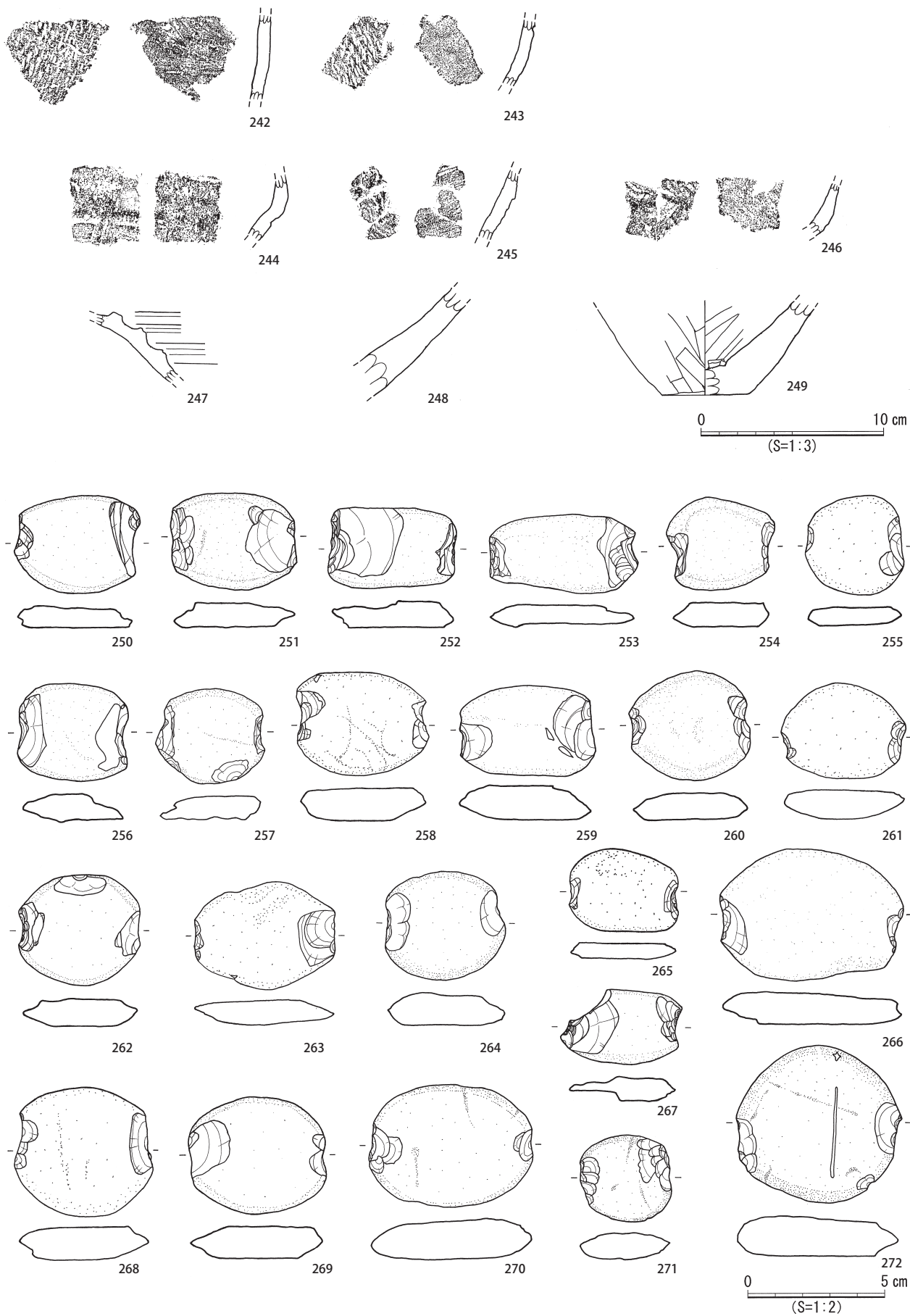
5点の採集資料で、286はホルンフェルス、285・289は砂岩、287・288は尾鈴山溶結凝灰岩である。全て礫素材を用いている。285は背面に礫面を残し、腹面は上部からの剥離が施される。286は背面、腹面共に上部からの剥離を施し、下部には礫面が広く残る。



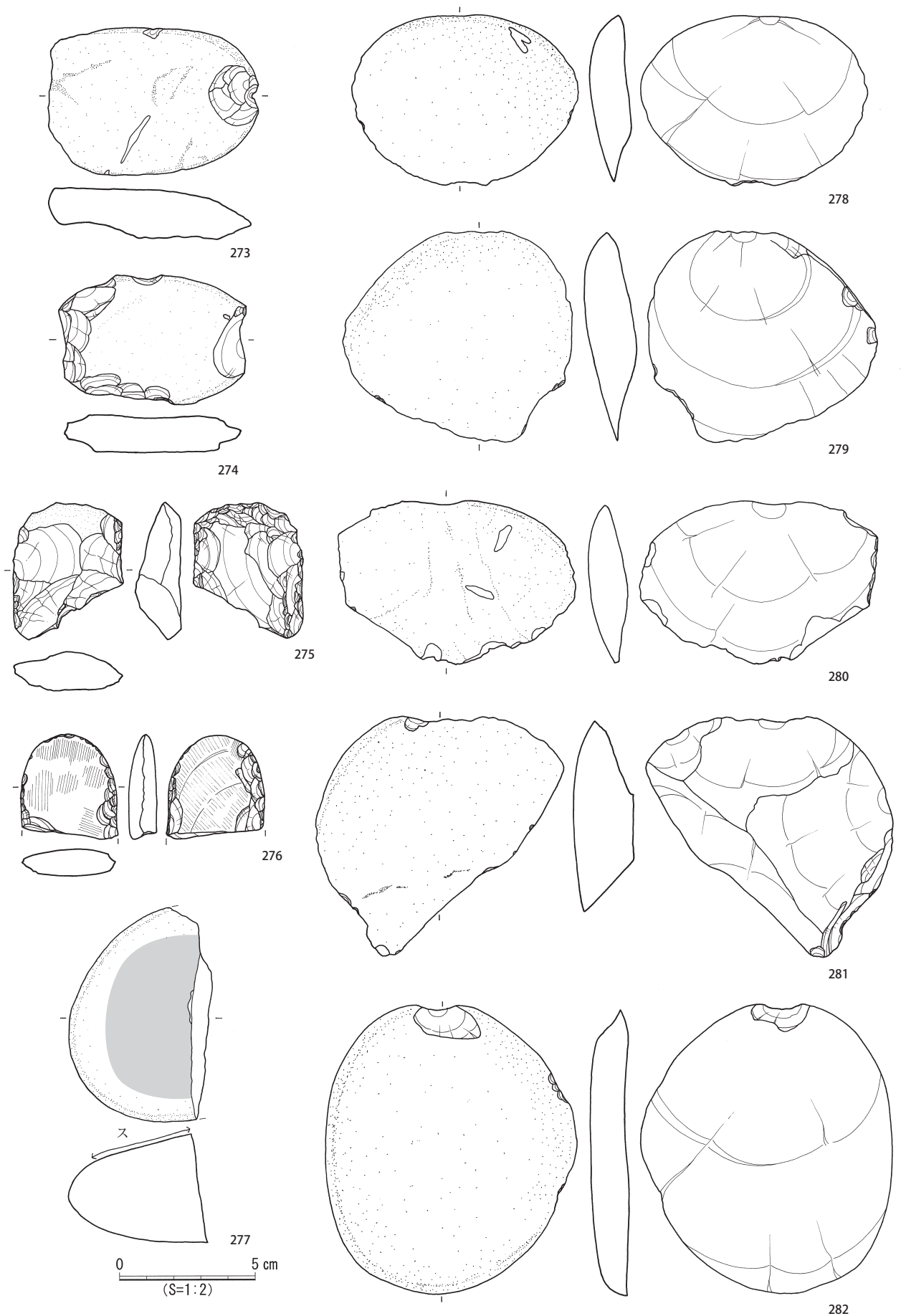
SC5土層断面注記

層	層序	土質の特徴
1	黒褐色土(10YR3/2)	粘質は普通、しまりはやや強い。アカホヤの粒(1~2cm程)が所々入る。
2	黒色土(10YR2/1)	粘質としまりは普通。3~4cm程のアカホヤがブロック状に入る。
3	黒褐色土(10YR2/2)	粘質としまりはやや弱い。

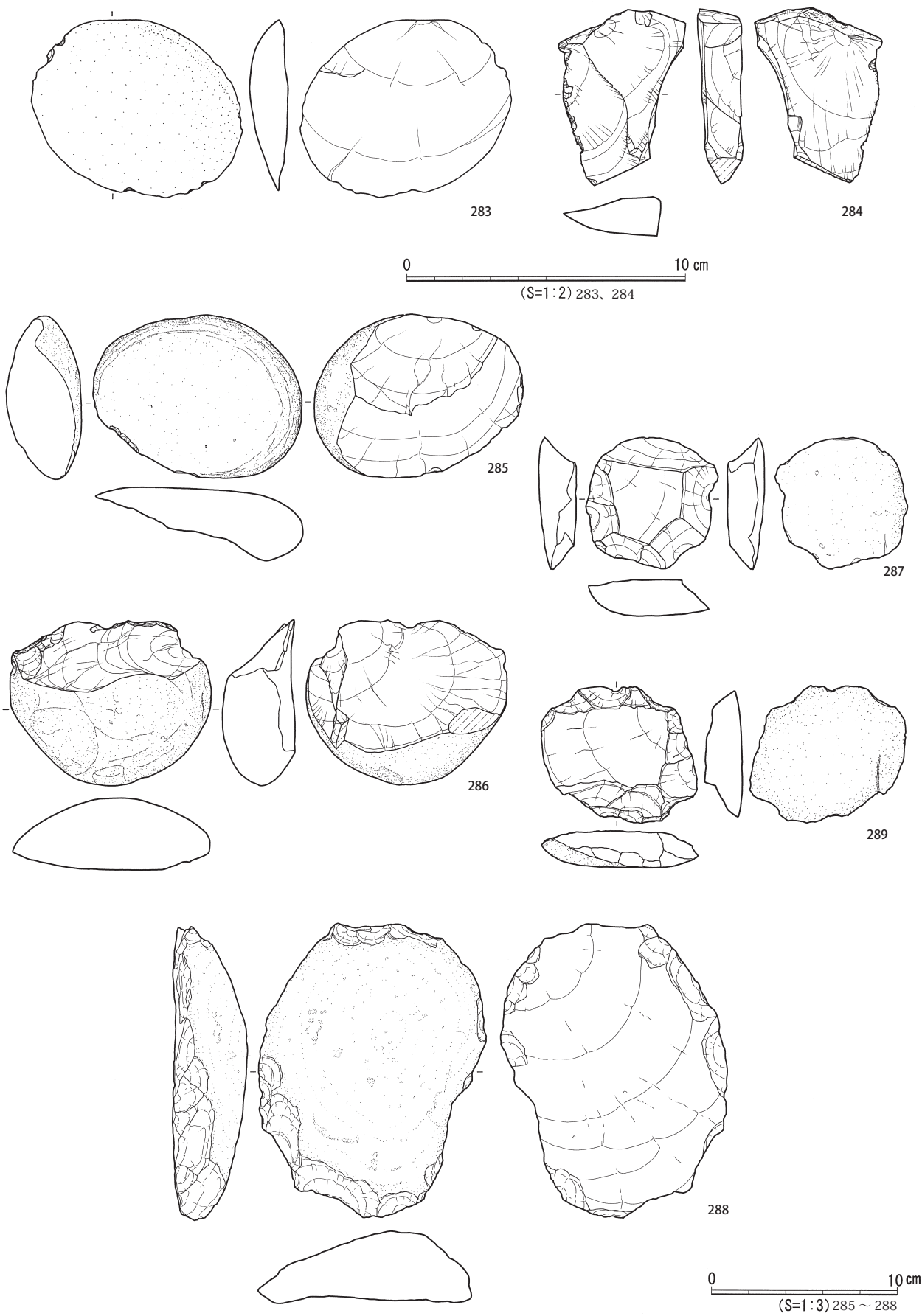
第38図 SC5実測図



第39圖 K - A h降灰以降遺物実測図(1)



第40図 K - A h降灰以降遺物実測図(2)



第41図 K - A h降灰以降遺物実測図 (3)

掲載番号	出土地点	器種部位	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
			外面	内面	外面	内面		
242	T43 II層	深胴部	ナデ後依糸文後、横斜方向の工具ナデ	横、斜方向の工具ナデ	黒褐色	にぶい褐色	0.5～0.4mmの角閃石、1mm～5mmの乳白、黒、灰褐色の粒	外面に煤付着 船元式
243	表採	深鉢胴部	ナデ後燃り糸文後工具による沈線後ナデ	ナデ後、横・斜め方向の工具ナデのちナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5～1mmの乳白、白、褐、灰褐、白色透明光沢粒、3～4mmの灰褐、白色透明の粒を含む	船元式
244	5区G10 III層上	深鉢頸部	ナデ後縦、斜め方向の工具ナデ、後沈線後ナデ	指などで後、多方向の工具ナデのちナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5mm～3mmの白色、半透明、乳白、灰褐色の粗大な粒を多く含み、1mm～3mmの雲母を僅かに含む	春日式系
245	表採	深鉢胴部	貝殻条痕のちナデ突帯貼り付け突帯に沿う様に浅い沈線文	ナデのち貝殻条痕のち軽くナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1mm以下の白色、透明光沢粒を含み器面全体が赤っぽい	春日式系
246	4区H6 III層	深鉢頸部	ナデ後斜方向の浅い沈線のち斜め報告の工具ナデ	ナデ後、横斜め方向の工具ナデ	橙色	にぶい黄褐色	0.5mm～1mmの白、乳白、黒、灰褐、透明光沢粒を含む	内・外面に僅かに赤色顔料が見られる春日式系

第10表 縄文時代中期土器観察表

掲載番号	出土地点	器種部位	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
			外面	内面	外面	内面		
247	5区表採	壺肩部	ナデ後貼り付け突帯、凹部分を指ナデのち突帯をナデ	ナデ後、横・斜め方向の工具ナデ	橙色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒、白、乳白、透明光沢粒を含む	外面の一部に煤付着
248	表採	甕胴～底部	ナデ後底部～上方向の工具ナデ	ナデ後底部～上部に縦・斜め方向の工具ナデ	にぶい褐色	黒褐色	1mm～4mmの乳白、灰褐、茶、白色半透明の細粒を多く含む	内・外面に一部煤が付着
249	表採	甕底部	ナデ後底部～上部へ縦、斜め方向の工具ナデ後ナデ	ナデ後底部～上部に縦・斜め方向の工具ナデ後ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	1mm～4.5mmの褐、灰褐、乳白、白色半透明、白の細粒を多く含む	

第11表 弥生土器観察表

掲載No.	調査区	グリッド	層	取り上げNo.	石材	X座標	Y座標	Z座標	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	観察所見
250	5	H12	I下II上	1356	頁岩	-76417.15	53103.88	157.404	石錘	3.60	4.25	0.80	21.20	長軸打ち欠き。
251	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	3.60	4.60	0.92	26.50	長軸打ち欠き。
252	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	4.70	3.05	1.00	21.00	長軸打ち欠き。
253	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	2.90	5.40	0.85	20.10	長軸打ち欠き。
254	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	3.95	6.65	0.95	21.10	長軸打ち欠き。
255	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	3.65	3.60	0.70	17.20	長軸打ち欠き。
256	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	3.60	4.10	1.05	20.40	長軸打ち欠き。
257	4	H9	II下III上	1333	砂岩	-76438.614	53076.857	154.791	石錘	3.50	3.95	0.89	16.70	長軸打ち欠き。
258	5	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	3.75	4.85	1.20	36.20	長軸打ち欠き。
259	5	—	—	—	砂岩	—	—	—	石錘	3.40	5.00	1.30	36.10	長軸打ち欠き、裏面中央が僅かに窪む。
260	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	41.50	4.35	1.00	33.30	長軸打ち欠き。
261	5	H12	I下II上	1355	砂岩	-76416.796	53103.143	157.142	石錘	3.55	4.55	1.10	23.50	長軸打ち欠き。
262	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	4.20	4.40	1.00	30.30	長軸打ち欠き、上部に剥離有り。
263	—	—	—	表採	頁岩	—	—	—	石錘	4.00	5.15	0.95	30.00	長軸打ち欠き。
264	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	4.00	4.40	1.20	32.30	長軸打ち欠き。
265	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	3.10	4.00	0.60	13.40	長軸打ち欠き。
266	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	4.85	6.70	1.20	62.45	長軸打ち欠き。
267	5	H12	I下II上	1359	頁岩	-76417.513	53105.688	157.492	石錘	4.45	2.75	0.90	13.70	長軸打ち欠き。
268	5	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	4.75	5.10	1.20	46.10	長軸打ち欠き。
269	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	4.30	5.00	1.20	44.30	長軸打ち欠き。
270	5	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	4.50	6.00	1.50	59.90	長軸打ち欠き。
271	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	3.20	3.35	1.00	15.30	長軸打ち欠き。
272	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石錘	5.75	6.10	1.50	77.10	長軸打ち欠き。
273	—	T36	I	1	砂岩	—	—	—	石錘	5.45	7.75	1.80	116.00	長軸打ち欠き、右側のみを打ち欠く。
274	—	T26	I	—	砂岩	—	—	—	石錘	4.80	6.90	1.40	73.60	長軸打ち欠き、左半部は側縁に多数の剥離を施す。
275	—	—	—	表採	ホルンフェルス	—	—	—	打製石斧	5.10	4.00	1.70	32.70	両側縁からの加工により基部整形、下部欠損。
276	—	—	—	—	ホルンフェルス	—	—	—	磨製石斧	3.85	3.60	1.00	20.00	両側からの加工により基部整形、下部欠損。
277	—	—	—	—	砂岩	—	—	—	磨石	5.35	7.90	4.00	230.20	円礫、表面、裏面に磨面が残る。右半部欠損。
278	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	剥片	6.30	8.40	1.60	89.60	礫素材、礫面形状は扁平な円礫状。
279	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	剥片	7.80	8.40	1.72	144.40	礫素材、礫面形状は扁平な円礫状。
280	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	剥片	6.10	8.80	1.40	93.20	礫素材、礫面形状は扁平な円礫状。
281	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	剥片	8.90	9.10	2.20	174.10	礫素材、裏面右に礫面から二次加工が入る。
282	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	剥片	10.80	9.30	1.40	208.50	礫素材、礫面形状は扁平な円礫状。
283	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	剥片	6.40	7.60	1.40	76.60	礫素材、礫面形状は扁平な円礫状。
284	1	—	—	—	頁岩	—	—	—	二次加工剥片	6.30	4.60	1.60	41.80	縦長剥片。
285	—	—	—	—	砂岩	—	—	—	石核	8.80	11.10	4.00	358.00	背面に幅広剥片の剥離面を確認できる。
286	—	—	—	—	ホルンフェルス	—	—	—	石核	8.85	10.80	3.90	459.00	背面の大半は自然面であるが、上部には剥離がほどこされておられ、腹面は広く剥離面が残る。
287	—	—	—	—	尾鈿山凝結凝灰岩	—	—	—	石核	7.30	8.30	2.00	141.30	背面は自然面、腹面は広い剥離面と側縁からの剥離が多数施されている。
288	—	—	—	表採	尾鈿山凝結凝灰岩	—	—	—	石核	1.58	1.22	4.10	822.00	背面に剥離面が僅かに見られ、腹面には広く剥離面が見られる。
289	—	—	—	表採	砂岩	—	—	—	石核	7.05	7.10	2.00	120.60	背面の側縁から中央に向かって多数の剥離が施されている。

第12表 K-A h 降灰以降石器観察表

第9節 自然科学分析の結果

1 目的

本遺跡の調査では、降灰層準を推定して遺物包含層の年代や層序に関する基礎的な情報を得るために、縄文時代早期の遺物包含層と後期旧石器時代の包含層の堆積層から資料を採取して層序対比の指標となる広域テフラ（火山灰）の分析を委託実施した。

この分析結果を一部抜粋・編集して以下に記す。

2 テフラ分析の結果

1. 試料

T37、T38 および3区南西壁面の3箇所断面の各層より合計21点を採取した。基本層序のⅢ～Ⅶ層と対応する。資料採取箇所及び試料番号は第4図・第5図に呈示した。

1～13の資料は色調などに違いはあるものの、いずれも火山ガラスが散在している黒ボクである。13は風化した軽石と考えられる碎屑物が微量散在している黒ボクである。14～16、21は、極細砂混じりのシルトであり、16・21は風化した軽石と考えられる碎屑物が微量含まれる。15は土壌化が認められる。17～19は火山灰土であり、黒ボク土からロームへの漸移的な様相を呈する。20は、ロームである。

2. 分析方法

分析の手順は以下の通りである。

- 1) 試料約40gを超音波洗浄装置により分散。
- 2) 250メッシュの分析篩を用い水洗。
- 3) 粒径1/16mm以下の粒子を除去。
- 4) 1/4mm-1/8mmの砂分ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離。
- 5) 重鉍物:偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定、屈折率測定は、火山灰ガラスを対象とした。

3. 結果

○重鉍物組成および火山ガラス比

T37の重鉍物組成は、1～11までは、斜方輝石と不透明鉍物（主に磁鉄鉍など）が多く、少量の単斜輝石を伴う組成を示す。

火山ガラス比では、Ⅲ層にバブル型火山ガラスが比較的多く含まれ、軽石型火山ガラスは少量である。Ⅳ層からⅤ層までの層位では、少量のバブル型と軽石型の火山ガラスが含まれる。両者を合わせた火山ガラス

比は、Ⅴ層からⅣb層まではほぼ同様であるが、Ⅳa層の下部では上位に向かって減少傾向を示し、Ⅳa層中部から上部にかけてはほぼ同量で推移。

T38の重鉍物組成は、各層により変化が認められる。Ⅳ層では、斜方輝石と不透明鉍物がほぼ同量程度で多く、少量の角閃石と微量の単斜輝石を伴い、Ⅴ層では、不透明鉍物が斜方輝石よりも多く、少量の角閃石を含む組成を示す。Ⅵb層では、上位のよりもさらに不透明鉍物が多くなり、斜方輝石は少なくなる。また、微量の単斜輝石と極めて微量の角閃石が含まれている。Ⅶ層では、不透明鉍物がほとんどを占め、不透明鉍物以外では斜方輝石が微量含まれる。

火山ガラス比では、Ⅳ層およびⅤ層に軽石型火山ガラスが比較的多く含まれ、少量のバブル型火山ガラスも含まれる。Ⅵb層には少量のバブル型と軽石型の火山ガラスが含まれるが、Ⅶ層には極めて微量のバブル型火山ガラスが含まれるのみである。

3区南西壁面の重鉍物組成では、Ⅴ層～Ⅶ層のいずれも不透明鉍物が最も多く、次いで斜方輝石の多い組成である。その中で、斜方輝石の量比はⅤ層が比較的高く、Ⅵ層は少量、Ⅶ層では微量含まれる。

火山ガラス比では、Ⅴ層の試料3点に少量のバブル型と軽石型の火山ガラスが含まれるが、Ⅵ層には両者ともに微量となり、Ⅶ層には極めて微量のバブル型火山ガラスが含まれるのみである。

火山ガラスの屈折率に関しては第42図・第13表に掲載する通りである。

4. 考察

今回の火山ガラス比分析により検出された火山ガラスは、その形態と屈折率および層位的な産状から、2種類のテフラに由来すると考えられる。T37Ⅲ層で検出された火山ガラスは、火山ガラスの特徴から、K-Ahに由来すると判断される。

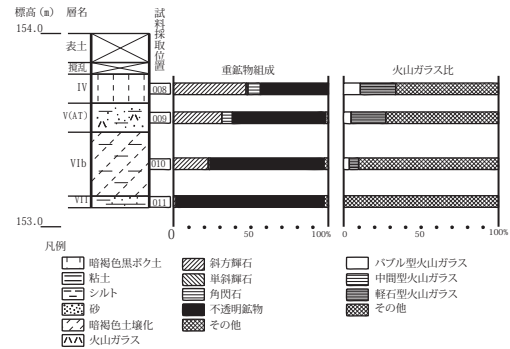
T37Ⅳa層以下とT38のⅣ層とⅤ層および3区南西壁面のⅤ層から少量検出された火山ガラスは、その特徴（特に屈折率）およびK-Ahより下位であることから、ATに由来すると考えられる。本遺跡におけるATの降灰層準は、Ⅴ層下部に推定される。

試料観察時には、T37北のⅣa層、T38のⅣ層および3区南西壁面Ⅶ層中にそれぞれ風化した軽石を認

めているが、重鉱物組成や火山ガラス比の結果には反映されなかったと言える。ただし、K-AhとATの間に挟まれる層位と宮崎平野におけるテフラの分布状況(長岡,1986;町田・新井,2003)などを考慮すると、T37北のIV a層とT38のIV層に認められた軽石は、霧島火山を給源とする霧島小林テフラ(Kr-Kb)に由来する可能性がある。また、3区南西壁面VII層に認められた軽石は、霧島イワオコシテフラ(Kr-Iw)に由来する可能性がある。

引用文献

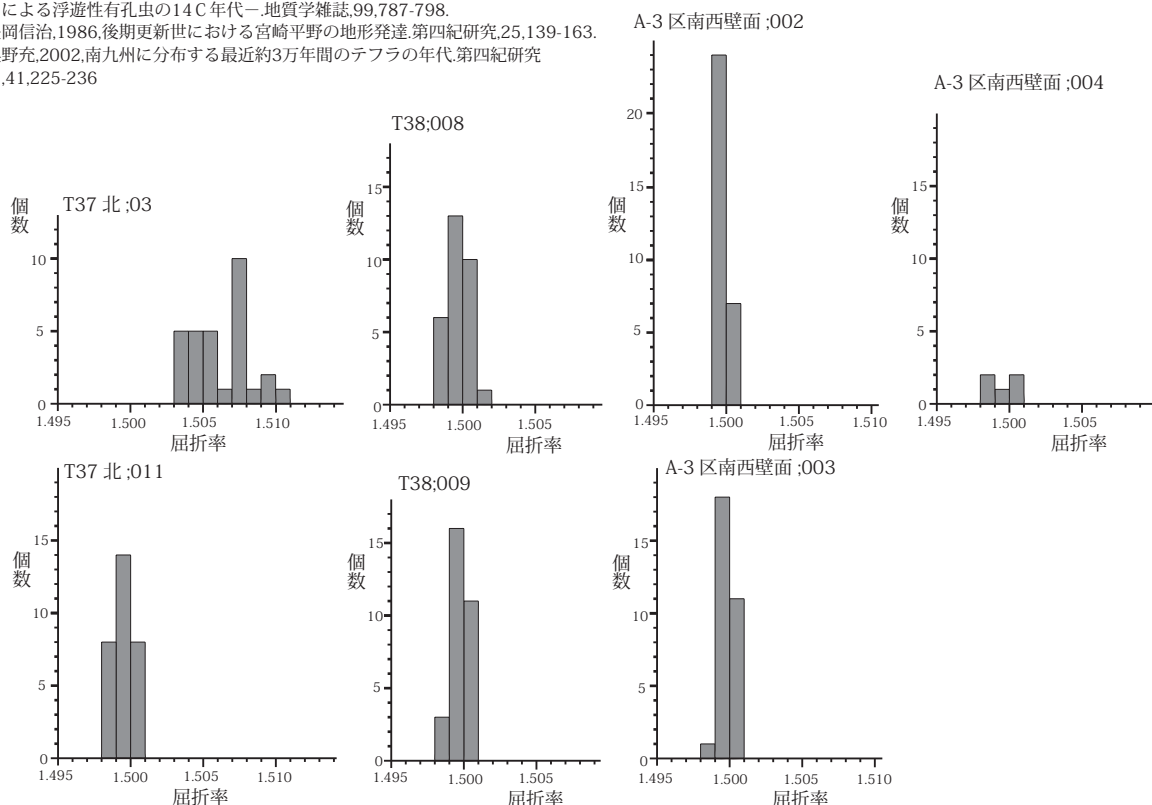
福沢仁之,1955,天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物,第四紀研究,34,135-149.
 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別,地質学雑誌,101,123-133.
 早津賢治,1988,テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー-A Tにまつわる議論に關係して,考古学研究,34, 18-32.
 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫,1995,南九州、始良カルデラ起源の大開降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代,第四紀研究,34,377-379.
 町田 洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-科学,46,339-347.
 町田 洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰,第四紀研究,17,143-163.
 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗,1987,始良Tn火山灰の14C年代,第四紀研究,26,79-83.
 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎,2001,始良Tn火山灰の14C年代のクロスチェック(演旨),地球惑星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM),2001,Qm-010.
 Miyairi,Y.,Yoshida,K.,Miyazaki,Y.,MA T suzaki,H.,Kaneoka,I.,2004,Improved 14C dating of A Tephra layer(A T tephra,Japan) using AMS on selected organic fractions,Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224,555-559.
 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・朝 朝彦,1993,四国沖ピストンコア試料を用いたA T火山灰噴出年代の再検討-タンデム加速器質量分析法による浮遊性有孔虫の14C年代-,地質学雑誌,99,787-798.
 長岡信治,1986,後期更新世における宮崎平野の地形発達,第四紀研究,25,139-163.
 奥野充,2002,南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代,第四紀研究,41,225-236



第42図 T38試料の火山ガラス比の屈折率

採取地点	層名	試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	斜方ウレイト	不透明鉱物	その他	合計	ハブ型火山ガラス	中野型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計	
T37北	III	02	0	124	41	0	0	0	84	1	250	58	0	20	172	250
		03	0	136	43	2	0	0	88	1	250	64	0	31	155	250
		04	0	168	24	0	0	1	57	0	250	20	2	11	217	250
		05	1	155	36	0	0	0	58	0	250	23	0	20	207	250
		06	0	96	40	1	0	0	113	0	250	20	3	10	217	250
	IVa	07	0	149	41	0	0	0	60	0	250	11	4	16	219	250
		08	0	104	39	1	0	0	106	0	250	21	2	25	202	250
		09	0	105	45	1	0	0	99	0	250	19	7	27	197	250
		010	0	129	19	2	0	1	99	0	250	24	2	34	190	250
		011	0	160	35	4	0	0	51	0	250	24	2	22	202	250
T38	IVb	012	0	141	17	5	0	0	86	1	250	31	1	26	192	250
		013	0	83	12	3	0	0	152	0	250	17	3	24	196	250
	V	008	0	117	3	20	0	0	110	0	250	27	0	57	166	250
		009	0	78	0	17	0	0	150	5	250	12	2	56	180	250
		010	0	56	3	2	1	0	184	4	250	9	2	15	224	250
		011	0	4	0	0	0	0	233	7	250	1	0	0	249	250
A-3区南西壁面	V	005	0	70	4	6	1	0	160	9	250	16	1	34	202	250
		001	0	95	8	3	0	0	143	11	250	32	1	24	193	250
	VI	002	0	46	4	3	0	0	192	5	250	22	1	26	202	250
		003	0	35	0	1	0	0	203	9	250	6	1	9	234	250
004	0	6	0	0	0	0	237	7	250	1	0	0	249	250		

第13表 重鉱物・火山ガラス比分析結果



第43図 各試料の火山ガラスの屈折率

第10節 総括

今回の調査では、主に後期旧石器時代から弥生時代にかけての遺構・遺物が検出された。

この節では、(1) 後期旧石器時代の遺構や遺物群、(2) 縄文時代草創期・早期の遺物群、(3) K-Ah 降灰以降に掘削された陥し穴状遺構群について若干の検討を加えることで総括としたい。

1 後期旧石器時代

A T 下位の遺構と石器群 A T (基本土層のV層) よりも下位で検出された礫群や石器群を後期旧石器時代I期に位置付けた(第III章第5節)。A T 下位の調査事例は、本遺跡が位置する旧東郷町地区内では初例となった。

このI期に伴う遺構や遺物は、1区と斜面地の3区で検出された(第7・8図)。礫群は、1区から検出したS I 4の1基のみだが、本遺跡の南側に位置する都農町舟川第2遺跡でも同様な礫群が確認されている。礫群の構成礫は、両遺跡とも全て尾鈴山溶結凝灰岩であり、全て赤化するなどの共通性がある。石器は剥片が中心であるが、ナイフ形石器やスクレイパーなどの製品も少量出土している。

後期旧石器時代I期における生業の場は、礫群や石器群の検出位置から、北東方向に開く谷部の最奥部ないし谷際付近という平坦面(1区)と斜面地(3区)であったと読み取れる。1区についてはその北側が遺構・遺物の中心域である可能性が高い。3区で集中して出土した石器群の存在は、それより南側の丘陵頂部に生業活動の主体が存在した可能性を示している。

なお、VII層中に認められた軽石は霧島イワオコシテフラ(K r - I w)に由来する可能性が指摘されている。

A T 上位の遺構と石器群 A T (基本土層のV層) よりも上位層(IV層)で検出された遺構や石器群を後期旧石器時代II期に位置付けた(第III章第6節)。

このII期に伴う遺構・遺物は、I期と同様の1区と3区に加え、4区においてもその存在が確認できた。礫群は、1区の東側と3区北側から4基が検出された。石器は剥片等が主体であるがナイフ形石器や剥片尖頭器、スクレイパー、石錐などの製品も出土している。

A T 降灰後のII期においても平坦面(1区)と斜面地(3区)が生業の場であったと読み取り、石器の出土量や石材の多様性はI期よりもより生業活動が活発であったことを示している。

後期旧石器時代の様相 本礫群の検出位置や石器群の出土位置は、A T 降灰を挟んでも平坦部分の1区や緩斜面の3区であった。このことから1・3区部分が引き続き生業の場として選択されていたと考えられる。さらに、礫群や石器群の様相からは、1・3区部分が遊動生活に伴うキャンプサイトであったと位置づけられる。

一方、本遺跡の北側にある向原中尾第2遺跡では、A T 上位層で礫や石器が出土した。本遺跡における後期旧石器時代II期に対応するものと考えられる。A T 上位層が堆積した後期旧石器時代は、丘陵頂部(向原中尾第2遺跡)と丘陵を縫う開析谷の際部分や丘陵の緩斜面(向原中尾第4遺跡)を生業の場とする遺跡立地の多様性が認められた。

2 縄文時代草創期・早期

有舌尖頭器の出土 縄文時代草創期に所属すると考えられるいわゆる柳又型有舌尖頭器(第26図169)は本遺跡を特色づける石器といえる。日向市域においては初例となった。

有舌尖頭器の出土事例は少ないため、その出土事例を宮崎県全域に目を向けると、管見の限りにおいて高千穂町セバット遺跡・阿蘇原上遺跡や高鍋町北牛牧第5遺跡、宮崎市清武町坂元遺跡、都城市高城町雀ヶ野遺跡の5遺跡から合計5点を確認できる。縄文時代草創期の遺跡数自体の少なさとも関連するが、有舌尖頭器はそのものが僅少であり、遺跡内で出土しても1~2本程度であって石鏃の多さとは対照的である。

本遺跡における有舌尖頭器は、出土例のない空白域であった宮崎平野部北縁域における新たな資料となっただけではない。本遺跡内で後期旧石器時代(細石刃文化期)から縄文時代へと連続的に移行する様相を示唆しており、本遺跡周辺における縄文時代の幕開け前後の人間活動の動きを復元していく上での重要な資料となった。

早期の土器・石器 縄文時代早期に属する土器は、貝殻条痕文と山形押型文系の土器、別府原式、中原式、手向山式といった縄文時代早期前葉~中葉頃の一群である。出土量全体では、手向山式土器が主体的である。隣接する向原中尾第2遺跡においても、早期前葉~中葉前後に位置づけられる各型式の土器群が出土したが、手向山式土器の出土量が最も多い状況であり、本遺跡の状況と類似している。

石器は完形の石鏃が比較的多く得られ、石斧や石匙なども少数出土した。石錘も早期の遺物としておきたい。

縄文時代早期の様相 本遺跡では早期に属する遺構は検出されなかったが、遺物の種類やその出土傾向からは手向山式土器の時期を中心に活発な活動が行われたと推察される。石鏃の出土は、周辺域における狩猟活動の存在が推定され、小振りな石錘群は丘陵地帯に数多く派生する小河川における漁撈活動が見いだせる。さらに石斧や石匙の存在は伐採や加工を類推させる。これらの特徴に加えて集石遺構は検出されなかったことから、本遺跡は食料獲得と加工に関する遺跡空間であったと復元される。

一方で、向原中尾第2遺跡では調理施設と考えられる集石遺構が17基検出されており、本遺跡とは対照的に定住的な集落の様相を端的に示している。前述のように各型式の土器の出土量から、手向山式土器の時期が盛行期と考えられる。このように、縄文時代早期中葉頃においては向原中尾第2遺跡を拠点とする集落域とその周囲に活動域が展開していたものと考えられる、本遺跡もその活動域の一部として機能していたと位置づけられる。

3 陥し穴状遺構群について

形態と法量 本遺跡ではK-Ah上面にて8基の土坑が検出された。このうち7基は底面に杭状の小穴が多数検出されたので陥し穴状遺構と判断して報告した(第Ⅲ章第8節)。これらの陥し穴状遺構は、等高線が大きく湾曲する浅い谷地形面に沿って、等高線に直交するように一定の間隔で配置されていた。遺構の主軸は等高線に平行で、SC6・7・9より北側は沼沢地となる。つまり、陥し穴状遺構は丘陵の頂部(南東側)から水場方向(北東側)に延びる、「けもの道」上に配置されたと考えられる。斜面地を利用した狩猟方法の実態を把握することができた。

遺構底面の平面形は楕円形で、各計測値の平均値は、長軸長1.289m、短軸長0.911m、深さ(残存高)は0.537mである。深さは、基本土層のI層の層厚を勘案しても最大1m前後と想定される。

縄文時代早期例との比較 高鍋・新富町域の検出例と比較して平面規模は小さく、掘り方は約0.5~1mほど浅いようである(西畦原第2遺跡(二次・三次))。

本遺跡に近い尾立第2遺跡や俵石第1遺跡においても縄文時代早期の陥し穴状遺構が多数検出されている。本遺跡例(K-Ah降灰以後)と比較すると、深さでは共通するが、規模は小さく、小ピット状の杭列が底面に配

されない場合がほとんどである。このことは、狩猟方法と対象とする動物の違いが反映されたものと解釈される。

遺構の時期 宮崎県下のK-Ah降灰以降の陥し穴状遺構は、本例も含めて21遺跡にのぼる。本遺跡の周辺では、日向市板平遺跡や上野原遺跡、都農町俵石第1遺跡などで検出例がある。掘り方の深さは1m前後と類似するが、平面形は短冊状の長方形であり、底面に一列に杭列が配されるなど、本遺跡例とは異なる様態である。板平遺跡、上野原遺跡の検出例では、弥生時代後期ないし古墳時代以降の時期が想定されている。

本遺跡例については、遺構の平面形状は縄文時代早期例に類似し、底面に小ピット状の杭痕を有するものは板平・上野原遺跡例に近い。さらに、本遺跡では縄文時代早期中葉頃に位置づけられる船元式土器が少量ではあるが出土していることから、陥し穴状遺構群の時期を概ね縄文時代中期前後・後期代に充当しておきたい。

4 向原中尾第4遺跡の位置づけ

向原中尾第4遺跡では、AT降灰以前の後期旧石器時代から弥生時代中期にかけての遺構・遺物が確認され、この間における土地利用の変遷や石器相の一端を明らかにすることができた。

向原中尾第4遺跡は、斜面地に立地することから、後期旧石器時代から縄文時代にかけて野営地や狩猟の場として、断続的に利用された場として位置づけられる。

今後は、本遺跡と向原中尾第1・2遺跡を向原中尾遺跡群と一括して捉えることで、日向市東南部域における人間活動の展開を追う作業が残されている。周辺遺跡の調査成果の援用や検討を深めることで、旧東郷町域における当遺跡を含めた地域の歴史を復元していくことが重要である。

【参考文献】

- 菊池 実 1987「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題—大原Ⅱ遺跡・村主遺跡検出の陥し穴群分析から—」『研究紀要—4—』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高千穂町教育委員会 1984『セベット遺跡』高千穂町教育委員会文化財調査報告書第3集
- 清武町教育委員会 2001『坂本遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第9集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『阿蘇原上遺跡』発掘調査報告書第71集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『北牛牧第5遺跡 銀座第3A遺跡』発掘調査報告書第80集
- 東郷町教育委員会 2003『上野原遺跡』東郷町文化財調査報告書第6集
- 九州縄文研究会・南九州縄文研究会 2004『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』第14回九州縄文研究会鹿児島大会
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『西畦原第2遺跡(二次・三次)』発掘調査報告書第109集
- 高城町教育委員会 2005『雀ヶ野遺跡群』高城町文化財報告書第18集
- 日向市教育委員会 2007『仲野原遺跡』日向市文化財調査報告書
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『俵石第1遺跡』発掘調査報告書第200集



向原中尾第1・2遺跡調査区全景



向原中尾第1遺跡B-1区中央部V層遺物出土状況(南西から)

図版2 向原中尾第1・2遺跡



向原中尾第2遺跡S I 1 検出状況（南東から）



向原中尾第2遺跡S I 2 検出状況（南西から）



向原中尾第2遺跡S I 5 検出状況（東から）



向原中尾第2遺跡S I 9 検出状況（東から）



向原中尾第2遺跡S I 4～6 検出状況（西から）



向原中尾第2遺跡S I 11 検出状況（南東から）



向原中尾第2遺跡S I 12 検出状況（北から）



向原中尾第2遺跡S I 13と検出層位（北から）



向原中尾第2遺跡S I 17 検出状況（東から）



向原中尾第2遺跡S I 14 検出状況（南から）



向原中尾第2遺跡S I 14の配石（東から）



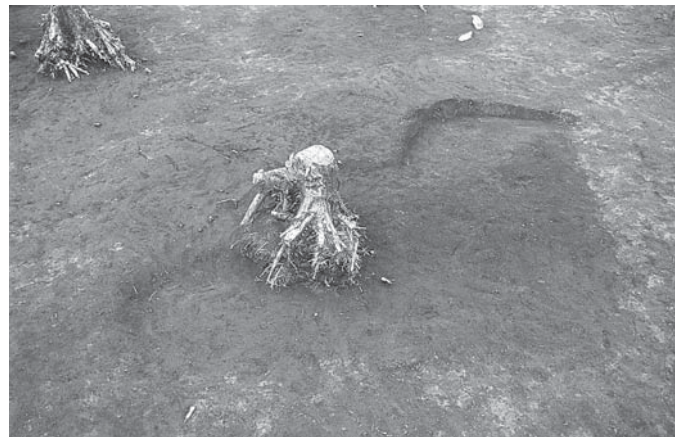
向原中尾第2遺跡石斧埋納遺構と土層堆積（東から）



向原中尾第2遺跡竪穴建物跡の広がり



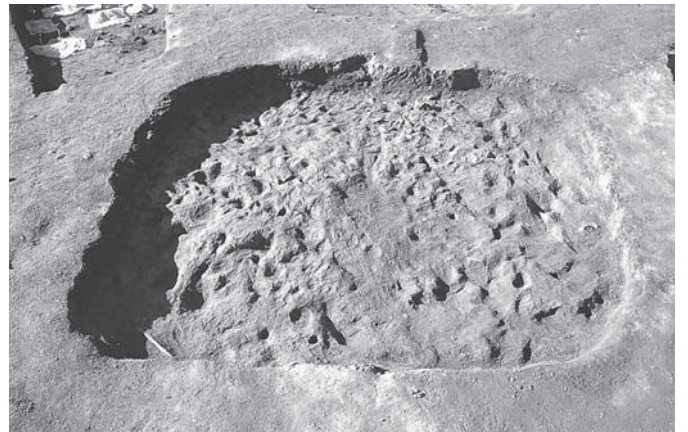
向原中尾第2遺跡S A 1・7完掘状況（南東から）



向原中尾第2遺跡S A 2検出状況（南東から）



向原中尾第2遺跡S A 2遺物出土状況（北東から）



向原中尾第2遺跡S A 2完掘状況（南東から）



向原中尾第2遺跡S A 3検出状況（東から）



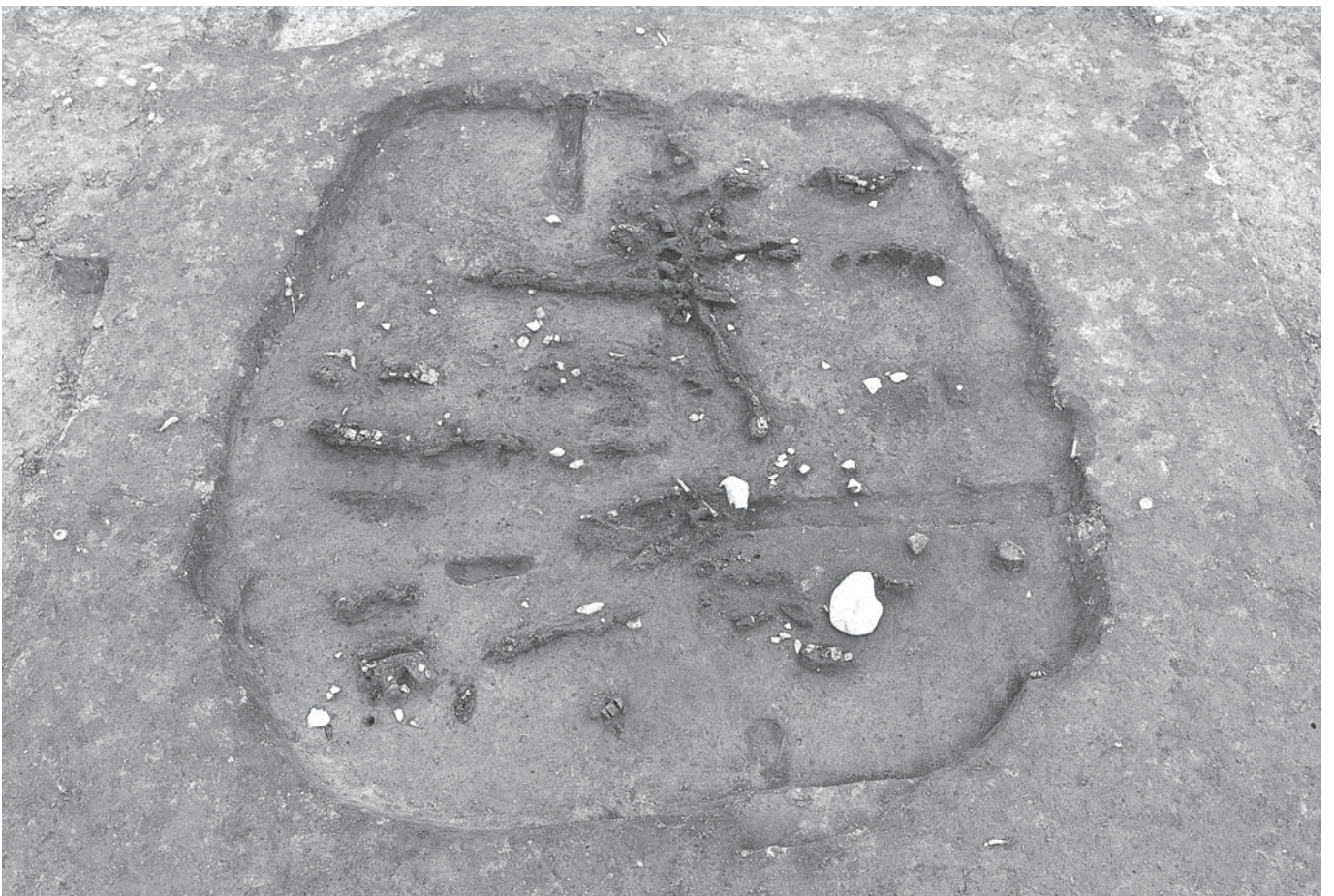
向原中尾第2遺跡S A 3土層堆積と炭化材との関係（南から）



向原中尾第2遺跡S A 3炭化材と焼土の広がり（東から）



向原中尾第2遺跡S A 3炭化材検出状況（南東から）

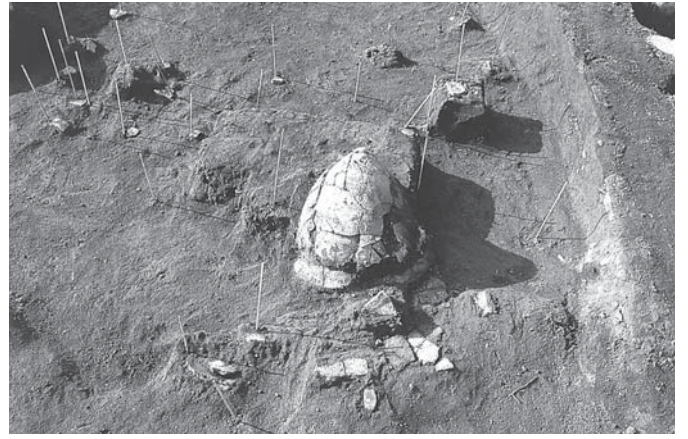


向原中尾第2遺跡S A 3全景（西から）

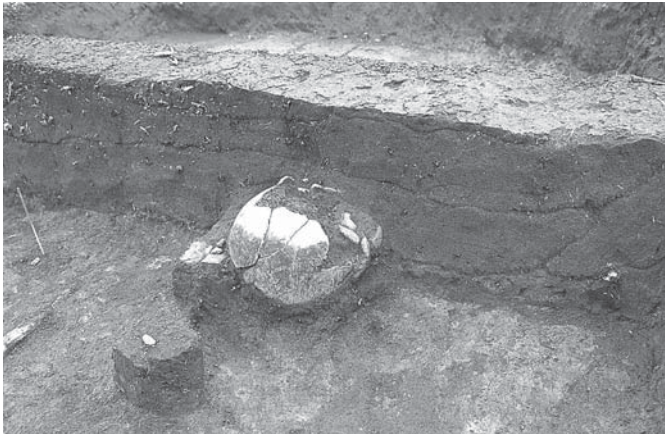
図版6 向原中尾第1・2遺跡



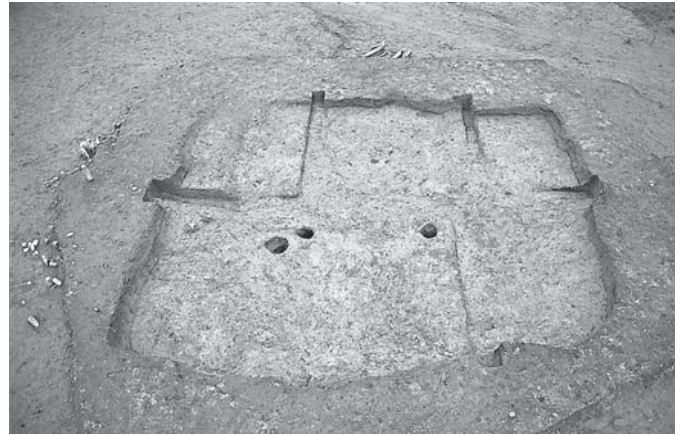
向原中尾第2遺跡 S A 4 埋土上遺物出土状況(北東から)



向原中尾第2遺跡 S A 4 伏せて置かれた弥生土器の甕(南東から)



向原中尾第2遺跡 S A 4 土層堆積状況と遺物(北東から)



向原中尾第2遺跡 S A 4 完掘状況(北西から)



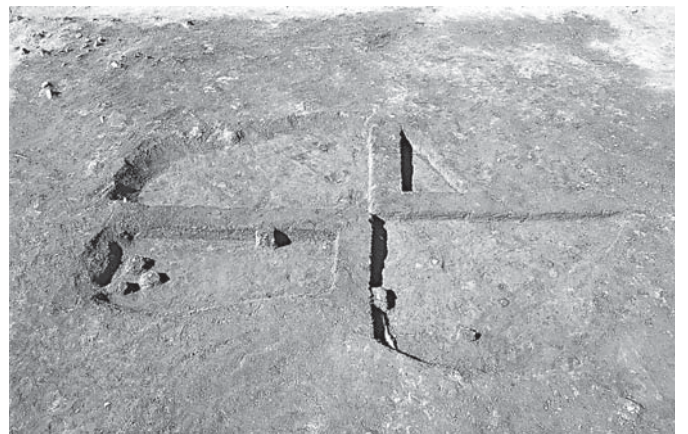
向原中尾第2遺跡 S A 5 遺物出土状況(東から)



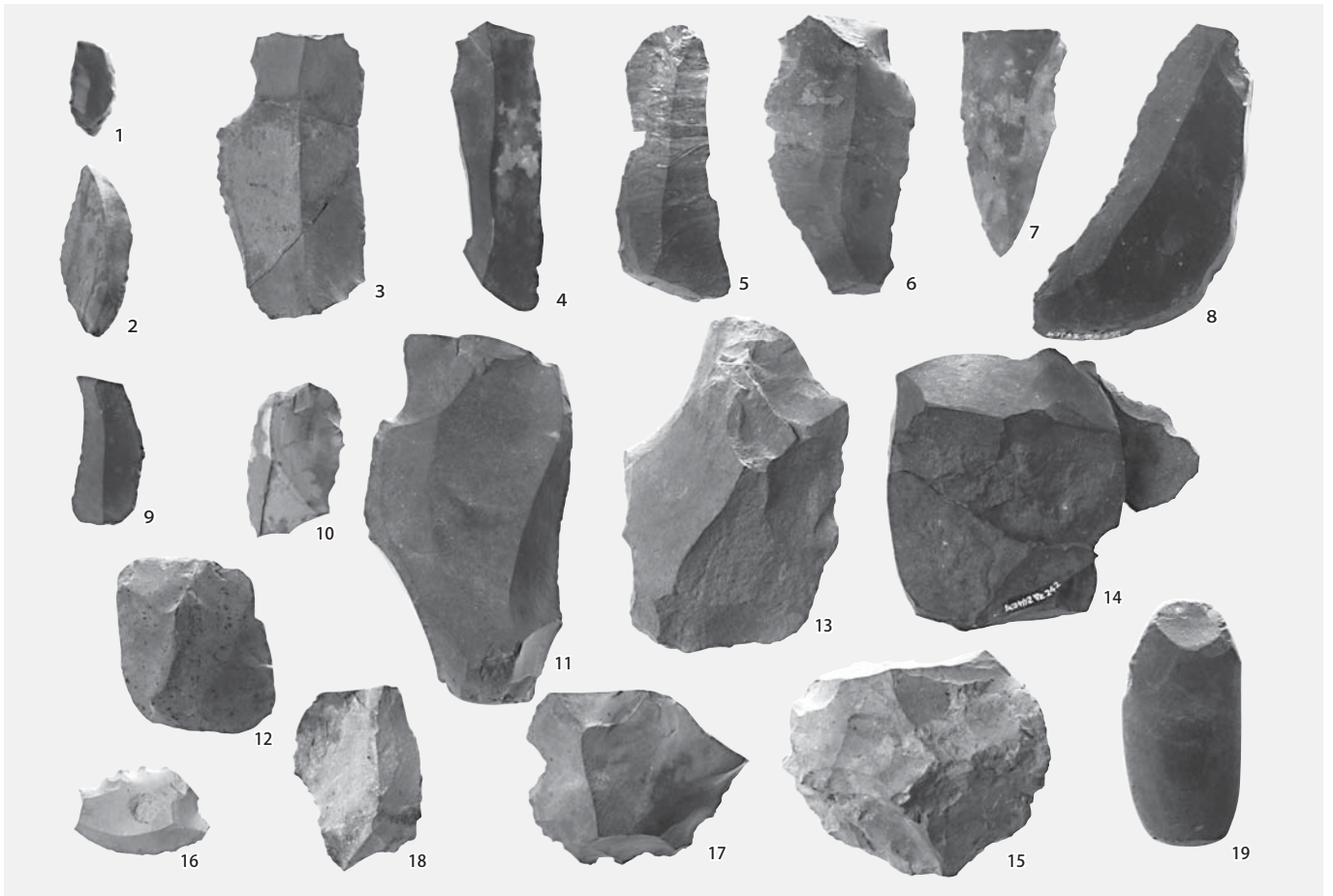
向原中尾第2遺跡 S A 5 土層堆積(南から)



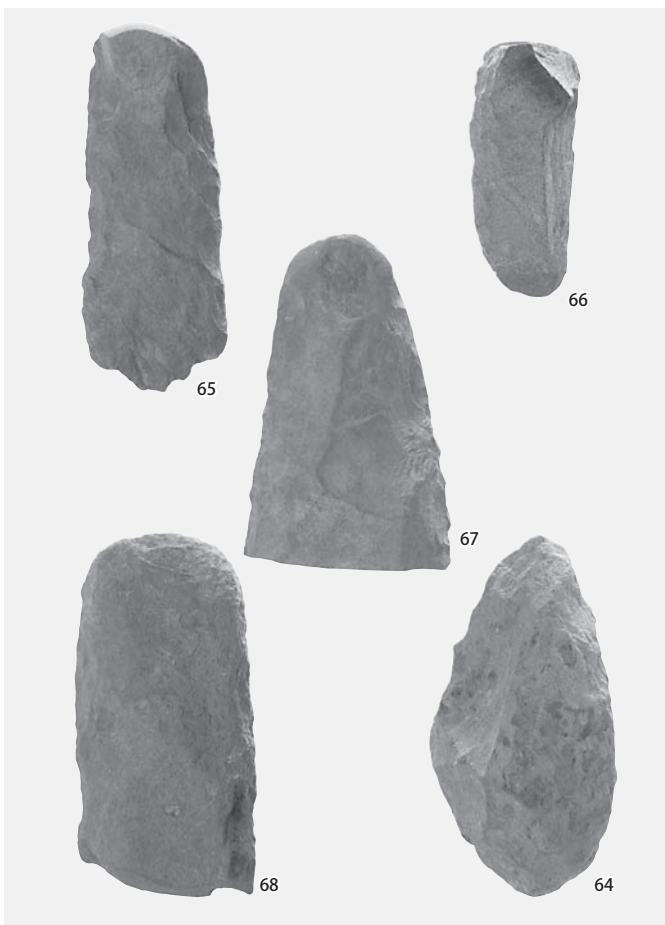
向原中尾第2遺跡 S A 5 完掘状況(南東から)



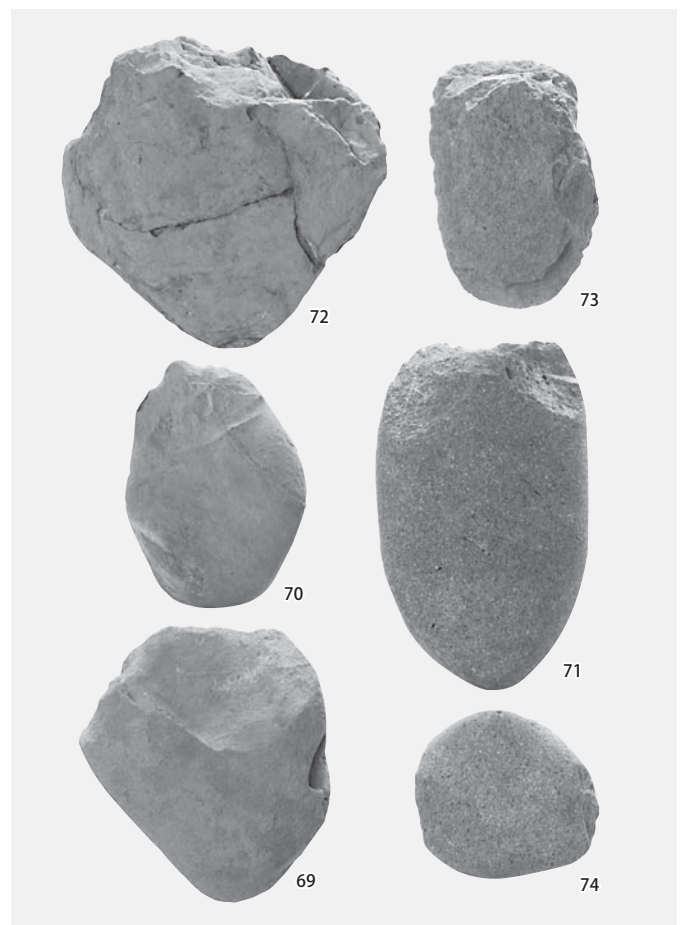
向原中尾第2遺跡 S A 6 遺物出土状況(南東から)



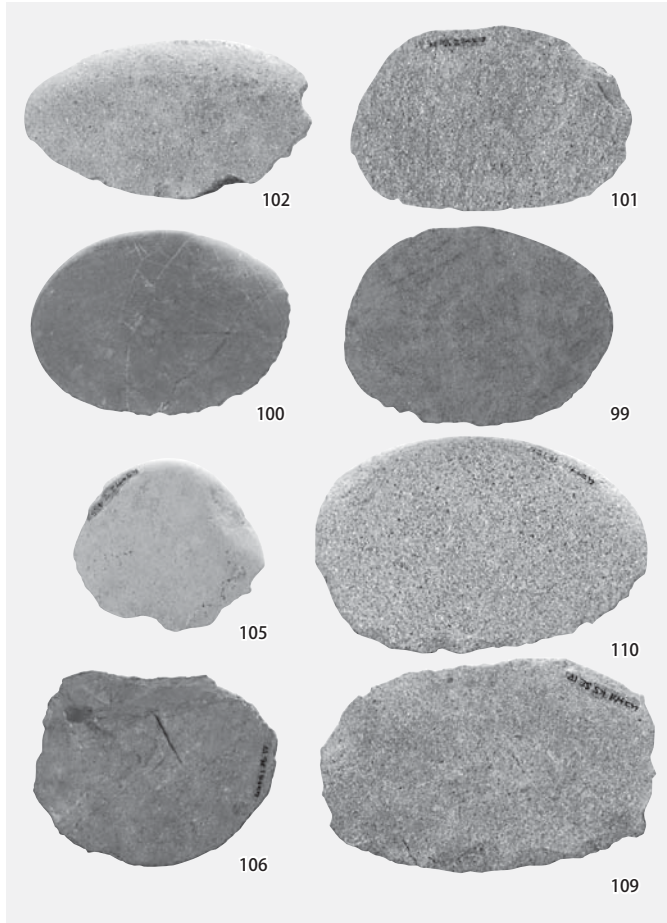
向原中尾第1・2遺跡旧石器時代遺物



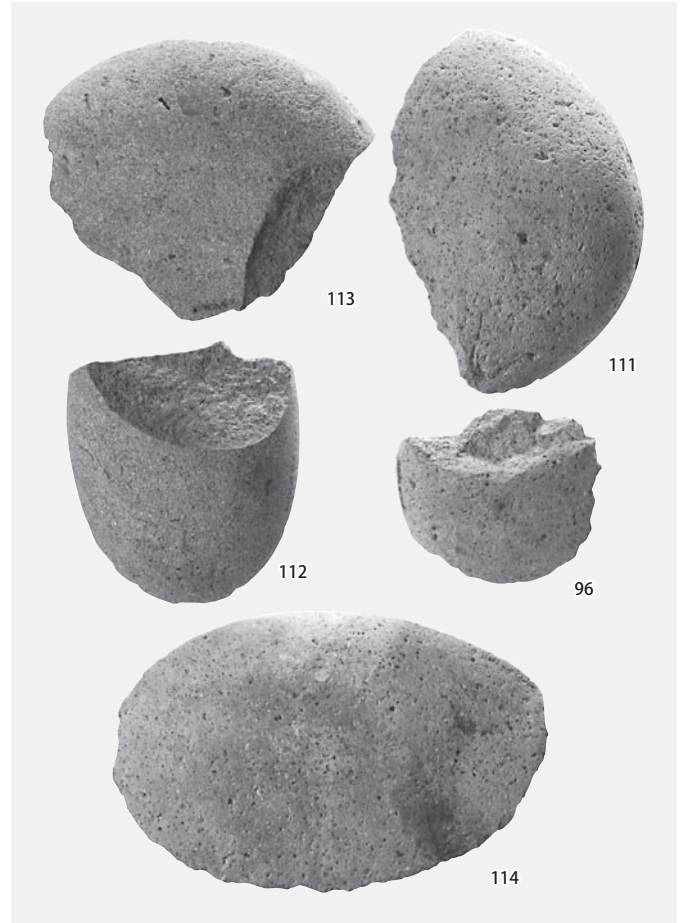
向原中尾第1・2遺跡縄文時代早期石器①



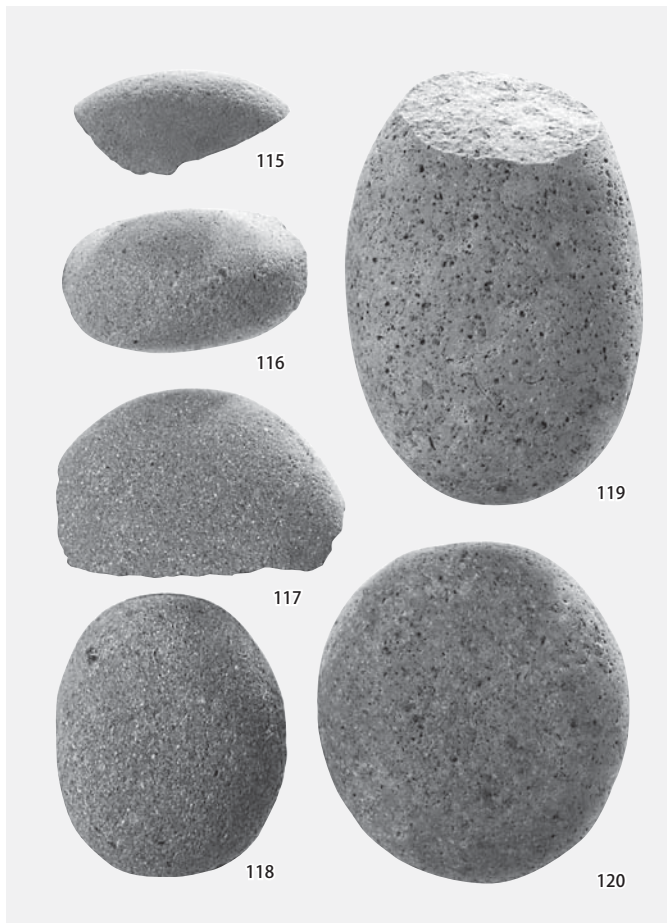
向原中尾第1・2遺跡縄文時代早期石器②



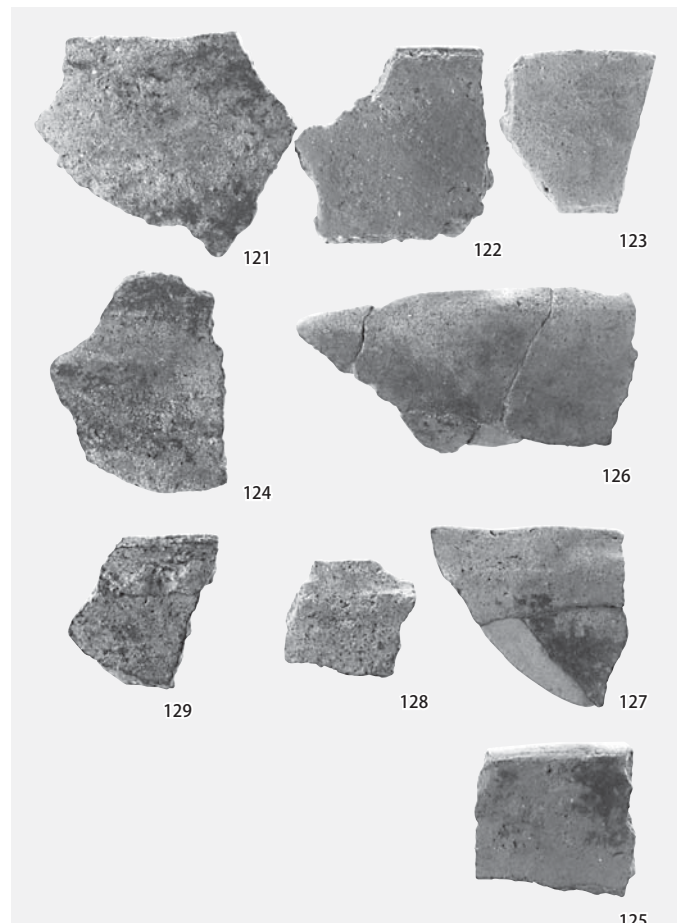
向原中尾第1・2遺跡縄文時代早期石器③



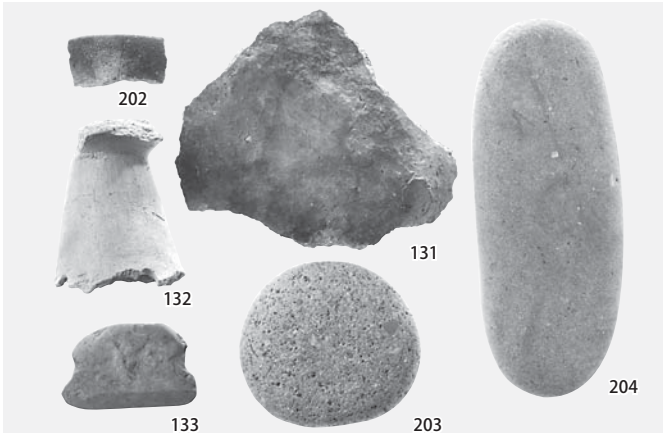
向原中尾第1・2遺跡縄文時代早期石器④



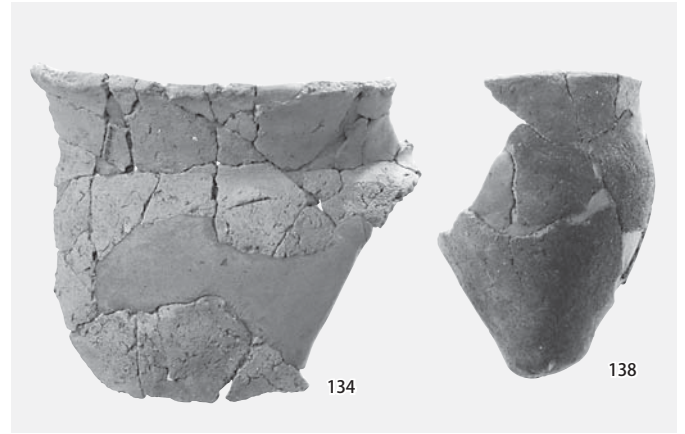
向原中尾第1・2遺跡縄文時代早期石器⑤



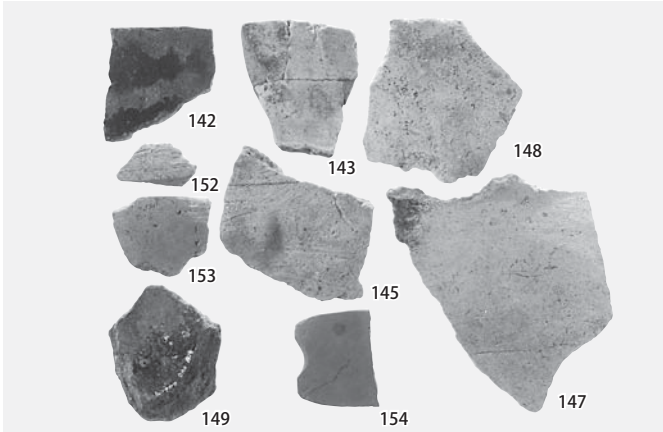
向原中尾第1遺跡縄文時代後・晩期土器



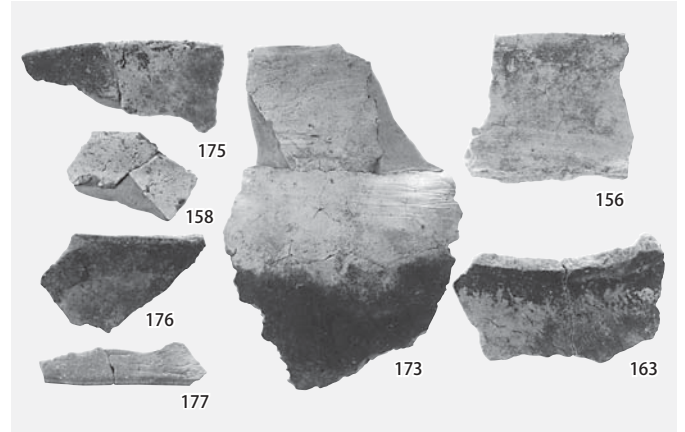
向原中尾第2遺跡S A 1・7出土遺物



向原中尾第2遺跡S A 2出土遺物



向原中尾第2遺跡S A 3出土遺物



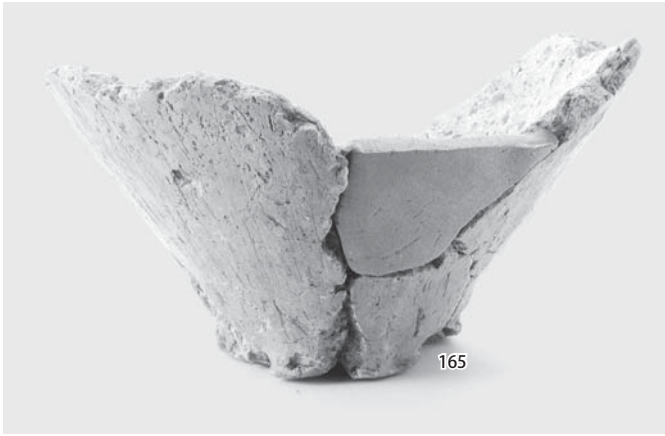
向原中尾第2遺跡S A 4出土土器①



向原中尾第2遺跡S A 4出土土器②



向原中尾第2遺跡S A 4出土土器③



向原中尾第 2 遺跡 S A 4 出土土器④



向原中尾第 2 遺跡 S A 4 出土土器⑤



向原中尾第 2 遺跡 S A 4 出土土器⑥



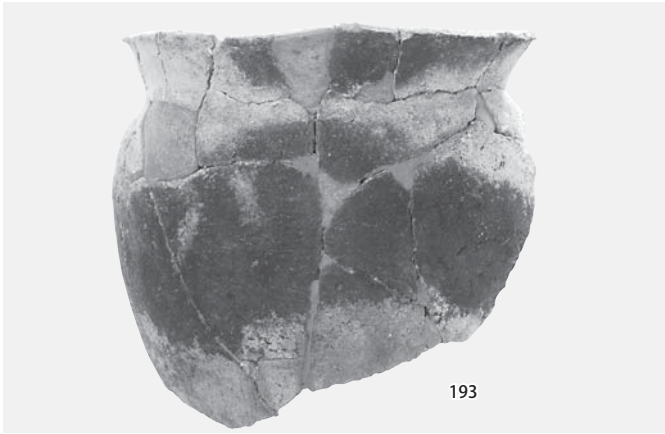
向原中尾第 2 遺跡 S A 4 出土土器⑦



向原中尾第 2 遺跡 S A 4 出土石器



向原中尾第 2 遺跡 S A 5 出土土器①



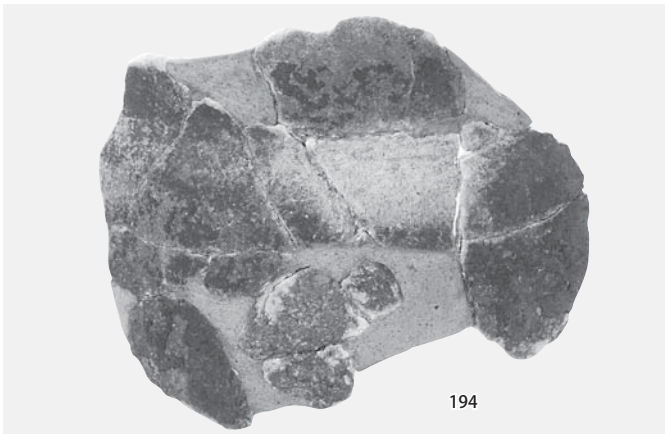
193

向原中尾第 2 遺跡 S A 5 出土土器②



196

向原中尾第 2 遺跡 S A 5 出土土器④



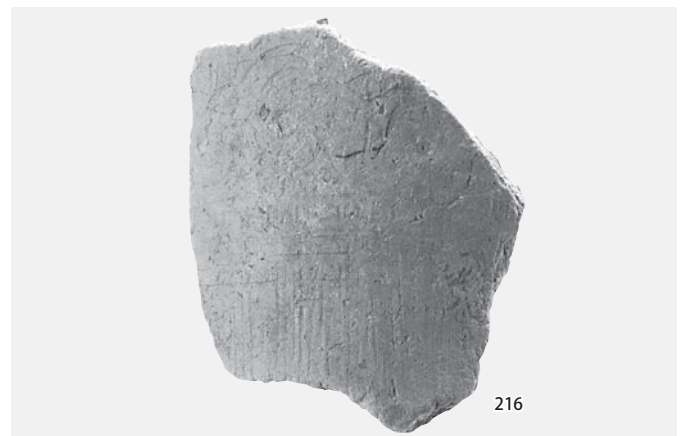
194

向原中尾第 2 遺跡 S A 5 出土土器③



226

向原中尾第 2 遺跡包含層出土石器

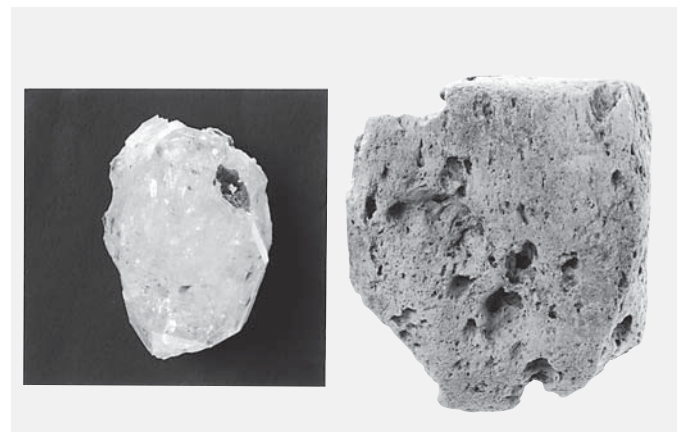


216

向原中尾第 1 遺跡包含層出土土器



225



向原中尾第 2 遺跡出土水晶・軽石



向原中尾第4遺跡より尾鈴連峰を望む



S I 4 検出状況 (南西から)



3区土層堆積状況 (北西から)



S I 2・3 検出状況 (南西から)



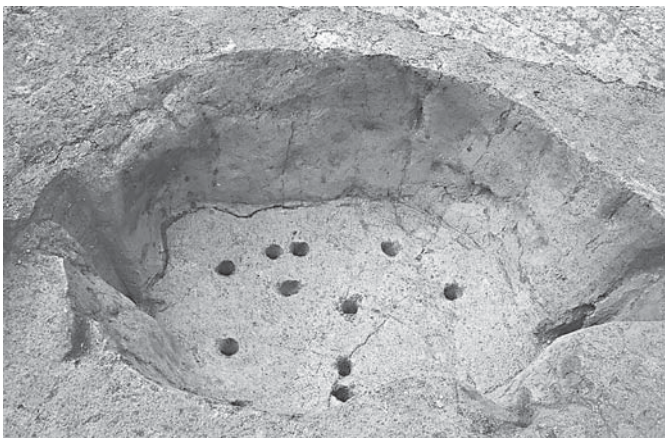
陥し穴状遺構分布状況



S C 1 杭状痕跡検出状況（北東から）



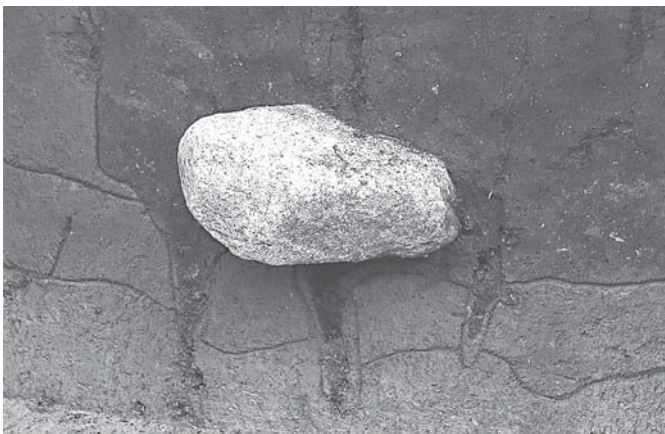
S C 3 杭状痕跡プラン検出状況（北東から）



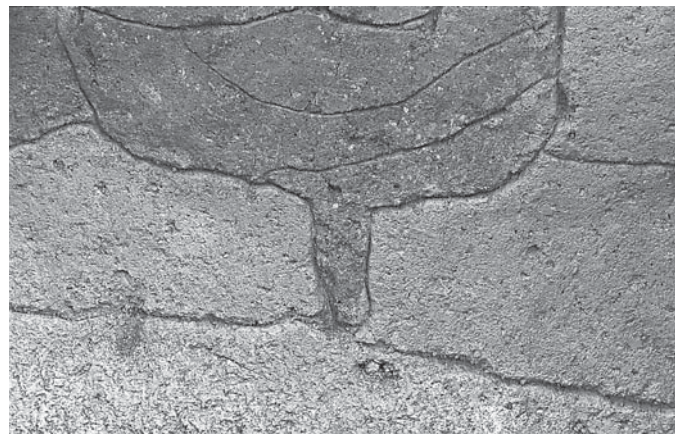
S C 3 完掘状況（北東から）



S C 4 杭状痕跡検出状況全景（北東から）



S C 4 (F-F') 杭状痕跡検出状況（北東から）



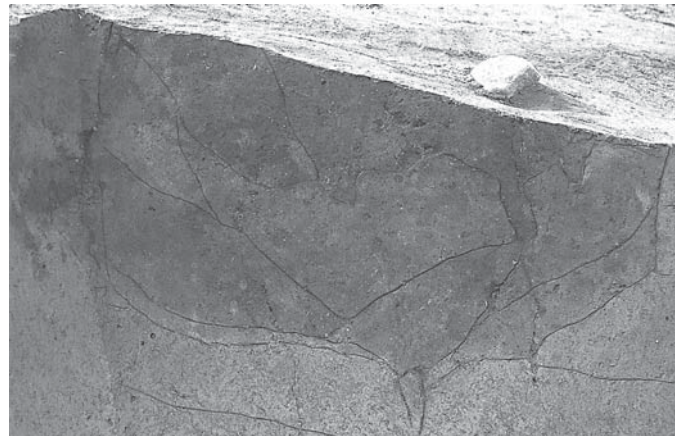
S C 4 (I-I') 杭状痕跡検出状況（北東から）



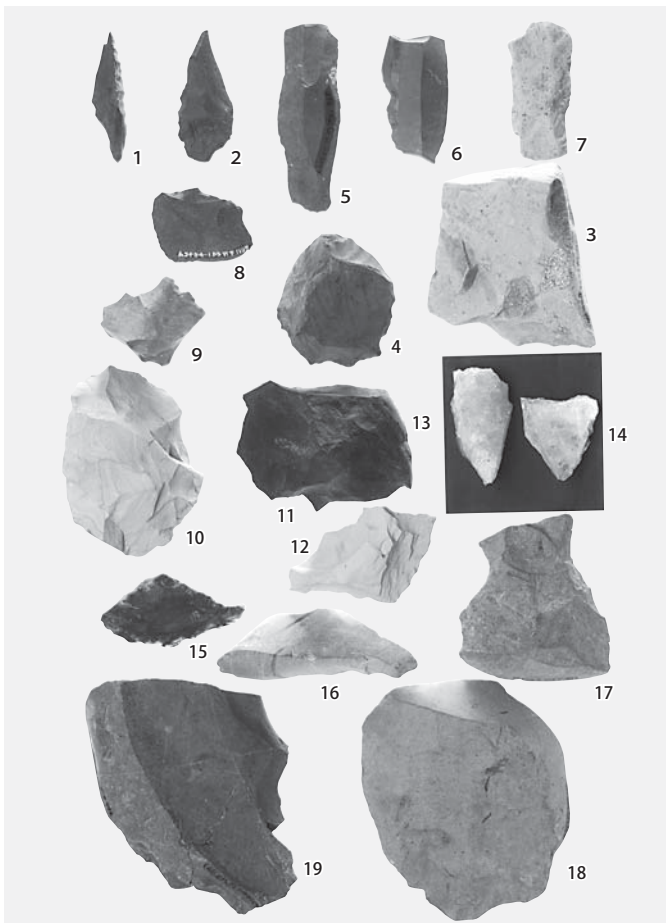
SC4 周辺地形（北東から）



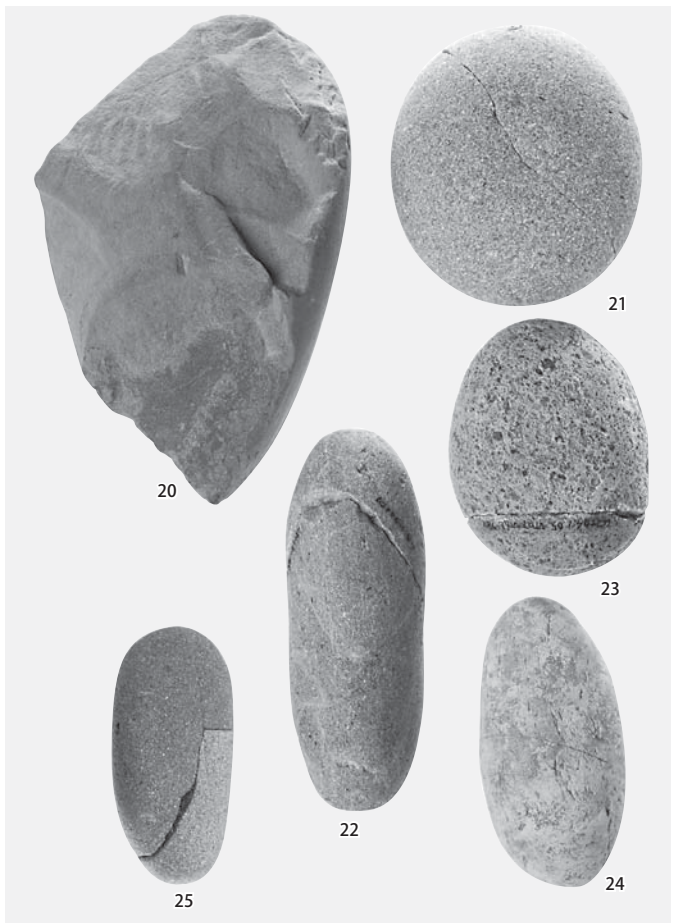
SC6 (A-A') 杭状痕跡検出状況（北東から）



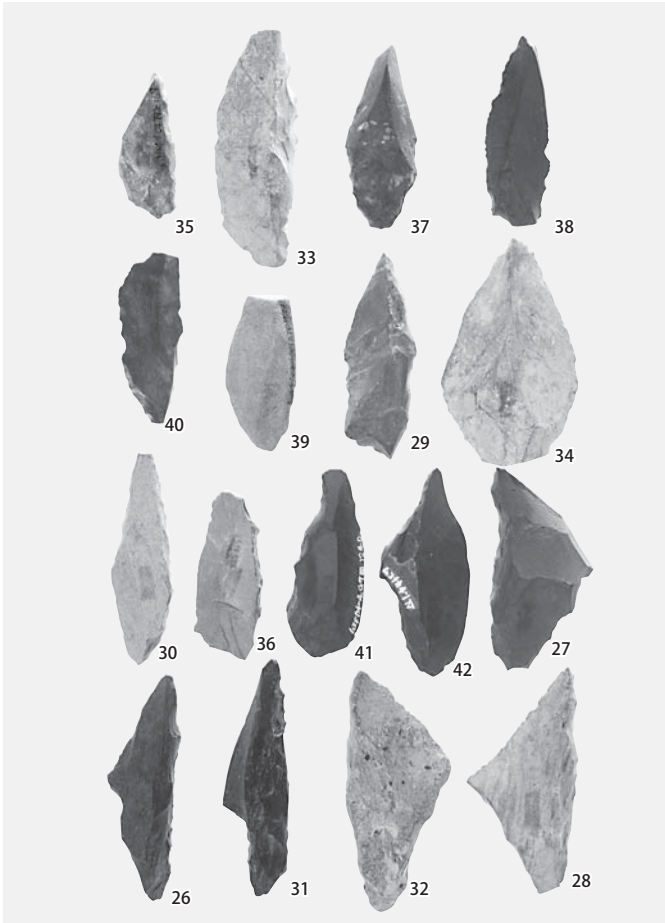
SC6 (C-C') 杭状痕跡検出状況（北東から）



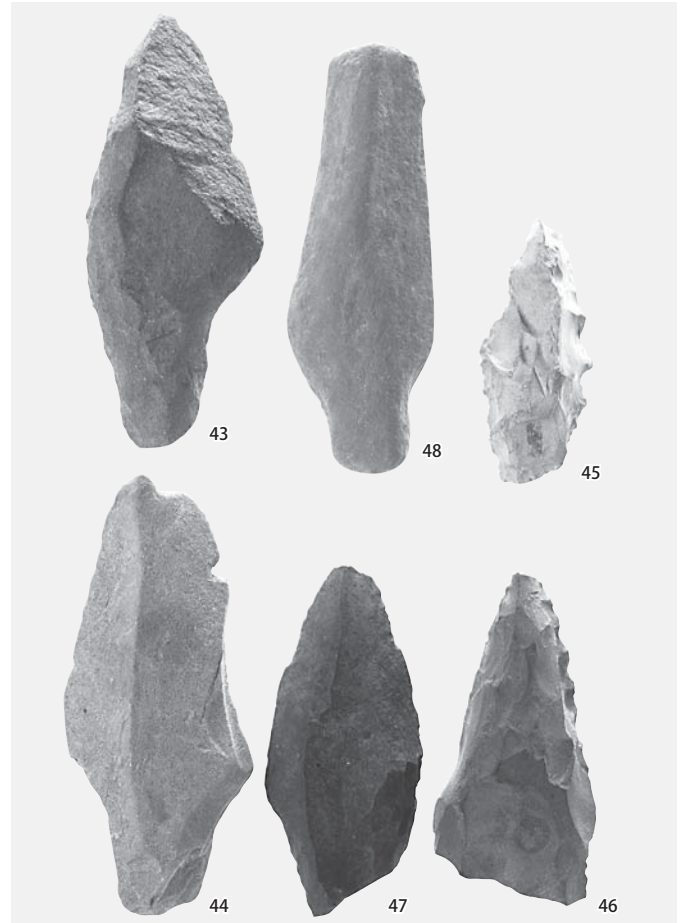
後期旧石器時代 I 期出土遺物①



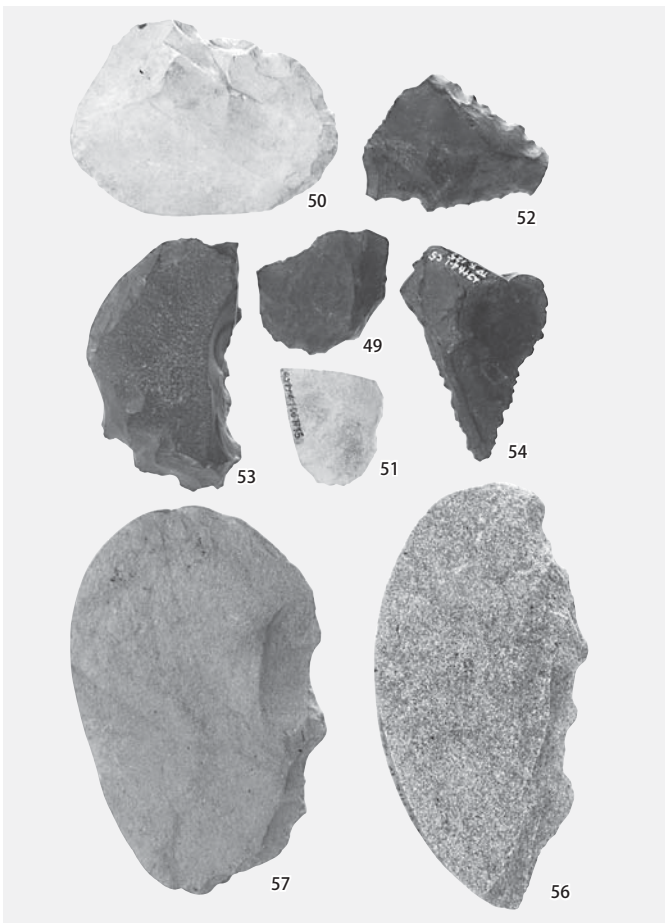
後期旧石器時代 I 期出土遺物②



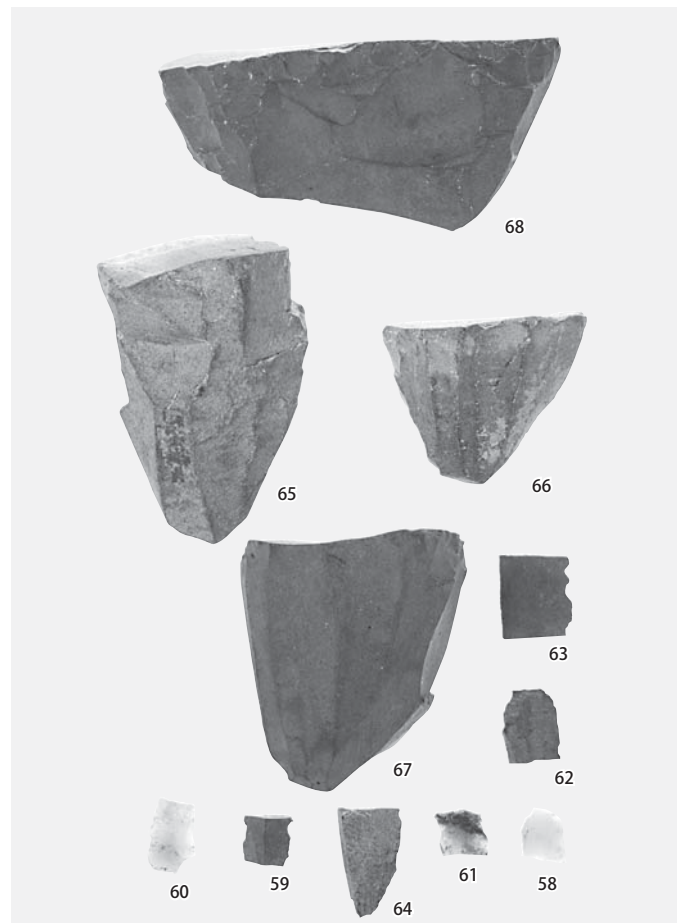
後期旧石器時代Ⅱ期ナイフ形石器



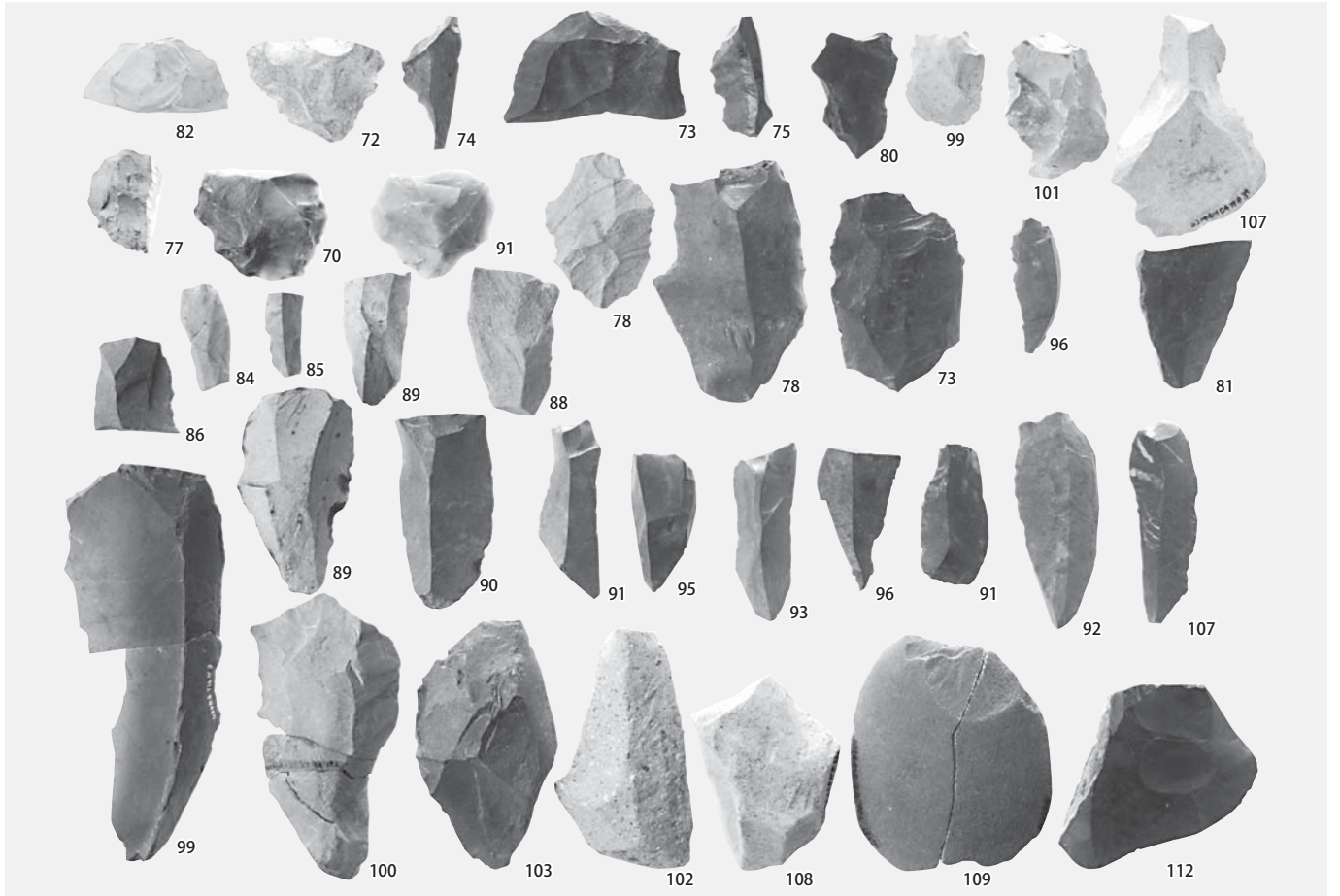
後期旧石器時代Ⅱ期尖頭器



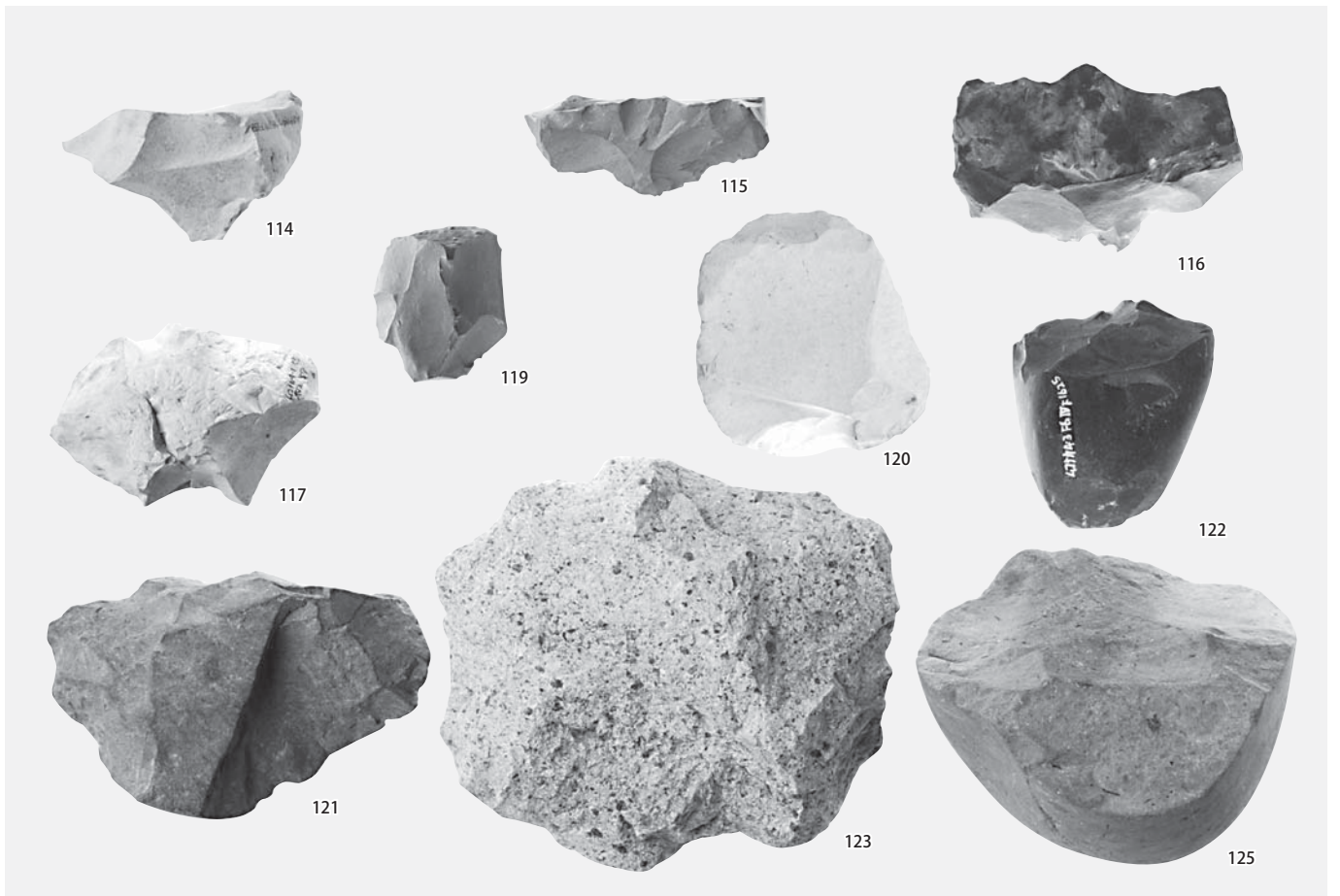
後期旧石器時代Ⅱ期スクレイパー



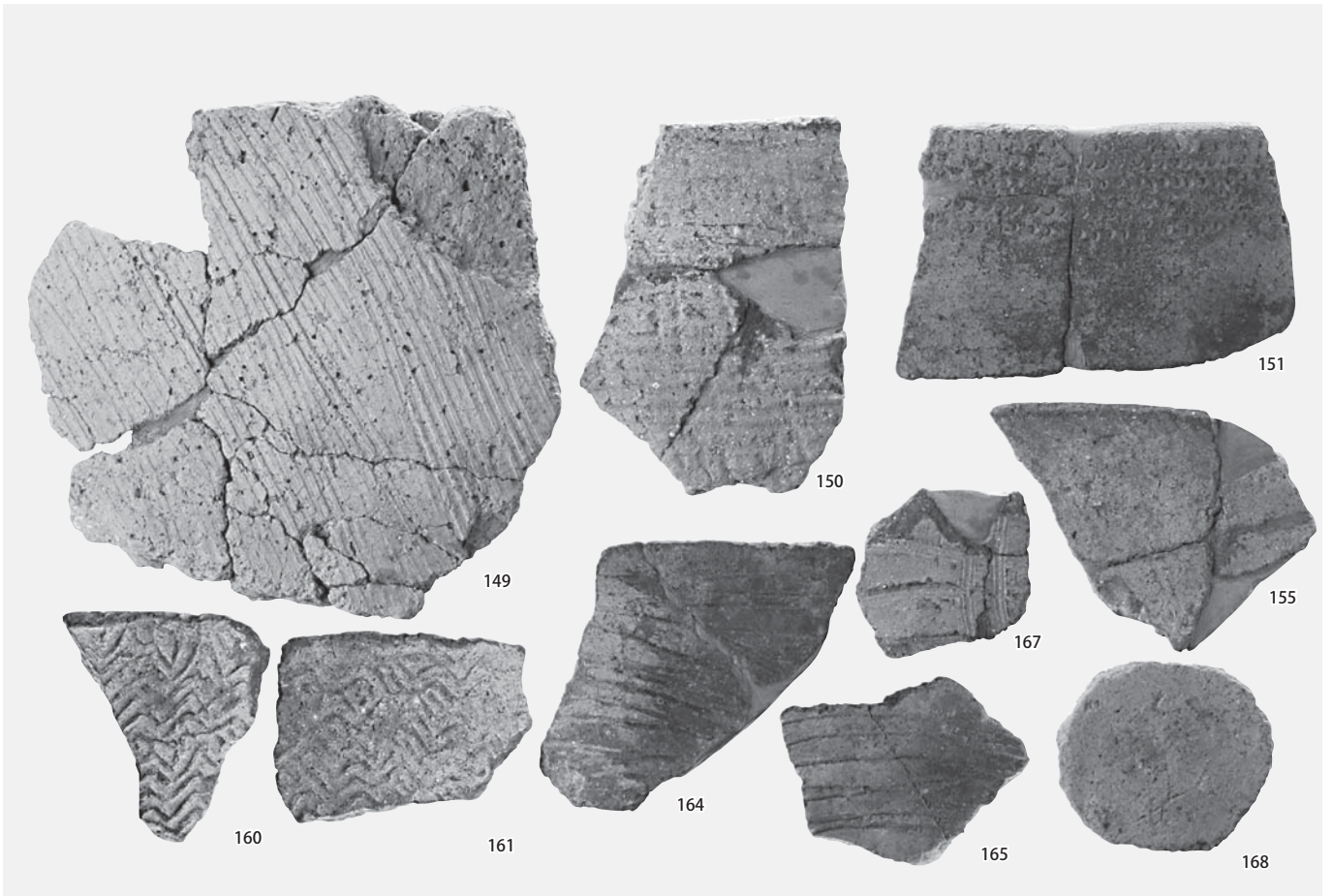
後期旧石器時代Ⅲ期出土遺物



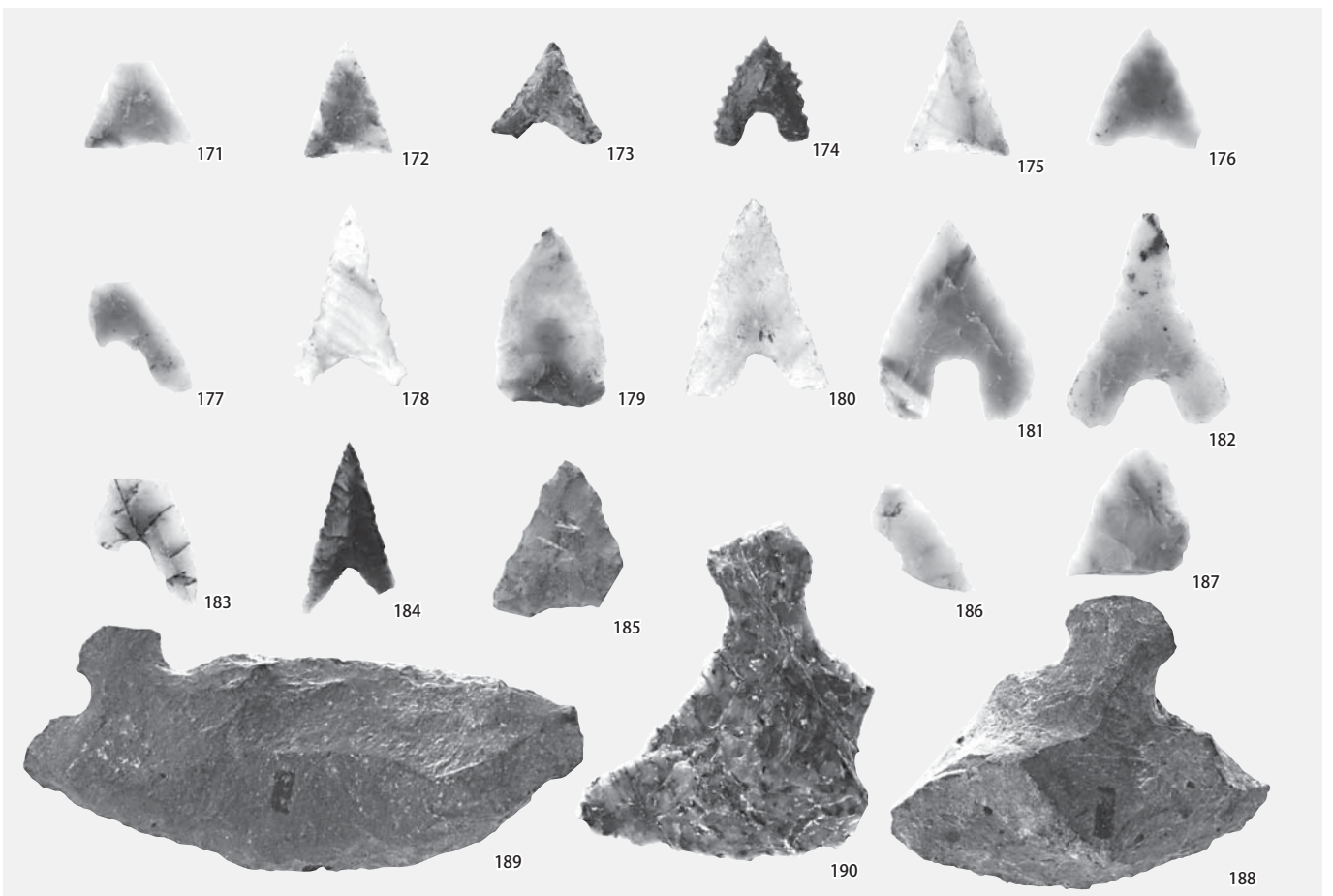
後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期剥片



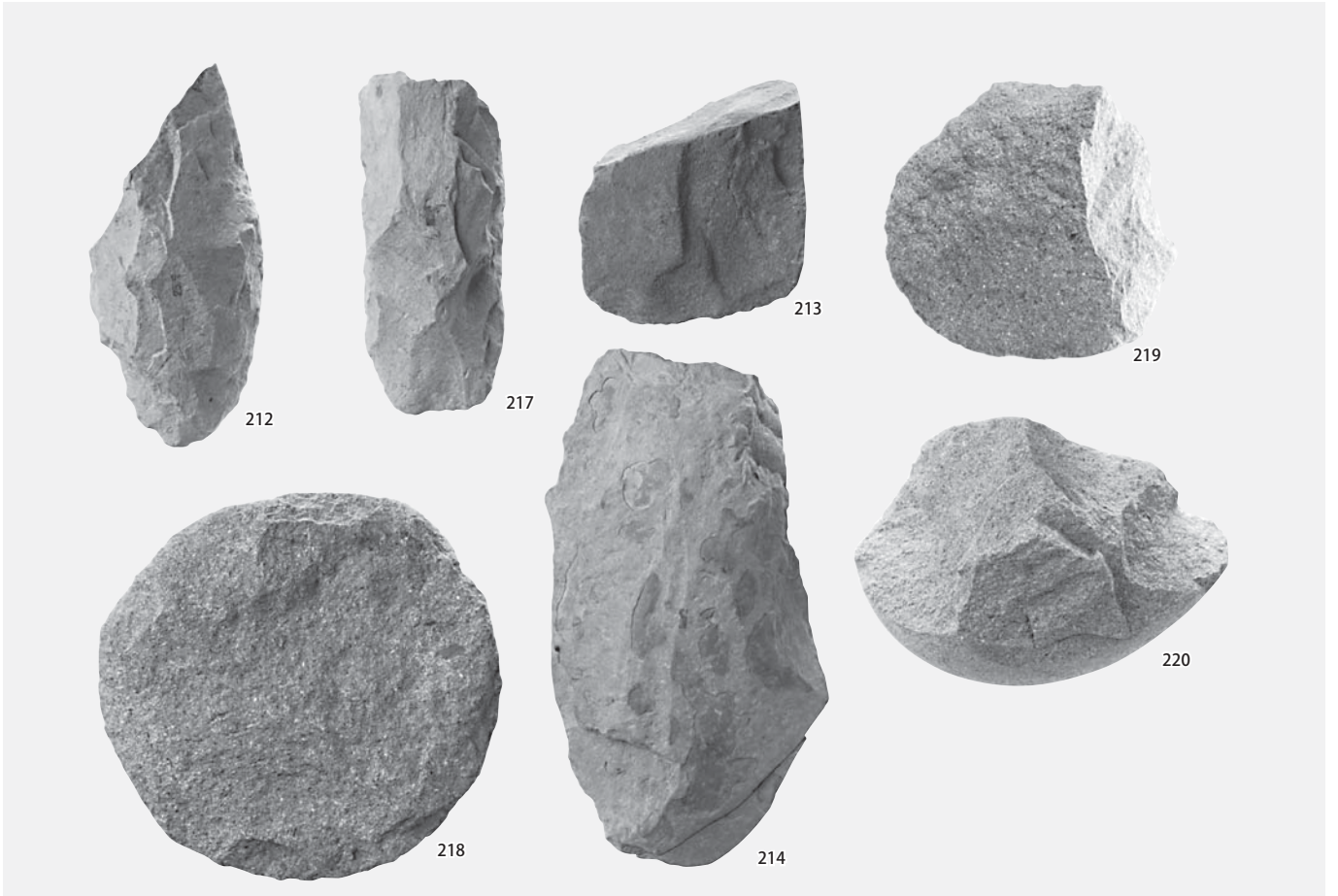
後期旧石器時代Ⅱ期・Ⅲ期石核



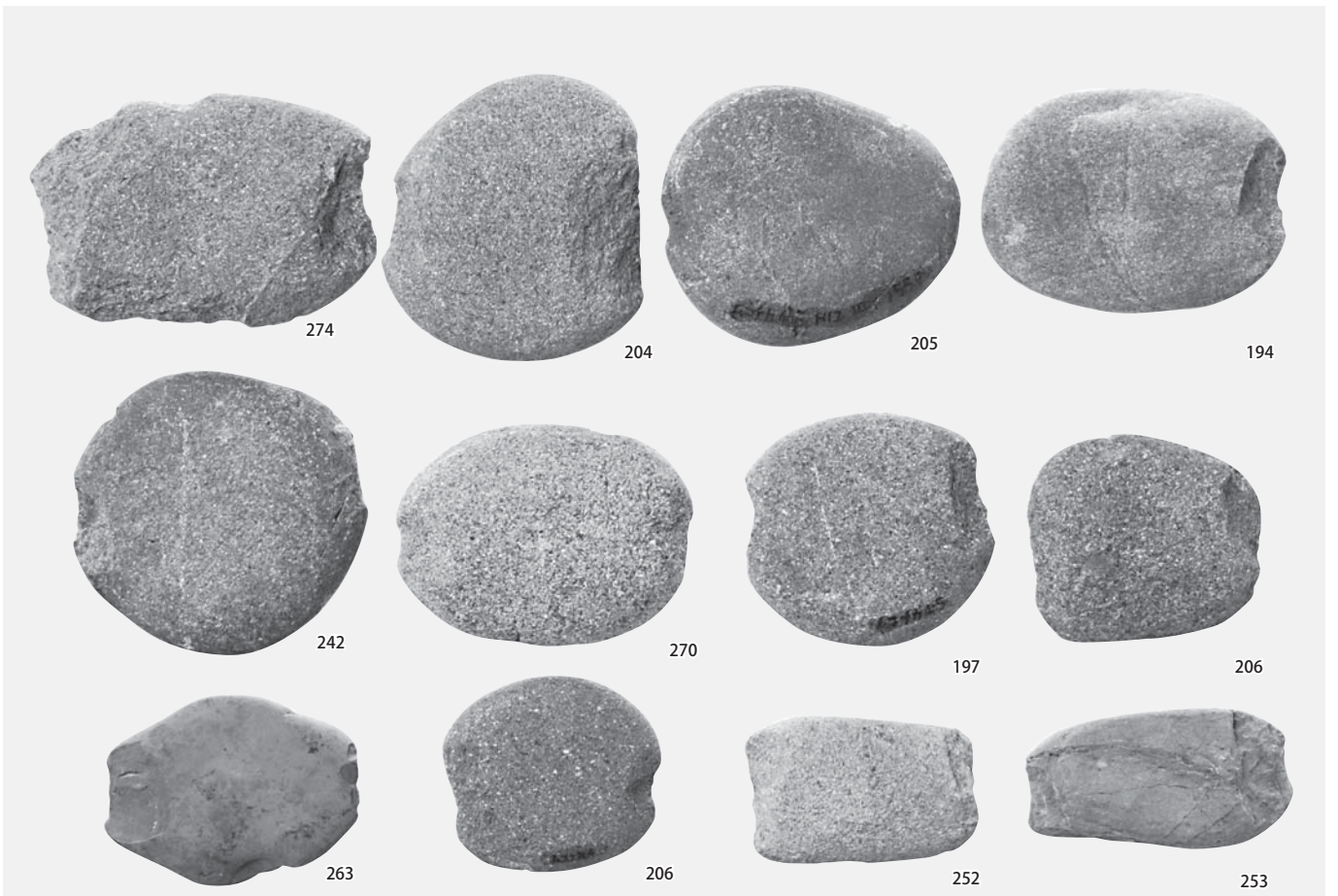
縄文時代早期土器



縄文時代早期石器①



縄文時代早期石器②



石錘

報告書抄録

ふりがな	むこうぼるなかおだいいち・にいせき むこうぼるなかおだいにいせき							
書名	向原中尾第1・2遺跡 向原中尾第4遺跡							
副書名	東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第213集							
編著者名	今塩屋 毅行・石貫 弘泰・南 健太郎・橋本 清美・山本 光俊・谷口 めぐみ（__は編集担当）							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2012年 2月 29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むこうぼるなかおだいいちいせき 向原中尾第1遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうごうちょうやまげ 東郷町山陰 あざやまのくち 字山ノ口	45206	—	32度 18分 43秒 付近	131度 34分 07秒 付近	2008.12.16～ 2009.01.06	140㎡	記録保存調査
						2010.06.28～ 2010.12.24	1,025㎡	
むこうぼるなかおだいにいせき 向原中尾第2遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうごうちょうやまげ 東郷町山陰 あざやまのくち 字山ノ口	45206	—	32度 18分 41秒 付近	131度 34分 01秒 付近	2010.06.21～ 2010.07.06	120㎡	
						2010.09.02～ 2010.12.28	1,200㎡	
むこうぼるなかおだいにいせき 向原中尾第4遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうごうちょうやまげ 東郷町山陰 あざむこうぼる 字ノヲ原	A05	—	32度 18分 35秒 付近	131度 33分 49秒 付近	2008.11.17～ 2008.12.01	190㎡	
						2009.08.05～ 2009.08.31	60㎡	
2010.04.26～ 2010.12.28	5,430㎡							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
向原中尾第1遺跡	散布地	旧石器時代			石核			
		縄文～ 弥生時代			縄文土器、弥生土器、石鏃、礫器、磨石、凹石、粗製剥片石器			
向原中尾第2遺跡	集落	旧石器時代			ナイフ形石器、石刃、スクレイパー、ストーンリタッチャー、石核、剥片		焼失建物跡を4軒検出。 S A 3の床土から赤色顔料塊が出土。	
		縄文時代	集石遺構	17基	縄文土器、石鏃、スクレイパー、礫器、磨石、敲石、石斧、二次加工剥片、粗製剥片石器、石核、剥片			
		弥生時代	竪穴建物跡	7軒	弥生土器、石庖丁、砥石、敲石、鉄鏃、赤色顔料塊、炭化種実			
向原中尾第4遺跡	集落	旧石器時代	礫群	5基	ナイフ形石器、スクレイパー、敲石、凹石、剥片尖頭器、角錐状石器、細石刃、石刃		A T 下位の石器群。 縄文時代草創期の柳又型有舌尖頭器が出土。 縄文時代前期以降の列状に並ぶ陥し穴状遺構。	
		縄文～	陥し穴状遺構	7基	縄文土器、弥生土器、有舌尖頭器、石鏃、石匙、石錘、石斧、礫器、スクレイパー、磨石			
		弥生時代	土坑	1基				
要約	<p>向原中尾第1・2遺跡は後期旧石器時代から弥生時代後期にかけての集落遺跡である。縄文時代早期の集石遺構が17基検出され、多くの石器や手向山式を中心とした土器が出土した。弥生時代終末期の竪穴建物が7軒検出された。そのうち4軒からは炭化材が確認されている。注目される遺物としては、赤色顔料塊が竪穴建物の床面から出土した。分析の結果ヒ素の成分が含まれることが確認された。</p> <p>向原中尾第4遺跡では後期旧石器時代のA T 下位より礫群やナイフ形石器が確認された。これまでの宮崎平野北端部、征矢原川流域におけるA T 降灰以前の後期旧石器時代の様相が初めて把握できた。それだけでなく、A T 上位でも多くの石器を出土しており、これは当地域における後期旧石器時代を考える上で1つの成果となった。また、縄文時代においては、草創期の遺物として県内でも出土事例の少ない柳又型有舌尖頭器が出土している。縄文土器では早期の手向山式や中期の船元式も出土しており、これも本遺跡の一つの特徴と言える。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 213 集

日向市東郷町所在

向原中尾第 1・2 遺跡

向原中尾第 4 遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5

2012 年 2 月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 有限会社 いろは企画

〒889-1603 宮崎市清武町正手 3 丁目 1 9 - 2

TEL 0985(85)5889 FAX0985(85)5889
